幕末恋風記

ひまうさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幕末恋風記

【Ｎコード】
Ｎ３２１３Ｍ

【作者名】
ひまうさ

【あらすじ】
時は幕末。宇都宮藩城下にある小さな道場にもたらされたひとつの願いから始まる。
道場主、葉桜は人とも妖ともわからないものから、後の「新選組」と呼ばれる者たちを救うため、動き出す。
自分の力の持てる限りで戦う葉桜に、新選組の者たちは次第に心惹かれてゆくのだった。

この話は乙女ゲーム「幕末恋華・新撰組」の二時創作です。

1#願いの書

庭で雀のさえずりと羽ばたきが聞こえてくる。
私は一度は閉じた目を開き、それから胡座をかいた左足に左腕を乗せて、左手に頬を乗せて、右目を閉じて、手元の紙を見ていた。

一度大口を開けて欠伸をし、まだ歪む左目だけの視界でじっと紙を見つめる。
和紙ではなく、もっと滑らかな紙だ。
上質であると証明する光り輝く白さを眺めながら、私は口元を歪める。

ここは宇都宮藩の城下にある小さな町道場で、私はここの仮道場主だ。
先代が亡くなった時に弟がまだ幼かったため、私が代理を務めて既に五年になる。

稽古も片付けも掃除も終わり、あとは着替えるばかりとなった私は、いつもどおりに居眠りをしていた。
いや、眠っていたかどうかは定かではない。
眩しい光に導かれ、目を開けた私の前には、少ない布を身につけた十五、六の少女がいた。

白い四肢を惜しげもなく露わにしている、西洋の絵画でも見ない、二の腕と太股をあらわにするような服――たしか、スカートといったか――を着ている少女は、肩口で雀色の髪を揺らして、私に頭を下げた。

「お願いします」

少女特有の鈴なる声が泣きながらに訴える。

「あの人を――新選組を救ってください」

透明な水を惜しげなく流す少女に私が肯くと、彼女は二枚の紙を私に差し出し、消えてしまった。

普通ならば、たぶん物の怪か妖怪かと大騒ぎになるところかもしれない。

だが、私は仕事柄こういう事象に慣れすぎていた。

仕事――道場主として勤めるほかに、私は先代からもう一つの仕事を継いでいる。

一言で言ってしまえば、よろず相談屋。

依頼されればなんでもする、それこそ飼い猫探し、迷子探しに、人生相談から妖怪退治まで、なんでもありだ。

今まで様々に依頼を請けてきたし、その中に人外が混ざっていたことも否定しない。

だから、別に女の子が何もない場所から出てきて消えたぐらいで動揺もしない。

（どうしたもんかね）

そんなことよりもこの依頼だ。

手元の紙を何度見直してもそれは首を傾げるばかりの文字が並んでいる。

まず元号。

今は文久元年の皐月だが、これは文久三年の水無月から始まる。
隣に四つの算用数字が並んでいるのも意味が分からない。

内容に至っては、文武両道を謳うここの道場主である私が見たことのない文字も多い。
書を読むのは好きだし、読めない漢字などはほとんどないと自負しているだけに、これは少しばかり悔しい。

文字を追っていくと、気になるのが「旧幕府」の文字。
過ぎる不安を私は頭を振って振り払う。

確かに今は世情が不安定に揺れてはいるが、辿り着く答えは余りに危険な考えだ。
二百年以上続いている江戸幕府が終わるなどと口にすれば、私もただではすまない。

「てか、マジで何これ」

もう一度、少女にもらった紙を読み返す。
会津藩やら京やら、宇都宮藩に留まっているだけでは縁のなさそうな名前が多い。

少女の依頼内容は、ここにいる「新選組」とかいう連中を救ってくれということらしい。
確かに相談屋という仕事をしてはいるが。

「私ぁ便利屋になったつもりはねぇんだけどな」

こんな離れた距離では何もできないから、当然長期にこの道場を留守にすることになる。

少女の残したメモから察するに、短くとも五年は戻ってこられない。

先代が亡くなってから、ようやくここまで軌道に乗せたというのに、今道場主である自分がそんな留守にするなど許されるだろうか。

「姉上、母上が……て、どうしたんですか？」

母屋と繋がる道場の戸を開けながら声をかけてきた青年が、私のすぐ隣まで来て、手元を覗き込む。

年は私と六つ違いで、実を言えば彼にいつでも道場を渡す準備は整っている。

「ねえ、あんた道場継ぐ？」
「藪から棒になんだよ。
依頼？」

私の手元から紙を取り、弟はそれを陽射しに翳す。

「……姉上、依頼内容は？」
「そこに書いてある」
「書いてないから聞いてるんだけど」

良い紙みたいだけどね、と返された私は首を傾けた。

「書いてあるじゃない」
「ないよ。
僕に見えなくて、姉上に見えるって事は、また物の怪がらみ？
やめといたら？」
「うーん、もう約束しちゃったしなぁ」

じっと紙を見つめても、やはり私には文字が書いてあるように見える。

隣に弟が座る気配に顔を向けようとすると、身体で強く押された。

「道場の話するってことは、長いの？」

「ん」

「どれぐらい？」

「短くて五年、かなぁ」

ふーん、と気のない返事をしながらもぐいぐいと押してくる。

「そりゃー、長いね」

「うん、だから流石に長く道場主が不在にするわけにもいかないし、あんた継ぎなさいよ」

ぐっと弟の身体を押し返す。

私よりも大きくはなったが、まだなんとか力で勝てる程度なのは、弟が武よりも文を得意とするからだ。

「それは嫌」

「なんで？」

弟とは今まで何度となく、この問答を繰り返してきた。

だけど、彼の答えはいつも同じだ。

「ここは姉上の道場なんだ。

代理ならいいけど、僕は継げないよ」

押し合いをしていた身体から僅かに力を抜く。

「わぁっ」

私の膝に倒れこんできた弟を上から笑う。

「馬鹿、ここはあんたの道場だって、言ってるでしょ。父様の息子はあんた一人なんだから」

「姉上だって」

屈んだせいで私の肩から滑り落ちた髪が弟にかかるのを、彼の頬を撫でるように避ける。

「約束したでしょ。あんたが元服したら、あんたが道場を継いで」

「姉上が相談屋の仕事を継ぐ。僕が元服するまでは、姉上が道場主を代理する」

わかってるじゃんか、とぺしりと額を叩くと、痛くもないのに痛いと弟は呟いた。

「でも、姉上。僕は姉上ほど剣の腕もないし、学もないよ」

「そりゃー、私はあんたの姉だからね」

自信なさげだが、私は弟が私以上に学に通じていることを知っている。

私以上に本の虫なんだ、この大きな弟は。

「大丈夫、あんたならできるって。それに、叔父さんだって助けてくれる」

「でも、姉上」
「私はしばらくここで教鞭もとってないし、実質あんたの道場になってるでしょうが」
二年半ほど前に元服した弟に道場と寺子屋を任せてからは、私は相談屋の仕事しかしていない。
たまに冷やかしにいったりはするがその程度だ。
「もう私がいなくても大丈夫でしょ」
「そんなことっ」
起き上がろうとした弟を押さえつける。
「それに、あんたもそろそろ所帯もってもいい年頃だし、道場もって損はないよ」
「それ言ったら、姉上は行き遅……ぐぇ」
押さえつけたまま肘を落とすと蛙が潰れたみたいな声をあげる。
「私はいいんだって」
二十歳を過ぎても男装して、剣を振り回しているような女性を娶る男などいないだろう。
それを後悔した事もないし、これからも後悔することはない。
だって、私は――。
「姉上」
いつのまにか手が緩んでいたのか、私を見上げる弟の顔が目に入

る。
泣きそうな彼の瞳をじっと見つめる。
何かを言おうとした口は開いた形で一度留まり、だが直ぐに閉じられた。
弟は複雑そうな顔で眉を顰め、それからため息をついて私から目線を外す。
「……いつ発つんだ？」
え、と驚いた声を上げると何驚いているのさと返される。
「行っていいの？
てか、ここ継ぐの？」
訊ね返すと、口をへの字に曲げられた。
「だって、姉上はもう決めたんだろ。
だったら止めても無駄じゃん」
確かにその通りだが、まったく引き止めてくれないというのでは、流石に寂しい。
「姉上がそうしたいっていうならしたらいいよ。
道場も僕が引き受ける。
――でも、これだけは忘れんな」
私の両肩を強く押さえ、弟はまっすぐに私を見る。
「ここは姉上の家なんだ。

俺も母上も、姉上が帰ってくるの待ってるからな」

そういってあんまり真剣に言うから、吹き出したら怒られた。

「なんだ、おまえまだ私がいないと寂しいの？」

「――姉上」

「しかたないなぁ。

じゃあ、さっさと片付けて、できるだけ早く帰ってこられるようにするよ」

弟の腕を外し、私は立って、母屋へと足を向ける。

「べ、別に寂しいとかじゃっ。

姉上こそ、家が恋しくなって、仕事途中で帰ってきたりしたら、二度と家の敷居は跨がせないからなっ」

「はいはい」

「本当にわかってんのかっ？」

私の背中を追いながら騒ぐ弟を笑いながら、母様の部屋を目指す。

途中の庭に面した縁側を通るときに雀がバサバサと二、三羽飛び立ってゆくのを、足を止めて眺める。

追い付いた弟が隣に立つ気配がした。

「明朝、発つよ」

できるだけ悟られないよう、静かに告げる。

たぶんだけれど、予感がする。

たぶん私はもう二度と戻れない。

そんな簡単な依頼じゃない。

「母様を頼む」

ここはもう自分がいなくても大丈夫だ。
このまま時は巡るだろう。

ただひとつの心残りは、母様のことだけだ。
父様が亡くなってからも気丈に振る舞っているけれど、実はとても弱い人だから。

「母様に不孝だけはするなよ」

私の願いに、弟がうなづいたかの確認もせず、私はまた歩きだす。

巡りだした新たな歩みを進めるために。
その先に待つ者が誰かも知らず、その先に待つ時間が何かも知らず。
ただ示された時の先を変えるために、私は一歩を踏み出すための戸を叩いた。

「母様、葉桜です」

2#不機嫌な局長

文久三年、皐月。
あの日と同じ初夏の風音を、私は別の場所で聴いていた。

実家と同じく古い木の温もりに包まれた家の一室で大小を外して、隣に置き、正座で時を待つ。
目の前は隣室の襖が開かれていて、私と並んで緊張した面持ちの十四、五歳の少女が一人座る。

あれから、少しの旅をした後で三月ほど前に江戸の会津藩の屋敷へ私は入った。
目的はもちろん、浪士組に入隊するためである。

年明頃、幕府は将軍警護の名目で浪士を募集した。
そのまま入ってしまっても良かったのだが、将軍上洛のこれを建策した清河八郎という男に疑念が合った為というのと、自分が女と侮られて門前払いされるのを避けるために、会津公からの紹介を求めた。

何故会津公かと言えば、現京都守護職についているというのもあるが、依頼人から託された紙から会津公との関わりがわかったからだ。

紹介を求めた際、会津藩主松平容保様の姉君が同席し、彼女から託されたのが隣にいる少女――桜庭鈴花である。

くりっとした大きな黒目、ほどよい餅肌ながらほんのり朱に染まる頬、肩口でばっさりと切りそろえられたわずかに波打つ髪。

男装をしていないときはとても可愛らしい女中である彼女は、剣で身を立てたいという願いを携えてここにいる。

鈴花の意志の強さは表情に強く現れていて、とても好ましいものだ。

ことのついでではあるが、手を貸してやりたい気持ちはある。

私はというと、いつもどおりに伸びすぎて腰まで届く黒髪を高く結い上げ、薄水の着物に濃藍の袴、瑠璃の羽織を着ている。

化粧なんてするはずもなく、今朝早くに顔を洗っただけだ。

今朝、壬生浪士組の門を叩いてから既に一刻。

待つのは好きではないが、これも依頼のためと我慢して一刻。

私にしては待った方だ。

「鈴花ちゃん」

「だめですよ、葉桜さん」

先に窘められて、苦笑する。

たった三ヶ月とはいえ、毎日共に稽古していたせいなのか、彼女には私の考えがわかったらしい。

「すぐに戻るって」

「だめです」

「どうせ私たちのことなんて、筒抜けなんだし」

「葉桜さんっ」

鈴花に説得されてから半刻過ぎた頃、ようやく部屋に近づいてくる気配があった。

心中で歎息しつつも、居住いを正す。
そして、障子が開くと同時に私は声を張った。

「遅い！」

急に私が声を上げたのと、障子が開いたことに驚いた鈴花が隣で慌てる。

「いくら気が乗らない面接だからって、女性を一刻半も待たせるなんて、ここの局長って弛んでるわよね、鈴花ちゃん」

部屋に入ってきた二人の男に目を向けることなく、顔ごと鈴花を向きながら話しかける。

「あ、ちょっ、葉桜さんっ」
「毎日毎日酒浸りになってるような馬鹿じゃあ仕方ないけどね。
そう思わない？」

挑戦的な問いかけは、部屋に入ってきた二人に向ける。
先頭の手に灰色の扇子を手にした男は顰めた眉を更に寄せ、彼の後から入ってきた男は厳しい顔ながら、どこか面白そうに瞳で笑う。

先頭の男が手にしているのが鉄扇であれば、彼がこの壬生浪士組の筆頭局長、芹沢鴨だろう。
いるだけでその存在を強く示す男は不機嫌に鼻を鳴らした。

「やぁ、待たせちゃってゴメンね。
今日は頼んでた着物が届く日だったからさぁ」

芹沢の隣で、軽い口調で話す男も芹沢ほどではないにしても、そ

れなりの存在感を放つ。
だが、大抵これだけの嫌味を言われたら不機嫌で返してきそうなものなのに、彼はへらへらと笑っている。
妙な男だ、と私は気を引き締める。

「俺は近藤勇。
この壬生浪士組の局長だ」

脳裏にざっと紙の内容を思い出し、私は気づかれないように眉を顰めた。
一覧にあった名前だが、この男は相当腕が立つ。
守るべきであるとしても、自分の出る幕などない気がする。

「で、こちらの方が……」

芹沢がまっすぐにこちらを睨みつけてくる。
不機嫌に不機嫌を返しても逆効果だから、私は受け流して笑いかけた。

「あー……こちらの方が筆頭局長の芹沢鴨さんね」

この芹沢と私は初対面ではない。
だからこその対応とはいえ、あまりに大人気ない。

芹沢は私ではなく鈴花に問いかけた。

「女……名は何という……」

それに対して平伏した鈴花が馬鹿正直に答える。

「は、はいっ！
お初にお目にかかります！
桜庭鈴花と申します」

そっちがその気なら、と私も芹沢から視線を外して、近藤に挨拶する。

「葉桜、と申します」

近藤は何か言いたげに私と芹沢を見比べた。

「あの～、お二人はお知り合い？」
「こんな馬鹿知りません」

恐る恐るの問いに私が即答すると、芹沢の眉間の皺がまた深くなった。

それで、近藤はここで私たちに何かを問うのは諦めたようである。

「え～っと、桜庭君と葉桜君は会津藩主松平容保様の義姉君、照姫様のご紹介だったね」

話を進める近藤に鈴花が「はい」と答える。
私は「君」などとつけて呼ばれることなど無い為、いささか居心地が悪くなった。

だがここでそれを見せるわけにはいかない。
弱味など欠片も見せるわけにはいかないのだ。

私が気合を入れなおしたところを見計らったかのように、近藤が

気の抜ける息を吐いた。

「はぁ～……まいったね」

明らかにこちらに聴こえるように呟く。

確かに、私と芹沢の間の空気はかなり険悪だから、わからないでもないが。

「会津公を通して話がきた以上、会津藩主お預かりのうちが拒否するワケにもいかないからなぁ……」

続いた言葉は、私たちが女だからと如実に語る。

「まぁ、きみたちに関しちゃ除隊は自由ってコトにしとくからさ。きついって思ったらいつでも抜けちゃっていいよ」

明らかに厄介者と言われ、隣で鈴花が膝に置いた拳を強く握る。

近藤が言うのは最もであるし、だからこそ私は会津公を通して、ここに入隊するのだから。

そうでなくても、芹沢と関係が悪いというだけで追い出される気がしなくもない。

「じゃ、そういうコトで」

「待ちなさいな、局長さん方」

そのまま逃げるように出ていこうとする二人を私は引き止めた。

怪訝そうな顔と、実に嫌そうな顔。

そんなことでこの私から逃げられると思ったら大間違いよ。

別に今の言動については文句を言うつもりはない。
それとは別件で、私には言いたいことがある。

「遅れた理由は本当に着物？
私には約束の刻限には、すでに近くの部屋であなた達の気配があったように思うけど」

笑顔のままの近藤が口を開く前に、芹沢が不機嫌そのものの声で言う。

「話す必要はない」

ぴしゃりと言い放ち、芹沢は足音荒くさっさと離れて行った。
その姿を見送る近藤は再び私に問いかける。

「……知り合い？」
「少し、ね」

にやりと笑ってみせると、近藤は堪えきれずに吹き出した。

「あはは、葉桜君は面白いねぇ。
あの芹沢さんにあそこまで物怖じしないで発言できるなんて、珍しいよ。
いつから知り合いなんだい？」

物怖じしないのは生来の性格だから、私の場合は大したことではない。

「最近、ちょっと旅籠で会っただけですよ」

京に入って最初の宿で、酒浸りで脅迫まがいのことをしている芹沢を倒していただけだが、それを口にしてはいけないという常識ぐらい、私にだってある。

「それだけじゃぁないんだろ。
是非今度その話聞かせてほしいなぁ」
「あはは。
嫌ですよ、近藤さん」

笑顔で返すと、そうだよねーと近藤も同意するが、勘付いているのは次の言葉ですぐにわかった。

「まぁ出来れば其の話は隊内でしないでほしいなぁ。
芹沢さん、お酒がはいんなきゃ志の高い、立派な人なのよ」

立派ねぇ、と私は心の中だけで呟く。

ふと隣でじっとその会話を聞いている鈴花に気が付いた。

「鈴花ちゃんは気にしないで良いからね。
鈴花ちゃんは自分の目的に専念しなさい」

鈴花は不思議そうにしながらも素直に「はい」と頷いた。

私たちの様子を苦笑している近藤に鈴花が問いかける。

「入隊試験とか本当にしなくてもいいんでしょうか？」
「したいのかい？」

問い返された鈴花が肯く前に、私は彼女の頭を抑えるようにわし

ゃわしゃと撫でる。

「鈴花ちゃん、あんたねー。
わざわざ自分から無茶な試験することないのに」
「無茶じゃないですっ」
「はいはい、どれぐらい上達したか、ここで剣が通じるか知りたいわけね」

やめてくださいと私の手を抑えようとする鈴花で遊びながら、どうしようかなと悩む。
このために鈴花を鍛えておいたから、ある程度の相手ならば問題無いだろうが。

視線を近藤に向けると、微笑ましげな表情を浮かべている。
そういえば、近藤には女好きという噂があった。
ここにきて、女として見られるのは困るし、予防線は張っておくにこしたことはないだろう。

「近藤さん」
「葉桜君と桜庭君は仲がいいんだねぇ。
姉妹だったりするのかい？」
「違います」

まったく見当違いの話を振られ、私はわかりやすく嘆息した。

「そんなことより、今日も入隊試験てやっているんですよね？」
「そのはずだよ」

深く頷き、私は立ち上がって、鈴花の手をとって立ち上がらせる。
不思議そうな鈴花が立ち上がったのを確認してから、私は近藤に

宣言した。

「その試験、私たちが参加してもいいですよね」

わかっていただろうに、意外そうに近藤は口にする。

「本気？」

「そのほうが、近藤さんの手間も省けますよ」

いくら会津公の紹介とはいえ、試験もなしに入隊したとあっては、他の隊士に納得させるのは難しいだろう。

私の提案に、近藤は満足気な笑顔で深く頷いた。

3#過信の代償

道場に案内された私たちが戸を開けてすぐに見たのは、近藤ぐらいの身長の浪人を、鈴花ぐらいの身長の少年が突き崩し、弾き飛ばした場面だった。

おおよそ、頭ひとつ分の身長差がある。

二十畳程度の道場は実家と比べるとかなり狭く、半分程度の広さは一試合するにも狭いと感じる。

あの小柄な少年の間合いでは、狭すぎる気がする。

「あ、近藤さん」

「調子はどうだい、藤堂君」

近藤に気づいた少年は彼を嬉しそうに見た後で、怪訝そうに私と鈴花を見つめた。

「まあまあかな」

こちらを検分するように見つめる少年は役者のような整った顔立ちをしているが、私が愛想笑いを返すと、秀麗な眉目をひそめる。

「近藤さん、彼は？」

藤堂と聞いた時点でわかっていたが、私は鈴花のために問いかける。

それと気づかない近藤はすんなりと藤堂を紹介してくれた。

「彼は藤堂平助君といって、北辰一刀流の使い手だよ。

今日の担当は藤堂君だっけ？」

前半は私と鈴花に、後半は藤堂に向けていった言葉だろう。
隣で、鈴花が緊張をさらに強くしたのは流派を聞いたせいだろうか。

「今日は新八さんだよ。
でも、朝からいないんだ」
「ああ、最近お気に入りの娘がいるっていってたね」

しかたねぇなぁと苦笑する近藤に藤堂が訊ねる。

「そんなことより、近藤さん、後ろの二人は誰なのさ」

紹介してよ、という藤堂の作られた笑顔の前で、鈴花が僅かに頬を染める。
何しろ私が見ても美少年なのだから、その反応は当然だ。

「彼女たちは会津公の紹介で入った新入隊士だよ。
是非、君の試験を受けたいっていうから、連れて来たんだ」

大仰に鈴花が頭を下げる。

「初めまして、桜庭鈴花と申します。
よろしくお願いしますっ」

藤堂は鈴花を腑に落ちない表情で見た後、私に目線を移した。
ああ、自己紹介するんだっけ。

「私は葉桜」

特別に笑顔もつけてあげると、私に頬を上げて、目を細めてみせた。

「これからよろしくお願いしますね、藤堂センセ？」

藤堂はわずかに頬に朱を上らせてから、誤魔化すように口を尖らせる。

「それは俺に勝ってからいいなよ。
どちらか一人でも俺から一本とれたら、認めてやる」

案外にあっさりとひっかかってしまったので、私はつい本気で驚いてしまった。

「望むところで……葉桜さん？」
「ふ……っ」
「葉桜君……？」

怪訝そうな近藤と鈴花を構う間もない。
慣れない猫を被るのも飽きてきたことだし、そろそろいいだろうか。

「あ、い、いいだろう。
藤堂が勝ったら、私たちは入隊を諦めるよ。
でも、私たちが一本でも藤堂から取ったら」

相手をなめるつもりはないが、過大視することもないだろう。
鈴花にはまだ無理だが、私には勝てる。

「葉桜君たちが勝ったら？」

誰かがごくりと唾のむ音がした。

「私たちを他の隊士に紹介してもらおうかな」

片目を閉じて笑うと、鈴花がホッとしたように笑った。
近藤も安堵しているようだが、藤堂は違うようだ。

「そんなこと言っていいの？
俺、強いよ」
「そっちこそ、後悔するなよ？」

一番手は鈴花、と木刀を渡す。
ついでに小さく彼女だけに囁き、私は鈴花を送り出した。

壁に寄り掛かる近藤の隣、同じく私も壁に背中を預ける。

「あんな約束していいの？
あの子じゃ勝てないよ」
「わかってますよ」

じゃあなんで、と近藤が疑念を口にする前に二人の試合が始まった。
互いに打ち込んでいるわけじゃない。
鈴花が打ち込むのを藤堂はただ防いでいるだけだ。

「私が鈴花ちゃんの道を塞ぐわけないじゃありませんか。
先に行ったように、近藤さんの手間を省いてあげるってだけです」
「藤堂が言ったのはあくまで二人で一本。

鈴花に無理でも、こうして見ていれば私でも一本とれます」

近藤の笑顔が少しだけ固まった気がした。

「君なら勝てるって？」

「たぶんですけど、勝てますよ。

だてに女だてらに武術指南なんかしません」

「へー……え？

武術指南て、どこの！？

ていうか、葉桜君て何者」

木刀の高い音が響いて、私は声を上げた。

「そこまで！」

近藤の問いは聞こえなかった振りをして、私は鈴花に近づく。

完全にへばっている鈴花の肩に手を置くと、悔しそうに目尻に涙を浮かべていた。

「鈴花ちゃん」

「ごめんなさい、葉桜さんっ」

「いいのよ」

満面の笑顔で鈴花の頭をなでる。

「その代わり、今日は素振り千回ね」

「っ！」

「わかった？」

私の言葉にしぶしぶと頷く鈴花を近藤の元へと送り、私は彼女が

手にしていた木刀を持った。

木刀を肩に担いでいる藤堂は息も切れず、余裕気な表情だ。

「あんたさ、俺のことナメてるよね」

「そんなことないよ」

さっきの鈴花との試合で、藤堂のだいたいの腕前はわかった。

思っていたよりも強いのは認める。

だけど、私はもっと強い北辰一刀流を知っている。

「藤堂は強いよ。

でも、」

真っ直ぐに藤堂と目線を合わせ、私は笑顔を向ける。

「私はもっと強いよ」

ざわと、空気が泡立った。

素肌で感じる冬の気配のように、初夏の水辺に吹く風のように、

ざわざわと私の気が揺れる。

手にした木刀を右手に持ち、左手を添えて、腰を落とす。

居合の構えにか気組みにか、藤堂も北辰一刀流の青眼である中段に構える。

「始めようか」

誰かが唾を飲む音が、はっきりと道場に響いた。

互いに睨み合ったまま、静かに時が過ぎる。
私は嬉しさに騒ぎ立てる心を押さえて、じっと中腰のままで藤堂を見つめる。

こうして見上げていてもわかる端正で、少しだけ幼い顔立ち。
実家の弟を思い出すが、藤堂のほうがさらに幼く見える。

（二十歳だっけ）

藤堂平助――伊勢・津藩主の落胤との噂があるのも頷ける養子であるが、北辰一刀流としてはまだ未熟だと知っている。
藤堂は皆伝する前に道場を出ているのだから。

廊下をドタドタと走る音が近づいてくるのが聞こえる。
互いに木刀を握る手に力が入る。

（頃合か）

緊迫した空気を打ち破る音を、藤堂と私の両方が期待した。

「おい、平助っ」

道場の扉を遠慮もなく、勢いつけて開ける音と同時に私たちは動く。
どちらもその動きに遅れはないが、二、三の打ち合いだけで勝敗はすぐに決した。

「そこまで！」

空手の藤堂の喉元に切っ先を向けたまま、私はぴたりと動きを止

める。
藤堂の木刀は私の足元だ。
「な、なんだァ？」
部屋に入ってきた無精髭の男が目を丸くし、手ぬぐいをぐるりと巻いた頭を手を当てる。
「近藤さん、あの女ァ何者だよ。
いくら油断してたからって、平助を負かすなんて」
それに、と無精髭の男は続ける。
「俺と同じ技を使うってェことは、神道無念流、か？」
木刀をおさめ、私は藤堂に手を差し出しつつ返す。
「そういや、これは神道無念流の技だったか。
久々だから、手が滑って焦ったよ」
藤堂は私の手を払いのけ、自力で立った。
ひどく不機嫌な藤堂は負けた様子も弟と同じで、私はもう笑いを堪えるつもりもない。
「強いって言っただろう」
「……」
「約束は覚えているね？」
藤堂はふて腐れた表情で私を睨んでから、無精髭の男を見る。

「新八さん、彼女は新入隊士の葉桜さんだよ！」
「何拗ねてやがんだァ、平助」
「拗ねてないっ」

私は軽く、ぽん、と藤堂の肩を手を置く。
かすかに肩を震わせる藤堂はこちらを見ない。

「もうひとり、いるだろ？」
「っ」
「い、いいですよ、葉桜さん。
私は自分で、」

鈴花を制し、藤堂の耳元へ私は口を寄せる。
藤堂の体が小さく震えるのは、自尊心のせいだろうか。
女に負けるということが相当悔しいらしい。

「私たちが一本とったら、認めてくれるんだろう？」

敢えての藤堂の宣言を通す。
藤堂はやはりしぶしぶと鈴花を無精髭の男に紹介した。

互いの紹介も終えてから、近藤と私と鈴花は、晴れて道場を後にする。

「武術指南て、どこでやってたの？」
「道場の近所ですよ～」

そんな軽口を叩きながら。

4#朝の習慣

私と鈴花が近藤と土方の部屋の隣に部屋をもらった翌日、日が昇らないうちに私は着替えて部屋を抜け出していた。
鈴花の寝付きはとても良く、彼女は気配に鈍感なので気がつかれずに私は部屋を出ることができるのだ。

まだ梅雨に入らない日が続いていて、初夏の空気はとても心地良い。
私は昨日教わった井戸の前に立つと両腕を高く伸ばし、それから襷を掛けて、井戸水を汲み上げた。

一杯目は両手で水を掬い、口に含んで漱いで吐き出す。
同じ水で顔を洗い、腕を洗い、足を洗い、最後に手ぬぐいでふく。
水の冷たさに残っていた眠気も飛んだ。

二杯目を桶に汲み上げ、片手で担いだ私は、昨日の道場へと向かう。
何をするのかと問われれば、掃除だ。
実家の道場で長く習慣にしていたので、ここでもやろうと思っただけだ。
単に他にやることがなかったのもあるが、これは道場主として過ごしてきた自分のけじめであり、礼儀でもある。

機嫌よく早朝の道場を開けた私は、だがそのまま呆れた息を吐いた。
入口を開けて直ぐ、人が倒れてきたからではない。
別に人が飛んできても驚きはしないし、そんなことよりももっと重要なことがある。

「道場で酒盛り？
舐めたことしてるじゃないの」

狭い道場内を埋め、気持ち良く眠る男たちを前に、私はまず手元の桶の水をぶっかけた。
とりあえず、人の掃除が先決だと判断したからだ。
これで慌てて飛び起きる者はまだ良いが、それでも尚寝ている奴らに一喝する。

「な、なんでぇ！？」
「～～～み、耳がーっ」
「……うるせぇな……」

尚寝ている馬鹿者共は容赦なく、蹴り起こす。
そうして漸く目覚めた彼らは、言うのだ。

「朝っぱらからなんだよ、葉桜さん。
オレ、昨日飲み過ぎて、」

眉を寄せて米神をおさえる藤堂に、昨日よりも凄みのある笑顔をむける。

「ほぅほぅ、飲み過ぎて、ねぇ。
道場で？」

目を覚ました平隊士数人がその私の様子を察して、一目散に道場を飛び出してゆく。

「堅ぇこと言うなよ、葉桜。

おら、平助、二日酔いには迎え酒がいいんだぜ」

尚、藤堂に飲ませようとする原田の頭を拳で殴りつける。
ほとんどの隊士には昨夜の夕食時に挨拶を済ませてある。

「飲むなら庭でやれ、原田」

原田は痛ぇーなとぼやきつつ、大きな欠伸をした。
寝起きだからか、乱れた着物の隙間から腹が見え、夕べも聞かされた切腹に失敗したとかいう横一文字の傷痕が覗いている。

「ん、何してんだ、葉桜？」

それから、と私はまだ寝転がって眠っている永倉に近づく。

「いつまで寝てるつもりだ、永倉。
さっさと起きないと蹴るぞ」

無造作に踏み付けようとした私は、だがしかし、蹴り足を捕まれて、そのまま後ろに倒れ込んだ。
強かに頭も打った。

「っいっつー」
「バーカ。
んなに何度も蹴られてたまるか」

周囲から、おぉと歓声があがる。

寝転がったまま私が自分の足元に目を移すと、にやにや笑っている永倉が右足首を掴んで離さない。

片足を押さえただけでいい気になるなよ。

「そうかよっ」

私は体を捻って、空いた左足で永倉を蹴りつけようと仕掛けた。
しかし、それも難なく避けられて、抑えられる。

「げっ」
「ははははっ、甘ぇな、葉桜っ」
「くっそ、離せ、バカ倉」

悪態を付くと永倉に捕まれた足首に強く力が加えられた。
半端ない痛さに思いがけず、目元が潤むのを感じる。

実家の道場ではこんな簡単に抑えられることもないし、足を取られたこともない。
永倉とは実力が均衡しているとはいえ、こんな風に負かされるのはひどく悔しい。

「離してください永倉様、って言ったら、離してやる……」

にやにやと私を笑っていた永倉の表情が、急に驚愕へと変わる。

「バカか、誰が言うかっ」

なんで私が「永倉様」なんて言うんだ。
私は仕えるために来たわけじゃないし、女として付き合うつもりもない。

「お、おい」

悔しさに歯噛みしていた私だか、急に目の前の永倉の姿が歪み、吐きそうな気分の悪さに襲われた。
ヤバイ、さっき頭打ったせいか、目の前がちらつく。

「は、なせ……っ」
「しっかりしろ、葉桜！」

暗転する意識の向こう、私は誰かの温かな腕に抱き上げられるのを感じていた。
それは遠い遠い記憶と同じに、とても強く、安心できる腕だった。

＊　＊　＊

穏やかな午後の陽気に、まどろむ瞼をゆっくりと押し上げる。
とろり、と世界が蕩けて、とても甘い砂糖菓子でもつまんでいる気分だ。

だが、次の瞬間には後頭部の痛みで、私は頭を抱えていた。

（え、なんで）

状況が分からないが、昨日、自分が壬生浪士組へ入隊したことは覚えている。
歓迎会ということはなかったが、夕食で酒が振る舞われたのは珍しいらしい。
最初だからそれも一杯でやめたし、それほど強い酒でもなかったから、二日酔いということもないだろう。

だとしたら、この痛みは眠っている間にどこかにぶつけたりしたのだろうか。

「気がついたかい」

傍らの落ち着いた男声を聞いて、私は漸く自分の布団の脇に男が座っていることに気がついた。

芹沢や近藤とも違う、穏やかな大人の雰囲気を醸し、文人とも見えるこの男は山南敬助という。

昨日挨拶した時も思ったが、とても穏やかな人で、剣を持つ人には、噂で聞く壬生浪士組の一員とは到底見えない。

山南は爽やかな竹林の緑で統一された着流し姿で微笑んでいる。

「え、あれ？」

更に酷くなる頭痛を堪えて私は起きあがった。

困ったことに本当に状況が見えない。

なんで自分の部屋に山南がいて、しかも温く微笑んでいるのか。

そもそもどうしてこんなに外が明るいのに自分は眠っていたのか。

「あ、朝餉！」

そういえばお腹が空いたと叫んだとたん、山南は微笑を崩して笑った。

「もう当にお昼だよ」

初日から寝坊ですか、私。

良い根性だ。

昨日、土方に散々念を押されたってのに。

土方というのはこの壬生浪士組で副長という名の雑用を務めている男だ。

彼の持つ雰囲気から固い剣をもつのかと思いきや、実に不規則で荒削りな剣を使うらしい。

彼が日野で暴れていた噂を思い出したのは、その後のことだ。

噂を教えてくれたのは沖田という年若い少年だ。

彼自身を簡単に紹介すると、藤堂と同じぐらいの歳だというが、その剣の腕はずば抜けているという。

「葉桜君は寝かせておいてくれと永倉君が頼んだようだから、土方君へ報告をしなくても大丈夫だよ」

「え、永倉……さんが？」

「なんでも自分たちのせいだからって。

早朝から永倉君達とやりあったそうじゃないか」

「やりあっ……？」

「自分たちの不注意でこうなったから、と言っていたよ」

山南と話す間にだんだんと私は思い出してきた。

やりあったって言い方は、まるで稽古していたみたいに言ってるけど、つまり自分たちが道場で酒盛りしてたことを隠しているんだけじゃないのか。

「彼らも別に悪気があるわけじゃないんだよ」

どうしてそれを山南が弁明するのか。

怪訝な視線を向ける私に、山南が穏やかに微笑む。

「ただ、なんというか葉桜君とは多少考え方が異なる部分があるというだけで」
「考えが異なるから道場で酒盛りするんですか？」
半眼で問いただしても彼の相好は崩れることが無く、それで全部わかっているのだと私は知ってしまった。
これでは、どう考えても自分が悪者だ。
どうやらここではそういうものなのだと、受け入れるしかないらしい。
「――……郷に入っては郷に従え、てことか」
私が小さく呟くと、山南は目を丸くする。
「山南さん、どうかしました？」
「いや、そんなにあっさりと納得されるとは思わなかったから」
「私、そんなに頑固そうに見えます？」
山南からは言葉ではなく苦笑で返答され、私は何度となくされた誤解に同じく笑って返した。
「あんまり堅苦しく考えてたら、見えるものも見えなくなりますからね」
山南の両眉が微細に上がる。
「時間や状況ってのは変化する生き物だから、囚われていてはいけないと」
「時間と状況が、変化、ですか」
「そうそう、過去の歴史にもあるでしょう？

——祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす、と。

日常っていうのはどう足掻いたって変わっていくものであるし、変えていかないといけないものでもあるんです。

だったらどんなコトでも受け入れてしまった方が楽しいじゃありませんか」

一応実家の道場は塾も兼業していたというのもあるから、わたしだって一通りの漢詩は読んだし、漢文も読んだ。

身体を動かすのが好きだと気がつくよりも先に、書に親しんできたのはやはり好きだからだ。

山南に諳んじてみせたのは「平家物語」の最初の一節で、世の中は変わっていくものだと、どんなものでも美しい時を迎えれば、老いていく時も迎えるのだとかって内容だった。

それを教えてくれた人の感想は、それなら一瞬一瞬を楽しんだ方がいいに決まってる、悲しんでばかりいる人生の何が楽しいというのか、というものだった。

過去の出来事を思いだし、思わず私の口元にも笑みが溢れる。

「葉桜君は、誰かに師事していたことでもあるのかい？」

問われて山南に視線を移すと、先程よりもわずかに頬に赤みがさしている。

どうしたのだろう。

「え？」

「ずいぶんと文学の知識がありそうだから」

「本を読んだりはしましたけど、師事しているかといわれるとそう

いう人はいませんね」
「そう、なんだ」

がっくりと少し肩を落とす山南が少し哀れに思えたが、真実なのだがらどうしようもない。
書を読む以外で知識をくれたのは、父様ぐらいのものだ。
その人も今は亡い。

ここまで目の前で落胆されると申し訳ないような気がして、私は声をかけようと口を開いたが、障子の向こうに人影が現れたのはほぼ同時だったので口をつぐんだ。

「山南さん、葉桜は起きたのかい？」

人影は永倉の声をしていて、山南が起きてると告げると部屋に入ってきた。
永倉の後に原田と藤堂も続く。
三人は山南とは対面に並んで、私の布団の側に座った。

「もう平気なのか？」
「まさか頭を打ったなんて思わなくってよ」

最初に口を開いたのは原田で、本当に心配してくれているように見えた。
次が永倉で、口調に詫びる響きはない。

「藤堂は大丈夫？」

何か言う前の藤堂に私が声をかけると、きょとんとした表情が返ってきた。

まるで仔犬のような可愛いさに、最初の勝負のことを忘れそうだ。
抱きしめて、ぐりぐりしたい衝動を掛け布団を握って抑える。

「ほら、あの時二日酔いっぽかったし」
「あのぐらいは別に、いつものことだから」

いつもなのか。
たぶん永倉と原田とつるんでるからだろう。
この二人と飲むのは楽しそうだし、わからなくもない。

「楽しいのはいいが、飲み過ぎちゃいけないよ。
過ぎれば良薬も毒だから」

伸ばした手で頭を撫でると、藤堂は複雑そうに私を見る。
美少年で可愛いなあ、と気持ちがほのぼのする。

「てか、俺らは無視かよ」

永倉と原田の抗議に、私は二人へ視線を移す。
それから、また美少年の瞳を見る。

「別にそんなつもりはないよ。
ただ、ほら藤堂はなんとなくかまいたくなるというか」
「え！？」
「弟みたいで可愛いし」

言ったとたんに藤堂は項垂れ、永倉と原田は爆笑した。
山南の視線を感じて向き直ると、彼は複雑な顔で私達を見ている。

「山南さん、どうかし……！」

向き直ってすぐ、胃に不快感が起きて、私は少し気持ち悪くなる。

「葉桜君？」

気づかれないように深呼吸し、もう一度山南に笑いかける。

「なんでもありません。
で、永倉たちは何しに来たの？」

ことなしに続けようとしたら、永倉に肩を軽く突かれて私は布団に倒された。

「へ？」
「まだ具合悪いんなら無理すんな」

なんでバレたんだろう。
疑問に思っているうちに、掛け布団を頭まで被せられてしまった。

「今はとにかく休め。
仕事は明日からってことにしてもらったしよ」

そんなことを言われても。

「土方さんの許可はとってあるぜ」

なにより、葉桜は自分の班だからと言っているが。
そうじゃなくて。

「何だ？

他になにか必要か？」

さらに何か続けようとする永倉の言葉を遮って、私は漸く口にできた。

「お腹空いた」

一瞬の間を置いて、私は全員に大笑いされてしまった。

朝から何も食べてないんだから、仕方ないじゃないか。

鈴花に昼食を持ってきてもらえるまでの間に、私は結局自分で謝った。

三人はどこか罰が悪そうに笑っていて、面白かった。

5＃大阪の暑い日

文久三年、水無月三日。
うだるような暑い日だった。

壬生浪士組入隊して程なく、隊士達は大阪に出てきていた。
目的は大阪で「天下浪士」という偽名をもって不逞浪士が人に斬りかかるという事件が起きたせいだ。
不逞浪士捕縛の為に京を離れ、大阪市中取締りへと向かう事となったのだった。

「うぅむ」

しまったと私が気がついた時には既に遅かった。
道の端で腕を組んで状況を考える私の前を足早に何人もが通り過ぎつつ、たまにこちらをちら見してゆく。

一、はぐれた。

二、迷った。

三、何処に行けばいいのかわからない。

（てゆーか、全部だ、全部）

私自身、協調性なんて欠片ももっていない自覚はあるが、まさか一緒に歩いているのにはぐれるとは。
なんというか我ながら凄すぎる。

道行く人を眺めながら、運良く知り合いでも通らないかと考えてみるが、大阪に知り合いなんていない。
その辺の人に聞いてみるのがいいか、いっそこのまま見物でもしてしまおうか。

しかし、それでは間違いなく私は土方の大目玉をくらうだろう。
あの仏頂面を鈴花はかなり怖がっているから、私が怒られるというだけで心配もするだろう。
鈴花に余計な心配をかけるというのは、彼女自身のためにも避けた方が良い。

顎をあげて空を見上げると、今日は快晴で暑いくらいだ。
こんな天気の良い日に何が起こるか私は知っているが、あまり進んで関わりたくはない。

（力士なんて暑苦しいモノ見たくもないしね）

普通なら喜ぶ人の多い出来事かもしれないが、私的には贔屓の力士がいるわけでもなく、なによりも過去の経緯から関わるのは遠慮したい。
過去について、と考えかけて眉根を寄せた私は、頭を振って、それを振り払った。

あの紙に書いてあったのはこうである。

――文久三年、水無月。
大阪にて舟涼み。
その後力士と乱闘。
梅さんと遭遇。

出来事は別に死人が出るようなものでもないし、私の出る幕はない。
どうせなら屯所でサボっていたかったのだが、いつの間にか大阪行きに入っていたのだ。
近藤が画策したのかどうかわからないが、面倒なことをしてくれたものである。

（梅さんが誰かは気になるけど、留守番がよかったなぁ）

クラクラとしてくる頭で私は空を仰ぐ。
まったく、少しぐらい雲が出てくれてもいいのにと心の中で呟いた。

「あら、葉桜ちゃんじゃない？」

聞いたことのある声に私は振り返った。
と、すぐに視界が暗転する。

（やば、倒れる）

倒れるときには倒れるとわかるけれど、どうせならもう少し早めに察知したいものだ。
原因はなんとなくわかっているが、しかしどうしてこういうものは急なのだろう。

辛うじて私は腕を着いたものの、ついた側はどこもかしこも鈍く痛む。
だが、頬に着いた地面は冷たくて気持ち良くて。
埃っぽいのが難点だが、暑いより良いと感じた。
地面に耳をつけているせいで響いてくる複数の足音が、私を眠り

へと誘う。

「葉桜君!?」
「葉桜ちゃん!?」

二つの声、が、私を呼んだ。
直後にふわふわと体が浮かぶのを感じる。

(近藤、さん、と……誰、だっけ?)

絶対に聞いたことのある声の主を見ようと思ったけど、私の目蓋は重くて上がらない。

「しっかりしろっ」
「勇ちゃん、とにかく宿に運びましょう!」
「おう」

大きくなった揺れに気分の悪さを感じながら、私はそのまま意識を手放した。

＊　＊　＊

(空が、茶色い)

目を覚まし、ぼーっと見上げる其れが天井だとわかるまで数秒かかった。
おそらく、今日の旅籠となる大阪八軒屋旅宿京屋だ。
ついてからだといくらでも思い出せる。

それから、何があったのかを考える。

「私、倒れたのか？」

「そうよ」

額に冷たい手ぬぐいが置かれたので、そちらへと視線を移すと、そこには寸分の隙もなく着飾った女がいた。

晴れやかな着物を幾重にも重ね、長い髪は煌びやかに飾り、白粉を叩き、紅を引く姿は私と対照的だ。

「……なによ」

「いや、可愛いなぁって」

私の言葉に、当たり前でしょと女――山崎烝は答えた。

宇都宮藩を出て旅をしている最中に何度となく遭遇している人物で、初対面から珍しく意気投合した希有な人で、今やマブダチとなっている。

格好こそ女性を装うが、山崎は医学的には男性だ。

心は女性と主張する山崎は、私にはとても自由で羨ましい。

「見つけたとたんに倒れるんだもの。

吃驚したわよ」

私が倒れた原因は、やはり単なる熱射病らしい。

まぁ、大阪に来て休む場所にたどり着く前にはぐれ、二、三刻は彷徨っていたのだ。

今日の天気では無理もない。

「サラシ、取ったわよ」

怒りながら、山崎に責められた私は苦笑いを返すほかない。
どうやら胸を締めつけていたのも原因らしいが、こういうときの女の身はつくづく厄介だなと、静かに歎息したのだった。

「あぁ、まぁ、あんたならいいか」

一応相手が男であれば恥じらってみせるのがつねかもしれないが、別に今更山崎が男か女かどうかなんて気にするわけがない。
実際、山崎の格好は本人にとても良く似合っているから、私は構わないし、女だと主張するならそう対応するまでだ。

山崎はまだ何か言いたいことがあるのか、まだ不機嫌そうに私をみている。

「ずるいわよね」
「は？」
「あんた男みたいなのに、しっかり女なんだもん」

どうやら、体つきのことを言っているらしい。
そうは言っても筋肉は付きにくいし、力ではどうしても男に敵わないこの身は不便だと、私自身は思っている。
それを話したところでどうにもならないから、私は苦笑で受け流す。

「悪いな」
「悪いわよ」

むくれている山崎はとても女性らしくて可愛くて、私は笑いをこらえきれない。

笑わないで、と山崎にまた怒られて、それがまた可愛くて、連鎖する。
仕舞いには山崎もつられて笑った。

「そろそろ入ってもいいかい？」

襖の向こうから、控えめに声がかかる。
この声は近藤だ。
意識が戻ったときにはそこに気配があることに気がついていたから、最初から私たちの会話も聞いていることだろう。

「どうぞ」

起きあがって、近藤を迎えようとすると、山崎と二人で止められた。

「そのままでいいから」
「そうそう。
病人はおとなしく眠ってらっしゃい」

近藤は山崎の隣に座って、私を見る。

「もう具合はいいみたいだね」
「ええ、だから」
「待った。
とにかく、今は起きあがらない方がいい」

具合がいいなら別に起きあがってもいいと思うのだが、近藤は何を言っているのだろう。

私が考え込んでいると、襖の向こうにまた気配が現れる。
今度の堅い気配は、土方だろう。

「近藤さん、いるかい？」
「あぁ、トシも入ってくれ」

藍の着流し姿をした機嫌の悪そうな男が入ってきた。
土方歳三――壬生浪士組で副長という名前の雑用をしている、と言ったら怒られるが、実際とりまとめ役の仕事なんてそんなもんだ。
土方は私を一瞥すると、山崎たちとは反対側に座った。
怒るのだろうか。
はぐれたのは私自身の責任だし、何を言われても仕方ないから反論するつもりはないが、癖でつい身構えてしまう。

「具合はどうだ」

開口一番の土方の気遣う言葉に、私はよほど吃驚した顔をしていたのだろう。
私の反応を見た土方は眉間の皺を深くし、それを見ていた山崎と近藤が大笑いする。

「二人とも煩い」

私が起きあがると笑うのを止めてくれたが、起きるなとかいろいろと別な意味で煩い。
二人の制止を無視して、私は土方に向き直ることにする。

「ご迷惑をおかけしました」
「もういいのか」
「はい」

私が笑顔を作って頷くと山崎に体を引き寄せられ、後ろ向きに倒される。

「うわっ」

「駄目よっ、まだ絶対安静っ」

何を言っているのか、近藤まで何度も頷き、それに同意している。

「トシ、怒らなくてもいいじゃないの。
葉桜君は無事だったんだからさ」

近藤と土方の会話が私の上を素通りする中、私は山崎から逃れようと苦戦してみる。
だが、まだ本調子ではないせいか、振り解く力は出ない。
迷子の後で、気心の知れた友人に出会えて、気が抜けているというのもあるかもしれない。

「ほら、大人しく寝てなさい。
まだそんなに動けないでしょ」

それを察知している山崎に、私は反論する言葉を持たない。

「わかったから、離せ。
大人しくしてるから」

満足そうに微笑む山崎に従い、私は大人しく布団に寝直す。

このやりとりを見ていた近藤と土方が意外そうな顔をしているのは、入隊後の私の行動によるものだろうか。

「知り合い？」

引きつった笑顔をしている近藤の問いに、私と山崎は互いに顔を合わせてから、自然に笑った。

「マブダチ」

土方の眉間の皺が、また深くなったようだ。

6#見た目と中身（前書き）

文久三年水無月

6#見た目と中身

「我々、壬生浪士の名をかたり金策を企てた不逞浪士の輩を斬ったそうだな。
皆、その調子で頑張ってくれ。
商売敵が増えては我らへの献金が減って困るからな」

風に乗って流れてくる嫌いな男の耳障りな高笑いに、私は顔を顰めた。

「なにあれ」
「え、あぁ。
葉桜さん、おかえり」

私が呟きながら屯所へ戻った際、私を見つけた井上が苦笑する。
芹沢はいつもあんな感じで、こんなことが日常茶飯事となりつつあるというのは、とても問題だと思う。
一体ここに何しにきたのか、あの人は本分を忘れているのではないだろうか。

先日の大阪のことだってそうだ。
大阪市中見廻りにいったっていうのに、幹部のほとんどと鈴花を連れて、舟涼みに行ってしまったと土方が眉間の皺を深くしていた。
土方の皺が深くなろうが知ったことではないが、大事な鈴花をそんな風に勝手に連れていかれるのは気にくわない。

「あの、葉桜さん？」
「なんですか？」

極上の笑顔で振り向くと、井上は怖い顔をしていると笑われる。
井上源三郎――芹沢と近い年齢ながら、この人はこの人で山南とは別の意味で、そばにいて和ませてくれる人だ。
顔を洗ってきますと、井上の側を離れて私は井戸へ向かう。

汲み上げた冷たい水を両手で掬い、顔につける。
それを数回繰り返し、私は頭を振った。

「……っ」
「あ、ごめん」

後ろにいた誰かに髪の毛が当たったらしいと気がつき、振り返ると、斎藤が顔面を左手で押さえている。

「斎藤、さんか。
ごめん、気づいてなかった」

斎藤一は寡黙な男だ。
だが、口にはしなくても気配や瞳で彼は雄弁に語る。

私に対して斎藤は何を言わず、懐から手ぬぐいを取り出し、差し出してきた。
よくわからないけれど、とりあえず私は受け取っておく。

「拭け」
「え？」

私の疑問に応えることなく、そのまま歩き去ろうとする斎藤の袂を、私はとっさに掴んでいた。
怪訝そうに振り返る斎藤に、もう一度問う。

「確認するけど、手ぬぐいを渡すためにそこにいたの？」
「違う」
即答し、結局そのまま逃げられた。
意味が分からない。
おそらく、顔を拭けと言ったのだろうけど、手ぬぐいならちゃんと自分のを持っている。
胸元のこれが見えなかったのだろうか。
少し考えて、私は斎藤には見えなかったのかもしれないと思い直した。
斎藤は右目側の髪を少し長めに伸ばしているからほとんど見えないはずだし、左側は私の髪が当たったみたいだし。
せっかくの好意を無にするのもなんだし、と私はそれを使うことにする。
井戸端に座って、顔を拭きながら、私はふと空を見上げた。
実家の道場を出てきたときと同じ真っ青な青空に目を細める。
時々こうして思い返す。
弟はどうしているだろうかとか、母は元気だろうかとか、通ってきていた子供達はどうしているだろうか、とか。
それでも帰りたいとは思わない。
あそこは自分がいなくても大丈夫だと知っているから。
殿様は少し頼りない藩だけど、それでも蔑ろにはされない場所だ。
そうそう窮地に落ちることもない。
かといって、ここに思い入れが深いわけでもない。

まだ来たばかりで何もわからない。
懐から、ここにくる原因となった紙を取り出し、開いてみる。

――文久三年、葉月。
新選組誕生。

もう少しでその月が来る。
なにがあってそうなるのかも書いてある。
ただ、話せないだけ。
その名を呟くこともできない。

「しっ……けほっ……はは っ、またご大層な名前」
「なにがだい？」

空に翳しながら見ていた私は声をかけられて、そのままのけぞりそうになった。
腕を引かれて間一髪、誰かの腕に収まり助かる。
また頭ぶつけるところだった。

「あっぶなーい……」
「本当に、気をつけないといけないよ」

声をかけたのも助けてくれたのも同じ人物、山南だ。
見た目は華奢な感じなのに、こうして腕の中にいると意外とがっしりとした体つきをしているのがわかる。
見た目は学士だが、やはりこの人も剣士だ。
この壬生浪士組の総長なのだし、小野派一刀流の免許皆伝を持ち、北辰一刀流の使い手でもあるのだから当然とも言える。

しかし、普段との格差が大きくて私は少し動揺した。

「あの、葉桜君？」
「はい」
「そろそろ、離してくれないかな」

体つきを確かめるためとはいえ、私はついしっかりと抱きついていた自分にやっと気がついた。
初日に会ったときの山南は平静で崩れなかったが、今はもしかすると相手もかなり動揺しているのかも。
そう思うと楽しくなってしまって。

「イヤですっ」

もう一度強く腕に力を込める。
女の力じゃどうにも敵わないので結局引っぺがされたけど、赤面する山南さんをいう貴重なものを見れたから、私は満足だ。
可愛いと言ったら、からかうんじゃないと怒られてしまった。

どうしてだろう。
今日みたいな綺麗な青空と山南を合わせてみると、ひどく切ない気持ちになる。
それは、未来を知っている故の痛みだと原因をわかっていても、問わずには居られない。
助けられなくても、彼のためには何かをしてあげたいと思っている。

一覧の最後に、できるなら、と、小さく書かれた名前。
震える筆跡がどうしようもないのだと諦めていた。
どうしようもないことをどうにかするのが、自分の役目。
だから、自分はここにいる。

「山南さ」
「おい、葉桜。
ちょっと来てくれ」

土方は時々見計らったように私へ声をかける。
なぜ今なのかと問いかけても、意味がわからないと返されるだけだ。
しかも今日は言い逃げられた。
私の都合はお構いなしか。

「じゃあね、葉桜君」

そして、山南にもあっさりと逃げられて。
私はどうすりゃいいんだ。
とにかく土方の部屋に向かうしかない。

絶対、意地でも助けてやるんだから。
と、私は土方の部屋の前で決意を固めた。

「何してんだ、さっさと入れ」

頼まれ、交わした「約束」はどんな方法を使ってでも押し通す。
それが、私のやり方だから。

「負けないんだから」

小さく呟く私を土方が怪訝そうに見ていた。

6#見た目と中身（後書き）

山南さん、大好きなのですよ。
だから、できれば助けたい。
だけど、どうすることが助けることになるのか模索中。
「生かす」ことは、必ずしも「助ける」と同等ではないと思うので。
（０５／１２／１３　１７：２４）

改訂
（２００９／１２／２８）

7#木片と糸

「芹沢さんが島原の角屋で暴れた上に、何の権限もなく七日間の営業停止命令を出したそうだ。
芹沢さんの酒乱にはほとほと困ったものだよ」
「本当ですねぇ」

山南の隣で頁を繰りながら、私は曖昧に返事を返した。
別に聞いていないわけではないし、蔑ろにしているつもりもない。
単に私は読んだことのない本に没頭しているだけだ。

何故昼間っから私が山南の部屋にいるのかは、ほんの小一時間前にさかのぼる。

朝稽古を終え、朝餉も終えた私が、同じく非番の鈴花を誘って甘味処にでも行こうと思ったら、すでに彼女は原田に連れ出された後で。
いきなり予定変更を迫られた私は、何か書を読んで過ごそうと決めた。
だが、京に不案内なのでどこに行けば書が手に入るのかわからず困っていたところで、通り掛かった藤堂に聞いてみたのだ。
すると、どうやら山南の部屋に沢山あるらしいということで、そういえばと先日のことを思い出し、ついでもかねて私は山南の部屋を訪ねた次第である。

山南の部屋には私が読んだことのない本も数多くあって、今はそれを読むのにとても忙しい。
だからといって、もうひとつの目的を忘れたわけではなく。

「葉桜君」
「……」
「手を、離してくれないかな」
「イヤです」

私は本から目を離さずに答える。
山南が困っているのは百も承知だが、ここで彼に逃げられては私がここにいる意味もなくなってしまう。
両方の用事を逃さないために、目は行を追い、左手は頁を捲りながら、右手は彼の袂をしっかりと掴んである。

完璧だ。

「葉桜君」
「もう少しで終わりますから」
「だから、貸してあげると」
「ここで読んでいきます」
「あのね」

山南の呆れ声を聞きながら、私は書の内容を頭に叩きこんでゆく。
私の集中力に根負けしたのか、しばらくすると山南は大人しくなったようだ。

家族とは違う、でも安心する気配にのめり込んでいた私は、ふと近くで聞こえる物音で顔を上げた。

「なにやってんですか？」

それは山南の手元から発せられており、私は書を開いたまま彼の弄っているものを覗く。

「うん、ちょっとね」
「……木細工ですか？」
「少し違うかな」

山南は木片と糸を操り、何かを組み立てていて、木片が重なりあうときにかちゃかちゃと軽い音を私に届けてきていたのだ。
それはわかっているが、山南が何をしているのかまでは思い当たらず、私は首をひねる。
その組み方やなんかは見たことがある気がするのだが。

（木細工じゃないけど、たぶん、近い）

「……人形……？」

山南の隣で私が小さく呟くと、いきなり頭をぐしゃぐしゃと撫でられた。
彼を見ると、子供みたいに破顔している。

「葉桜くんはよくわかったね。
まだ全然形にもなってないのに」
「え、本当に人形！？」

かなり適当に言ったつもりだったのに、当たりだといわれても私自身困惑するだけだ。
山南の前に積み上げられ、糸で繋がれた木片をもう一度よく見てみるが、さっきの当てずっぽうが信じられないほど、どう見ても人形には見えない。
連想だけでよく当たったものだが、会話に繋がるならそれでいい

か。

「これはまだ構想段階なんだけど、自動でお茶を淹れてくれる人形にするつもりなんだ」

「へー凄いですね。

そんなの作れるんですか」

自慢ではないが、私は華道茶道といった女性らしい手習いは苦手だ。

その分腕っ節に関しては相当なものであるが、やはりお茶の一つもいれることができないとなると、ことあるごとにお小言をいただくのだ。

代わりにこなしてくれる人形がいるというのなら、それこそ両手を広げて歓迎するに決まっている。

「出来上がったら見せてあげるよ」

「え、いいんですか？

やったーっ」

本気で喜ぶ私をとても嬉しそうに山南は見守ってくれる。

その温かさにますます私は嬉しくなる。

「ははははっ、話だけでそこまで喜んでもらえるなんて、沖田君以来だな。

期待に添えるよう頑張るよ」

「はいっ」

山南の言葉に素直に私は頷いた。

実を言うと、私はからくりとか新しい発明が大好きなのだ。

ただ、知人の自称発明家には「私が触ると壊れる」と嘆かれるが。

「他にどんなのを作れるんですか？」

部屋の中を見回して、私はその他にそれらしい発明品らしきものが見あたらないことを確認した。

知人の自称発明家は部屋といわず、家ごと発明品で散らかっていたから。

ここではたぶん潔癖そうな土方にでも文句をいわれそうだし、倉庫にでもしまってあるのだろうか。

「見たいのかい？」

「是非っ」

「じゃあ、手を」

「イヤです」

しっかりと私は山南の袂を握り直した。

対して、山南はしかたないなぁと柔らかい微笑を私に向け、小さな子供にするように、私の髪を撫でる。

山南の隣は、山崎や鈴花とは違い、気負わない自分で居られる。

その心地よさに、私は自分の目元がゆるくなるのを感じた。

だからというわけじゃない、気配に気づかなかったのは。

不意に山南が離れ、つい不安に思ってしまって私が顔をあげると、丁度良く障子が開いた。

そこに立っていたのは芹沢で、いつものごとく飲んだくれているのか、ほんのりと頬が朱に染まっている。

「芹沢さん？」

芹沢は私と山南を交互に見た後、にやりと下卑た笑いを見せた。

「妙なのに懐かれたな、山南」

大きなお世話だ、と無言で私は芹沢を睨みつけたが、少し考えて笑顔を向ける。

「羨ましい？」

からかうように言うと芹沢の顔から笑みは消え、苛ついた様子で部屋の中を見回す。

その目に止まるのは、私が読んでいる書の数々と山南が弄る木片と。

「また妙なもので遊んでやがるようだな」

「酒飲んで暴れるよりは良いでしょ」

言い返した私と芹沢を遮るように山南が手を翳すが、今の私はそれで止まれなかった。

「だいたい、自分だって変なもの好きなくせに。

格好だけ真似したって、自分以外の何者にもなれないってわかっているくせに」

隣にいる人を振り切って立ち上がり、私は芹沢に一歩近づく。

精一杯、目線を合わせて、睨みつけて。

普通の隊士であれば、芹沢の振るう鉄扇で撃ち殺されてもおかしくない状況で、芹沢はただ静かに私の声を聞く。

それが、私は気に入らなかった。

「今のあんたはあんたじゃない。
大っ嫌いっ」

そのまま、山南の部屋を後にする私を芹沢は引き止めることなく見送っていて、だけどそれさえも腹立たしく感じてた私は少しだけ寂しそうに私を見る山南に謝る余裕もなかった。

7#木片と糸（後書き）

なんとなくですが、新選組で一番大人なのはこの人だと思います。
お父さんみたいな。いや、お母さん・・？いやいやいや。
主人公が妙に幼いですね。
（２００５／１２／１３）

改訂
（２００９／１２／２８）

8＃酒の妙薬（前書き）

芹沢鴨追加1「酒の妙薬」（裏）

8＃酒の妙薬

壬生浪士組という場所は私にとって妙に居心地が良くて、慣れるのに一日もいらなかった。

その理由の半分の半分は近藤のおかげかも知れないし、その更に半分は認めたくない人の存在で、残りの半分の半分は今一緒にいる居心地の良い者達のおかげだ。

「よくあんな店知ってんなァ」

満腹の笑顔で半歩前を歩く永倉が腹を叩く。

「旨かろうよ」

「へへ、おごってもらって悪いな」

並び歩く苦笑いの原田に、私も苦笑いを返す。

「土方さんらには内緒だよ？」

会津藩お抱えと聞いていたが、どうやら禄もない浪士の寄せ集めらしい彼らに、おごりを買って出たのは私のほうだった。

もちろん状況の把握のためとかそういった理由もあるにはあるが、一番の理由はこの二人が特に気が合うからだ。

おかげで彼らが江戸に出てくるまでの顛末を聞かせてもらえたことは、私にとってかなりの収穫となった。

「で、葉桜はあといくら持ってんだ？」

にやりと人の悪い笑顔で問いかけてくる二人には悪いが、これ以

上おごるつもりはない。

「ないよ」

「そんなわけねぇだろ」

支払いの時にちらっと私の財布が見えたらしい二人は、食い下がってくる。

「ちーっとだけ貸してくんねぇ？」

「ははは、駄目だよ。

これは――」

軽い足取りで二人から距離を取りつつ振り返った私の隣を二、三人の子供が何かを手にしながら笑い声を上げて、駆け抜けて行く。

微笑ましく見送ってすぐ、子供らの手にしていたものを目にした私は思わず足を止め、呆然としていた。

「もーらいっ」

「どした？」

原田に空の財布を奪われたまま、まだ明るい道を遠ざかってゆく子供らの後姿に私は目を細める。

あんな風に無邪気にしていられたのはいつだったかと考えかけ、頭を振る。

「葉桜？」

「ち、カラか」

人の財布を逆さに振って文句を言う原田からそれを奪い返し、懐へしまいながら私は歩き出す。

後をついてくる二人の訝しげな視線を感じるけれど、いくら気が合うといったってまだ話せることではない。

「おい、どうしたってんだよ」

「懐かしいなぁ、って思ってさ」

ずっと昔のことのように思える子供の時分、何も知らずにいられた心愉しい時間を思い出し、私は自然と笑みを浮かべる。

「実家の道場に、絵の上手な食客が泊まっていた時分のことを思い出してね」

「へー、書生かなんかか？」

「いいや、剣客さ」

目線を上にあげると同じ時間を思い出す。

「おまえ、絵が上手いな」

道場で父が門下生の稽古をつけている間、私は暇だったのでよく「彼」の部屋に出入りしていた。

「彼」は面倒がってなかなか外で遊んでくれなくて、昼の穏やかな光差し込む部屋の中で、私によく絵を描いてくれた。

「葉桜は下手だな」

「そんなことないだろ」

対抗してべたべたと私も描いたが、彼の言うようにどうも思うように描けない。

だけど、それを認めるのは悔しくて、部屋中を埋め尽くさんばかりに私は絵を描いた。

「どうだっ」
「あー上手い上手い」
「ちゃんと見ろっ」
「見てるぜ、ちゃんと」
「うそだ、おまえ目を瞑っているではないかっ」
「……うっせぇガキだな」

そういっていつも寝たフリをして逃げられたことを思い出し、自然と口角が下がる。

「なに一人で百面相してやがる」

いきなり後ろ頭を叩かれ、私は永倉に抗議の目を向けた。
永倉は何故か私を優しく笑っている。

「葉桜はイケる口だよな」
「へ？」
「聞いてやるから、今夜俺らの部屋に来い」

実は若衆だけで飲むんだと聞いて、私は少し瞬きをしたあとで軽く笑った。

「土方さんや芹沢さんに見つかったらやばいんじゃないか？」

前者は説教込みで取り上げられ、後者は酒の匂いで取り上げられる。
私がそう言うと二人の男はにやりと笑った。

「心配すんなって。

そんなことより来るのか来ねぇのか、どっちだ？」

さて、と私は少しばかり思案のフリをする。

「むさ苦しい男に囲まれての酒盛りはつまらんなぁ」

「そういうなって」

肩を組んでこようとする原田の手を跳ね除ける。

純粋に仲間として誘っているのはわかるが、他のものにどうこう言われるのも困る。

「実はな、ちっとオメーに尋ねたいことがあってよ」

「なんだ？」

「こんなところで言う話じゃねェから、夜に俺らの部屋まで来いっつってんだよ。

いーか、土方さんや山南さんらには絶対言うなよ」

なんだろうと首を傾げつつも私はこくりと頷いた。

＊　＊　＊

寝息で煩い部屋の窓辺で、私は手酌を傾ける。

小さな杯を摘むように持ち、そこに溜まる少し白く濁った水をクイと煽ろうとした手を、不意に抑えられ、私はそのゴツゴツした男の手を一瞥した。

酒に浮かぶ月をそのままに私の手ごと傾け、一気に飲み干される。

「っかー、うめェなァ」
「起きたのか、永倉」

驚くでも動揺するでもなく、小さな笑みを零し、私は永倉の手を軽く払い、また手酌で注ぐ。
その様子をじっと永倉が眺めていることに気が付いてはいたが、私はただ瞳に月を映したまま、ゆるりと酒を飲み干した。
こくり、と喉が鳴る。
ごくり、と近くで唾を飲む音がする。

「で？」

唐突な問いかけだったから、あまり自分に言われている気がしなかった私は、また猪口を傾ける。

「昼間、何思い出してたんだ？」

頭の中で少し反芻し、私はああと小さく呟く。

「子供の頃のことを少し、ね」
「絵の上手い食客のことか」
「まあね」

言いながらも少し眉間に皺がよる気がして、私は指先で眉間を押さえた。

「強い人だったんだ。
私は一度も勝てたことなんてなかった。
だけど、いつも本気で相手をしてくれてたことだけは感謝してる」

自然と私の口元が緩むのは、やはりあの頃が幸せだったからだろう。

今とは比べものにならない、比べてはいけない想い出だから、私は目を閉じて小さく笑う。

「良い奴だったのか」

「ああ、良い奴だった」

即答できるぐらいに大切な想い出の中で笑うあの人を、私は下ろした瞼の向こうに見つめる。

目を閉じればこんなにも鮮明なのに、ゆっくりと目を開ければ寂しい月が浮かぶだけで。

眦にかすかに浮かぶ雫に、私は自分が少しだけ酔ってしまっているのだと思った。

銚子を振って少し残っている音を耳にしてから、そのまま煽る。

喉をするりと通り抜け、焼け付くような痛みに眥が熱い。

「流石に酔っただろ。

こりゃ上物だからな」

からかうように笑いながら、永倉が私の肩を抱く腕は、女の扱いに慣れた優しさを込めている。

丁度の加減で弱く抑えつける腕に震え響くのを抑えつつ、見えないのをいいことを私は俯いたまま、声だけは笑いながら涙した。

「ははは、流石に少し酔ったよ。

本当に、良い酒だ」

もしもあの頃に戻れたら、なんて私は言わない。

あれからだってたくさんの出来事があったし、どんな選択だって私は間違えたとは思わない。
私は私が最良の生き方をしてきたと胸を張って生きているから。

だけど、時には私も想い出を懐かしんでもいいだろうか。
戻れないからこそ、切なさの募る優しいあの時間を私は何よりも愛しているから。

「鼻水つけんじゃねーぞ」
「つけるか、ばーか」

気の合う仲間は勘が良すぎて、私には少しだけ厄介だ。
だけど、酔ったふりして甘えるのもたまにはいいだろうか。

明日になったらまた頑張るために、今だけ、少しだけ、泣かせて。

顔をあげない私の背を撫でる手はとても優しく、気持ちがとても温かかった。

8#酒の妙薬（後書き）

芹沢と絡みがあった場合は他の部分で矛盾が生じるので、あえて裏イベント。
そういえば、最初は永倉、原田と絡みがないなぁ気が合うのに、と思ってこの二人をチョイスしました。
初期イベントなので甘味なし。
の、つもりだったのですが。
うーん……この話の永倉がいつからヒロインに傾いていたのか、書いている本人が一番よくわかりません（マテ
（２００９／０１／１９）

改訂
（２００９／１２／２８）

9#きれえやか

さらさらと流れる川の流れる音に私は耳を澄ませ、閉じた瞳の後ろ側で目の前にあるであろう景色を想う。
雑踏を歩く人々の足音、威勢のいい掛け声、風に揺れる柳の葉擦れ、誰かの呼び声が心地よい。

心地よさに身をゆだねつつも、私は手元の真剣に触れ、その存在を確かめる。
というのも、明らかにこちらへと近づいてくる気配を感じたからだ。
今は休息の時間で、出会いは求めていない。

しかし、気配は近寄って来ず、離れていったことに私は安堵する。
それから、鍔から手を離し、陽射しの強さに眩まされないように、ゆっくりと自分の両目を開いた。

目の前には、不審な男の顔。

「誰だ、あんた」
「相変わらずつれん人やか。
こがーにしょうえい男をふとぅうは忘れやーせん」

訛りの強い言葉に私は眉をしかめる。
会ったことなんてあるだろうかと思い巡らすが、こんな目立つ男なら、一度見たら忘れない気がする。

細面の優男だが、それ以上に目立つのは真っ直ぐでない天然パーマ。

足元には草履や下駄でなく、南蛮渡来の編み込みブーツ。
腰に剣を差しているが、使っている様子はない。
だからといって軟弱な文人というわけでも無さそう。

「知らん」
「えずいやか。
わしはいちじつも忘れたことはないがでよ」

男は軽口を叩くのを挨拶代わりにしているのか。
こういう部類の人間が苦手な私は、剣を手にわずかに殺気を散らせる。

「言いたいことはそれだけか。
だったら、さっさと行け」
「しょうまっこと覚えちゃーせきか？」

触れそうなほどに顔を近づけられ、私は思わず足が出た。
一間程度吹き飛ばされた男は腹を抱えて蹲っていたが、笑顔で顔を上げる。
苦しげな息の元のそれに、私は見覚えが確かにあった。

「あ、あー！」
「思い出しちゅうか」

いつかの旅籠で、一度だけ会った気がする。
私が酔っぱらいを素手で叩き潰した後に、ひとっ風呂浴びた後で。

「あの時の覗きかっ？」
「やき、ほりゃあ覗いちゃーせんとゆうたにかぁーらん」

そうはいうが、脱衣所を出て、すぐに会ったという状況を信じろと言う方が無理な話だ。

「第一、おんしは気にしやーせんとゆうたがやないかね」
「そりゃ、私の裸なんか見たってなんの得にもならんからだよ」

私は自分がまったく女らしくないと自覚もしている。
女性らしい体つきとは言い難く、筋肉質で、また傷も多いのだから。
男ならば勲章とでも言える傷跡の数々は、女にとってはただの醜い傷でしかない。
だが、私はそれを後悔したことはない。

「そうにかぁーらんか？
わしはいい線いっちゅうと思うのやけど」

男は自然と私の腕をとりあげる。
たったそれだけで、私の腕には並の剣士でも持たないような夥しい数の傷痕が現れる。
掠り傷の中にひときわ大きな剣の切り傷は、真剣を小手で受けたときに突いてしまったものだ。
よく落とされなかったと、自分でも感心する。

「きれえやか」

男が笑顔で言った言葉に、私は小さく首を傾げた。
これは、褒められたのだろうか。

「有り難う」

考えてから返すと、男はうれしそうにうなずいた。
こういうのは、私は少し照れくさい。
こんな風に真っ直ぐに見られたのは、いつ以来だろうと思い返して、私はまた顔を顰めた。

「どうしちゅうか」

別に一度会っただけの他人に言うことでもないし、まさか過去の因縁なんか話したって仕方がない。
こいつはあの男のことなど知らないだろうし。

「何でもない」
「わしにゃ言えやーせんか」

残念そうに言って、男は私を掴んでいた腕を放す。
引き際をわかっているというより、踏み込めないことだと理解してくれた様子だ。
こうしてまともに話すのは初めてだけれど、そうされると私もなんだか安心してしまう。
思い出には踏み込んでほしくないし、踏み込ませる気もないから、留まってくれるなら逃げはしない。

「わしはこがーにおんしのことを想っちゅうがやき」

拗ねるような男の様子に、私は思わず笑ってしまった。
彼もそれが狙いだったのか、笑顔を見せる。

「そうやか。
おんしはほがな風に笑った方が可愛いやか」
「調子に乗るな」

急に頬に触れようとする男の腕を掴み、私はひねり上げようとしたが、あっさりと交わされてしまった。
まったく、京に来てからは強い人ばかりに会う。
おんしゃぁ油断ならんぜよ、と笑っている男に、私も問いかける。
あの紙の一覧にある名前だと良いと願う反面、そうあって欲しくないと思う自分もいるという矛盾を笑顔の下に隠して。

「私は葉桜。
あなたは？」

彼は、才谷梅太郎、と名乗った。
梅さんでいいと言った彼の前で、私はちゃんと笑えていただろうか。
関わって欲しくない。
でも、関わって欲しい。
そんな二つの相反する想いに、私の心は深く揺らいでいた。

依頼人の紙に書かれた人物は強い人ばかりで、自分はいったい彼らの何をどう助ければいいのか。
剣という面では一切力になれない気がして、流石に私も気持ちが挫けそうになる。

「きれえな名やき」

才谷の優しい声が、私の世界に半分だけ温かい音を響かせる。
何かを予感させるように、柳が呼応し、さやさやと揺らいでいた。

9#きれえやか（後書き）

土佐弁コンバータサイトを発見。
それでも合っているのか不安です……。
でも、梅さんは外せない！外せないったら、外せない。
（０５／１２／２２　１３：５４）

梅さんの言葉は最大の難関！です。
コンバータを持ってしても違和感が…！
これは違うだろう、というツッコミ待ってます。
（０６／０２／０８　１０：４１）　新規

梅さんの言葉をすべて修正。
なんとなくコンバータの使い方が分かってきました。
丁寧語をいれれば、それっぽくなるみたいです。
（０６／０６／２１　１０：３６）

改訂
（２００９／１２／２８）

１０#有難くない信用（前書き）

「からくり人形」（裏）

10#有難くない信用

私が壬生浪士組に入隊して、だいたいひと月が経った。
自慢じゃないが、それなりの経験と商売柄、人の信用を得るのには慣れている。
つまり、今ではこうして土方の部屋で、自分の肘枕にくつろぐ程度には打ち解けていた。

「え？」

いつも通りに事務仕事をしていた土方が振り向いて言った言葉を私が聞き返した瞬間、同じ屋根の下で小さな爆発音がそれを掻き消した。
身を起こして構える私に対し、土方は心配ないと言って普段の倍も眉間に皺を寄せる。

「ありゃあ、山南さんだよ。
あの人は発明が趣味なんだ」

既に聞いていた話なので別に驚くことでもない。
爆発の方向も土方の言うように山南の部屋で間違いはないだろう。

「たしか今は自動お茶汲み人形を作っているんでしたね。
失敗したのかな」

私のつぶやきに、土方は知るかと素っ気なく返してきた。
どうやら山南の発明は土方にとって、心労の一つらしい。
もうひとつの心労はおそらく彼の上官にあたる人のせいだろうが、それは私が知ったことではない。

「山南さんのことはいい。
それより、どうなんだ？」
「どうって、土方さんは何考えているんですか」

一応の訂正としておくが、私とてよく土方の部屋に入り浸っているわけではないし、今は何か話があると呼ばれたから、いるというに過ぎない。
呼んでおいて、少し待ってくれと土方に言われ、寝転がっても文句がでなかったから、私もそのままでいたまでだ。

「土方さんは買いかぶりすぎです。
入ったばかりの、しかも女に隊を任せるなんて」

いくら実力本位で信頼もされているとはいえ、私は自分が異例として入っている自覚はある。
私の信用とかいう以前に、女が組長の一人になることに対して、納得しない隊士だって多いはずだ。
いくら強くても私は女で、その女が隊を率いる様子は、世間の目から見ても宜しくはない。

私は視線を膝に落とし、自分の手を見た。
目の前の土方とは比べものにならない細く小さな手で、この人と剣を交えたことはないが勝てる気はしない。
土方の上官である、あの芹沢や近藤にだって、私は勝てないだろう。

私に対して、土方の手は剣を持つ人の手にしては骨張って細い指だ。
傷も荒れも多いが、それでも綺麗な手をしている。

心根までも写すようなまっすぐで綺麗な手だ。

「俺もそう思うぜ。
だが、おまえを推す奴が多いのも事実だ」

土方が私にこんな話を持ちかけてきた原因に、心当たりはあった。
先日、斎藤と稽古したときに言われたのだ。
手を抜いている、と。

本気でやるわけにもいかなかったが、そんなふうに見抜かれるのも良くはない。
だが、木刀では私はどうにも真剣になれなくて、遊びとしか思えなかった。
悪い癖だと父様にも言われたし、弟にも言われた。
それでも直らない私の剣は、ひどく不格好であることだろう。

カタカタと梁が鳴る音に、私は意識だけを向けた。
わざわざ報せるということは、何か言いたいことでもあるのだろう。

「でもねぇ、問題あるでしょ、烝」

音の鳴った天井へと私は顔を向ける。
次には隣に普段とは違う質素な服を着た美女が私の隣に並んだ。
音を鳴らす以前のいつからそこにいたのか、私にはわからない。
山崎の気配はひどく読みにくいのだ。

「そうかしら？」
「ちょっと、烝は土方さんの肩持つ気？
それって親友としてどうよ」

「だって、葉桜ちゃんはおもいっきり稽古してないじゃない。前に会ったときより弱くなってるでしょ」
「なにそれ、ひどいなぁ。私が毎日遊んでるって？」
山崎と普段通りの軽口を叩いていた私は、ふと土方へと目を向けた。
いつもなら眉間に何本も皺を寄せて見ている光景を、今は興味深そうに見ている。
「山崎、おまえから見て、本気の葉桜はどのくらい強い？」
げ、と小さく私は呻いた。
土方は私を組長にしようとするのに、かなり乗り気なのかもしれない。
「あ、私、山南さんに呼ばれてたんだった。土方さんの話はもう終わりですよね？」
咎められる前に、私は逃げるように、土方の部屋を出た。
廊下を少し進んで、明るい日の射す庭木へと私は目を向ける。
そのまま視線を上方の空へと向ければ、既に太陽は頂上を通り越し、後追いの月がうっすらと昇り始めている。
私はそのまま数歩歩いて、足を止めた。
今朝方降った小降りの雨で未だわずかに乾かずにある庭の立木の元、かすかにのぞいた見知った羽織が小刻みに揺れている。
着物の色は白で裾や袂に薄桜があしらわれていて、足元には泥はねが数カ所乾いてあることから、私はこの人も随分前からここにいたのがわかった。

「近藤さん、なにが可笑しいんですか？」

私が声をかけると木の陰から抜けて、近藤はこちらをのぞく。
声に出ているわけではないが、やはり近藤は口端をあげて、笑っていた。

「葉桜君さぁ、俺とちょっと稽古しないかい？」

珍しいこともあるもんだ、と私は気づかれない程度に眉を上げた。
近藤も私同様、木刀と真剣に差のある剣客だという。
二人ともに真剣でない稽古に意味などない。

「木刀はやる気がおきないんじゃなかったんですか？」
「いやだなぁ、稽古っていったじゃない。
それに、葉桜君だって同じでしょ？」

同類だと近藤も知っているということは、斎藤が報告したか、あるいはあれを見ていたのか。

「勘ぐらないでよ。
そうだね、屯所の外……河原にでも行くかい？」
「はい」

私が頷くと近藤は背を向けて歩きだす。
背中を見ていても勝てる気はしないが、勝てなくとも強い相手と戦うこと自体には私も心踊る。

だから、先を歩く近藤の背中を私は追いかけた。

＊　＊　＊

川のせせらぎや葉擦れの音は、私にいつも安らぎと緊張感を運んでくれる。
先日はここで才谷と会って、今日は近藤と剣術の稽古か。
日常の稽古と呼ぶには、今日のはずいぶんと危険な稽古だろう。

降ろしたままの私の抜き身の真剣が、高く低く鳴く音が聞こえる。
その声は自分を支配するものにはほど遠く、確かな力を分けてくれることを誓約する心地の良い音色だ。
父様の形見でであると共に、私を守り続けてくれる愛刀は、数多の命を吸ってなお、透き通るほどの輝きを私に見せる。

今日これが鳴くのは、何のためか。
それが血を、命を求めるものでないことを祈りながら、私は正面を見据えた。
目の前には私と同様に剣を抜いている近藤の姿がある。

「俺はさぁ、ずっと葉桜君に聞きたかったことがあるんだ」
「何をですか？」
「なんで、壬生浪士組にきたの」

入隊して以来、何度となく言葉を変えてされた問いだが、今日はずいぶんと直球にくることだ。
真っ直ぐに向かってくる近藤の感情が、私には心地良く響く。
空気に溶けるように、全てが溶けて、私と世界が交わる。

「鈴花ちゃんを助けるために」

これはただの建前だ。

「嘘だよ」

見抜いている近藤を可笑しくもないのに、私は笑う。

「本当はどうなんだい？」

本当のことなど、話せやしない。

入隊当初は本当に近藤や土方らを助けるために、私は入ったつもりだった。

だけど、これだけの強さを持つ人たちを前に、そんなことを口になんてできない。

どうしてなんて、私が聞きたい。

会話を打ち切りたくて、私から動いた。

風に乗るように動くのが私の剣で、近藤は軽くそれを受け流す。

数太刀を交えたあと、近藤の方から距離を取る。

「困ったね。

葉桜君、やる気ないでしょ」

「近藤さんはずいぶんとやる気ですね。

私を疑っているから？」

「自覚はあるんだ」

そりゃ、自分でも不審だという自覚はある。

「俺がわかるのは、葉桜君が俺たちを仲間と見ているってことと、桜庭君を本当に大切にしているってことぐらいだよ。

藤堂君や永倉君、斎藤君、原田君とも稽古してるだろ？
その後、必ず桜庭君ともやってるねぇ」

そこまでバレていて、私を疑わないという近藤は、笑ってしまうほどお人よしなのか。
それとも、それだけの器を持っている人だということか。

「それに、芹沢さんも君をかってる」
「あの人が？」

まさか、と純粋に疑問に思う。
私はここにきてから、あの芹沢が道場にいる姿なんて、一度も見ていない。
彼が私の実力を知るはずがないのだ。

「葉桜君は信頼できるとも言っていたよ」

近藤はうそつきだ。

「あの人がそんなこと言うわけない」

言うわけがないと、私は知っている。

「芹沢さんは私を嫌いなんだから、そんなこと言わないよ」

私だって、あの人が嫌いだ。
今の、芹沢が大っ嫌いだ。

再会した時には、私だってわかってた。
芹沢が名前と共に過去を、私を棄てていることなんて、わかって

いたんだ。

刀を鞘に納め、ゆっくりと近づいてくる近藤を前に、私は構えずに睨み付ける。

近藤は何も言わず、私に頭から何かを被せ、身体ごと抱き寄せた。

淡い優しい香の匂いに、不覚にも泣きたくなる。

「もうちょっとさ、素直になりなよ。

葉桜君は女の子なんだからさ」

私は柔らかく背中を叩かれて、嗚咽までもがが零れそうになる。

だって、近藤の手はまるであの人のようだったから。

そういえば、あの人もこうやって私を泣かせた。

意地でも泣かないつもりだったのに、こうすれば見えないからと言って、普段は私をからかって遊ぶくせに、真逆の優しさで慰めてくれた。

川のせせらぎのせいか、今の勝負のせいか、私は思い出してしまったじゃないか。

溢れる涙の代わりに、私は声を押し殺す。

泣かれていると近藤に気がつかれたくないのは下らない意地だ。

「そんなに声を押し殺して泣かなくても。

誰にも言ったりしないからさ」

あやすように、近藤は私の背中を叩く。

ぽんぽん、ぽんぽん、とリズムが心地良くて、私は懐かしさが込み上げて。

「っう……ぇ……」

零れ始めた私の嗚咽は、意地とは無関係に留まることを忘れ。

「……ぁ……ぅぁ……――――っ」

くぐもった音も流れた涙も、堪えてきた何もかもが流れ落ち、私に被せられた羽織に吸いこまれて消えた。

近藤は不思議な男だ。

普段はちゃらちゃらしているのに包容力があって、父様のように大きな存在感があって、とても安心できる。

父様がいなくなった夜に泣いてから、今まで決して流さなかった涙を、簡単に私に流させる。

こんな人が父様以外にもいるのだということを、この日私は初めて知った。

＊　＊　＊

腕の中で急に重くなった葉桜君の身体を片腕で支え、俺は地面に突き立てられた葉桜君の愛刀を抜いた。

守るように甲高い声を上げる葉桜君の刀を彼女の腰の鞘に収め、俺は一動作で抱き上げる。

その体は起きているときの不遜な存在感から考えていたほど、重くはない。

最初に聞いている葉桜君の年齢を考えれば、軽すぎるぐらいだ。

入隊の面接にきた当初、葉桜君はとても自信に満ちていて、俺には年齢や容姿以上に大きく見えた。

だが、日を追うごとに葉桜君が只の女の子なのだと気がつかされる場面は、よく見ていれば多い。

無理をして男装しているわけではないのだろうが、時折のぞかせる女性らしさには幾度となくハッとさせられる。

「葉桜君がそんな風だから、俺は本気で疑えないんだ」

俺の腕の中で眠る葉桜君は、起きているときとは比較にならないほど、存在が稀薄だ。

目的をもって壬生浪士組に入隊したのだろうが、その役目を終えたら、葉桜君は消えてなくなってしまいそうだと、俺は時々感じてしまう。

だから、他の隊士に望まれていることもあり、トシに頼んで葉桜君に隊を預けようと思ったのだ。

預かる命がある限り、葉桜君は自棄になることも消えることもないだろうから。

葉桜君が間者とは、俺はまったく考えてもいなかった。

壬生浪士組がまだ小さな組織だということもあるが、顔見知りだというだけの芹沢さんは妙に葉桜君を気にするし、彼女も芹沢さんをとても気にしている。

二人はお互いがお互いを嫌っているように見えて、とても信頼しあっているのが見てとれて、正直俺は二人の関係がとても羨ましい。

屯所に戻った俺は、葉桜君を彼女の部屋――俺の隣の部屋に寝かせる。

そこへ示し合わせたように現れたトシと連れだって、彼の部屋―

―葉桜君の隣の部屋へ行く。
トシの部屋の襖を閉めたとたん、彼は思った通りの言葉を俺にかけてきた。

「で、どうだったんだ、近藤さん」

実際、ここで葉桜君を疑うものは少ない。
それは葉桜君が俺たちを仲間として、とても大切にしてくれているのだとわかるからだ。
目的がなんにせよ、それが達成してしまったときに葉桜君がどうなってしまうのかを、だからこそ心配もする。

「トシは何か聞けたかい？」
「あんた、知ってて言ってるだろ」

トシの口調から察するに、俺が葉桜君を連れ出すところは見られていたらしい。
おそらく烝がそう仕向けたのだろう。

「腕前は、まぁ、イイ線いってると思うよ。
道場を持っていたのも本当みたいだから、隊をまかせるのに申し分ない」
「そうじゃねぇよ」

普段通りの俺の軽口に、ようやくトシの眉間の皺がとれて、苦笑が返ってきた。
聞きたかったくせに、素直じゃないなぁ。

「芹沢さんを知ってはいるようだけど、深くは聞き出せなかったよ。
葉桜君、途中で寝ちゃったからさ」

葉桜君が泣いたことは黙っておいた。
言わないって、約束したからね。

「隊の話はまた今度にしようか、トシ。
俺ももう眠いし」

誤魔化したことをわかっていて、あんたがそういうなら、とあっさりトシも引いてくれた。
正直、俺は助かった。
トシにこれ以上追求されたら、俺まで彼女のことを深く知りたくなってしまうから。
知りすぎてしまう誘惑に、俺はたぶんきっと勝てないだろうから。

１０＃有難くない信用（後書き）

普通は疑うなぁ、と。
だって、どう考えてもこの主人公設定ぁゃしぃ。
考えたのは自分だけど、女武芸者って。
でも、ドリームなのでおっけーかなぁと。
思わないでもない（待て。
（０５／１２／２６　１３：５８）

先の更新でもちょこちょこ出てきてはいるんですけど、ヒロインの組長話が持ち上がった時の話です
割と最初から書いてましたが、入れないまんま終わってしまいましたが
読み返してみると、これがあるものとして書いてるなぁという部分がちらほら。
（２００７／０５／１６　０９：２０：３５）

人称修正。
（２００７／０６／１２　２３：５７：５８）

改訂
（２００９／１２／２８）

11#火事騒ぎ

触れれば斬り殺されそうな殺気を放っている人物がひとり、いらいらと俺の部屋で座っていた。
約ひと月前に入隊した女性隊士、葉桜君だ。

見た目は女とも男ともとれる女性だが、なかなか腕は永倉くんやあの総司に張るというのだから、大したものだ。
だからといって、それを誇るでなく、弱いものにも強いものにも別け隔てなく、ただ信念のままに動く葉桜君は見ていて羨ましいほど真っ直ぐだ。

そんな彼女がこの場を飛び出して、ある場所へ向かうのを俺が留めている理由は、たった一つである。

「あのさー……」
「なんですか」

葉桜君は気を使っているのか笑顔で返してくれるが、抑え切れていない殺気の前ではそれは怖いばかりだ。
もしこの場に葉桜君が可愛がっている桜庭君がいたら、桜庭君は何が何でも逃げ出していただろう。

そんな状態の葉桜君だが、つい先程のことを考えれば、俺は葉桜君を今、自由にするわけにはいかない理由があった。

こうなった事の発端は、昨日の火事である。
非番で郊外まで出掛けていた葉桜君は戻ってくる際にそれに遭遇し、炎の中から家人を幾人も助けたそうだ。

行動は無茶だが、おかげで今回の騒動は葉桜君の大活躍ということで幕が引かれた。

これだけならば美談で済んだ話だが、問題はその火事を起こしたのが誰あろう、芹沢さんだという事だ。

戻ってきた葉桜君はその噂の真相を確認すべく、俺たちの所に来たらしい。

その上で、機会悪く俺とトシの会話を聞いてしまった。

「なぁ、トシ。

あれって結構やばくないか？」

「ああなるとただの犯罪だな」

「まいるよなぁ、まったく」

そんな会話をトシと二人で、のんきにしていた処へ葉桜君は遭遇してしまったわけで。

その時のことを思い出すだけで、俺は胸が透く思いだ。

なんでこの子は、ああも気持ちよく局長室の障子を開け放つのかね。

スパーンと背中で勢い良く開かれたときは、もう心臓が止まるかと思ったよ。

「葉桜君」

「なんですか」

さっきからこんな笑顔ながらに刺のたつ調子では、いくら俺でもどうにも話しにくい。

「話が無いなら、芹沢さんを殴りに行かせてください」

「だから、それはだめだって～」

俺は立ちあがろうとする葉桜君の腕を引いて、留める。
もうさっきから何度こんなことをやっただろうか。

たしかに今回の大和屋の火事は大事だ。
葉桜君のおかげで壬生浪士組の評判が一気に悪くなるということは避けられたが、次にまた同じようなことがあればどうなるかは想像に難くない。

「たまたま私が早く帰る気になって、あちらの道を選んでいたから良かったですけど、通りがからなかったらどれだけの人が死んだと思っているんですか。
なんなんだよ、自分がどれだけ偉くなったっていうんだよ！
何もできないくせにっ、何も、わかってないくせに！！」
「はいはい、落ち着いて」

話しながら興奮している葉桜君は、俺が気になる言葉を数々吐いてはいるが、今つっこんでも逆上させるばかりだ。
先程逆上されたばかりだ。

葉桜君の握り込みすぎて白くなる手を取り、俺はゆっくりと開かせる。
案の定、葉桜君の掌には爪の後がしっかりとついているし、所々には血も滲んできている。

「とにかく今回は葉桜君のお手柄で誰も死ななかったし、大事に至らなかったんだからさ」
「だからって！」
「芹沢さんを殴るのはやめておいてよ。

葉桜君がいなくなったら、桜庭君が悲しむよ」

いくら葉桜君に人望や信用があっても、芹沢さんに殴りかかったら葉桜君の方が返り討ちに遭うのは目に見えている。

芹沢さんはただの筆頭局長というわけでなく、実力の意味でも壬生浪士組では頂点に立っているのだ。

俺やトシだって、サシで勝てるかどうか怪しい相手で。

ここに来る前に葉桜君が昏倒させたという話を聞いて入るが、おそらく芹沢さんに酒が入っていたせいというのが俺の見解だ。

泥酔でもしていないかぎり、葉桜君に勝ち目はない。

「俺だって、葉桜君がいなくなるのは哀しい」

壬生浪士組に面接に来たときから芹沢さんに食ってかかり、トシにも物怖じせず、自らの信念で真っ直ぐに生きている葉桜君は、俺から見てもとても気持ちいい人だ。

かといって、芯から真面目というワケでもなく、隊務の時は怖いぐらいに頼もしく、羽目を外すときは男女に関係なく騒ぐ。

でも、どこか人を気遣う気持ちを忘れないという、よく出来た葉桜君だけれど、俺には時折どうしようもなく儚く消えてしまいそうに見える事がある。

今回の火事の件だって発端に過ぎない。

話によると、葉桜君はもし自分が死んだらなんて考えもせずに火の中に飛び込んでいったという。

躊躇いも迷いも持ち合わせていないようだという話を聞いて、俺はますます葉桜君という人が怖くなった。

自分の命を顧みないというのは凄いけれど、だからといって、葉桜君の行動は行き過ぎていると思った。

「助けたい気持ちはわかるけどさ、あまり無茶はしないでくれよ。もっと自分を大切にするんだ」
「……近藤さん」
桜庭君の名前を聞いて、少しばかり落ち着きを取り戻した様子の葉桜君が、泣きそうな少女の顔で俺を見上げてくるので、俺は少しばかり胸が高鳴った。
「無茶じゃありません」
わかってない。
葉桜君は可愛い顔して、まったくわかってない。
「あーのーねー」
「私は、」
何かを言おうと、葉桜君が口を開く。
でも、その先は音も出てこなくて、葉桜君は苦しげに咳をして、忌々しげに舌打ちする。
「ごめんなさい、まだ話せないみたいです。
でも、これだけは信じてください。
私は――」
口は動いたけれど、やはり葉桜君の声は出なくて、俺は口の形だけで判断するしかなかった。
落ち着いた葉桜君が部屋を出て行った後、俺は考える。
その、意味を。

「芹沢さんを助けたい、か」

一体、芹沢さんと葉桜君はどんな関係なのだろう。

＊　＊　＊

近藤の部屋を出て、私はひとり廊下を歩きながらも固まった表情が和らがなかった。

なぜ近藤が私を留めたのかとか、芹沢が行動した意味も、私だって本当はわかっている。

他に道はなかったし、自分が言ったところでもうどうにもならなかったということもわかっている。

そして、この先の運命が、あの紙に書かれた出来事から逃れられないのだということも。

それでも、依頼には無いのだとしても、芹沢が死ななければならないのだとしても、それでも。

「……バカだ、あいつ」

誰もいない場所で立ち止まり、私は小さく呟いた。

聞こえてくる気配は寝息混じりで、起きているものは数人しかいない。

見るものがいないと安心しているからなのか、私の頬を伴って落ちてくる篤い雫を拭う。

「何やってんだ、オメー」

後ろから声をかけられ、私は急いでそれを拭って、振り返った。

「なんだ、永倉か」
「オメー、呼び捨てかよ」
「じゃ、バカ倉がいいか？」
「呼び捨てでいいよ」

そうかとだけ答え、私は庭に視線を移した。
火事の後は快晴になることが多いというが、今も例に漏れず快晴だ。
憎らしいほどに澄んだ雲ひとつない高い夏空を見上げて、私の心は晴れない。

隣に立つ気配に、私は少しだけ場所を空ける。

「ちゃんと寝たか？」

永倉に訊ねられてから、そういえば自分が戻ってきてからまだそんなに時間も経っていないことに気がついた。
外で湯だけもらって帰ってきたが、眠る間もなく芹沢の話を聞いたものだから、その足で局長室に行って、今やっと私は解放されたんだ。

「明日は隊務だろ。
ちゃんと寝ておいた方がいいぜ」
「まだ、少し眠れそうにないんだ」
「腹でも減ってんのかよ？」

昨夜の火事から何も口にしていないが、不思議と今の私に空腹感はない。
ただあるのは空虚な怒りのみで、本人にぶつけられない怒りのみ

で。
　このままでは眠れそうにもない。
「なぁ、暇ならちょっと相手してよ」
「してんだろ、今」
「違うって、稽古だよ」
　疲れたら眠れるかもしれないとは思わなかったけど、ただこのぶつけられない憤りをどうにかしないと、同室の鈴花を怖がらせてしまうだろう。
　鈴花だって、夕べの火事に駆り出されて、今は疲れて眠っているはずだろうから。
　永倉の了承を得て、私は道場で二人向かい合う。
　稽古中の隊士も居たが何かを察して、私たちに快く空けてくれた。
「なぁ、永倉、真剣じゃ駄目か？」
「ダメだ」
「……そうか」
　私は大人しく木刀を握り、永倉と向かい合う。
　一度目を閉じ、永倉を彼に見立てる。
　彼に、芹沢に正当な構えは通じない。
　それに、本気なら殺す気でかからなければ。
　私の空気が張り詰めるのに合わせ、相手もまた気を合わせてくる。
　世界が遠くなり、私は彼と対峙する。
　遠い過去の、幻影と。
「はぁっ！」

私は気合一閃、一足刀に飛び込んで打ち込んだ。
でも、予想通りに防がれ、何度も何度も私は打ち込む。
全て、鉄扇に防がれるのを感じるが、気を緩めることもなく、普段の型の意識もなく、ただ思うままに乱雑に打ち込む。

「まだまだ！」

一度後方へ跳びづさり、私は間を取る。
次の手はと考える前に、私の視界はそこで揺らいだ。

「またかよ！」

道場に響く足音が私に急に現実をつれてくるが、直ぐさま夢へとすりかわる。
あの頃の、憎くて愛しい、彼に変わる。

「おい、大丈夫か、葉桜！」
「……まだ、負けてなんか……っ」

あの頃だって、私は勝てたことがなくて、再会してのあれだって、あいつが酔っていたからで。
だけど、このまま負けていたら、最悪のあの日を迎えるしかない。
回避する方法なんてたったひとつしか思い浮かばないのに、それさえも叶わない。

もう負けてなんて、いられないのに。
あの人を止めるなら、もっと私は強くならないとならないのに。

「……っ」

夢の中で私が流す涙を、大きくて温かい手が拭ってくれた。

＊　＊　＊

布団で静かに寝息を立てる葉桜を、俺はただ傍らに座って眺めていた。

起きているときは左之や平助らとつるんでいても変わらないイイ仲間で、こうしていりゃぁ、単なるイイ女なんだけどな。

葉桜と会う時や剣を交わす時はいつも倒れやがるな、と布団で眠る姿を眺めながら過ぎり、俺は頭を振る。

いや、必ずではないな。

けれど、葉桜がひとりでいるときってのはたいていこうなる。

単に廊下で佇んでた葉桜に声かけただけなのによ、泣いた後みたいな、それも女の目ェしてやがるから俺は放っておけなくなっちまってよ。

眠れねェっていうから稽古に付き合ったら、葉桜は殺気出して襲いかかってきて、しかもいきなり勝負の途中でぶっ倒れやがる。

「まったく、マジで人騒がせだぜ」

さっきの葉桜は今までの稽古では見たことのない本気の打ち込みで、俺は本気で殺されそうだったから、本気で応戦したんだけどよ。

一体誰を相手に戦ってんだよ、葉桜。

倒れたのは疲れがたまっていたところに追い打ちかけて、稽古したせいってのは俺でなくたって誰でもわかる。
どうやら、火事騒ぎで戻ってから一睡もしていなかったせいらしいと聞いたのはついさっきだ。
土方さんの話じゃ、芹沢さんを殴りに行くといって聞く耳もたなかったから、近藤さんが抑えていたらしい。

「なあ、オメーと芹沢さんは、何の関係があんだよ」

眠っている葉桜に問いかけても答えは返るはずもない。
起きているときに問いかけたところで話す気がないなら、葉桜は決して答えないだろう。
すべてをひとりで抱え込み、頼ることをしないのは生来のものなのか、それとも別の理由でももっているのか。
語らない秘密の多い葉桜のことなんか、考えても答えなんて出やしねェ。

「ちっ」

表情もなく寝ながら涙する葉桜の目元を軽くぬぐう。
一瞬だけ幸せそうに笑った顔に、俺は動揺した自分に驚いた。

誰が見ても、葉桜と芹沢さんには男女の関係がある。
昔のことだとしても、今は互いにそうではないと嫌い合っているように見えても、惹きあう様はどうしようもない。
誰にも入り込む隙のない二人の関係を知っていて、惹かれちゃならねェ。

「無理、すんじゃねェぜ、葉桜」

自分の気持を誤魔化して囁く俺に、何故か葉桜は寝ながら眉をしかめて唸った。

11#火事騒ぎ（後書き）

付け足し。
だって、あの話むかつくっていうか。
　このヒロインならやりかねない。
でも殴ったら話にならないので、会話で選べない人達に止めてもらいました。
ヒロインを止めてたから、近藤さんと鈴花は話せなくて、
稽古してたから、永倉さんと鈴花は話せなかったってことで。

ギリギリ更新に間に合いますか？

（０６／０３／１５　１１：４９）

近藤・永倉のモノローグの人称を修正。
（０６／０７／０６　０９：０３）

改訂
（２００９／１２／２８）

12#ありえない推薦者（前書き）

文久三年葉月
永倉イベント「京都の神髄」・裏

12#ありえない推薦者

京に来て二月あまりも過ぎれば、流石に私だって慣れたもので知人友人もかなり増えた。
だが、それでもやはり私にとって一番の気がかりは鈴花に変わりはなく。

「京都の……神髄？」

だから、部屋へ戻る途中に聞こえた鈴花の声に、私が思わず足を止めたのも必然といえるだろう。

京の町にすっかり馴染んだ私とは別で、壬生浪士組にやっと馴染んだばかりの鈴花は持ち前の物怖じしない性格と負けん気の強く、真面目な性格ですっかり男衆に気に入られていた。
女としてというよりも弟として扱われているように見えるがそれもまあ良いだろう。
剣で身を立てようとしているのに女として扱われても困る。

「おうよ！
ここを外しちゃ京都を知ったことにならねェってトコよ！」
「へえ……そんなトコがあるんですか。
ちょっと行ってみたいな」

にしてもだ、と私は口元を緩めながら鈴花と永倉のやりとりを眺める。
あまり鈴花で遊ばれるのも困るので、一応遠目に見張っているが、どうやら心配ないようだ。
永倉を追い返した鈴花に、私はホッと安堵の息をつく。

「みんなしてたるんでやがるぜ。
少し引き締めてやらねぇとな」

一部始終をのんびりと縁側に腰掛けて見届けた私に、突然上から土方の声が降ってきた。
気配を読むのが苦手とは言わないが、土方はいつからいたか気がつかなかった。
私は鈴花に集中しすぎていたのだろうか。

「こんなのは今だけだから、大目に見てあげてくださいよ」

私が軽めに言うと、土方からは返事の代わりに深いため息が降ってくる。

「こんな時だから、だ。
俺たちは京まで遊びに来たわけじゃねえんだ」
「筆頭が酒浸りなのはどうなんですか？」

少しの間の後、土方はまた深いため息をつく。
それを静かに笑って、私も屯所へと上がり込んだ。
夏間近の日差しは強く、初めての京の夏は既に私にとってはかなりきつい。
何よりも蒸し暑さが地元とは比較にならないほど、ひどいのだ。
この男物の長着姿が許されていなければ、耐えきれないかもしれない。

これで後一月後が夏本番だというのだから、水筒は手放せないなぁと私には苦笑いの毎日だ。

「葉桜」
「この間の話の繰り返しは御免被りますよ。
どう言われても、私の器じゃない」

私が土方の話の先手を取って顧みると、思いっきり眉間に皺を寄せて、渋面されてしまった。
それが楽しくて笑ったものの、私は次の言葉に顔を強ばらせることになる。

「芹沢さんが葉桜を推しているとしてもか」

私はまず何よりも先に腹が立った。
名前を聞くだけで、今の私がすぐに怒り心頭に達するとわかっていて、土方は尚もそれを言うのか。

「質の悪い冗談ですね」

私の強張る声に土方は黙ったままだ。

「あの人が私を推すはずがないですよ。
女に務まるわけがないと言い切るような男が、私を認めるわけがありません」

ここで最初に面接したときだって、あいつは鈴花をそんなふうな目で見ていたはずだ。
女に何が出来ると、言葉ではなく態度で物語っていた。

「実力じゃ確かにあの人は相当強いし、存在感だってある。
でも、たとえ私があの人に勝てたとしてもあの人は私を認めませんよ。

あの人がどんな苦境に立たされても、私の手を借りようとも思わないでしょう」

こちらに助ける術があっても彼がそれを望まない限り、自分には手を出せない。

やれることがわかっていても、私には手をだすことが出来ない。

それをしてしまえば、本当の意味で私たちの関係は崩壊してしまう。

今さらでも、それは躊躇われる。

私の仕事はもともと不確定だ。

そして、一歩間違えれば人が死ぬことだって容易にある。

――自分の行動のすべてに責任があると思え。

そう、私は言われてきたし、私の行動一つですべてが終わることだってあると知っている。

だから、私はこんな仕事をしていても依頼がない限り動いてはならないと自分自身に定めている。

そうでなければ、今すぐにでも芹沢を殴ってでもあの約束を思い出させてやりたい。

強く握りしめた手で思い出を振り切り、私は土方を強く見つめる。

「土方さんだって、私を疑っているはずでしょう？

何故そこまで私を気にかけるんです」

関係がないでしょう、と囁くように私は言の葉を紡いでゆく。

そこには強い拒絶を漂わせて、土方が諦めるようにと。

余計なことはするな、とそう小さな頃から重々言い聞かされてきた。
この仕事も他の役目も深入りや詮索は無用なのだと。
他人の領分に入り込んでまでやる仕事ではないのだと。

「疑ってるわけじゃないさ。
理由がない」
「ふふ、無理しなくてもいいですよ」

作り笑いの私の肩を土方が掴む。
大して力を込めているようには見えないのに、土方の力は強い。

「そこまでして拒む理由はなんだ。
お前は桜庭と同じ理由でここへ来たわけじゃねぇのか」

鈴花は剣で身を立てるという目的で壬生浪士組へ入った。
だけど、私は既に武芸者として身を立てているし、此処へ来た目的は全く別だし、かといってそれを話そうとは思わない。
だって、この人たちに私の手がどの程度必要かなんて見極めも出来ていないのだ。

「故郷ではこれでも剣術指南役でね、剣客としての名は上げてるつもりです。
しかし、自分が女だからということを武器にすることも卑下するつもりもありませんが、そう見る者も多いのは事実で、その場合肩書きに意味なんてありません」

こんな建前でも留まる理由としては充分だろうかと考えながらも、私は土方から目をそらさない。
土方もまっすぐに私をみたまま逸らす気はないようだ。

「肩書きが欲しいから入隊したワケじゃありません。
私はただ、」

ふっと私の口元に自然な笑みが浮かぶ。
私はここに来てひとつだけよかったと思っていることがある。
それはここでなければ得られないものだ。

「ただ、なんだ?」

黙ったまま笑みを浮かべている私に、土方はまた眉根を寄せる。
誰もが私を見るとき、そういう顔をするからもう慣れた。

「私はただ強い人と戦いたい。
今はそれだけが理由です」

表情を変えない土方の手を肩から外し、その隣をすり抜けて、私は道場へと向かう。

「そういうわけで、鍛錬に行ってきます」

背中で複雑そうな土方の視線を受け止めて、私は軽い足取りで道場へと向かった。
残された土方は小さく舌打ちしてから、自室へと足を向けたようだ。
土方の部屋の障子が閉まる音に安堵し、私は足を止める。

強い人というならば、ここにはかなり多くいる。
これだけの剣客が集まる場所など、私は知らない。
そんな場所にいられることはおそらく剣客としては幸せなのだろ

う。

これで依頼――少女との「約束」がなければ、私は無条件に楽しめたかもしれない。

これから何が起こるのか知っていても、私はそれを伝える術を持たず何もできることはない。

だけど、叶うなら。

一日でも長くこの平和な日が続くようにと私は願いたい。

＊　＊　＊

ぱちり、と碁盤の上に白石を人差し指と中指で挟んで置く。

それを対岸から二人の打ち手が見つめていた。

石を置いていない方の相手――永倉が小さく唸り声を上げる。

「なぁ、永倉」

私が声をかけた永倉は普段よりも長い間を置いて、なんだと返してくる。

だが、それもおざなりなのは明白だ。

わかっていて、声をかけているから私もあまり気にしない。

自分だって、先の手を頭の中でいくつも考えながら、適当に話しているだけだ。

「京都の神髄ってなんだ？」

永倉が黒石を置くのに合わせて問いかける。

そこに置くなら、私はここと決めていたので、白石を取り上げて、置く。
碁盤上の勝負はほぼ互角だが、わずかに私が優勢だろうか。

「見てやがったのかよ」
「あんなところで騒いでりゃ、聞こえるに決まってんだろ。
永倉は今お鹿姐さんが相手だって聞いてるけど、他の場所じゃないよな？」

囲んだ黒石を取り上げて、私がお前の番だと顔をあげると、永倉は片手で顔を押さえ、必死に赤面した顔を隠そうとしていた。

「……オメー、なんでんなことまで……」
「お鹿姐さんに小一時間も惚気られちゃあ、知らないなんていう方が無理ってもんでしょ」

返す言葉もない永倉は、指の間からちらりと私をのぞき見る。
どうだまいったかと私が笑ってやると、永倉は軽いため息を吐いて顔を上げた。

「お鹿と葉桜が知り合いたァ思わなかったぜ」

永倉がいうのも道理で、お鹿というのは大阪の花街の芸姑の名前だ。
大阪で迷って倒れた私が知るはずもないと思ったのだろうが、こちらは永倉が身請した話をとある筋から得ている。

「ちっちっちっ、私の情報網をなめてもらっちゃぁ困るね。
二月以上も住んでりゃ、地元の大半はオトモダチよ」
「そりゃ情報網じゃなくて、単に性格だろ。

オメー、余計なことをお鹿に吹き込んでねェだろうな？」
「いわれて困るようなことあるんだ？」

渋面する永倉を笑って、碁盤を軽く叩いて促すと仕方なしに永倉も黒石を指に挟んだ。

「ないとはいえねェからなァ」
「お、正直」
「……オメーなぁ」
「そろそろ進めてくれ。待ちくたびれる」
「自分で話振っといて、それかよ」

やっと手が決まったのか、軽口を叩きながらも永倉も黒石を置いた。
私も白石を取り、思うように置いてゆく。
そうして、十数手も過ぎた頃、今度は永倉から口を開いた。

「オメーの流派ってどこだ？」

どうやらお鹿さんの話題を変えようとしているらしい。

「唐突だなぁ」
「こないだ思ったんだけど、神道無念流以外にもいろいろ入ってねェ？」
「そりゃあ入ってるよ」
「……当然のように言うなよ」
「私に教えてくれる人が無茶苦茶だったらしい」
「らしい？」
「人に言わせると、ものすっごいいろんな流派混ざってるのに強い

って変人なんだってさ」

石を置こうとしたままの器用な体勢で止まったまま、永倉が顔をあげた。

私を見る妙な表情に、思わず笑う。

「なんだそら」

「それと、まあ、もともと私が舞をやってたのも混ざって、もう更に目茶苦茶」

すごいだろうと胸を張ると、呆れられるかと思ったのに深く感心されてしまった。

「ああ、そりゃわかる。
オメーの剣は出鱈目なのにどっか綺麗なんだよな」

「……なんだそれ」

今度はこちらが首をかしげる番だ。

「大陸の舞踊でもやってたか？
今度はそっちだけ見せてくれよ」

「んなもん、もう覚えてないって」

「お鹿の唄とオメーの舞でなら、いけそうじゃねェ？」

調子に乗る永倉の頭に私は持っていた白石をひとつ投げたが、あっさりとかわされた。

「何がどういけるんだよ。
てか結局、永倉がお鹿姐さんに会いたいだけじゃないか」

「はっはっはっ、そのとおりだぜ」

「威張るな！」

もうひとつ投げたがこれも交わされ、後は互いに適当な軽口を叩きながら、勝負を進めた。

結果は、引き分けで終わった。

「葉桜がこんなに強いとは思わなかったなァ」

「私も永倉が碁を打てるとは思わなかった」

「へっ、これぐらい当たり前だろ」

「剣と酒と女にしか興味ないと思ってたから」

永倉を黙らせるのはなかなか楽しかった、というと妙な顔で舌打ちされた。

碁を打っていたのは永倉の部屋で、そこから眺める庭の景色はあまり明るくない。

「なァ、葉桜」

「ん？」

「あいつ、元気だったか？」

あいつというのがお鹿さんをさすのはわかった。

永倉が身請した理由も知っているし、今は二人があっていないことも知っている。

知っていての軽口ではあったけど、伝えたい事があったから私も話題にした。

「元気だよ。

今は幸せだってさ」

「そう、かァ」

大阪での芹沢の横暴は、力士との乱闘だけに留まる話ではなかった。

その後遊郭吉田屋で芹沢が求めた芸妓小寅がそれを断り、仲居であったお鹿共々髪を切られたという話がある。

女にとって髪は命。

鈴花は別として、大抵はそんなに髪を短くしては嫁ぐことは叶わない。

人気芸妓小寅はともかくとして、ただの仲居だったお鹿には当てもなく。

彼女に惚れていた永倉は、それを機に彼女を身請し、求婚した。

だが、お鹿自身が断り、結局他方へ嫁いでいった。

私は懐から紅葉を象る簪を取り出し、永倉へと渡す。

黒漆に赤漆で紅葉を塗られた、見事な品だ。

「言伝を預かったよ。

ごめんなさい、それから有難う、と」

私は隣を見ずに、部屋を出た。

永倉からは何も声をかけられなかったが、私は障子をしめて歩き去る。

声を殺してむせび泣く声が聞こえた気がしたが、私は聞こえない振りをした。

１２#ありえない推薦者（後書き）

また裏イベント（鈴花イベント中の行動っぽいの）
リクエストの無かったイベントの補完みたいな感じで
まあ、裏になるか表になるかは自分の気分なんですが（笑
こうして追加で書いていて思うんだけど、悉くネタが土方か永倉かってなってて、そこまで好きか自分と唸りたくなります
いや、好きなんですけどね。偏りすぎかなって、ねぇ（聞くな
（２００７／０５／２３　１１：０２：２７）

改訂
（２００９／１２／２８）

13#新選組誕生

文久三年八月十八日、既に日の差す晴天の元に立つ私は出そうになる欠伸を噛み殺した。

夕べはいろいろと用事が重なり、私が眠ることができたのは朝方なのだ。

近藤らにバレると後が面倒なので私は報告もしていないし、する義務もない。

完全に私事なので、私も言い訳る気もない。

私がひとつ深呼吸すると、皆からも自分からも新品の匂いがしてくる。

それが居心地悪いのか、それともこれから起こるであろうことに緊張しているせいか、壬生浪士組全体が浮き足立っているように見て取れる。

今の状態だったら、子供がちょっとつつくだけで乱闘が起きるかもしれないと考えるだけで、心楽しくなってくる。

（て、余計なことを考えるのはやめよう）

私たちは今庭で、芹沢や近藤の出てくるのを待っている状態だ。

落ち着くために私は目を閉じてみるものの、周囲のざわめきに流されてしまって、少しも集中できない。

諦めて目を開いて辺りを見回してみれば、幹部連中はみな落ち着いたモノだ。

それなりの修羅場はくぐってきたつもりだったが、やはり私は彼らの比ではないのだろうか。

とても敵わないなぁと思うと、やっと私にも自然な笑みが出てき

た。

「葉桜さん？」

隣にいる鈴花がそんな私を見て首を傾げる。

それに、なんでもない、と言ってまた笑った。

不思議なぐらいに鈴花までもが落ち着いていて、自分ばっかり焦ってて。

こんな状態では自分一人も守れないし、救えやしない。

ここにいる誰ひとりとして護れやしない。

護るべきは命ではないけれど、命なければ、その信念だって護れない。

私はもう一度目を閉じ、集中してざわめきを遠ざける。

もう一度目を開ける。

まるで私の意識が切り替わる機会を窺っていたかのように、ざわめきが収まり、芹沢と近藤が姿を現した。

近藤がわずかに私の方を見る。

切り替えた視線で私が見返すと、近藤は口元だけ薄く笑み、隊士に向き直るときには真剣な顔に戻っていた。

（なんだろ、今の）

心中で首を捻っていたが、私は芹沢の声で我に返る。

今はそんなことを考えている場合じゃないのだ。

もちろん、芹沢を好きだ嫌いだと言っている時でもないし、筆頭局長である彼の言葉を聞かないわけにはいかない。

幾ら過去の因果がどうあろうとも。

（あ、思い出したらむかついてきた）

この間だって、私は殴りに行くの止められたばかりだし、その止められた原因ってのもわかってるけど、でも碌に練習もしない芹沢が自分の知っていた頃より強いかと言われると、そんな気はしない。単に偉そうになっただけだ。

でも、私がもしも実行したことで私が除隊され、それで鈴花が嫌な思いをするのも寂しい思いをさせるのも嫌だから、私はぐっと拳を握り込むだけで黙っておく。

偉そうになっただけとはいえ、芹沢は真実強い。

真面目に考えて、おそらくひとりで勝つのは困難だろう。

「俺たちの誠の心意気を見せてやろうじゃねぇか！」

近藤の言葉に隊士達が鬨の声をあげるのを聴く。

そうだ、考え込んでいる場合じゃない。

今日は大事な日――この壬生浪士組にとって、とても大事な日なのだ。

いくら、私自身が芹沢を気にくわなかろうと、この際関係ない。

芹沢のせいで出動要請が遅れていることだって、たぶんきっと定められた通りなのだろう。

「ぼーっとしてんな、葉桜」

後頭を叩かれた私が振り返ると、永倉と原田が何か嬉しいことを

抑える顔で私を見ていた。

＊　＊　＊

「ずるい、烝ちゃん」
「急になによ、葉桜ちゃん」

後ろから私が小さく不満をぶつけると、すぐさま山崎は振り返った。
私がずるい、と言ったのは山崎の服装が他と違っているからである。
そう、皆が着ている今日卸したばかりのあの隊服を着ていない。
こいつのことだから、気に入らないモノは絶対に着ないというのはわかってる。

「何、この細い体っ」

だからまったく違うところで私はつっこんだ。
ついでにその二の腕を摘んでみると、筋肉が引き締まっている男の体だというのがよくわかる。
こんなに細いのに、私には山崎に力で勝つことができないと思い知らされる。
私は筋肉を付けたところで女性特有の柔らかさが消えることもなく、力が勝ることもないというのに、山崎は姿だけならすっかり女性に見える。

「ちょ、やめてよ」
「こんなに綺麗で可愛いのにおと」

「葉桜ちゃんっ」

慌てた山崎に口を塞がれそうになり、私は身を翻して丁度近くにいた近藤を盾にする。

壬生浪士組内でこれ以上の盾はないが、そんな大それたことをするのは私ぐらいしかいないだろう。

近藤は複雑な心中ながら、緊張を微塵も感じさせない私と山崎を楽しそうに笑う。

「はいはい、その位にしないとトシに怒られるよ～」

「は～い」

素直に山崎が応えるのに対し、私は隊服を着ている上機嫌な近藤を見上げる。

「葉桜君？」

この隊服や模様を決めたのが近藤だという話だから、おそらく今日一番嬉しいのはこの男だろう。

壬生浪士組の初の晴れ舞台。

そこで着れるのだから、嬉しくないわけがない。

（やっぱ趣味悪ぃって、これ）

わかっているから口に出さずに悪態をつき、私は近藤に背中を向けてため息をつく。

「な、なに？」

「近藤さん、この色ってさ」

おそらく誰も言えないだろうことを私ぐらいは一応指摘したほうが良いかと口を開く。
だが、急に満面の笑顔になった近藤の前に、私はそれ以上続けられなかった。

「良い色でしょ～？」

周囲でこれはちょっと目立ちすぎるとか、言ってるのが聞こえてないわけじゃないだろうに、これは由緒正しい色なんだよと近藤は説明してくれる。

「それに、やっぱさぁ、こういう空の色って映えるじゃない」

そういって、空を仰いで、太陽のような笑顔を見せる近藤が少し眩しく、私は目を細めた。
真っ直で実直で、芹沢ほどの貫禄はないが、人望厚い近藤のそばは心地よい。

だが、同時に自分の世渡りなれした汚さが見えるようで、私は居心地悪くもある。
仕事のためとはいえ、やはり隠し事をしているのは性に合わない。

だが、言ってしまえば仕事をしづらくもなる。
信用して、言うとおりに動いてもらわなければならない場面だって出てくるだろうし、知らないならば知らないままのほうが幸せなことだってある。

私は無理矢理に自分を納得させて、近藤に微笑返した。

少し離れた場所で鈴花が永倉や藤堂にからかわれている声がする

が、緊張感の欠片もない私に対し、鈴花はずいぶんと堅くなっているようだから丁度いい。
今この場で一番堅いのは鈴花で、一番柔らかいのは葉桜だろうから。

「このまま、膠着状態かぁ」

どうせすべては既に終わっているし、あの紙にだって大したことは何も書かれていなかった。
どう加味しても、長い長い膠着状態の末、結局ここで戦闘は起こらないはずだ。

（なんだったっけかなぁ。
……八月のなんとかって書いてあったような……）

肝心なところが思い出せない辺りは、実は私も緊張しているのかもしれないなと小さく笑う。

特徴のある足音に気づいて私が振り向くと、思った通り土方がこちらに険しい顔で近づいてきていた。
なんとなく危険を感じ、近藤を盾にして、くるりと位置を変える。

「あんたら、特に葉桜、もう少し緊張感を持ってくれ。
他の隊士に示しがつかねぇだろ」

厳しいが疲れたような土方の物言いに、近藤と顔を見合わせて笑う。
これでも緊張しているのだが、やはりそうは見えないのだろう。

「あ～ら、トシちゃんたら失礼ねぇ。

葉桜ちゃんもあたしも緊張してるわよぉ」

ねぇ、とすぐ後ろから山崎に問いかけられ、私はしまったと気づいた。

そりゃ、近藤を軸に回れば、当然山崎の側に行くわけだ。

私は後ろからしっかりと抱きすくめられ、山崎に「つーかまーえたー」と楽しそうに言われてしまう。

そのまま、山崎に二の腕を摘まれ、吃驚した。

「ずるいのは葉桜ちゃんの方でしょ。

なにこの柔らかさっ、羨ましいっ！！」

山崎は私の二の腕をふにふにと摘みながら悪態を付く。

「う、羨ましい？」

「うん、羨ましい。

あたしじゃ、どうしたってこんなに柔らかくならないもの～」

「そういうもの？」

とりあえず、山崎と私はお互いないものねだりをしているのは確かで。

私が土方へ視線を向けると、彼は頭を抱えてため息をついたのだった。

「さっさと持ち場に行け、山崎」

「えー」

「烝」

「はーい。

じゃ、まったねぇ、葉桜ちゃん」

近藤と土方の二人に言われ、さっさと山崎のその姿は私たちの前からなくなる。
忍びと同等のあの動きは、私にはどうしたって真似できない。
正直、そういうことさえも羨ましい。
私に出来ないことを出来るというだけで、それは羨ましい。
羨んだところで、結局私はただ剣を振ることしかできないわけだが。

ふと私はまた自分の手を見てみる。
女性にしては骨張って切り傷や痣の残る無骨な手だけれど、それでも男性的には見えない細く小さな手だ。
この手で護れるモノに限りはあるし、しかもそれは意外と近い場所に限界を見せてくれる。
どれだけ血に塗れても、どれだけ泥で踏みにじられたとしても、砕けても、失われるまで。
この手は、護るためにある。

自分の意志を確認し、私はぐっと握り直した。

「なにやってんの？」

上から降ってくる近藤のからかうような声で私は顔を上げる。

「別に、何でもありませんよ」

笑顔を作って見返したら、私は近藤に頬をつつかれる。

「ならいいんだけどねぇ」
「な、やめてください」

私が振り払っても振り払っても、近藤はやめなくて。
いい加減キレそうになった頃に土方がそれを止めてくれる。

「あんたのいうようにしばらく動きはない。
その辺で休んでろ」

私は土方に肩を引かれ、後ろへ下がった。
別に土方の動きは強すぎるというほどではなく、私が動かないほど弱すぎるというほどでもない。
ないのだが。

「ひゃっ」

私の体はどうしてかそのまま後ろに押される力に流され、バランスを崩した。
地面にぶつかる、と思ったが既の所で誰かに背中を抱き留められた。
目の前、私に触れられない程度に離れた場所で近藤が吃驚した顔をしているということは、この腕は。

「おい」
「は、はい」
「調子が悪いなら屯所へ戻れ」
「いや、別に悪くは」

ないんですが、と続けようとする声は何故か小さくかすれ、体中から力が抜けてゆく。
経験したことのない異変に自分自身が戸惑う。

「おい」

「すいません、けど、離れて、土方、さん」
「何？」
私は残る力を振り絞って、逃げるように土方から距離を取って近くの壁に体を預けた。
数回深呼吸すると、直ぐに元の力が私へと戻ってくる。
「葉桜？」
「大丈夫でっす。
あ、えーっと、そ、その」
何かが自分に起きているようだが、とりあえずは土方に近寄らなければ大丈夫だというのはわかる。
さっきまでは近藤でも山崎でも、容保様でも何ともなかったのだから。
「私、持ち場に」
「葉桜君、君の持ち場はここ」
「そ、うでしたね。
じゃあ、えっと、少し向こうで休んできますっ」
二人に何か声をかけられる前に距離をとり、私は直ぐに隊士に紛れた。
紛れるのは慣れているし、二人に近くにいないと思わせるのは簡単で、適度に適当な気配で見えない位置で壁よりに座る。
私がいなくなった後の二人の戸惑いが聞こえてくるけれど、追求されても説明出来ない変化だから、私は逃げた。
「逃げ足が早いねぇ」

近藤のからかうような声に。

「オレは何もしてねぇよな？」

自問する土方の声が続くのを聞いた私は、口に出来ない謝罪を胸に両目を閉じて世界を闇にした。

＊　＊　＊

（おかしい）

すべてが終わって、寝所で横になってから私は昼間のことを思い返していた。

大阪で熱射病で倒れて以来、突然調子が悪くなることが多くなっているのは確かだ。

かといって、その他は今まで通りでいたって健康。

大阪以来何度か医者にもみてもらったが、私は見事な健康体だと太鼓判まで押されてしまっている。

それなのに、今日みたいな肝心なときに体中の力が抜けるような感覚があるというのはとても困る。

今のところは剣を握っているときに起きた現象ではないし、隊に迷惑をかけることになってはいない。

が、あくまでそれは今までなかったというだけのことだ。

（どうしよう）

壬生浪士組というのは私が入隊前からこれまでにかけて調べた限り、多少の問題はあるものの、しっかりとした勢いの強い組織だ。
芹沢に問題はあるが、あの人の影響力は強い。
そして、これから先にあれを起こす近藤と土方がいるということは、簡単に潰れるとも思えない。
だから、私が組織の中にいる必要というのは、あまりない。
その、はずなのだ。

見た目以上の結束の強さの元として、特に試衛館出身だという近藤を筆頭とした土方、沖田、山南、永倉、原田、藤堂、斎藤、そして山崎が挙げられる。
彼らの結束が解けない限り、この組織はきっと強いとわかる。

（まあ、ずっとはありえない、か）

永遠に続く関係なんて、こんな時代にありえない。
剣を手にする限り、身近な死による別れは無視出来ないことなど、ずっと前から私だってわかっている。

考え事をしていたからか、私は近づいた気配にもかけられた声にも気がつかなかった。

「どう、するかなぁ」

近藤から最初に除隊は自由といわれてある。
鈴花もそれなりに認められてもきたし、腕も平隊士の中じゃかなりのものだし、柔術においてもいざというときの対処も叩きこんでおいた。
これ以上、私にできることはとりたてて見あたらないから、時が来るまでは適当に永倉らと剣をかわして遊んでいるつもりだったの

に、こんな事態だ。
真剣に考え直さなければ、近藤らの足を引っ張ることにもなりかねない。

「葉桜、入るぞ」
「は？」

私がその声が誰なのかを考えている間に障子が開き、薄い月明かりが室内へと差し込んだ。
それを背にしているのは戻ってきたばかりと見える土方だ。

私は布団から体を起こし、土方を見上げる。
鈴花は気がついていないらしく、隣で気持ちの良い寝息を立てている。

「起きているなら、返事ぐらいしたらどうだ」

土方から普段通りの不機嫌な声で問われ、私はやっと少し前から声をかけられていたと気がついた。
消してもいない土方の気配に気づかないほど、私は考えに集中していたようだ。

しかし、こんな時間に誰か尋ねてくるとは思わないだろう。

「申し訳ありません」

口だけでもあやまっておいたが、当然のごとく土方は不機嫌なままだ。
気がつけば土方は隊服も羽織ったままで着替えもせずにまっすぐにこの部屋に向かってきたらしい。

私に何か急ぎの任務でもあるのだろうか。

「あの、もしかして急ぎの任務ですか？」

大事の後だからこそ、ということもある。

しかし、山崎がいるのにわざわざ私、というのは命令だからとはいえ解せない。

「いや、今夜は何もない。
お前はゆっくり休め」
「はぁ」

私にはますますわけが分からない。

だったら、土方は何故こんな夜中に寝ているかもしれない人物の所へ来るというのだろう。

「それより、起きているなら聞きたいことがある」
「明日じゃいけませんか」

土方は黙って庭へ出てこいと促すので、しかたなく私もその辺に置いておいた隊服を肩に羽織って出た。

私の髪は普段高めに結い上げているが寝ていておろしてあったため、その辺に置いておいた白い紐で歩きながら簡単に一本に軽く結わえる。

月明かりのおかげで明るい庭だから、先に待つ土方が手招きする姿はよく見えた。

土方の容姿を考えれば、こんな状況で平服ならもっと色気があるだろうが、そうであっても私にはあまり関係がない。

「なんですか、土方さん」

私が足音静かに近寄ると、あと一歩の距離を土方が急に引き寄せた。

堅い胴が当たって痛いし、冷たいし、一体なんの意図があってこんなことをするのか意味がわからない。

「なんなんですか、一体」

腕を振り払って、私が直ぐに離れて見上げた土方はあいかわらず不機嫌なままだ。

自分の手と、私を交互に見る。

「なんともないか？」

「は？」

なんともあるわけが、と考えて昼間のことを思い出した。

そういえば、今度は別に力が抜けるようなことはなかったし、簡単に振りほどくこともできた。

ということは、昼間の現象は必ずしも土方が原因というわけではないということだ。

「あぁ、そういえばそうですねぇ」

原因はわからないが、特定の誰かと決まって起こるわけではないなら、私自身の問題だ。

だったらなんとかなるだろう、と自然と口元が笑う。

こういうものは気力と根性でなんとかなるというのが、私の小さい頃の主治医の言葉だ。

なんだ、何も心配することなんてないし、隊を抜ける必要だってない。
ここではまだやるべきこともやりたいことも多いし、なにより、もっとここの者たちと剣を交わしたい。

「おまえ、どこか具合でも悪くしていないだろうな？」
「もちろんですよ。
土方さんだって、一緒に医療所で先生の説明をきいたじゃないですか。
惑う事なき健康体だって」
「そうなんだがな」

大阪から帰って直ぐ、私を医療所に連れていったのは土方だった。
周りからは奇異な目で見られもしたが、新入隊士の健康を心配するのは当然だと言われれば私も従うしかない。

ふっと目の前の土方が笑みを浮かべる。
私に向けてではなく、おそらく自分に対してだと直感する笑いだ。

「オレもやきがまわったもんだ」

聞こえるか聞こえないかの小さな呟きが聞こえて、私は首をかしげる。
土方の様子はまったくおかしい。
本当に、変だ。

「土方さん、疲れてるんじゃないですか。
もう休んだ方が良いですよ」

自分も戻りますからと私は微笑んで近づき、身長の高い土方の顔

を自然下から覗きこむ形になる。
と、一瞬の後土方からは凄い勢いで顔を背けられた。

「ああ、そうするとしよう」

まったく変な人だと思いながら、私は土方を見送ったが、土方は私の視線に気づいていないような様子で、一直線に部屋へと戻っていった。
不自然なぐらい一直線に。
途中躓きながら縁側を上って。

変だなと思いながら、私は両腕を上げて、体の筋を伸ばす。
見上げる月は輝いていて、静かな世界が緩やかに私を見守ってくれている気がして、嬉しくなってくる。
私は凛とした空気を吸いこみ、吐き出す。
直後に私の背後から声が聞こえた。

「たっだいま」
「近藤さん？」
「あれ？
さっきトシがいたような気がしたんだけど」

本当に戻ってきたばかりの様子の近藤が、疲れを隠しもせずに聞いてくる。
かなりの手練れではあるけど、間合いに入る前とはいえ、隠しもしていない近藤の気配にさえ気がつかないとは不覚だ。
まだ私の体は眠っているのだろうか。
私は不満を隠して、振り返る。

「おかえりなさい、近藤さん。

土方さんなら、今戻って」

私は普通に返しただけなのに、近藤には物凄く驚かれてしまった。

「なんですか、近藤さん」

私が声をかけると、近藤はびくりと震える。

なんなんだかなぁ、この人も。

「え、あの……葉桜、君？」

「そうですけど」

他に誰にみえると言うんだろうか。

近藤はとても困ったように目線を逸らし、土方と同じようにわずかに頬を染めて笑う。

「あのねぇ」

「はい」

「その格好で庭に出るのは今後禁止。

わかった？」

「は？」

「局長命令。

いいね？」

「はぁ」

何か変な格好だろうか、と自分の格好を見る。

別に今は寝るところだったんだし、それにちゃんと上に隊服だけど羽織ってる。

世間一般には外を出歩くに適さない薄着ではあるが、ふたりともこれぐらいは遊郭で見慣れているだろうし、私のような男女の姿で

頭を抱える意味がわからない。
何がいけないのだろうか、とまた私は首を傾げる。

「近藤さん」
「さっきここにトシがいたって言ったよね？」
「あ、はい」

気の毒にねぇ、と近藤は小さく呟く。
だから、何がと私は問いつめたいのだが、近藤にはそうはさせない空気がある。

「まったく、君に比べれば桜庭君のがよっぽどしっかりしてるよ」
「そりゃ鈴花ちゃんは一通りの礼儀作法ができますから」

鈴花がほめられたことが嬉しくて、私が笑顔で返すと、近藤からは苦笑が返された。

「早く部屋に戻って寝なさい。
明日から忙しくなるからさ」

明日から京都市中見廻りの任務が任せられたこと、それから「新選組」という隊名を賜ったことを聞き、私は無理矢理部屋まで送られた。

「さっき言ったこと、絶対だからね」
「わかりましたから」

近藤を追い出して、隊服を脱ぎ、もう一度私が布団に横になる頃、宵の月は沈みかけていた。

「新選組、か」

口に出してつぶやき、私は少しだけ気持ちが上向く。

大層な名前だけど、それに見合うだけの組織だと思う。

だから、嬉しくて。

「新選組、ね」

もう一度つぶやいて、私は目を閉じた。

１３＃新選組誕生（後書き）

八月の政変。
緊張を隠すために騒ぎそうっていったら、不謹慎ですね。
主人公以外の視点で書く気はないのですが、土方さんが主人公にぐらり。
近藤さんがくらり。な感じです（どんな。
山崎はあくまで、マブダチ。
（２００５／１１／１７）

や、やばい！！
１週間１更新目標がもう破れそう…！！
感想とか、苦情でもいいから、応援ください～。
（２００６／２／１５）

加筆修正。
（０６／０３／１５　１５：５４）

改訂
（２００９／１２／２８）

１４#桂小五郎（前書き）

文久三年葉月

14#桂小五郎

人が張り切って仕事をしようとしている時には出会わなくて、休もうとしているときに限って、どうしてこんなのに出会ってしまったのか。

よほど、私の運命ってヤツは私に仕事をさせたいらしい。

「読書中、失礼するよ」

巡察上がりに、邪魔の入らない壬生寺の境内裏手でお茶を飲みつつ、山南に借りた書を読んでいた私の元に、一人の客人が訪れた。

なんでそんな場所にいたかというと。

「葉桜さ～ん！」

「げ」

沖田の声で私は慌てて本殿に逃げ込む。

男も着いてきているが、この際仕方がない。

見つかったが最後、沖田の気の済むまで、私は稽古の相手をさせられる。

「あれー？

桜庭さんにここにいるって聞いたんだけど、いませんねぇ」

沖田はこちらにわざと聞こえるように言っているとしか思えないが、私は気配を消して、様子を窺う。

「仕方ありません、次は絶対相手してくださいよ」

その台詞はどう考えても私がいるということに気がついていて、隠れているのを引っ張り出す気はないといっているが。
全部わかっていてやっているあたり、全くとんでもない天才剣士様だ。
あんなのの稽古相手なんてしていたら、こちらの命がいくつあっても足りやしない。
完全に沖田の気配が消えてから、私は胸を押さえて、やっと一息ついた。

「珍しい物を読んでいるね」

一間も離れていない距離で、つまり隣で聞こえる澄んだ男声に、私は状況を思い出す。
そうだ、こっちもあった。

「なんであんたまで隠れてんだ？」

戸を閉めてしまったおかげで、暗くて男の顔はよく見えない。
僅かに差し込む光に私は目を細めてみるが、よくわからない。
男の声を私はどこかで聞いたことがあるような気がするが、思い出せない。

「私も少々人に追われていてね。
美味しいお茶とお茶うけだな」
「あ、勝手に飲むな！
食うな！！」

折角鈴花が作ってくれた白玉団子だというのに、勝手に食われたと気づいた私はやむなく思考を中断した。
この男はなんで遠慮もなく人のお茶を取りやがるんだ。

男は私の持ってきたお茶を飲み、白玉団子を食しながら、私の読んでいた書に目を通している。
それもわずかに差し込む光を使って、だ。
あまりにその集中している様子に、私は声をかけるのを諦めて、結局本殿を出ることにした。

両腕を高く伸ばして、ついでに外の空気を深く吸いこむ。
本が読めないなら、ここで出来ることは昼寝か鍛錬ぐらいしか残らない。
昼寝しようにもその場所には男が書を読んでいるから、叶わない。
だったら、と私は境内に降りて、適当な場所で立ち止まった。

両目を閉じると、ひゅぅと風の音が耳元を駆け去る音が大きく聞こえる。
風が連れてくるのは、遠くで交わされる平和の声たちで。
後はただ、昼の穏やかな静寂だけが広がる。

私は余計な考えを捨て、対峙する仮想敵を考える。
こうする時、常に出てくるのは昔の芹沢だ。
あの頃の決して敵わなかった面影を追いかけ、血豆が出来るほどに私は練習した。
そして、今の私がいる。

芹沢のおかげといえば聞こえは良いが、結局の所私は単にからかわれていただけだった。
ここに来て、それを思い知らされるのが思い返す度に悔しくて、奥歯を強く噛んでしまう。

（どうしてなんだ。

あんたは全部、忘れてしまったのか？）

ただ考えても答えが出るわけもなく、私はこうしていても苛立ちが募るばかりだ。

結局何の応えもないまま、私は心を無理矢理に納め、構えを解いて、本殿の正面で胡座をかく。

両目を閉じて、私は呼吸を整える。

何か、別なことを考えないと、もう苛立ちで私自身がどうにかなってしまいそうだ。

無心になって、もう一度音を聞く。

何も考えるなと自分自身に言い聞かせ、私はただ静寂の音を聞く。

「すまないね。

なかなか興味深かったもので、すっかり長居してしまったようだ」

「あ」

耳の側で男の声が聞こえ、私は目を開けたと同時に、思い出した。

「……あんた、桂小五郎、か」

「ん？

私を知っているのか」

仕事を忘れていたワケじゃないし、土方らの苛立ちも私は知っている。

だが、今彼を捕まえると長州が暴走することもわかっている。

「ああ、まだこんなところにいたんだ。

とっくに京から逃げていると思った」

隊士としては捕らえるべきなのだろうが今は休憩中だし、長州に暴走されると今は面倒になる。

私は大人しく書だけ受け取り、桂には言葉を返すだけにした。

「その本、面白かったんだ？」

「ああ、君のような女性が好むというのも意外でいいね」

桂は聞いてない答えを返してくる。

「そっか」

面倒事は仕事以外じゃ歓迎しない。

あとで土方に怒られるかもしれないけど、私が怒られて終わるなら、それでいい。

私は書の趣味の合う男を敵にしたくはない。

「もうそろそろここに沖田が戻ってくるし、その前に消えた方がいいかもよ？」

私が受け取った書を開き、読みかけの部分を探していると、桂からは小さく笑われた。

次いで、子供にするように、桂は私の頭を軽く叩く。

「助かるよ。

君とはまた会いたいね」

「次は見逃さないよ」

「ははは、そうか」

桂が居なくなった後を見計らったように、案の定沖田が戻ってきた。
私はもう読む気のなくなった書を置く。
「遅かったな、沖田」
「稽古に付き合ってくれますよね、葉桜さん」
「ああ」
沖田からは言外に、口止め代わりにというのが聞こえるようだ。
流石に誰がいたかまではわからないだろうが、逢い引き現場に遭遇したとは考えたかもしれない。
誤解されても別に構わないけど。
私は書とカラになった湯飲み、それに白玉団子の乗っていた皿を持って、境内を後にする。
桂は全部食べて、全部飲んで、全部読んで行ってしまった。
「……読むの速いな……」
「そうなんですか？」
隣を歩く沖田はこれからの稽古を考えて沸き立つ心を抑えきれない軽い足取りで、笑いを堪える声で聞いてくる。
私はただ、別に、とだけ返し、子供らしい沖田を小さく笑った。

１４＃桂小五郎（後書き）

＜＜追記＞＞

新選組となってのお仕事、「桂小五郎の捕縛」に関する話でした。
沖田さんは強い人が好きなので、絶対にこのヒロインはまとわりつかれてると思って書いていたのに、いつの間にか桂に口説かれそうになってるし……！
もう自分がわかりません。
（０６／０３／１５　１７：２０）

ゲームやり直して、桂捕縛失敗の報告にかなり近藤さんや土方さんが苛立っている会話を聞いて、本気で書き直そうかと思いました。
でも、ここで捕まっちゃうと話にならないんですよね。
不逞浪士以外にはまったく興味のない、役目以外にはやる気皆無ということで。
（いやいやいや、それはイカンですよ）
（０６／０３／２２　０９：１６）

改訂
（２００９／１２／３０）

15#剣の抜き方

簡単に抜くような剣は持ち合わせていないと私が言ったら、対峙している浪人どもに怒鳴り返された。

当然だろうという目で斎藤が私を見ている。

一面に広がる緑の清涼な空気と高く小さな木漏れ日の下で、私は顔を逸らしてため息を吐いた。

巡察中、ここに彼らを誘い込んだのは確かに私だけど、そもそも仕事に対してのやる気がないのだ、今日の私は。

誘い込むまでは私も騙し合いみたいで楽しいのだが、対面してみれば腕もないつまらない相手ばかり。

私は沖田じゃないが、どうせなら強い相手のほうが楽しい。

「贅沢は言ってられません、か」

スラリと抜いた私の剣に、浪人たちが興奮した面持ちになる。

「もったいない」

「なんだよ」

小さな斎藤の呟きを私が聞きとがめると、斎藤はもうすでに相手に構えを取っている。

斎藤も私同様、かなり面倒そうだ。

「斎藤の出る幕はないよ」

私は右の口端だけつり上げて笑い、地を蹴る。

相手が五人だろうが六人だろうが、雑魚は雑魚だ。

走り抜けざまに、私は剣を閃かせ、竹を切る。

「うわぁ！」

私は一人をその真下に蹴り落とし、二人目に柄を叩きつけて昏倒させる。

三人目には剣の腹を叩きつけ。

「はぁっ！」

私の直ぐ横で斎藤の気配が動き、敵を斬り伏せる。

私は余裕の笑みで、残る二人を睨みつけた。

「まだやる？」

「ひぃぃぃ……っ」

逃げようとする者に向ける剣はない、と私が剣を鞘に収めたところで、その浪人は私に斬りかかってきた。

私は身を翻しつつ、浪人の足を引っかける。

彼はそのまま竹につっこんで、私の目の前で小気味いい音を響かせて倒れ、昏倒したようだ。

「あぁ、せっかく許してやったのにねぇ」

それを私が笑っていると、いきなり横から張り飛ばされた。

倒れずに踏みとどまった私は大したものだと思うし、それをした相手の言い分はわかっているつもりだ。

斎藤のまっすぐな瞳に射抜かれて、私はわずかに胸が痛い。

「何故だ」

斎藤の短い問いに、私は苦笑を返す。

「言ったでしょ。
雑魚に抜く剣は持ち合わせてない」

私は本能的にヤバイと直感してしまう。
斎藤は言葉少ないが見抜くことに長けている。
事実、私のことを土方に進言したのは斎藤なのだ。
どういう理由だろうと、これ以上信用されても困る。
私が組長になるなんてもってのほかだ。

「ならば抜けろ。
やる気のない者は必要ない」
「そういうわけにもいかないんだなぁ」

目だけで聞かないでよ、と私は視線で返す。
私にだって、答えようがないんだから。
まさか、新選組がこれからどうなっていくのかを私が知っているから助けたいなんて言えないし、言ったところで信用されるわけもない。
今の私が言えるとしたら、これだけだ。

「大切な約束があるんだ。
だから、私はここにいる」

依頼人である少女との、大切な約束。
人でないかもしれないし、違えても問題はないのかもしれない。
けれど、それでも一度した約束を破るような人間に、私はなりたくないから。

私の殴られた箇所を柔らかく風が撫でてゆき、頬を掠めていった。
何故今、斎藤が驚いた顔をするのだろう。

「約束は極個人的なものだし、相手は人間でさえないのかもしれない。
でも、」

――新選組をとても愛しているものとの約束だ。

やっぱり私の声は出なくて、でも斎藤には伝わったようで。
斎藤は無言で手ぬぐいを出し、私の頬に添えた。

「すまん」

何故、斎藤が謝るのだろう。

「疑っている訳じゃない」

斎藤も近藤と同じ台詞を言う。
どうして、皆、私に同じことを繰り返すのだろう。

楽しいことばかりであればいいのに、どうして私は依頼人の少女のことを思い出すのも胸が苦しくなるのだろう。
芹沢のことも、そうだ。

「悪い。
みっともないところを見せた」

私は手ぬぐいで顔を拭い、顔をあげて笑う。
まったく、愚痴なんか零して、私は馬鹿みたいじゃないか。

「葉桜」
「さぁて、こいつらどうするんだっけ。
斎藤さん？」

有無を言わせぬ笑顔で私が問いかけると、ほんの少しだけ斎藤は微笑んだようだった。

＊　＊　＊

夕餉もそうそうに切り上げた私は、道場に向かう途中で誰かに呼びとめられ、直ぐ脇の部屋に引っ張り込まれた。
新選組の他の隊士ならともかく、相手は山崎だ。
私が逃げる必要もない。

「ちょっとそこにお座りなさいな」

山崎は普段通りの煌びやかな服装で、私はいつみても綺麗だなと思う。
山崎はその辺の女の子よりも可愛らしい。
でも、今日の山崎は秀麗な眉間に皺が寄ってて、少しだけ怖い。

「烝ちゃん、顔怖いよ？」
「黙って座りなさい」

私が思ったままにいったら、また眉間の皺が増えた。
このまま土方化されても困るので、私は言われるままに山崎の前に正座する。
と、直ぐに山崎の傷も被れもない綺麗な指が伸びてきて、つぅーっと私の頬を撫でた。

「今日はハジメちゃんとお仕事だったのよね。
なにかされた？」
「は？」

山崎は涙の跡がある、と言う。
私はちゃんと戻ってから洗ったのに、何故わかったのだろう。

「これはちょっと気が抜けちゃっただけで、別に斎藤に何かされたとかじゃないよ」
「本当？」
「ウソつく理由がないよ」

私がにこにこ笑って返すと、山崎は安堵の息を漏らして手を離した。

「だそーよ、鈴花ちゃん」
「うんだから、斎藤を解放してあげて。
近藤さん、鈴花ちゃん」

山崎と私が襖の向こうに声をかけると、近藤の手によって静かに開かれた襖の向こうには、酷く憤慨している鈴花とその前で平然としている斎藤、そして苦笑している近藤が姿を現した。

「あれ～、なんで俺と斎藤君までわかったの？」

斎藤はともかく、近藤は気配を消しもせずによく言う。

「ほら、鈴花ちゃんも」

「……はい」

しぶしぶ鈴花が私の前にやってくる。

「鈴花ちゃん、貴方は何しにここに来ているの？
私を気にかけてるばあいじゃないはずでしょう」

私がペシペシと小さな額を叩いてやると、恨めしそうに見上げてくる。

うーん、可愛いと私はにやけてしまいそうだ。

「でも、葉桜さん」

「でもじゃない。

さっさと夕餉を食べてきなさい」

「……」

「あとでお茶しましょう？」

「……はい」

失礼します、と鈴花がいなくなったところで、私は近藤達に向き直る。

「近藤さんが参加してる理由は？」

「葉桜君が心配だから？」

「却下」

「……即答しないでよ」

私は心配されている場合じゃないのに、どうして皆構うんだろう。
私は女だけど、ただの隊士でしかない。
気にかけるほどの価値を、私は私自身に見出せない。

「悪かったね、斎藤。
鈴花ちゃんには私からちゃんと説明しておくから」

貴方も夕餉に行ったら、という私の言葉を遮り、近藤が笑顔のまま問う。

「約束って？」

しゃべったなと私が睨みつけると、斎藤はなにかまずいのかと視線で問い返してくる。
まずいことじゃないけど、私個人として、あまり知られたくはない。

「それって芹沢さんとの約束？」
「なんでここで芹沢さんが出てくるんですか」

あんな男との約束なんてとんでもない、と私の眉間にまたも皺が寄る。
守る気のない約束になんて何の意味もない。
裏切り者の約束に価値なんて、無い。

芹沢の話になると、私は自然と口調も厳しくなる。
私は私自身の感情を抑えるために笑顔を作ってはみるものの、どうしたって怖いと言われる。
どうして私があんな男のことで悩まなきゃならないのか、といい

加減嫌になる。

「あ、別の人なんだ」

「当たり前です」

剣先よりも鋭くとがる私の声に、山崎も斎藤も口を挟めずにいるようだ。

それでも、めげない近藤はちょっと凄く見える。

山崎も芹沢に関しては、私に一切問うことをしない。

私も話そうとしたことがあったわけではないが、山崎は決して私に聞こうとしない。

制約のある内容ではないけれど、今の芹沢だけ知る人に、昔の彼の話を私がしたところでどうなるというわけもないだろう。

「約束って、アレ？」

山崎の短い問いに、私はただ頷いて応える。

そちらに関しては、山崎にも以前に話してあるから合点もいくのだろう。

山崎は頬に手を当て、憂いた表情で息を吐いた。

「ちょっとちょっと。

二人だけでじゃなく、ちゃんと俺にもわかるように話してくれないかなぁ？」

私も話せればいいんだけれど、これはどうにもならない事柄だ。

あの紙は私以外に、見せることも話すことも叶わない。

でも、このままでは近藤は私を解放してくれないだろう。

「近藤さん」

私は背筋を伸ばし、近藤に真摯な視線を向けて、直る。

「二人だけでお話ししませんか？」

ほんの少し表情を和らげ微笑んだ私に、近藤は柔らかく頷いた。

１５＃剣の抜き方（後書き）

＜＜追記＞＞
ゲーム本編からちょっとそれているような気がしないでもないですが（逸れてるって）、
桂を逃がした後なので、斎藤さんと真面目に（？）お仕事している所でも書いてみました。
（２００６／０４／０５）

改訂
（２００９／１２／３０）

16#無防備

私が依頼人である少女とかわした「約束」を話せないことは、依頼されたあの日にわかっていた。
それがおそらく未来に関わることだからと気づくのに、時間は掛からなかった。
憶えていたところで話せないなら、私は自力で何とかするしかない。
そう、わかってはいたんだけれど。

「あれ、沖田と、土方さん？」

近藤に二人で話したいと言ったら、じゃあ後で局長室に来てくれと言われたから私は来たのに、そこには土方と沖田が寛いでいた。
二人は私が来たと言うことに驚いて起き上がり、近藤と私を交互に見つめる。
沖田も土方も私もお互いに不思議そうな顔をしている中、近藤だけが楽しそうに嗤っている。

「……近藤さん、嵌めました？」
「だって二人で話したら、葉桜君ははぐらかすつもりでしょ？」

その通りですけどね、よりによってこの二人の前でなんて、私は余計に話せません。
踵を返して戻ろうとすると、私は近藤に言葉で引き戻された。

「局長が脅すのもどうかと思いますけどね」
「葉桜君が素直に残ってくれれば問題ない話でしょ」

にこにこと人の良さそうな笑顔の裏側で、近藤は一体何を企んでいるのやら。
私は仕方なく局長室に戻り、後ろ手に障子を閉める。
「で、芹沢に関することって？
あの人今度はなにやらかしたんです？」
障子を閉めた位置から、私は動かずに座る。
「あはは、あの芹沢さんを呼び捨てですか。
流石、葉桜さんですね」
面白そうに沖田は事の成り行きを笑って傍観しているが、土方は渋い顔をして近藤を睨みつけている。
対する近藤はにこにこと私を見つめたまま、言った。
「そっちじゃないよ。
今日はどうせなら芹沢さんと君の関係を知りたくて」
一瞬、私の思考が停止した。
私と芹沢の関係なんて。
「どうしてそんなことを？」
近藤は私に依頼人の少女との「約束」の話を聞きたかったんじゃないのか。
聞かれても私には答えられないけれど、少なくともこんな話は予定外だ。
それより、どうして近藤がそれを気にするのか、土方と沖田も黙

ってないで止めてほしい。

「あ、僕もそれ知りたいです。
葉桜さん、芹沢さんと殺り合ったコトあるんでしょう？
その話とか」
「おい総司」
「近藤さんの後で良いから、教えてくださいねっ」

沖田にね！と可愛らしく念を押されても、私は余計にそれを教えたくないし、思い出したくもない。
しかし、目の前で近藤は私の答えを待っている。
ここにきた最初にも、私はそんな話をされたような気がするし、何度か遠回しにも、直接的にも問われている。

「言いませんでしたっけ？
旅の途中の旅籠で会ったんですよ」
「それじゃないよ」

近藤はまだ疑っているのか。

「それだけです。
じゃ、話はこれで終わりですね」

私は立ちあがったところで、誰かに腕を強く掴まれた。
沖田は見た目も行動も子供なのに、剣の腕や腕力はしっかり一人前なんで困る。

「まだですよ。
芹沢さんとの勝負の話」
「それもまた後でね」

私があやすように言っても、沖田が私を掴む腕の力は緩まない。
それどころか私は沖田に引き寄せられて、危うく保つ均衡が破れそうだ。

「いいかげんにしなさいよ、沖田」
「嫌です」

私は更に強く引かれて、そのまま沖田に倒れ込む。
幸いどこにもぶつけなかったから良かったモノの。

「沖田っ」

私を大切そうに抱きしめる沖田に近藤は苦笑いし、土方までもが憐れみの視線を向けている。
二人とも沖田を止める気はないようだ。

「完全に懐かれたね、葉桜君」
「こうなると総司は頑固だからな」

近藤も土方も、頑張れ、じゃない。
私はそんな応援いらない。

ぐいぐいと沖田の腕を退かそうとしている私に対し、沖田は全く平然としていて、なんだか私は悔しい。
そんなことを私が思っているとは考えもしない男達は、勝手なことを言い始める。

「近藤さん、彼女も仲間にいれませんか！？」
「うーん」

「僕は葉桜さんと芹沢さんの勝負も見てみたいなぁ」

もうちょっとで沖田の腕は外れそうだ、と私は腕一杯に力を込める。

「総司、これは遊びじゃねぇんだぞ」

「それにまだはっきり決めた訳じゃないしねぇ」

「えー」

やっと、抜け出せそうな隙間を作った私は、一瞬沖田の意識が私からそれたのを見計らった。

「っ抜けたー！」

転がり、すぐに間合いを取る私を楽しそうに沖田は見る。

「意外と力はないんですねぇ、葉桜さん」

「沖田が馬鹿力なんでしょうが。

わかってるなら私に余計な体力使わせないでよ、もう」

沖田が私を捉まえにこないと確認できてはいないが、私は軽く構えたまま、肩で大きく息をし、パタパタと右手で団扇を仰ぐ。

それから私は自分の小袖をゆらし、着物内に風を通した。

涼しさに、一瞬、私の目も細まる。

ふと気がつけば、近藤がにやにやと評したい笑顔で私を見ていて、土方は眉間に皺を寄せて両目を閉じていて、沖田は私の首元を見ながらほんのりと頬を赤らめている。

「葉桜さんって」

「ん？」
「無防備ですよね」
「そう？」

そういえば、この部屋に入ってから私は気を張っていない気がする。
思い当たることといえば、ひとつ。

「葉桜さん？」
「沖田、それは多分ここが一番屯所内で安全だからじゃない？」

だって、近藤も土方も沖田も並の剣士じゃない、大抵のヤツなら剣を抜かせることもできるかどうかというほどの剣客だ。
私はいくら依頼と言われていても、普段ほど気を張り詰めている必要がない。

「でもこれはマズイね」

私は芹沢のように、ここに来ている目的を忘れるわけにはいかないのだから。
どれだけ私がこの中では弱くたって、守りに来たことに代わりはないのだから、一時だって気を抜いちゃいけないのだから。

急に苦笑した私を、三人は不思議そうに見つめている。

「近藤さん、もう話は終わり？」
「え、あ」
「じゃあこれで失礼しますね」
「ええ、葉桜さんっ」

今度は沖田に手を捕られないように私は交わしつつ、障子を抜ける。

「じゃ、おやすみなさいっ」

「お、おやすみ……？」

そうして不思議そうな男達を残して、私は廊下を走った。

目指すは道場だ。

＊　＊　＊

葉桜さんが去った後、かすかな残り香だけが僕の腕に残った。

彼女だけの清廉な香りは甘く優しく、葉桜さん自身のように直ぐに消えてしまう。

もう少しだけ、彼女に僕の腕の中にいて欲しかった。

「総司、ずいぶん葉桜君を気に入っているんだね」

葉桜さんの声は、近藤さんの柔らかな声と似ているようで全然違う。

「あんまり世話かけてやるなよ、総司」

葉桜さんの空気は、土方さんの世話焼きな空気とも似ているようで全然違う。

葉桜さんは強くて弱くて、とても暖かい人だ。

僕は腕を上げて、袖に残る僅かな残り香を嗅ぐ。

とても柔らかな葉桜さんの香りは、僅かでも強く芯に響いてくる。

「総司は葉桜君が好きなんだな」

「ええ、大好きです」

僕が笑って応えると、同じように笑っていた近藤さんの笑顔が少しだけ曇る。

「じゃあ、総司にお願いしようか」

葉桜さんを引き止めてくれるか、と近藤さんは言う。

まるで葉桜さんがどこかに行ってしまうみたいにいうから、僕は少し吃驚したけれど素直に頷いた。

「もちろんですよ」

葉桜さんのいない新選組なんて、もう僕には考えられないんですから。

返事をして直ぐ、僕は立ち上がり、部屋を出た。

「じゃあ、これから葉桜さんと稽古してきますねっ」

「おー行って来い」

「ほどほどにな」

近藤さんと土方さんの声援を受けて、僕は今日も葉桜さんと剣を交わす時間を手に入れるために、部屋を後にした。

１６＃無防備　（後書き）

＜＜追記＞＞

前回からの続き。

なんとなくこの三人がヒマだと局長室で寛いでいるような。

て、そんなにヒマじゃないですよね。

近藤さんも、土方さんも。

……沖田はヒマ？

沖田はなんだか物凄く子供のイメージが。

沖田ファンの方々、イメージ崩れたらごめんなさい。

（０６／０４／１９）

ヒロインの台詞を一部修正。

（０６／０６／２１　１１：２５）

沖田のモノローグの人称を修正。

（０６／０７／０６　０９：０４）

改訂

（２００９／１２／３０）

17#剣先の相手（前書き）

芹沢追加2「最後の楽しみ」

17#剣先の相手

私が上げた視線の蒼天上を、ゆっくりと真っ白い雲が流れてゆく。のんびりとした雲の流れは、過ぎゆく時間の流れを忘れさせてくれるから、私は好きだ。

遠き日と同じ夕影に心を任せて、庭木に紛れて座り、両腕をだらりと落としたままで、私はぼんやりと天を仰ぐ。

「昼間から飲むのも、たまには、いいですね」

私が近寄ってきた相手を見ないでいると、隣にどかりと座る気配がした。

普段よりも落ち着かない気を漂わせながら私の手に重ねる沖田の手からは暖かさが流れ込む。

沖田がほろ酔いというほど軽い酔い方でないのは、先ほどまで芹沢の部屋で鈴花と一緒に、芹沢の酒の相手をしていたからだろう。

「たまにだったら、な」

沖田が呑むに対して、私が別段とやかくいうほどの事でもないし、なにかあっても芹沢の一声でおさまるのもまた事実だ。

「たまには、一緒にいかがですか?」

沖田の妙な切り返しに、私は小さく息を吐く。

「……沖田、仕事は」

「お酒を飲んで仕事なんかしたら、土方さんや斎藤さんに怒られますよ」

近藤は入らないんだな、と私の中をどうでもいいことが通り過ぎる。

「そういう葉桜さんは」

「今日は非番だったから、な」

相変わらず私の目の前の空を流れる雲はゆっくりだが、吹いてくる風はそれよりも強めだ。

ふわりと風に流される自分の髪が前に落ちるのを、私は空いた手で避ける。

「葉桜さんはいつからここにおられたのですか」

手が冷たいですよと沖田に笑われて、私はようやく視線を空から地面へと落とした。

私は非番の日は普段なら散歩に出て、京都市中をぶらついて過ごすのだが、今日は妙にそんな気が起きなかった。

胸騒ぎがしたとかではなく、なんとなく出る気がなくて、誰とも会話をしたくない日だったんだ。

私にだって、ひとりになりたくなることだって、ある。

「昼餉を食べたら眠くなって、用事を言いつけられるのも面倒で。まあ、まさか屯所内の庭で寝てるとは思わないだろうから」

「誰かから隠れていたんですか。

それとも、芹沢さんを監視するためですか」

私の言葉途中での沖田の陳腐な問いかけに、私は短い笑いを零す。

「監視してどうにかなるか、あれが」

自分でも思いもよらないほど、吐き捨てるように私の口から言葉が出てきた。

芹沢を憎んでいるつもりも、本心から嫌悪しているわけでもないのに。

私が自分の発言を誤魔化すべきか否か迷う間に、小さな沖田の笑いが耳に届く。

「てっきり葉桜さんも来ると思っていましたよ」

沖田がどうしてそう言うのかは、言われなくとも分かっていた。

沖田と鈴花が芹沢の部屋へ行く前、私はここで鈴花が芹沢に意見しているのを見ていたのだ。

以前にも私が見ていないときに同じようなことがあったというが、今だって、いざという時には鈴花を守る準備が私にはあった。

ただ、極力出て行きたくなかったのも事実なので、沖田の助け船に甘えて放置した。

私では今、芹沢に対して、冷静に対処できる自信がないから。

「沖田が行けば充分だろう」

「葉桜さんは最初から見ていたんでしょう?」

ここの位置なら一部始終が見えていたはずと指摘され、私が答えずにいると沖田に強く手を握られた。

「痛いよ、沖田」

「何故ですか」

「手を離してくれ」

沖田が強める力に抵抗せず、私は瞳を閉じる。

「葉桜さんが芹沢さんにだけ、何も言わないのは何故ですか？
彼は葉桜さんの志――誠からすれば、」

「言うな、沖田」

続けようとする沖田から手を振り払い、私は立ち上がる。
何でもない風を装い、私が袴の埃を叩いて落としていると、同じく立った沖田が腕を引いた。
落ちる陽に染まる沖田の真っ直ぐな眼差しはひどく眩しくて、私は風の強さに気圧されたフリで目を細める。

「芹沢さんは葉桜さんにとって、何なのですか？」

沖田からの問いかけを自問しても答えは出ない。
否、私は出すつもりもない。

「上役だ。
沖田にとっても同じだろう」

「今は、そうですね」

今、を強める沖田を私は軽く笑い、乱雑に腕を振り払った。

「沖田は正直でうらやましいな」

「ありがとうございます」

歩き出す私の後をついてくる沖田は離れる気配がない。
そして、近寄ってきたときと同じく落ち着かない沖田の空気に心

当たりもあるので、私はしかたなく立ち止まった。

沖田は確かに鈴花を助けてくれたのだから、私からも礼をしなければならないだろう。

「道場に行くか、沖田？」

私が背中で沖田の満面の笑顔を感じ取ったときには、軽く走り出した沖田に手を取られていた。

「早く行きましょうっ。
葉桜さんの気が変わらないうちにっ」

芹沢の部屋から漏れてきた気配からも、その後の庭での鈴花との会話からも、沖田が抑えきれない闘争を抑えていることに、私は気づいていたが、それにしたって沖田は喜びすぎだ。

「おい、流石に自分から誘っておいてそれはないぞ」
「あったじゃないですか」
「そうだったか？」

私は手を引かれながら橙の夕空を見上げる。
天高く流れる雲が悠々と泳ぐ空は遠き日と同じで、自分も沖田のような時分があったなと思い返す。
立場違えど、過去と同じ光景を思い出した私は、沖田に手を引かれながら、また小さく笑った。

＊　＊　＊

道場内で僕は葉桜さんと二人、木刀を構える。
葉桜さんの気組みは他の誰とも違っていて、僕にはとても静かに練られているように見える。
それは火のない熱のように静かで熱い一撃を秘めていて、葉桜さんの細腕のどこから力が出ているのかも僕にはわからない。

板張りの道場で音もなく、葉桜さんの足が動く。
ぎ、と僕の足元でも床が啼く。

「どうした、沖田。
私とやりたかったんじゃないの？」

余裕そうに笑う葉桜さんの首筋を、つ、と汗が一筋流れ落ちるのが見える。
葉桜さんも僕を相手に余裕というわけではないらしい、と気が付けば、僕も少し気が楽になる。
今日も僕と葉桜さんの条件は五分五分だ。

「誘ったのは葉桜さんですよ」
「それも、そうだな」

葉桜さんの口角が上がるのと同時に、心地よいほどの気合が真っ直ぐに僕を向かってくる。
こちらを、僕だけをただ真っ直ぐに見つめてくれる葉桜さんは普段よりの万倍以上の色香を纏う。

僕は純粋に、彼女を綺麗だ、と見惚れる。

普段は勇ましさが先に立つけれど、こうして向かい合うときの葉桜さんはどんな女性よりも妖艶だ。
相手が魅せられている間に、桜の花びらが舞い落ちるように葉桜さんは動き、叩き伏せる剣を使う。

硬い音がぶつかり、僕は寸での所で、葉桜さんの一撃を防いだ。
だが、それだけで葉桜さんの攻撃は終わらない。
引いたと見せかけ、小さな動作で僕の胴を凪ごうとするのをこちらも絡めて防ぐ。

カン、カン、カンと心地よい木刀を打ち合う音が道場内へ響き続けるのを、終わらない演舞のように僕が感じるのはこんなときだ。
水面を歩くように僕と葉桜さんは互いに打ち合い、引いてはまた打ち合うのを繰り返す。

今この時だけは、葉桜さんは僕だけの葉桜さんだ。
他の誰でもなく、僕一人を見つめてくれる葉桜さんの瞳が誰よりも愛しい。

「考え事とは余裕だな」
「葉桜さんこそ」

唯一つ問題があるとすれば、葉桜さんの目の前にいるのが僕であっても他の誰であっても、必ず感じる違和感があるということだ。

確かに今目の前で葉桜さんは僕を見ているけれど、その剣の先にいるのは僕じゃない。
それは剣を交わすたびに、僕は強く思い知らされる。

「そろそろ疲れた、終わらせるぞ」

「させませんよ」

僕が言うと、葉桜さんは心底楽しそうに笑う。

その咲き乱れる花の笑顔のあとで、僕を見つめる葉桜さんの瞳がすっと細められる。

――来る。

僕はいつもわかる瞬間なのに、それが何時来るのかがわからない。

僕が気がつくのはいつも、高い音を立てて、木刀が一間先に飛ばされた後だ。

何もない自分の手を見て、僕は今日もまた少しの落胆をする。

葉桜さんのそれはわかっているのに防ぎきれない不思議な技で、この僕に武器を手放させる唯一の技だ。

あの一瞬があるからこそ、葉桜さんが対峙しているのがいつも僕でないと思い知らされてしまう。

木刀を納めた葉桜さんが、儀礼的に頭を下げて礼をする。

「ありがとうございました」

儀礼的な試合のようにそうする葉桜さんが何を見、何のため、誰のためにその技を編み出したのかは、誰が聞いても、僕が聞いても決して教えてはくれない。

どれだけ仲がよくても、教えてはくれないらしい。

長い髪を掻き上げ、手ぬぐいで汗を拭きながら道場を出て行く葉桜さんは、僕を振り返りもしない。

葉桜さんは僕が追いかけなければ、追いつけもしない。
葉桜さんはいつだって目に見える全てを守るといいながら、その実は唯一人しかその剣の前に見据えていない。

「葉桜さん」
「続きはまた今度なー」

道場を出て、立ち去ろうとする葉桜さんの手首を、僕は取る。
簡単に僕にその手を取らせてくれるのは、信用されているからなのか。
今はただ、葉桜さんが僕を仲間と思ってくれているからだと信じたい。

「もしも僕が芹沢さんと戦ったらどうしますか」

そのまま歩き出そうとしていた葉桜さんは、ぴたりと足を止めて僕を振り返った。
その眉間には、土方さんのように不機嫌な皺が寄る。

「どうって？
勝負にならないだろ」
「即答しますか」
「おまえひとりじゃ話にならない。
せめて原田、山南さん……うーん、土方も必要だな。
それに沖田も含めて、四人ぐらいでギリじゃないか？」

僕が驚いて手を離してしまうと、葉桜さんはあっさりと歩いていってしまった。
残された僕は廊下に立ちすくむ。
まさか、葉桜さんは知っているのだろうか。

葉桜さんが近くにいるときに、僕らはその話をしたことなどないのに。

だけど、あの口ぶりは知っていると言っている気がする。

「本当に油断のならない人ですよ、葉桜さんは」

芹沢さんの強さを知っているのだと、葉桜さんは僕に暗に示していた。

僕は急ぎ足で土方さんの部屋へと向かう。

やっぱり、今回の計画で葉桜さんには立ち会って欲しいからだ。

そして、叶うなら葉桜さんと芹沢さんの仕合が見たいと騒ぐ心を抑えきれずに、僕は土方さんの部屋の障子を勢いよく開け放つ。

「土方さんっ！」

怒鳴り返す土方さんの声を聞きながら、僕は後ろ手に副長室の戸を閉めた。

「やっぱり葉桜さんも仲間に入れましょうよっ」

「またその話か。
何度も言うようだが」

そして、またかと言いたげな土方さんを説得するために、僕は今日も骨を折るのだ。

僕だって、すべてに確証がある訳じゃない。

だけどきっと、葉桜さんと芹沢さんが剣を交わせば、答えが見つ

かる気がした。

どうしてこんなにも、僕が葉桜さんの剣に魅せられるのか。

どうしてこんなにも、葉桜さんの剣先の相手が気になるのか。

僕にはまだ何も、わからない。

１７＃剣先の相手（後書き）

＜＜追記＞＞

芹沢と絡められないのが残念でならない…（ェ

（２００９／０２／０２）

改訂

（２００９／１２／３０）

18#いるはずのない人（前書き）

藤堂デート「よく似た男」

18#いるはずのない人

私はいつものようにふらりふらふらと町歩きをしていた。
数日続く晴天というだけで私も気分が良いし、町は平和で活気がある。
一人で歩いているだけで、その空気に触れているだけでも私はなんだか嬉しくて、笑みがこぼれる。

数年前までは、同じ町ではないけれど、共にそうして歩く人がいた。
私にこの町歩きの楽しさを教えてくれたのもその人だ。

「葉桜？」

巡察中らしい永倉率いる二番隊と行きあい、私は軽く手を挙げて返す。

「お勤めご苦労さん」
「おめェはこんなとこでなにしてんだ？」
「んー、散歩？」

じゃあなと別れてからもふらふらと店先で冷やかしたり、小間物屋で綺麗な財布を物色したり。

そんな風にふらふらと歩いていた私は、ふと道ばたで立ち止まり、振り返った。
雑踏に覚えのある香りがあった気がしたからだ。

（そんなはずは）

私は自分を否定し、再び歩き出す。
しかし、数歩先で自分の意思に反して、私は踵を返してしまった。
夢を求めるように、幻を願うように、微かとなった香りを追いかけて、私は走っていた。

（そんなはずは）

あるはずがない、いるはずもないとわかっているのに確かめずにはいられなくて、私は周囲を見回す。

「なにしちゅう？」

背後から問いかけてくる才谷の声で私は我に返り、拳を握りしめ、唇を強くかんで、何も言わずにその場を逃げ出した。

（そんなはずは）

一目散に屯所へ戻り、布団を被って、私は我が身を強く抱きしめる。

（そんなはずない）

今、私を捕らえていたのは恐怖でなく、逢いたいとただ希う、恋慕の情で。
叶うはずのない願いとわかっているのに止められなかった。

＊　＊　＊

葉桜さんは昼餉をいつも外で済ませる。
理由は贔屓の店がとかいうけど、新八さんや左之は贔屓の女がと馬鹿笑いした。

でも、今日は非番の日はいつも夕餉に合わせて屯所に戻る葉桜さんが、早番の新八さんのすぐあとに戻ったと聞いて、俺は驚いたんだ。

「でもいない、よね」
「うん、部屋に篭っちゃってるの」

鈴花さんは心配そうにしながら、昼餉を食べてた。

俺はいつも笑って、人をからかう葉桜さんしか知らない。
だから、話を聞いた時は信じられなくて、軽い気持ちで新八さんらと部屋へ行ったんだ。

遠めに縁側で寝転がる葉桜さんを見て、俺は足を止めてた。
いつもと同じ、青で統一された男姿なのに、ふだんよりも線の細い女らしさを感じる。

そう感じたのは俺だけではないようで、同じように立ち止まったままの新八さんも左之さんも前に進まない。

夏空を見上げ憂い顔の葉桜さんがいる場所は、俺らがいる場所までをきっちりと切り取り、崩せない風景みたいだ。

ゆっくりと葉桜さんの視線が動き、俺らを認めてから、気の抜けたようにへらりと笑う。

「いつまでそんな所でつったってる。
用があるならさっさと言いなさいな」

そのまま俺らが何も言わないでいると、葉桜さんは視線を空に戻し、左手を口元へ運んだ。
違和感は、もうひとつ。

「煙草なんて吸うのか、葉桜」

まず歩き出した新八さんに続き、左之さんが、そして俺もやっと葉桜さんの近くまで歩み寄った。
隣に胡座をかいた新八さんにも、後ろに座った左之さんにも何も言わない葉桜さんは、キセルをくわえたままで俺を見上げる。
なんとも言えない色気に、俺は耳が熱い気がした。

「吸ってないよ。
葉もないし、火もない。
てか、あんなマズイもの吸うかよ」

葉桜さんは口では嫌悪しているが、キセルをくわえて、笑っていては説得力がない。

「んじゃ、そらなんだ？」
「キセル」
「……まさか土方さんのじゃねェよな」
「ったりまえ。
つか、他のやつのなんか、くわえるかよ」

言いながら、葉桜さんは口からキセルを離し、大切そうに紅の袱紗に包んだ。

「これは、形見なんだ」

そういって微笑む葉桜さんは、女の顔をしていた。

「私を救ってくれた恩人の、形見でさ。
今日はなんとなく思い出して、引っ張りだしてみた」

吸わないんだけど、と袱紗の上から、葉桜さんはまた撫でる。

「恋人かなんかか？」
「あはは、言うと思った。
残念ながら違うよ。
恩人って言ったでしょ」

袱紗を胸にしまい、葉桜さんは柔らかに笑う。

「私に光をくれて、剣を教えてくれた人さ。
永倉と別れた後で急に思い出して、偲んでたんだ」

違うと葉桜さんは言うけど、その顔はどう見ても恋しい人を想う顔だ。
俺が横顔をじっと見つめているのに気づいた葉桜さんが、はにかんで笑いかけてくる。

「……おまえら、午後の予定がないなら、ちょっと付き合わないか？」

葉桜さんがそんな女の顔で誘うから、つい俺らはうなづいてしまったんだ。

＊　＊　＊

道場内に緊張が広がり、俺はあの時と同じく動けない。
目の前にはあの時――入隊試験と同じく、温く笑う葉桜さんがいる。

「大丈夫かよ、平助」
「代わるか？」

左之さんと新八さんの言葉にも、俺は動けない。
葉桜さんは強い。
一瞬でも気を緩めたら負けることは、俺はあの時に思い知っている。

得意の上段に構えた俺に対し、葉桜さんは右手を軸に下段に構えている。

あの時の葉桜さんは利き手と逆だったと、俺は後から鈴花さんに聞いて、もっと悔しくなった。
あれから更に鍛練も重ねたから、俺だって強くなっているはずだ。
だけど、それでも俺は。

「藤堂、悪いが半分はいかせてもらうぞ」

予告と同時に俺は間一髪で、葉桜さんの一撃を受けていた。
だけど、葉桜さんの速さだけに捕われてもいけない。
続く猛打もだが、見た目の細腕に反して、その一撃はどれも軽くない。
さらに魁先生の異名をもつ俺でも追いきれない速さに、押され続ける。

葉桜さんは女だと認識したさっきが嘘みたいだ。

「それまでッ」

新八さんの合図がなければ、俺はどうなっていたか。
両肩で息する俺に、葉桜さんが笑う。

「ふーん、ちゃんと稽古してんだ」
「あ、当たり前っ」
「エライエライ」

小さい子にするみたいにぐしゃぐしゃと俺の頭を撫で、葉桜さんが俺に背をむける。

「葉桜さんっ」

俺は葉桜さんを呼びとめ、彼女が振り返ってから、呼び止めた自分に驚いた。
負けて悔しいのはあるが、恨み言を言うつもりなんてない。

「なんだ、藤堂？」

そうと知らない葉桜さんが俺の前に戻る。
今更、なんでもないとは言えない。

「……鈴花さんが心配してたよ」

結局、考えた末に出たのはそんな言葉で。

「そうか、鈴花ちゃんが」

決まり悪そうに笑った葉桜さんは、有難うとまた俺を撫でた。
今度こそ俺から離れる葉桜さんを見送る。

その後ろ姿はまた、かすかに女の顔を俺にみせていた。

18#いるはずのない人（後書き）

＜＜追記＞＞

新年初創作がこれってどーよ。
父様について書こうかと思ったけど、ここではまだ明かしちゃいけないと思い出したのでやめた。
て、ここで書いたら台無しか……ｗ
（２０１０／０１／０２）

19#必要のない自覚

淡い薄空色の着物に濃紺の帯を締め、臙脂の風呂敷を胸に抱えて、私は町を急ぐ。

こんな女姿だけに私の髪型も普段の雑なまとめ方ではなく、きちんと髻を結って、簪を挿している。

時折、簪から軽やかな鈴の音が鳴るのは風が私に吹き付けてきたときだけなのは、不自然かもしれないなと私は小さく口端をあげた。

遠目に見ると、宮家か公家者と見えるのか、普段なら町歩きの私に声をかけてくる者たちもこちらを見るだけで近寄ってこない。

（やっぱりやり過ぎじゃないの、山崎）

私は心の中で歎息していても足の運びは変わらず、とにかく先へ進むことを優先した。

途中、何度か私にぶつかるふりをする浪人もいたが、構うのも面倒なのですり抜けてきたし、道を変えて撒いたりもした。

とにかくこの格好は面倒が多いし、周囲の反応も気持ちが悪いから、私は好きではない。

（早く用事済ませちゃおう）

どうして私がこんな格好をしているのかと言うのを端的に言えば、山崎との賭けに負けた罰ゲームだ。

賭けの内容は実に下らないのだが、負けたら勝った方のいうことを何でも聞くという条件だったせいで、今、私は女装にこだわりのある山崎の手で着飾られ、とある店に向かっているのだった。

道の向こうで烏が環を描いて飛んでいるのが、私の視線の先に写る。

これが私への目印で、なければ私に目的地まですんなりと辿り着けはしない。

烏が軒先に止まるそれなりに大きな店の前で、私は息をつく。

私が暖簾をくぐり、店内に入ると、ここに来るまでと同じような視線を感じてしまって、やはり居心地が悪い。

しかも、どうしよう。

こういうところって来たことないから、私はどうしたらいいのかわからない。

「あの～」

とりあえず、私は笑っておくことにした。

「山崎さんからこれをお預かりしてきたので、確認していただけませんか？」

私が風呂敷を差し出すと慌てたように番頭がやってきて、風呂敷を受け取り、かと思えば女性が私を案内をしてくれる。

「山崎様のお知り合いどすか。

どーりでお綺麗や思いましたわ」

「うちはまたどこのお姫さんがいらしたか思うて、どきどきしてしまいましたわ」

口々の女中らの言葉に、私もげんなりと心中で口を曲げる。

「おひいさん」て言われても、私は着物を買いに来たわけでもないから、もう帰りたい気分だ。

「お名前を伺っても宜しおすか？」

ニコニコと番台から人の良さそうな笑顔の男が、私に問いかけてくる。

「はい、葉桜と申します」

「葉桜様はどのような着物がお好きですか？」

さっさと済ませてしまいたい私は、何も考えずに受け答えする。

「あまり気にしたことはありませんけど、青っぽいのが」

とたんに私の辺りに反物が集まってきた。

買いにきたわけじゃないんだから、本当にもう私は帰った方が良さそうだ。

「あの、私の用事は山崎さんのお届け物だけですので」

「その山崎様からお見立てを言付かりまして」

番頭の言葉に、私は笑顔を作るのも忘れて、眉を寄せた。

「一着差し上げてからお返しするように、と」

呆気にとられる私の前にひとつの反物が広げられる。

「なぁなぁこの色なんてどうや？」

それに重ねるように別の反物が広げられ。

「そんな下品な色は似合わんと違います？

こちらの睡蓮なんてよう似合う」
「空気が凛々しくあらはりますし、この白梅なんて」
目の前で勝手に繰り広げられる色彩の乱舞に、私は眩暈がする頭を押さえた。
山崎め、帰ったらとっちめてやる。
「葉桜様はどんな柄がお好きでいらっしゃいますの？」
そんな決意も目の前の反物と勧めてくる女中らを前にしては、さすがの私も薄らぐ。
あきらめるとかそういう問題ではなく、本当にもう、その前に決めるまで帰してくれなさそうなここから誰か助けて、と私は出入り口へと顔を向けた。

＊　＊　＊

私は欄干に寄りかかり、大きくため息をつく。
女の子がいっぱいって怖いし、あの手の店ってほとんど入ったことないから、私は苦手だ。
普段の着物も自分で買うことなんてなかったし、今だって男物でざっくり済ませている。
よほど私は情けない顔をしていたのだろう、側にいる相手は楽しそうに私を嗤っている。

「笑い事じゃないんですってば、近藤さん」
「ゴメン、ゴメン。
まさか葉桜君の苦手なものが女の子だなんて思わなかったからさぁ」
「あれだけはマジで勘弁してほしい。
どうも女の子のあーゆー感じって馴染めないんですよ。
稽古してる方がよっぽど気が楽」

あんな醜態をみせちゃどんな顔を作っても無意味だから、私にはもう笑うしか手がない。

稽古ねぇとまだ笑っている近藤に夕陽が当たって、私は悔しいけれど綺麗で格好良く見えてしまった。
私の着物は夕陽で朱色に染まり、頭の上では涼しげな音が鳴る。

「その格好は烝にやられたの？」
「ええ。
私みたいな男女を着飾って、烝ちゃんも何が楽しいんでしょうねー」

私がくるりと回ってみせると近藤から急に腕を引かれて引き寄せられた。
直後、私の後ろをすり抜けるように浪人が走り去る。

「危ないよ」
「あ、ありがとう、ござ、います」

触れた分だけ、私と近藤の間がぎこちなくなる。
橋を通る人も少なくなり、私が腕の中から見上げると、近藤はいつになく真剣な目をしている。

「近藤さん」

かと思うと近藤からは、あーぁとなんだか情けないため息が聞こえる。

「烝も罪なことをしてくれるよ」

「本当ですね」

「この姿の葉桜君を一人で屯所に帰すなんて、危険なこと出来るわけないじゃない」

「いや、それは別に問題ないでしょう？」

「あのねー、その格好でいくら意気がったって駄目なの」

私は近藤に小さい子を叱るように目線を合わせて怒られる。

でも、私は怒られてる気がしなかった。

「襲ってくださいって言ってるようなモンだよ」

私を？誰が？てか、返り討ちにする自信ありありなんですけど。

私が本当に不思議そうに見返すと、近藤には困ったように微笑まれ、いきなり抱きしめられた。

最初は柔らかく、それから強く。

「近藤さん？」

聞き返しても答えはなく、私はどうしたらいいのか。

考えた末に私は手を伸ばし、近藤の広い背中に腕を回した。

かすかに近藤から震えが伝わってくる。

「よしよし」

私が道場に来る子供達と同じようにしたら、近藤にはもたれかかって笑われた。

「俺ってそんなに子供？」

「そうですね、なんだか道場に来てた子と同じ感じ」

「ひどいなぁ」

「重いんでそろそろ離してくれません？」

ようやく離れてくれた近藤に、私は笑いかける。

「葉桜君は確かに強いけどね、ひとつ大切なことに気付いてないよ」

そんなことないと笑ってみせる私をもう一度引き寄せ、近藤は私の額にそっと口づけた。

「！」

「敵は内にあり、だよ。

その姿で屯所内を歩かれちゃ、隊士達の目に毒」

危険なのは近藤さんじゃないんですか、と私が見上げると、今度の近藤は私の額を軽く叩いた。

カワイイ顔しても駄目って言われても、私にはそんなつもりもない。

私にただわかるのは、近藤の腕がとても安心できる場所だということだけだ。

私は近藤と繋いだ手を引く。

「それじゃ邪魔者が入らないうちに帰りましょうか」

私の宣言を皮切りに、私と近藤を囲むようにバラバラと浪人が出てくる。

「無粋な連中だね～」

「本当ですね」

私は懐から懐剣を取り出し、右手に逆手で構え、左手で右の袂を押さえて近藤の前に立つ。

浪人の人数は五、六人といったところだから、これなら私一人でも充分だ。

「新選組局長の近藤勇だな?」

「違うって言っても信じてくれないくせに」

私が鼻で笑うと、浪人の一人から黙っていろと怒鳴り返された。

不満に口をとがらせる私は、後ろから肩を引かれたかと思うと、近藤が私を庇って前に出る。

「そうそう、今は大人しくしてなさいって」

「いやです」

「女の子に守られたんじゃ、局長としてカッコがつかないっしょ」

近藤は言い出したら聞かない人だとはわかっていたけど、少しぐらい私に守らせて欲しいものだ。

「待ってて、すぐに終わらせるから」

「手伝います」

「葉桜君、キミねぇ」

「足手まといにはなりませんよ」
「そうじゃなくて」

もめているところに一気に斬りかかられ、近藤と私は二人でそれを抑え込む。

「ほら、悠長なこと言ってる場合じゃありませんよ！」
「くっ、わかったよ。
そっちは頼んだ」
「了解っ」

次にきた一撃を私は懐剣で弾き飛ばした。
それで私が動けなくなったと思った浪人が斬りかかってきたところを、私は後ろへ飛びつつ、腰の後ろ辺りへ手を入れて、それを取り出した。
続く高い金属音で相手を弾き飛ばした私に、目の前の浪人たちの目の色が変わる。

「何っ？」
「この女、強いぞっ」

右手の懐剣に加えて、左手には少し黒光りする懐剣よりも少し長めで、小太刀よりは短めな特殊な刀を私は構える。

「なに、その刀」
「話は後です」

がむしゃらに向かってくる浪人を私はすかさず叩き伏せ、背中側でも近藤が刀を振るう音が聞こえてくる。
焦りも勇みもない、安定した存在感と音に、私の頬も自然とあが

る。

まるで、昔に戻ったみたいな気がして、――がいてくれるような気がして。

「っ！」

考えを振り払い、私は相手の手に右手の懐剣をたたきつけ、取り落とした相手の剣を踏みつける。

「さあ、次は誰？」

それからだいたい半刻もしない間に、私と近藤は川縁にいた。

私は水辺に近づいて、手持ちの刀を水にさらす。

手ぬぐいで二本の刀を丁寧に拭い、血が付いていないのを確認して、鞘に収める。

「二つも刀持ってるなんて思わなかったよ」

「だから一人でも大丈夫って言ったじゃないですか」

「それは駄目ー」

これだけは譲れないと、近藤は近づいてきて、私の手をとって微笑んだ。

戦闘中も思ったが、この人はやはり私の父様に似ている。

安心感や包容力もそうだが、何よりも強いのはその存在感。

二度と、出会えないと思っていた存在感に、心の中が靄がかって落ち着かない。

結局近藤に押し切られる形で私は部屋まで送られてしまった。

夕餉を終えて布団に入るまで、私は思い出につつまれて、とても

幸せで。

これから先に起こることも知っているのに、忘れて眠りについた。

１９＃必要のない自覚（後書き）

＜＜追記＞＞

山崎との友情夢と見せかけて、近藤夢。
これ、実は鈴花があるイベントを起こす前の出来事な設定です。
なんのイベントかはお好きに推理してください。
（０６／０４／２０　１０：４８）

山崎の呼び方が二人とも変だったので修正。
（０６／０４／２６　０９：５０）

改訂
（２０１０／０１／０２）

２０#胎動－１（前書き）

文久三年長月

20#胎動ー1

今まで私は酔っぱらうほどの酒を飲んだことはない。
体質なのか、まったく酔うことが出来ないのだ。
そうでなくても気がかりが多すぎて今日ばかりは無理だ。

「オメーは勿論イけるよなっ」

片側から永倉、正面には藤堂、少し離れて斎藤に囲まれながらも私は笑顔で応える。

「とぉっぜんっ。
なんなら飲み比べてみるっ？」

誘いにノって永倉と私が飲み比べを始めたのがたしか酉の刻頃だったと思う。
そして、私が永倉との飲み比べに勝ったのが子の刻頃だったと思う。
辺りは皆酔いつぶれ、めずらしく土方や山南、沖田までもが落ちていた。
隣で寝言をいう原田は普段の粗雑さが影を潜め、しかめっ面な顔で七面倒な論争なんかふっかけてくるから、適当な平隊士を餌に置いてきた。

当然ながら、芹沢も酔いつぶれている。
最近は酒を控えていたから、芹沢もさぞかし効いたことだろう。

先日、芹沢の腹心だった新見が切腹した。
でも、その死はどう考えても不自然で、近藤と土方を問い詰めて

いたらあっさりと白状した。

切腹に見せかけた暗殺。

全ては芹沢自身の目の余るほどの横暴故だった。

芹沢のせいで新選組の悪名は京中に知れ渡り、このままでは存続さえも危うい。

だからこそ、芹沢は新選組内で粛正されなければならない、と。

土方はそう言っていた。

私だって、理屈はわかる。

でも、理解したくないんだ。

こうなるとわかっていたから、私は遠回しに何度か芹沢に言った。

直接行けば逃げられる。

だから、何度か酔っている芹沢の元へ忍んだけれど、眠っている状態では届かなかったのか。

手紙も私は何度か芹沢に書こうとした。

だけど、何をどう書けばいいのか。

あの頃とは私も芹沢も立場や関係が違っていて、どうしても言葉に書けなかった。

結局、書けたのは一言で、それさえも丸めた紙を芹沢の部屋に投げ捨てただけだ。

読んでいるはずもないだろう。

せめてあの頃に戻ってくれれば、私だって話をできた。

厠へ行った帰りに廊下で酔いつぶれた振りをして、私は柱に寄りかかって眠った振りをする。

もう遅いかもしれないけれど、私は芹沢にどうしても一言言いたかった。

「葉桜」

上から昔みたいに柔らかくかかる芹沢の声に、私は顔をあげることができない。

どうして今、そんな風に優しく私を呼ぶ。

「達者でな」

それは全然酔っていない、昔のままの芹沢の声で。

別れの、言葉で。

「俺は先に先生んとこへ行くぜ」

全てわかっているのだと、芹沢の口ぶりでわかってしまう。

芹沢は柔らかく私の頭を叩き、蹌踉けた様子で廊下を歩いていった。

昔の、まだ父が生きていた頃の道場に来た道場破りだった、血気盛んな芹沢はとても高い志を持って、ずっと遠くを見つめていた。

私は小さくて追いつけなくて、何度も稽古をつけてもらって、泣いて、笑って、また勝負して。

あの頃の私は芹沢に勝ったことが一度もなかった。

一度くらい、素面の芹沢と私はきちんと話したかった。

「……っ……馬鹿ぁ」

芹沢は小さい頃からずっと私の憧れだった。

だから、再会したときの芹沢を見て幻滅したし、私はとても哀しかった。
安易に再会したことを喜ぶなんて私には出来なかった。
芹沢はあの頃よりもずっと粗野で粗暴で我が侭で乱暴で。
その行動が世間一般的にどれほどの迷惑をこうむるのかわからないはずがないのに、そんなことをする芹沢を私には理解できなかった。

皆が皆、「お酒さえ飲まなければ」と芹沢を評する。
私だって同じく思う。

留まることができたなら、あの頃に戻ることができたなら、こんなことにはならなかったはずだ。
隊の内部で局長を暗殺なんて、そんなことにならなかったはずだ。

「何をほがーに泣くがかぇ？」

柔らかい声がかけられ、私は温かさに包み込まれる。
この別れの宴に乱入してきた男――才谷は、さっきまで高鼾をかいていたはずなのに、いつのまにか私の隣に膝をついて、私の髪を優しく撫でる。

「あいとら全部わかっちゅう。
おまんがほがーに泣くことはなんちゃーがやないがで」

梅さんのくせに馴れ馴れしい。
そういって私は振り払いたいのに、ただ涙が出て止まらなかった。
本当は芹沢を助けたかった。
だって、どんな人だったかとか、私はとてもよく知っているから。

でも、旅に出てからの芹沢の噂はどう聞いても横暴で傍若無人で、実際にあったらもっと酷くて、芹沢は私を覚えてもいなかった。

約束も、何もかも、憶えていなかった。

「どうしたがか」

「行くわ」

私は立ち上がり、才谷を見ずに駆け出す。

言っていないこと、言いたいことはまだあるし、まだ間に合うはずだから、私は廊下を蹴って走り出す。

後ろに感じる優しい視線に見送られ、屯所へと足を急がせる私は気がつかなかった。

「ふふ……まっこと惚れ惚れするぜよ」

才谷はにんまりとした笑顔で私を送り出してくれていた。

＊　＊　＊

私が屯所へと向かう道すがら、静かに雨が降りだす。

雨は芹沢の運命を悼むように、ただただ強くなってゆく。

雨に吸いこまれた服が重いけれど、私は気になんてしていられなかった。

屯所の門を潜って直ぐ、私は鈴花を見つける。
おそらく見張りだろう。

「鈴花ちゃん」
「っ葉桜、さん」
「まだ終わってないんだね」
「、駄目ですっ」

鈴花の制止を聞かずに、私は真っ直ぐに芹沢の部屋へと向かった。
私が屋内へと入ってすぐ、かすかに聞こえる剣戟の音からまだ勝負はついていないのだとわかる。

（間に合って）

芹沢にも土方らにも殺されるかもしれないが、どうしても、私は芹沢に言いたいことがある。
私は走りながら、小太刀を抜き放ち、芹沢の部屋の襖を開け放つ。
今この場で大太刀では動きにくい。

「下村っ」

私は芹沢の部屋の襖を開けた瞬間、驚いた顔の芹沢一人に的を決め、切りかかった。

鈍い金属音と火花が散って、私はすぐに芹沢に攻撃を防がれたことを知る。

「おまえっ」

鉄扇で私の一撃を受け止めた芹沢の顔が、驚愕を示す。

芹沢に隙が出来た所で、私はすかさず二撃、三撃と続けて打ち込む。
流石というか、芹沢には全てが防がれた。
それでも、私は休むことも止めることもなく打ち込み続ける。

あの頃の芹沢なら、私のこんな攻撃ものともしなかった。
でも、今の芹沢はもう動きが遅くみえてしまって、それを哀しく思いながら、私は止めの一撃を振り下ろした。
その一瞬、芹沢が笑ったように見え、上げかけた腕を芹沢が降ろしたのが私にはわかってしまった。

芹沢から吹き出す鮮血がかかるのを気にもせず、落ちる彼の体を抱いて、私自身も座りこむ。
急所を貫いたので、もう芹沢に意識はないだろう。
それでも、私は問いかける。

「どうしてっ」

自分が手にかけた男に、私は問いかけた。

「どうして忘れたんだよっ。
父様との、私との約束をっ！」

そうすれば、殺されることなんてなかったかもしれない。
でも、殺されたかもしれない。
でも、一言「久しぶり」って言ってくれれば、言ってくれれば力になった。
一人になんてさせなかったし、どんな難題だって私にはこなせる自信があった。

あなたが頼ってくれたなら、私はなんだってできたのに。

「葉桜、君」

「ごめんなさいっ」

山南の声に、呆気にとられている面々に私は顔を向ける。

たぶん、私は泣いていたと思う。

ここでは疑われてはいたかもしれないけれど、私と芹沢の昔の関係なんて誰も知らない。

信頼関係があったようには見えないくらい、私も芹沢も互いを嫌っていたから。

「後で切腹だって何だってするから、だから今はっ。

この人を、せめて送らせて、ください」

この時に私は斬られたってしかたなかった。

斬るか斬らないか、四人が迷っていたのがこんな状態の私でも伝わってくる。

でも、何より、目の前のこの人に私は言いたかった。

自己満足になろうと、私は言いたかった。

「今のあなたは大嫌いだった。

戻って、欲しかった」

昔のままなら、私はもっと近くにいてあげられたのに。

こんなことになる前に、私が芹沢を止めたのに。

「馬鹿だよ、あなたは」

四つの気配が芹沢の部屋から、私の側から静かに消えた。

誰もいない部屋にただ強く、雨が強く降っているのだけがすべてで。

「馬鹿だけど――」

たった二人きりの世界で私は強く強く、芹沢の亡骸を抱きしめた。

＊　＊　＊

迎えに来た鈴花と部屋へと戻り、彼女に手伝ってもらって、血のついた着物を脱ぎ、髪を洗い、体を拭いた。

外を歩いてきたから、大半は流れてしまったおかげで、芹沢の血はあっさりと消えてしまって、少しも残らない。

鈴花の勧めで早めに布団に入ったけれど、私は眠る気が起きず、ただ目を開いていた。

鈴花はどこか部屋の外へ出たようだった。

私は何も考えることが出来なくて、ただ昔の芹沢が思い出されて。

全然、眠れなかった。

こんなんじゃ駄目だと自分でもわかっているのに、私は何も、眠る気も起きない。

布団から体を起こし、膝を抱えて、闇をただじっと見つめていた。

襖越しに声をかけられ、私は小さく応える。

「眠れないのかい？」

私が目を向けると、近藤が立っていた。

雨の音で、近藤が何を言っているのか、私にはわからなかった。

世界がぼんやりと霞んで遠く見える私に手を差し伸べて、近藤はただ抱きしめた。

小さい子供にそうするように、私の髪を撫で、静かにあやす。

「君のせいじゃない」

こんなに近いのに、近藤の声が聞こえないのを私は不思議に思った。

芹沢とは小さい頃のほんの一時期を過ごしただけだった。

後はずっと会っていなかったし、再会しても私はあんなに嫌いだったのに。

今は芹沢のいない世界が空虚に満たされていて。

暗い暗い穴が口を開いて、私の目の前にあって。

あやすような近藤の手の平に体を預け、私は静かに目を閉じた。

「君のせいじゃないんだよ」

誰かの声が、私の耳に響いていた。

優しい声を抱いて、私はただ暗く深く眠った。

＊　＊　＊

眠ってしまった葉桜君の部屋に、俺の他にもう一人の静かな訪問者が訪れる。

「……近藤さん」
「眠ったよ」
「そうか」

葉桜君をそっと布団に寝かせて、俺たちは部屋を出る。
トシは普段ならば決してみせないような哀しい顔で庭の闇に視線を落としている。

「情けない顔してるなぁ、トシ。
葉桜君は大丈夫だって。
強い人だもの」

俺はトシの肩を叩き、自分の部屋へを足を向ける。

「あいつが来るとは思わなかったんだぜ。
俺たちでやるつもりだったのに」
「そういうなよ。
彼女にも何かあるんだろ。
知り合いみたいだし」
「仇敵になる程の、か？」
「うん、たぶんね」

芹沢さんが「下村」と名乗っていた頃を知っている葉桜君。
それが良い思い出だけであるはずはないと俺達は想像してしまう。
でなければ、殺そうとなんて思わないだろうと。

「素面の、昔のあの人を知ってて、殺したってのか」

俺もトシも推測の域を越えることはできないだろうけれど。
葉桜君はきっと俺にもトシにも他の誰にも、本当のことは語らないだろうけど。

「女ってのは、こえーな」
「そうだねぇ」

トシの言葉を振り見て、俺は笑う。

「でも、彼女を放っておけなかったんだろ？
わざわざ俺に様子見に行かせないで、自分で行けばよかったのにねぇ」

そんなこと出来るか、とトシは俺の頭を叩いた。

「なにすんのさ」
「俺じゃ葉桜は眠らねぇよ」

トシは自分の部屋の襖を開けて、俺を見もせずに言う。
その声音は清々しく聞こえるが、トシをよく知っている俺には悲痛に聞こえた。

「眠れねぇのさ」

俺が何かを返す前に、トシは襖を閉めてしまう。

「二人とも強情だねぇ」

からかう俺の声は雨音に吸いこまれ、誰にも届かなかった。

２０#胎動－１（後書き）

＜＜追記＞＞

新規作成

（０６／０４／２０）

梅さんの台詞を微細修正。

（０６／０６／２１　１０：４５）

近藤のモノローグの人称を修正

（０６／０７／０６　０９：０５）

改訂

（２０１０／０１／０３）

20#胎動－2

雨の上がった庭へと降り、俺は顔を洗いに井戸へと向かう。
その途中で珍しい人を見つけ、俺は眉をしかめた。

他の人物なら驚かないが、庭掃除をする葉桜なんて、初めて見た。
普段の葉桜ならこういう仕事はあの手この手と使って、何がなんでも避けようとしているくらいだ。
庭掃除はキリがないから面倒なのだと、ぼやいていたのを笑ったことを俺は憶えている。

「槍でも降ってくるかぁ？」

俺は空を見上げてみるが、昨夜の雨が嘘のような快晴だ。

「あぁ、おはよう、永倉さん」

葉桜に柔らかな笑顔を浮かべて挨拶され、俺は背筋に寒気が走った。
いつもの葉桜ならもっと意地悪そうな笑顔で、しかもだいたい人に仕事を押しつけるか、何か奢らせるかする奴だ。
葉桜が普通の女みたいに優しく笑うなんて、俺は出来ないと思っていた。

そういえば、昨日俺は葉桜と飲み比べをしたんだと思い出す。

「オメー、二日酔いとかなんねぇのか？」
「ないですねぇ。
そもそも酔ったことないし」

「は？
てことは、昨日のは」
「昨日？」

不思議そうな顔をして、葉桜は俺を見る。

「昨日何かありましたっけ？」
「二人で店の酒飲み尽くしたかしれねーのに、覚えてねぇのか？」

変だ変だと思いつつ、俺は葉桜に向かって足を勧める。
葉桜は常なら絶対にしないような、普通の小娘のように首を傾げている。

こうしてみると、葉桜に色気はないものの、けっこうな美人に見える。
普段ならそうしていればいいのにと俺は思う反面、場所が場所だけにそうもいかないと気がつく。

「やっぱ酔ってたんじゃねーかよ」
「酔ってません」
「それとも未だに酔ってんのか？」
「酔ってませんって」

頑なに否定する葉桜の腕を俺が掴んでみても、痛がるでなく、睨みつけるでなく、ただただ不思議そうに見返す。
普通の女のように。

「酔ってんだろ」

俺はやばいと、思った。

葉桜は只でさえ人目を引く女なんだ。
こんなに無防備な状態の葉桜が屯所内を歩き回るなんて、無謀にも程がある。

「酔ってません」

俺の意図をわかっていないのか、ただ不思議そうな表情で、吸いこまれそうな茶色い虹彩の混じった黒い瞳で、葉桜は見返してくる。

俺はやばい、と分かっていた。
でも、葉桜から視線を反らせなかった。
俺の近づく距離に、葉桜の方が顔を背け、再び箒を動かし始める。

「顔を洗った方がいいですよ」

葉桜が悪い、と俺は心中で弁明する。
抱き寄せ、葉桜の細い顎を掴んで、俺は口を合わせる。
葉桜は抵抗もせず、ただ状況に驚き、目を見開いたまま。

俺の臑を蹴り上げた。

「いってぇ！」
「さっさと顔を洗って、目を覚ましてください。
昼頃、近藤さんからお話がありますから」
「なにすんだよっ」

涙目になって蹲る俺に葉桜は背を向け、先ほどまでとまったく変わらない口調で言う。

「さっさと行ってください」

それが拒絶も何もない感情のない声なのだと、俺は今更ながらに気がついた。

謝ろうと思ったが、さっさと葉桜はその場を離れてしまって、俺にその隙も与えちゃくれない。

「……っち」

俺は舌打ちして、仕方なく井戸へと向かった。

＊　＊　＊

芹沢さんを斬った翌日の葉桜君の様子は、私から見て明らかに正気ではなかった。

普段通りに行動しているから他の平隊士にはわからないようだけれど、私はよく葉桜君といたせいか違いがわかる。

葉桜君は何かから逃げている。

その何かというのが、芹沢さんを斬ったことへの後悔なのかどうかは、私にはわからない。

道場から出てきた葉桜君が目をかけている桜庭君が出てきて、ため息をついた。

「あ、山南さん」

「おつかれさま、桜庭君。

これから巡察かい？」
「はい」
私にうなずいてから、桜庭君の視線が道場へと向けられる。
「大丈夫なんでしょうか」
桜庭君が誰を心配しているのかは、私にもわかる。
「……大丈夫だよ。
強い人だから」
「そう、ですよね」
桜庭君が巡察へと出てからほどなく、数人の隊士が昼餉のために道場から出てきて、中にはとても微弱な気配が一つだけになる。
葉桜君はまだ道場から出てこない。
強い人だと桜庭君には言ったけれど、私にも自信はない。
普段は少しも揺らぐことのない強い女性なのだと信じられるが、時々見える消えてしまいそうな脆さが私を不安にさせるんだ。
道場内の弱い気配が移動するのがわかり、私は道場の中をのぞいた。
瞬間、強い気合が辺りに広がる。
もちろん、それは葉桜君に他ならない。
彼女以外にこんな清廉な殺気を放つ者など、私は知らない。
「はぁっ！」
葉桜君は空気に乗って、剣を放つ。

だが、彼女はすぐさま誰かに向き直り、間合いをとった。

一体誰とやっているのか分からないが、昨夜の葉桜君を思えば、自ずと答えは出てくる。

見惚れる程に綺麗な太刀筋、流水のような運び、攻守一体となった動き。

葉桜君の全てに、私は心を吸い寄せられる。

それでも、私に近寄ることは出来ない。

近寄れば葉桜君に斬られてしまいそうな殺気がそこにある。

私は一度目を閉じ、意を決して、それに踏み込んだ。

私の剣鞘と葉桜君の真剣がぶつかり合い、鈍い音が道場内に響き渡る。

今日始めてみる葉桜君の瞳を見て、私は背筋が凍り付いた。

（葉桜君、君は）

見ているだけで吸い込まれそうな闇と――絶望。

葉桜君はもう、壊れているのだと、思った。

「葉桜君、もう止めなさい」

葉桜君は私に薄く笑うと、その場に崩れ落ちた。

私が危うく抱き留めると、葉桜君の意識はすでになく、かすかな寝息が聞こえる。

葉桜君はいつから夢現となってしまっているのか。
私は不安に思いながら、その体を抱き上げる。

常ならば、とても強く、堅く、何者にも崩されることがないと思っていた葉桜君の体は、私が思う以上に柔らかく、また軽かった。
存在を不安にさせるほどに、消えてしまいそうに軽かった。

「葉桜……ってサンナンさん!?」

道場を恐る恐る覗いた永倉君が、私と葉桜君を見て、何事かと目を見張る。
だが、すぐに真剣な目で私は問いかけてきた。

「サンナンさん、何があったんだ?」

私はただ止めただけだと答え、そのまま葉桜君を彼女の自室へと運んだ。

葉桜君は一見調子が悪いようには見えないし、熱があるわけでもない。
当然、怪我をしているわけもない。
だが、静かに眠り続けた。
昏々と、静かに静かに眠り続ける葉桜君を布団に寝かせてから、私は部屋を出る。

「っ……ごめん、なさい……」

葉桜君は時折うなされながら、何度も何度も誰かに謝って。
そのまま葉桜君は、翌朝まで一度も起きることなく眠り続けた。

＊　＊　＊

部屋に差し込む柔らかな日差しに導かれ、私は落ち着いてまぶたを開いた。

久しぶりにとてもすっきりとした目覚めで、そのまま私は体を起こす。

（昨日……は）

昨日の、虚ろだった自分と止めてくれた山南のことを思いだし、小さく笑って、私は自分の額を押さえる。

まさかこんな風に私があの人の――芹沢の死を悼むなんて、思わなかった。

なんとも思っていなかったと、むしろ憤りや怒りさえ感じていたのに。

止めてくれた山南や、心配してくれた永倉には礼をしなければならないだろうな、と考えたところではたと思い出す。

（馬鹿には礼を貰う側だったな）

私は軽くなった体に機嫌良くサラシを巻き付け、平服に着替え、庭に出た。

私の行く先、井戸から聞こえる話し声に目的の人物を見つけ、私は旋律を刻んだ機嫌の良い足取りで、彼に近づく。

「永倉さんーっ」

手を挙げて振り返った永倉に私はそのままつっこみ、鳩尾に拳を一撃叩きこむ。

私の行動を予想だにしていなかった永倉は、そのままその場に蹲った。

それに何かを察した平隊士たちは口々に私と永倉を置いて、去ってゆく。

「な、何しやがるんだ、オメー！」

涙目になって見上げてくる永倉に、私はひたりと目を合わせ、極力可愛らしく宣言する。

「慰謝料」

「はぁ？」

「あとはぁ、着物とかー袴とかー新しい刀でもいいかなー」

「何がだよっ」

「鈴花ちゃんと私にお団子も買って貰っちゃおうかなぁ」

「なんで桜庭まで！？」

混乱している永倉に、人差し指を口に当てて、私は囁く。

「高くつくよ？」

虚ろな私に口づけたことは忘れていないし、自分を安売りするつもりもない。

私が悪いなんて言い訳なんて、させてやらない。

わかったかと私が笑顔で言うと、観念した永倉は神妙に頷くのだ

った。

「んじゃ、手始めに」
「待った」
「なによ」
「俺、今月はもう金ねぇんだけど」
「知ってる。
給金がでてからでいいよ」

私の悪魔のような微笑みに、今更ながら永倉は後悔したようだ。
やっぱりやらなきゃよかった、と小さくつぶやいている永倉を、
私は空を見上げて快活に笑った。

２０#胎動－２（後書き）

＜＜追記＞＞

土佐弁が分かりません！誰かご指導を！！（じゃあ、書くなよ）

芹沢夢というには甘くなく、永倉夢というには唐突で（しかも相手が不幸）、土方夢というにも押しが足りない。

山南さんはこの場合、助演って感じですね。

結局自力で立ち直ってしまう主人公。

（２００５／１１／１８）

修正

（０６／０３／１６　０９：３３）

会話編を入れなきゃ、最初から出来上がっていた部分。

芹沢さん、これを書く間にお気に入りになってしまったんですけど…。

ゲームの流れを全く無視するようになってきました…。

あ、リクエストがなければイベントはほとんどすっとばしです。

起こして欲しいイベントはお早めにメールや拍手等でリクエストしてください。

話が長いことを実感しているので、出来るだけ章単位での更新を心がけてみようと思います。

（０６／０４／２０　１０：２１）　新規

永倉のモノローグの人称を修正。

（０６／０７／０６　０９：１１）

改訂

（2010／01／03）

21#山南先生

ここ数日、私は夢を見ている。
何度も何度も自分の手で赤い血飛沫を上げて、大切な人が死にゆく夢を、私は見続けている。
これが今ではなく過去なのだとわかっていても、私の胸はひどく塞いだ。

心を隠す術を身につけるようになったのはいつからだっただろうと、私は毎朝、空を見ながら考える。
小さい頃の私は隠そうとして隠していたことはなかった。
それがいつから、こんな風に私は意識して隠すようになってしまったのだろう。

「次、お願いしますっ」

目の前で礼をしてから構える隊士に大して、私も渋々と下段に構えをとる。
彼の弱点だと知っていて、私はそうしている。

「はいはい。
どこからでもどうぞ～」

そうして、一秒二秒と待つ間に仕掛けてきた相手をいなし、私はいつものように軽く剣を振るう。
私は木刀を彼の首筋にひたりと当てて、止める。

「まだまだ。
もう少し崩すことを覚えような～？」

「そんなぁ、葉桜さん相手じゃ無理、」
「無理とか言っても敵は待っちゃくれないぞ」
「う……はい」

芹沢がいなくても、私の毎日は何も変わらず過ぎてゆく。
いたことさえもわからないぐらいに、平和に普通に過ぎてゆく毎日に埋没するように、私は稽古に精を出すことしかできない。

数人の隊士の相手をしてから、私は一息入れるために井戸へと向かう。
あれから私は、隊務以外の時間のほとんどを道場で過ごしていた。
稽古をすれば芹沢を思い出してしまうけれど、私は何かをしていなければ考えてしまいそうで。
そして、私にとって何かといえば、稽古をするか書を読むかしかない。
だけど、今はとにかく何も考えたくなかったから、ただ無心に鍛錬に集中していた。

鍛錬の休憩中に私は井戸へ行って、桶をくみ上げる。
汲み上げたばかりの水に映る私の顔は、誰も周囲にいないからか何の感情もないのがよくわかる。

（ひどい顔）

笑顔を作ろうと口端を上げてみても、私の目が笑わない。
これじゃダメだと思っていても、私自身にはどうしようもなかった。

「おぉい、葉桜。
土方さんが呼んで、って何してんだ？」

原田の声で私は慌て、水をすくい上げて顔を洗う。
こんな顔で私がいちゃダメだ。
早く、笑わなきゃ。

「葉桜？」

私は数回水を顔に打ち付けるようにして洗い、懐から手拭いを取り出して、顔を拭いた。

「あ、ああ。
わかった、直ぐに行くよ」

無理矢理に笑顔を作ったけれど、私はやはりちゃんと笑えていなかったのだろう。
すれ違いざま原田に頭を叩かれた。

「あんま無理すんじゃねぇぞ」
「ははっ、無理なんてしないよ～」

寄りかかれとはいわない原田の優しさに感謝しつつ、私は土方の部屋へ向かった。
おそらく新たな任務の話だろうと、気持ちを切り替えながら。

＊　＊　＊

私への新たな任務は、鈴花と山南の手伝いということだった。
土方が言うには、山南の発明趣味を止めるためだということだが、私は別にそんな必要はないと思う。
そういったら、そんなのは沖田と私ぐらいだと土方に言われてしまった。

これでも私は宇都宮で道場主を勤めていた身であるし、多数の生徒を相手に教えていたこともある。
自慢じゃないが、私を論破できる者というのはかなり限られたものばかりだった。
そういう時だけは、私は頭の回転が良いとよくからかわれた。

「教材なんて作ったことないなぁ」
「ええっ、じゃあどうやって指導してたんですか？」
「ああ、私はほとんど見てなかったから」
「そうなんですか？」
「たまに臨時で講義と稽古付けてやるだけ。
あとは弟とか叔父に任せっきり。
気が向いたらやるって感じで」

私の目の前で呆気にとられている鈴花の顔は、相当面白かった。
くつくつと笑いながら私は清書を続けるので、時々字が歪む。

「じゃあせっかくだからたまに葉桜君の講義も」
「却下です」

山南の提案を私は即座に却下する。
そんな面倒なことをここに来てまで私は引き受けるつもりはない。
「剣の稽古なら一緒にみても良いですけど、講義はダメです。

私の信念は人に伝えるものではないですから」

私みたいのが何人もいたら周囲が大変でしょうと笑ったら、二人ともが呆れていた。

鈴花が巡察でいなくなってからも、私は山南と二人でしばらく作業を続けた。

どのくらい時が過ぎたのか、清書している紙の上に影が落ちたので、私は筆を置き、顔を上げる。

「そろそろ夕餉が出来る頃で……」

私の頭の上にそっと山南の手が置かれ、ゆっくりと撫でられる。

大きな手の重さと温かさが想い出を引き出すようで、今の私には辛い。

山南に顔を見られないように俯きながら、私は声だけでも明るく話す。

「あは、急になんですか、山南さん。

私、そんなに子供じゃありませんよ」

顔を上げられないので、山南が今どんな顔をして、私をみているのかわからない。

山南は私を憐れんでいるのだろうか、それとも、ただいつもの温かな目で見つめてくれているのだろうか。

どちらにしても、今の私には顔を上げることはできない。

これだけの距離で私の顔を見られたら、山南でなくても気がつかれてしまう。

「そうかな。

私にはとても無理をしているように見えるのだけど」
「無理なんて」
無理なんて、していないときっと私は壊れてしまう。
それでも山南が私を撫でることをやめないのは、心配しているからだろうか。
私はゆっくりと顔を上げながら、山南に向けて柔らかな笑顔を浮かべる。
泣かないように、壊れてしまわないように、何も壊してしまわないように。
私にはやるべきことがあって、ここにいるのだから。
いない人ばかりを思って過ごしても何も変わらないし、私にも何も変えられない。
まだ、ここでの私の仕事は何一つ始まってなどいないのだから、音を上げるわけにもいかない。
始まっていても、音を上げたりなどしないけれど。
私を見つめる山南の表情は優しくもなく、憐れんでもいなかった。
山南はただ厳しい瞳で、眉根を寄せている。
「葉桜君は、今日はもう戻って眠った方がいいね」
「あと少しでキリの良いところまで終わりますから」
「いや、今日はもう、」
「あはは、今日で全部終わらせられるなんて思ってませんから。
あと少し進めたら、終わりにしますよ」
そうじゃない、と言う山南から視線を反らし、私は清書に向き直る。
そして、手に取った筆に私が墨を付ける前に、山南に取り上げら

れてしまった。

「山南さん」

「休んだ方が良い。

ひどい顔をしているよ」

「ふふ、そんな心配しすぎですよ～」

でもそこまで言うなら、と私は席を立つ。

ここにいてももう手伝わせてもらえないなら、無理を言うこともない。

ほっとした山南に礼を言って、私が立ち去る方向はもちろん自分の部屋とは正反対だ。

気がついた山南が追ってきて、私の腕を強く掴む。

「っ！」

「どこへ行くんだい？

私は、休むように言ったはずだよ」

山南の声は厳しいけれど、私はそんなもので怯むわけにはいかない。

「まだ寝るには早い時間ですよ。

少し稽古してきます」

「ダメだ」

「別に無理をしているわけじゃないですよ。

寝る前に稽古するのは習慣で、」

私の腕を掴む山南の力が強くなり、流石に眉を顰める。

「こういうことは言いたくないんだが、」
「じゃあ言わないでください」
「今日はもう休みなさい。
総長命令だ」

山南にそういう風に言われたら、隊士である私には従うしか術がない。
山南はなんて狡い言い方を私にするんだ。

「……わかりました」

ふて腐れた返事を返す私の腕を掴む山南の手が離された。
ここではここの規則に従わなければならないから、私も今の言葉に逆らうわけにはいかない。
私は山南の顔を見ないように頭を下げる。

「おやすみなさい、山南総長」

私は足を自分の部屋へ向け、一度も振り返らず、寄り道ひとつせずにまっすぐ部屋へと戻る。
立ち去るとき、かすかに山南のため息が聞こえた気がした。

＊　＊　＊

ここ数日、私はずっと同じ夢を見ている。
楽しかった頃の想い出を、何度も何度も繰り返し、最後には私が

何もかもを斬り殺してしまう夢を、ずっと見続けている。
「今」もいつか想い出に変わってしまうのだろうか。

（夢だったら、よかったのに）

夢の中で私は何も知らずに待ち続けている。
決して還ってこない人を私は待ち続けている。
夢だから逢えるなんて想ってないのに、私は待ち続けている。
逢いたいと願う自分と逢いたくないと踞る自分が、私の中で争っている。

どれだけの夜を過ごしたら、一人が平気になるのかと考えたこともあったけど、どれだけの時間が過ぎても私は大切な人を失うどんな状況にも耐えられないままだ。
だから、心の中に私は倉を描く。
その向こうへ哀しむ自分を追いやって、私は私に鍵をかけてしまおう。

私の心が、壊れてしまわぬうちに。
心が砕けて、欠片となる前に。

次に目を覚ませば、それが私の現実。
いつもと変わらない私の日常が、また、始まる。

２１＃山南先生（後書き）

＜＜追記＞＞
ここに「山南先生」イベントを入れようと考えたものの、今失敗したかなと思ってます
だって、この辺りって暗いですよ？ヒロインがギリギリですものでも、復活までの間の行動を書いても良いかなと考えたのも事実
（２００７／０６／１３）

改訂
（２０１０／０１／０３）

22#芹沢との関係（前書き）

文久三年長月

22#芹沢との関係

基本的に私は人の好き嫌いというのがない。
だけど、私にもごく稀にどうしても相容れない人間というのがいないわけではない。

「葉桜さん、あの人なんなんですか！？」

まず鈴花が稽古後の私に泣きついてきた。

「葉桜ちゃんはたぶん大丈夫だろうけど、気を付けるのよ」

意味不明な言葉と笑顔を私に残して、山崎は仕事へ出てしまった。

そして、私はヤツに会った。
場所は山南さんの部屋で、私はいつものように書を読みに行っただけなのに。

「山南さん、お茶でもいかがですか？」

書を読ませて貰う御礼にお茶とお茶菓子を持っていくのが日課になっていた私は、山南の部屋を目の前にして、固まってしまった。

先客は目も覚めるような真っ赤な平服を着た見たこともない男で、私を見るや否や汚いものでもみるかのように眉根を寄せる。
別に私は綺麗でもないけど、初対面でそんな顔をされる覚えはない。

「ああ、いただくよ」

山南の声に我に返り、ヤツのいるのとは反対の隣に座り、私は山南にお茶を出した。
先客がいるとは思わなかったから二人分しかなかったけれど、一応ヤツに自分のお茶を出してやる。

「お仕事の話ですか？」
「用が済んだのなら、さっさと出て行くがよかろう」

答えは侮蔑を多分に含んだ響きで聞こえてきたので、温厚な私も一瞬ムカッときた。
だけど、山南の前でそうそうキレる私など見せたくはない。

「仕事の話はもう済んだ処だから、心配いらないよ」

ゆっくり読んでいいと言われたので、私は積み重なった本から一冊を取り、定位置に座って読み始める。
私の定位置というのは、山南に寄り添う体勢になる。
あの日以来、私はこうしているととても安心するのだ。

「これ」

普段なら読み始めると滅多なコトじゃ集中も切れないんだけど、今日に限っては私も別だったみたいだ。
ヤツの声が私にはとても耳障りで。

イライラしているのが伝わったのか、山南が苦笑しつつ私の髪を撫でてくれる。
大きな山南の手に撫でて貰っていると、とても心地良く、私の気分も落ち着いてくるのがわかる。

私と山南の間に流れる穏やかな空気に当てられたのか、ヤツは機嫌悪く足音を大きく立てて出て行った。

しばらくして、山南が口を開く。

「武田さんと何かあったのかい？」

あーあれが鈴花の言ってた人かと私は納得した。

薄々そうじゃないかと思っていたけど、まさか私から嫌悪するような人間がいるなんて思わなかった。

「いいえ、初対面です。
あの人が武田さんですか」

驚いている様子がわかるので私は書を読むことを止め、山南に向き直る。

私を見る山南は、思いっきり微妙な表情をしている。

ここに来るようになって、私はいろいろなことが変わっていって、山南のこともなんとなくだけどわかるようになった。

中でも、時折山南が私に見せるこの微妙な困ったような表情は、見ていて楽しい。

山南の大きな手が私の頬に添えられ、私もそれにすり寄る。

「ちゃんと眠れているようだね」

山南の安堵の響きに、私も頷く。

「ずっと聞きたかったことがあるんだけど、いいかな」

あれから、芹沢が死んでから約一週間が過ぎる頃だ。
そろそろ聞かれるとは思っていたから、私は山南の手を離れて向かい合う。

「長い話になりますよ」
「聞かせてくれるかい？」

山南に頷いて、たっぷりの間を置いた後、私は過去に想いを馳せながら静かに彼の話を始めた。

「芹沢は、あの人は私の――でした」

芹沢は他愛もない子供との約束なんて、憶えていなかっただろうけど。
それでも、私は彼のことが――。

＊　＊　＊

私が話し終えた後、山南は私を引き寄せて、謝った。
あやすように山南に背中を叩かれるけど、私の涙はもう出ない。
いずれは話さなければならないことだったのだから、山南が気にすることは何もないのに、この人は優し過ぎる。

「全部、終わったことですよ」

何か言われる前に山南を押し返し、私は目線を合わせて微笑む。

「だから山南さんが気にすることはなにもないんです。
もちろん、土方さんも沖田も原田も、近藤さんだって気にする必要はありません。
そう、伝えておいてくれますか」

たぶん聞きたがっているだろうけど、私は何度も同じ話をしようとは思わない。
まったく私を離す気配のない山南を、私は強く抱きしめる。

「心配かけてごめんなさい。
もう大丈夫ですから」

翌日の夢現だった私を止めたのは山南だった。
だからこそ、これほどに私を心配するのだろう。
それはとても心地良く、私には少し気まずい。

「私では、彼の代わりになれないかな」
「……え？」
「いや、嫌なら別にいいんだよ」

落ち着いているようでどこか慌てた山南の様子が面白くて、私は思わず笑ってしまった。

「山南さんがあの人みたいになったら困ります。
どうかそのままでいてください」
「そういう意味じゃなくてね」

困ったな、と笑う山南の姿が、私にはなんだか可愛らしく見える。

「私では葉桜君の支えにはなれないかな」

山南の思わぬ言葉に私が顔をあげると、至極真剣な目線と合ってしまって、本心なのだとわかる。

でも、私にはその意味が分からない。

ここに来てから一度だって私は芹沢を頼りにしたことなんてなかったのに、その代わりといわれても困る。

「すぐにというわけにはいかないだろうけど、その、もう少し落ち着いたら」

「あの山南さん？」

「ああもう私は何を言っているんだろうな」

「気持ちは嬉しいんですけど、私はここに来てあの人を頼ったりしたことは一度もないですよ。

それどころか大っ嫌いだったんですよ？」

それに芹沢の代わりというには、山南では気が優しすぎる。

「無意識だったのか……」

「へ？」

「まあ何かあったら話を聞いてあげるぐらいならできるから」

「はぁ」

だから何でも相談してくれって山南には言われたけれど、今までと私の状況は大して変わらないだろう。

ただそう言った後の山南が納得しているみたいなので、つまり今のままでいいってコトだと私は納得して笑う。

「山南さん？」

不意に一緒に笑いあっていた山南が私の頭を引き寄せ、自分の胸に押しつける。

「無理は、しなくていいんだからね。
葉桜君がいくら強くても、君は女性なんだから」

甘えてもいいんだよ、と言われて私は吃驚した。
山南は時々妙に鋭くて、困る。

「ははは、何言ってんですか。
その台詞はそのままお返ししますよ、山南さん」

腕を伸ばして、体を離した私はしっかりと山南を見上げる。

「山南さんこそ、もっと我を通してもいいですよ。
あなたは――優しすぎる」

私の言葉に少し戸惑う様子を見せた山南は、呆れた様子で笑った。

２２#芹沢との関係（後書き）

＜＜追記＞＞
芹沢さん話はここまで。
ここからはちゃんと本筋に乗っ取って…乗っ取って？
（２００６／０４／２６）

リンク変更
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／０４）

23#天高く上がれ（前書き）

元治元年　睦月

23#天高く上がれ

手元をくいと引くと、紐を伝わる振動が先へと伝えられ、高い場所でくるりと四角い物体が円を描く。

「おにーちゃん、すごーい」
「はは、そう？」

子供の歓声に否定を返さず、私はまた紐を引く。
今度は上下に大きく波を打つ予定だったが上空で吹く風が凧を煽り、どんどんと地面に近づいてゆく。

「ちっ」

少し後ろに下がるだけでは追いつかないと判断し、私は走り出す。
だけど、周囲の子供達には焦りを悟られないように、私は笑う。

「そらっ、行くぞ！」

私は走りながら、飛行を修正するが、一度失速した凧を元に戻すにはまだ風が足りない。

「おにーちゃん、がんばってっ」
「あがれ！あがれ！」

子どもたちの声援を受けて、私の目の前でもう一度高く高く凧が上がってゆく。
私は目を細めて、それを子供達と一緒に見守る。

高い青空に高く高く凧が昇ってゆく。
陽と重なって一瞬眩む瞳を私は閉じた。

その一瞬のことだった。

「わあっ」

一際大きな横風が吹いて、凧紐を持つ私の手が緩む。

「あーっ！」

私の手を離れた凧はさらに高く天へと昇ってゆく。
この手に使われていては決して届かない高見へと、あっというまに消えゆく姿に私は手を伸ばした。

どんなに望んでも届かない手のずっと先で凧はすぐに見えなくなってしまって。

「……飛んでっちゃったね」

残念そうな子供らの声に胸が痛くて、私は握った拳を胸に押し付けたまま、凧の消えた先を見つめる。

どこまでもどこまでも飛んで言ってしまうことはいつだってわかっているのに、私はいつも苦しくて苦しくて。

「今度は山南先生に作ってもらおう」

袖を引かれて、私が視線を下へと向けると、子供達はまだ興奮した面持ちで私を見上げていて。

「山南先生なら、きっともっとずーっと大きくて、ずーっと高く飛ぶ凧を作ってくれるよ」

この子たちは山南の教え子だったかと思い出すと同時に、私の教え子であることも思い出す。

「そうだな、たぶん山南さんなら」

高い空を見上げ、私は目を細める。

久しぶりに上げた凧はひどく不安定で、風に煽られて行く様子が私の不安を煽る。

これから新選組はどんどん飛躍してゆくというのに、私はどんどん不安が増してゆく。

私に本当に少女との約束を果たすことが出来るのか、新選組の彼らを救うことが出来るのか。

まだ分からない不安で、私の心は揺れる。

子供らを帰した後で、私は凧を見失った方向へと足を進める。

私も凧が無事な姿を望んでいたわけではないから焦ることなく、散歩と同じく軽く草を踏み分ける旋律に鼻唄を合わせながら歩く。

「ふーんふーんんーふーふーん」

童歌を教えてくれたのは今は亡き母で、いつまでも少女のままみたいな人だった。

「葉桜ちゃん、ほらほら」

私がまだ幼い頃、言葉らしい言葉を話さない私と母は根気強く遊んでくれた。
母は自分が遊びたかっただけかもしれないけど、言葉にこそしなかったが私も母と遊ぶのは好きだったし、楽しかった。

ぱきりと私ではない者が小枝を踏む音がして、私は足を止めて、音を顧みる。
相手は私の視線に怯むこともなく、真っすぐに私に近寄ってきて、目の前に立ち止まった。

「葉桜さん、僕もご一緒して宜しいですか」
「どうぞー」

私の手を迷わず取った沖田の手は、私よりも大きくて力強い。
手を引かれながら、私は逆らわずに足を進める。

空は高く青くて、陽射しはまだ強くて、私たちの首筋をすり抜ける風は涼しい。

「近くに水辺があるな」
「ええ、そうですね」

何が可笑しいのか、沖田は私と歩きだしてからずっとクスクス笑っている。

「今日はどこまで行く予定ですか？」

沖田の問いに返しかけた言葉を私は引っ込め、足を止めた。
自然に沖田と繋いだ手が離れたことに私は少し驚いたけど、それを隠して私は笑う。

「あ」

急に沖田が走り出し、少し離れた場所で何かを拾いあげる。
それは確かにさっき飛んでいってしまった凧で、見付かったという安堵で自分の頬が緩むのを私は感じた。

「ありましたよ、葉桜さん」

沖田の台詞は、私が子供と遊んでいたのを最初から見ていたと言っている。
私は笑いながら、沖田に歩み寄った。

「沖田はなんで出て来なかった？」

一緒に遊ぶつもりだったのだろうと私が言うと、沖田は眉尻を下げて笑う。

「邪魔を」
「ん？」
「必死になっている葉桜さんの邪魔をしてしまうかと」

珍しいことを考えている沖田に、私は目を丸くする。
普段の沖田はあまり考えずに人を振り回している風だから、私は本当に驚いた。

「どうしたんだ？」

私の問いに答えることなく、沖田は凧の紐の先を持って走り出す。
仕方なく、私は凧を持ち、少しだけ走ってすぐに手放した。

凧が上がるのを見送って、沖田のもとへと私はゆっくり歩み寄る。
私が来るのを待って、凧から目を離さないままに沖田が言う。

「何を必死になっていたんですか?」

どきりと、私の心が震えた。

「別に、必死なわけじゃないさ」
「あの夜からずっと、葉桜さんは凍ったまま」

沖田から目を反らし、私は凧へと視線を向ける。
紐が一瞬緩み、さっきよりも遠くへと飛んで行く。

「芹沢さんでなければいけませんか?」

背後から私を包む腕に抵抗せず、私は静かに両目を閉じる。
思わぬ相手からその名を聞いてしまったから、私は体の震えが止まらない。

「何故、沖田が気にするの」
「気にしてはいけませんか」
「ああ」

沖田の腕に力が入り、少し私は苦しくなる。

「……沖田が気にかけることじゃないよ。
これは私の、私自身の問題だから」

私が両手を沖田の腕にかけると、更に力が込められて苦しい。

「僕は頼りにならなくても」
「沖田？」
「せめて、近藤さんや土方さんは頼ってください。
――仲間なんですから」
不覚にも、私の頬を雫が流れた。
私にはどう考えても不審な点は多いのに、それでも新選組の者らは私を仲間と言ってくれる。
それは嬉しい反面、私を強く苛む。
すべてを、近藤らに話して楽になりたいと、私だって考えることがある。
「約束」で話せない、そのこと自体に私は自分で甘えてしまっている気がするのだ。
「仲間、か」
「はい」
すぐさま沖田から即答が帰ってきて、それを笑いかけた私はすぐさま顔を上げた。
仲間なのだと信じていても、いつかは沖田だって私の敵になるかもしれない。
そうしたら、沖田はきっと私を斬ってくれるだろう。
私がそうしたように。
「な、沖田」
「なんですか、葉桜さん」

するりと沖田の腕の中から抜けた私は、一間離れて、沖田と向かい合う。

「約束を、しようか」

笑いを含んだ私の声は滑稽で。

「もしも私が裏切ったら、沖田が私を斬ってくれ」

さっき子供らと揚げた凧を操るように、私は新選組の近藤らを救うためならば、敵になることも厭わない。

それが、救いとなるならば、私は喜んで敵となり、憎まれる道を選ぼう。

「葉桜、さん」

驚いたように両目を見開いていた沖田は少しだけ逡巡し、首を縦に振った。

「僕でいいのなら」

「沖田がいい。

沖田は――迷わないから」

時に冷酷無邪気な殺戮者とも評される沖田は、ただの青年のように眉尻を下げて、困った様子で笑った。

２３＃天高く上がれ（後書き）

＜＜追記＞＞

凧を使った話。

予定より、なんだか重くなった気がします。

（２０１０／０１／０９）

２４#恋文（前書き）

元治元年如月

24#恋文

習字の紙に大きく書かれた拙い文字たちを前に、私はにやにやとした笑いを零していた。
何度眺めても見飽きないそれは、私が山南塾の子供らからもらった恋文だ。
子供らしく、大きな文字で「好き」だとか「愛」だとか書いてあるのだが、もちろん山南がこんなこっ恥ずかしいことをするとは私にも思えない。
つまりは、共に手伝う鈴花の差し金だろうと、私には推測できる。

鈴花も変わったことをするものだ。
言外に元気を出してくださいと笑ってくれる少女の姿を思い浮かべるだけで、私も元気になれるような気がする。

実際、私は身体的にはいたって健康で、心配されるようなことは何もない。
何もないのだが、心配されるというのはそれだけ私の内面が健康に見えないということだろう。

「まいったなぁ～」

芹沢を殺した直後に比べれば、私はかなり回復したつもりだ。
まだ半月程度しか過ぎていないが、元の私に戻ることもできないけれど、せめてもう少し周囲に回復したと見せかける余裕ぐらい、私にはあるつもりだった。

でも、子供たちから見ても鈴花から見ても、私はまだまだだということがこの文字たちから伝わってくる。

「よぉ、葉桜君」

庭の木々の向こうから羽織を引っ掛けながら近づいてきた近藤に私は片手をあげて返す。

「おかえりなさい、近藤さん」

「っと」

藪に引っかかった羽織を落としかけながら、ようやく近づいてきた近藤は、私のそばに散らかっている紙を手に取る。

「良い子たちだねぇ」

「ええ、本当に」

深く頷く私と恋文をじっと見比べ、おもむろに近藤は大きな手を私の頭に乗せた。

ぽんぽん、と軽く叩いて、さらりと私の髪を撫でる。

「近藤さん？」

しゃがみ込んだ近藤がまっすぐに私を見上げる。

「どうする？」

「どうって、何がですか？」

「最初に言ったように、葉桜君は除隊することが出来る。ここにいるのが辛いなら、出て行ってもいいよ」

真剣だけれど、普段は変わらない近藤の瞳が幽かに揺らいでいるのが見えて、私はくすりと笑った。

「それ、本気で言ってるんですか？」

近藤から、答えは返ってこない。

でも、それがたとえ本気だとしても、私は是と頷くわけにはいかない。

手を伸ばして、今度は私が近藤の頭を撫でる。

「余計なお世話です」

「葉桜君」

「この程度のことで何を言い出すんですか。

ただ人が一人死んだだけですよ」

目の前で揺れる近藤の瞳を真っ直ぐに見つめて、私は大丈夫だと微笑んだ。

芹沢とは一度別れ、もう二度と逢わないのだと私は勝手に思っていた。

芹沢と再会しても、以前のような関係には戻れないと、私には覚悟だって出来ていた。

実際、私と芹沢が新選組で再会してから、まともに会話した事なんてただの一度だってなかった。

「遅かれ早かれこうなっていたんです。

だいたい、どうして私がたったそれだけのことで逃げ出すなんて思うんですか？」

私は悟られないように振る舞うのなんて慣れてる。

「わ、葉桜君っ！」

ぐぐっと近藤の頭を抑えつけるように、私は力を込めた。
「私はこーんなに心許してるのに、わかってもらえないのは心外ですねぇ」
近藤には力でそれを押し返されて、互いに押しているのにいつの間にか私の方が押し倒される体勢になっていた。
「大丈夫ならそれでいいんだ。
俺らも葉桜君といるのは楽しいから、できれば残っていて欲しい」
普通なら、いや鈴花ならこういう状況で暴れるかもしれない。
だけど、不思議と私は焦りを感じなかった。
近藤の対応はどちらかというと父親が子供にするようなものだったから。
「ああもうイヤになるなぁ。
ここ、すっごい居心地いいんだもん」
「嬉しいけど、この体勢で言う台詞じゃないね」
「どこにいるより安心しちゃう」
「聞いてないでしょ、葉桜君」
笑い出している近藤の手を借りて、私は起き上がる。
目の前に広がる朱色に染まる空、薄橙の雲、朱い翳りを見せる緑の庭が眩しくて、私は目を細める。
「それでどうする、葉桜君?」
もう一度聞いてくる近藤に、私は笑って返す。

「ふざけんなって、言ってほしいんですか？」
「なんとなく、言うだけで終わらなそうなんだけど」
「ふふふ」

ほら、ね。
誰かといれば、何かをしていれば、私はもうなんともない。

「私、平気ですよ」

私は笑っているのに、近藤の笑顔が消える。
大丈夫だって、私が言ってるのに。

「一人でいたって時間は進んでいくし、何も変わらない。
だったら、心許せる仲間といられる方が何倍も平気です」
「言ってることは一々嬉しいんだけど、全然大丈夫には聞こえないなぁ」

小さな子供にそうするように、近藤は私の頭をくるりと撫でて、自分の胸に引き寄せた。
それでも、私に焦りは生まれず、ただ安心が広がる。

「私、大丈夫ですよ」
「しーっ」
「？」
「少し黙って、じっとしておいで」

私が言われるとおりにしていて、一番大きく聞こえてくるのは近藤の鼓動だ。
早くなく、遅くなく、規則正しいその音は近藤が生きている証。

私が守るべき音、だ。

「近藤さん」

「ん、なんだい？」

「いつもこんなことしてるんですか？」

「え？」

「お願いですから、鈴花ちゃんにはこういうことしないでくださいね」

私は顔を上げて、真剣に言ったのに、近藤に笑われるのは心外だ。

「あはは、なにそれ。

妬いてるの？」

「誰が、誰に」

「……そこまで強く言わなくても……」

近藤から体を離して、私はもう一度強く言う。

「鈴花ちゃんに手を出したら、相応の覚悟をしておいてくださいね。

他の人ならともかく、近藤さんは奥さんがいるんですから。

軽い気持ちで鈴花を弄ばないでください」

近藤は気まずそうな顔で頬を掻いてから、私をちらりと盗み見た。

「軽い気持ちじゃなければいいのかな？」

「ダメです」

「それは、葉桜君も？」

「当然です」

ふいと私が顔を背けると、肩に腕を回され、近藤へと私は引き寄

せられた。
私の耳に近藤の吐息がかかり、ぞわぞわする感覚を抑えて私は息を吐き出す。

「近藤さん」
「うん？
葉桜君にはこうしても構わないんでしょ？」
「覚悟があれば、と言ったハズです」
「ああ、あるよ」

私が仕掛けようとしたら、もう一度耳元で近藤に囁かれる。

「葉桜君を守る自信と覚悟ぐらいはあるさ」

もしも私がただの女なら、きっと嬉しいと言うべきなのだろう。
だけど、私は近藤たちを護るために来ているのであって、決して守られるためにいるわけじゃない。

「私よりも前に守るべきものがあるでしょう」

私は返答を待たずに立ち上がるが、もう近藤は私を止めなかった。

２４＃恋文（後書き）

恋文よりも近藤がメイン
初稿はなんだか暗かったんですけど、書き直したら強くなりました
１週間でずいぶんと気分が変わるものです
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／１３）

25#山南道場

屯所内に子供の笑い声が響くようになって、もうどのくらい時間が経っただろうかと、時々私は思い返す。

「こらー！
真面目にやらないとこの後遊んでやらないぞー」
「はーい」

講師が離れている隙にサボろうとしている子供に、私は軽く声をかける。
元々は壬生寺に遊びに来ていた子供達なので、私はみんな顔見知りだ。

山南の発明趣味が迷惑だからどうにかしてくれと鈴花が土方に頼まれた任務から始まった山南塾だけど、私としてもなんだか懐かしくて楽しくて、面白半分で手伝っている。

「真太、背筋を伸ばして」
「伸ばしてるよ～」

本人はそのつもりなんだろうけど、私にはどうにもへっぴり腰で見るに堪えない。
近寄って私が真太の背中を軽く叩くと、簡単に前へ倒れ込む。

「ケツは引っ込めて、お腹に力を入れて。
そうそう、視線は相手を真っ直ぐ見据えるの」

真太の前を私がすっと指し、空に視点を置いてやる。

「顎は引いて」

真太の竹刀を掴んで、私は上に上げてゆく。

「脇に力を入れて、柄をしっかりと握って」

そして、丁度良い辺りで私は竹刀を離した。

「そのまま真っ直ぐ振り下ろす！」

「っ！」

「よし、一つずつ気を付けてやるようにしなよ」

剣の指導中は、私も一緒に見て回るようにしていた。

実家でももともと指導していたのは弟だし、私はこんな風な手助けぐらいしかしていない。

「葉桜先生ーっ」

蒼天の下で子供が笑う声を聞きながら、私は縁側に座る。

「先生は休憩でーす」

「一人教える度に休憩ー？」

「そー」

「葉桜先生、ズルいー」

「あははっ、私は先生だからいーのっ」

子供らと笑っている私の上に、影が落ちる。

振り返ってみれば、私を見下ろしているのは、少しだけ席を外していた山南だ。

「じゃあ、葉桜先生には別なお仕事でも」
「げ。
いや、ちゃんと教えますって、山南先生っ」

逃げようと腰を上げたところで、私は山南に腕を掴まれる。
掴まれた腕が痛いわけではないけれど、痛くはないんだけど居心地が少しだけ悪い。
それは、芹沢がいなくなって以降の山南が妙に私に近づくからだ。

動揺している私が面白いのか、子供らはニヤニヤと笑っている。

「先生ー、山南先生と葉桜先生はどっちが強いの？」
「へ？
そんなの山南さんに決まって」
「そんなの葉桜先生に決まってるよー」
「何いってんだよ、山南先生が負けるわけないだろ」

目の前で私と山南さんのどっちが強いか、子供達が言い合いを始めてしまうのを見て、私は戸惑う。
山南さんと私が仕合をしたことはないし、剣を交わしたのはたったの一度。
しかもそのときの私は正気ではなかったから、山南がどのくらいの強さか判別はできない。

山南は北辰一刀流の免許皆伝と聞いているし、ただ習っていた藤堂と比べなくとも格段に強いだろう。
山南の体つきそのものも、私が最初に抱きついた時を思い返せば、文人のそれじゃないし、かなりがっしりとしてて。

（て、な、何考えてるんだ、私は）

私は赤面している顔を見られないように、山南の腕を振り払って、子供らに近づき屈む。

「あのねー、流石に私は山南先生に勝てないよ」
「そうかな？」

異論の言葉に私が声を振り返ると、とても楽しそうな山南の顔が目に入る。

「山南さん、子供達を煽らないで」
「永倉君達から葉桜君はかなりやると聞いているよ」
「いや、いくらなんでも勝ったコトなんて」
「あるんだろう？」

私にはその一瞬、山南の眼鏡がキラリと光った気がした。
全部話してるとは思わなかったし、言うなとも言わなかったけれど。
永倉らは後で少し懲らしめておこう、と私は決意した。

「みなさーん、そろそろお時間ですよー」

そんな風に話していたら、機嫌の良い鈴花の声が私たちにかけられた。
これでこの話は終わりだと安堵した私の耳に、山南の呟きが届く。

「一度、葉桜君とは仕合ってみたいな」
「僕も見たいー」
「俺もー」

「私もー」

山南の言葉に同意して、子供達が手を挙げる。
これだけやられちゃ私が逃げられないと思って山南はやっているのだろう。
いつもは穏やかに見える山南の顔が策略家に見える気がして、私は小さくため息を吐いた。

「わぁ、葉桜さん、山南さんと試合されるんですか？」
「鈴花ちゃーん」

鈴花のは悪気がない分、さらに質が悪い気がする。

「だーめーでーすー。
山南さんとは絶対にやりません」

なんで？と私が口々に問われる中、一つだけ違う言葉が飛び出す。

「あーわかった。
葉桜先生、山南先生が好きなんだろっ」

唐突に何を言い出すんだ、と私は発言した子供の前に足を向ける。
名は小六といって、私と山南に特に懐いている利発な子供だ。

「葉桜先生、好きな人とは戦えないってことだろ？」

好きな人、と言われて、少しだけ私は動揺した。

「でも、山南先生には鈴花先生がいるからダメだぞ」

ここで鈴花が出てくる意味は私にはわからない。

「……な、何言ってるのよ、小六君」

動揺する鈴花は、ほんのりと頬を朱に染めて騒ぐ。
それは惹かれていることを肯定しているだけに、わずかに私の心も騒ぐ。
ざわめく心を落ち着けて、私は小六の前にしゃがむ。

「だから、俺にしておきなよ。
葉桜先生っ」

ほんのり熱を持っているように見える小六は、私に小さな腕をいっぱいに伸ばして、首にしがみついてくる。

「小六、結局それが言いたかったの？」
「俺、葉桜先生が好きなんだ。
だから、俺が稼げるようになったら、一緒に暮らそうなっ」

たしかに小六はとても利発で可愛いし、私も嫌いじゃない。
だけどと私は小六の小さな両肩に手をかけて、私から引き離し、顔を見合わせる。

「そーゆー台詞は十年早い」
「いてぇっ」

デコピンして小さな求婚者を退けた私は、立ち上がって小六を柔らかな目で見下ろした。

「十年経って、私がまだ一人で、小六が強くなったらまたおいで」

悔しげに私を見上げる小六に、私は口角をあげ、歯を見せて笑って見せた。

＊　＊　＊

生徒の子供達がいなくなった後、山南と私で道場の片付けをしている最中、不意に山南が私に言った。
鈴花は巡察に出ているから、今ここには私と山南の二人だけしかいない。

「葉桜君、一度手合わせ願えないかい？」

道場内には薄明かりがあるばかりで、山南がどんな顔をしているのか私からは見えない。
ただ声の響きだけで山南が真剣だとわかるので、私にもちゃかして終わらせることは出来なかった。

「一本だけですよ」

本当は、私はずっとこの人の剣を見てみたかった。
山南はとても穏やかで、滅多にその剣を見せないから、稽古の剣を見たところで大して本質は見えない。

木刀を取り、私と山南はお互いに向かい合う。

「葉桜君の本気の剣を、私はまだみたことがないんだ」
「それは私もですよ」

礼をし、山南は正眼に、私は両腕を下げて無限に構える。

「それが本気の構えなのかい？」
「我流の喧嘩剣術ですから」

私はたんっと軽く床を踏み込む、それだけで山南の間合い以上に近づける。
だが、もちろん山南にこんなのは防げる範疇だろう。
一撃を奮って直ぐ、私は遠間に下がる。

「思ったよりも重い剣だ」
「でなければ、勝てないでしょう？」

山南には私が誰にと言わなくても、その言葉の相手がわかるのだろう。
私には山南が小さく頷くのが見える。

「もう一度いきます。
防いでくださいね」

私が床を蹴り飛ぶと、たんっ、と先程よりも軽い音が道場に響く。
勝負は一瞬、と私と山南のどちらもが分かっていた。
互いに遠間に離れた後、膝をついたのは私の方だった。

「ほら、山南さんのほうがっ、強いっ」
「ご、ごめん！
思いっきり入っただろう！？」

木刀を投げ出して、山南が私に駆け寄ってくる。

私は別にこのぐらいは平気なんだけど、と思ったが、少し、いや、やっぱり痛い。
私の隣に山南が膝をつく。
「避けた、つもりだったんですけど、けっこう、伸びますね」
「何か冷やすものを持ってくるよ」
近くまで来ておいて、立ちあがろうとする山南の服を私は掴んだ。
「大げさです、これぐらいは」
ひとつ大きく息を吐き、私は呼吸を整えて、山南を見上げて笑う。
「これぐらいは怪我に入りませんって」
「強がるんじゃない、痛いだろう?」
「痛くないです。
もう、大丈夫」
私がそうして笑ってみせると、山南は腕を伸ばして強く抱きしめてきた。
これは、流石の私も痛い。
「すまない。
葉桜君があまりに強くて手加減できなかった」
「それでいいんですよ。
手加減したら、一生許さない所です」
痛みが引いて、動けるようになったところで、私は山南の体を押し返す。

「やっぱり強いですね、山南さんは」

私が言ったとたんに、山南にはため息を吐かれた。

他の人なら私もふざけて怒ってみせるが、山南のため息の理由がわかっているだけに、私にも緩い笑顔だけが浮かぶ。

「小六の言うとおりだったら、嬉しいんだけど。

そうじゃないようだね」

小六の指摘は、私にとって半分当たりで半分外れだった。

確かに山南は好きだが、好きは好きでも仲間として、だ。

私は山南と戦いたくないわけじゃない。

ただ、山南とは真剣で勝負しなければ私には勝てない気がしていて、だけど真剣で勝負したら、私は山南を殺してしまうかもしれない。

相手が強ければ強いほど、私は真剣で手加減できなくなる。

山南は大切な仲間だから、特別なやむを得ない理由がない限り、私の手にはかけたくない。

「山南さん？」

山南から見つめられる切なげな視線に戸惑い、私は問い返す。

「子供は素直で羨ましいね」

「そう、ですね」

「私が同じように言っても、同じように返されるのかな？」

「そう……ですね。

――は、ええ！？」

山南は何を急に私に言い出すのだろう。
同じようにという意味を考え、私は困惑する。
山南は好きだけど、やはり仲間は仲間で。

「ははは、冗談だよ。
葉桜君が私を何とも思っていないのはよくわかってるから」

返答に困っている間に、山南には気持ちよく笑われてしまって、つられて私も笑う。

「あーもー驚かさないでくださいよ、山南さん。
笑ったらお腹空いちゃった。
夕餉を食べに行きましょうっ」

先に立って私は出て行ってしまったので、山南が少し哀しげな顔でため息を吐いたことに気がつかなかった。

「手強いなぁ」

山南のつぶやきも、私は聞かなかった。

２５＃山南道場（後書き）

殺陣は書くのが難しいですね…。
ヒロインは元道場主ってことで、山南塾の手伝いをしています。
手伝いをしていると、なんとその時間は隊務免除！
なーんてことにはなるわけがありません。
隊務のないときだけ、邪魔にならない程度にお手伝い。
（２００６／０４／２６）

リンク変更
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／１３）

26#ふれんど

手渡された湯呑みの中の黒い液体を覗き込み、私は小さく笑った。

「よく手に入れたね、梅さん」

私の言葉に才谷はいつもの通りに快活な笑顔を放つ。

祇園近くの宿に呼ばれて来てみれば、そこにいたのはよく見知った才谷で、なにやら変わった茶を振舞ってくれるとか。

「流石に葉桜さんは知っちゅうか」

「うん、まあ、な」

歯切れ悪く答える私に、才谷は少し首を傾げたようだ。

「まあグイッといきーや」

だが、気にするのを止める辺りが才谷とも言える。

これが珍しい飲み物だと言うのも、値打ち物だというのもわかっているが、と私は湯呑みを置いた。

「梅さん、まさかこれだけのために私を呼び出したわけじゃないだろう」

「わりぃのにかぁーらんか」

まったく悪びれない返答に、怒りを超えて、私は呆れて笑ってしまう。

「ここに来る前に沖田と鈴花とすれ違ったよ」

私の目の前で、才谷はこの黒い液体を美味そうに啜る。

「鈴花はともかく、沖田は気づいているはずだろう。
よく無事だったな」

「はっはっはっ、わしと沖田くんとはふれんどやきな」

何も心配することはないというが、二人ともは任務の時の格好をしていたのを見ていただけに、私にだってそれだけではないと推測出来る。

「梅、いや、坂本さん」

言い改める私を才谷は面白そうに見ている。
私は才谷の目をまっすぐに見て、それから諦めた。
この男には私や他人が何を言っても、変えられるわけもなく、いつも周囲は振り回されるばかりだ。

「またお付きに怒られるよ」

「はっはっはっ、葉桜さんは優しいやき」

才谷は私の肩を掴んで、顔を近づけてきて、そのまま私の肩に額を当て寄りかかる。

「梅さん?」

「ちっくとばあ、このままでいとおせ」

普段なら、襲ってくる体勢だけど、才谷の様子があまりにおかしいので私はそのままにした。

部屋に薫るのは嗅ぎ慣れない香りで、異国の船が寄る島ではよく薫る。
旅をしていた時に、少しだけ口にしたが、すぐに吐き戻してしまった上、一晩高熱に魘された。
だが、一緒にいた者にはなんの影響もなかったところをみると、別な理由が考えられる。

「珈琲、だったっけ」
「そうやか」
「てぃーはないのか？
そっちなら飲めるんだけど」

才谷は顔を上げて、私に驚いた顔を見せる。
だが、すぐに才谷にも合点がいったようだ。

「ざんじにいれてきゆう」

いきなり離れたかと思うと、駆け出していった才谷を見送り、私は軽い頭痛のする頭を押さえて、窓を開けた。

待ち構えた風が部屋に入り込み、ぐるぐると回って出て行く様子を、青空を見て見送る。
髪が煽られ、外へと流されるが、それよりも、と眼下を見下ろす。

近くに祇園があるといっても、ここは旅宿。
店に入る客は大抵が他藩の者や、芸事をするものたちだ。
私を見上げた十二、三の娘に手を振ると、かすかに頬を赤らめるのが見える。

「だれか知り合いでもおったか」

私の前で、窓枠に腰を預けた才谷が香りの良い湯呑みを差し出してくるのを、私は受け取る。

「いないよ」
「じゃー誰に手を降っちょったがかぇ」

わしが目の前にいるのにと拗ねる才谷を、私はまた笑う。
才谷といると、私は笑いが絶えない。

才谷がいれてくれた「てぃー」に私は口をつける。
口に入るよりも先の甘やかな香りが心地よくて、私は目を閉じる。

「才谷」
「なんなが」

外から入る風が才谷の縮れた髪と私の真っすぐな髪を揺らす。

「あんまり、鈴花をからかわないでほしい」

真っすぐな瞳で才谷は私に尋ね返す。

「鈴花が選ぶ道を妨げるなら、たとえ友であっても許さないよ」

私は強く、才谷を見る。
飄々としているが、才谷の瞳にはいつもブレがない。
ゆるぎない信念を持つ者だけが、その瞳を持っているのだという。
私のような半端者がそんな人間に言うことではないのだろう。

黙っていた才谷は唐突にがくりとうなだれる。

「はやわしは葉桜さんをいとさんとおもうちょるに、ふれんどとはえずいやかっ」

わざとらしい才谷の落胆に、私は呆れた息を吐く。

いとさん、とは才谷の土地の言葉で、愛しい人や恋人という意味だ。

才谷はどうしてこうも軽々しく、そういうことを口にできるのか、私には理解し難い。

「だから、簡単にそういうことを言うなって」

「はっはっはっ」

空にかかる雲を吹き飛ばす才谷の笑い声は、聞いていて気持ちがいい。

「葉桜さんは西郷さんを知っちゅうが」

唐突に問い掛けてきた才谷に、私は収まらぬ笑いを零しながら、首を傾げた。

「いや、知らないよ。

その人が何、」

「葉桜さんの話をしたら、会ってみたいとゆうちょった」

西郷という名前の人物に聞き覚えがないだけに、私は腑に落ちない。

才谷の紹介だけでというなら、私にはますます謎が深まるばかりだ。

「葉桜さんはどこにいても」
「梅さん、一体どんな風に私を紹介したの」
私の問いに対し、才谷は一言。
「事実しかゆうてやーせんよ」
「だから、なんて」
かすかにいらつく私を才谷が容易に引き寄せ、耳元で囁く。
「わしのいとさん、と」
続けられる、わしのものにならんかといういつもの才谷の誘い文句を聞く前に、私は相手を殴り飛ばした。
派手に襖へ叩きつけられる才谷を横目に、私は部屋の外に足を向ける。
「葉桜さん、いっさん西郷さんと会いやーせんか」
大して痛くもないくせに寝転んだままの才谷が、私に言う。
「……考えておくよ」
廊下に出た私の背中を才谷の笑い声が追いかけてきた。

26#ふれんど（後書き）

この時代に入ってくる珈琲って、めちゃめちゃ濃そう。
裏話的には、珈琲には呪術的なものとして使われることもあるため……って、書きすぎるとネタばれになるΣ
（２０１０／０１／１３）

27#鬼ごっこ　（前書き）

元治元年卯月

27#鬼ごっこ

あの人がいないということを、私がこんなにも強く気にかけるようになるなんて思ってもいなかった。

芹沢のコトなんて、私はまったく気にしていないつもりだったのに。

そういう風にどれだけ振る舞っていても、結局は山南の言うとおりに私は芹沢を頼りにしていたのかもしれない。

どれだけ明るく振る舞っていても、私は一人になるとつい考えてしまう。

もう帰ってこないとわかっている人に会いたいと、私は願ってしまう。

それがどれだけ無駄な望みと私自身がわかっているのにも関わらず、だ。

（我ながら、愚かしいな）

私は壬生寺の境内裏手に座って、からりとした笑いを誰にともなく零す。

表に行くと空が見えてしまうから、その空に流れる雲間に探してしまいそうな気がするから、私は空の見えないそこでよく踞っていた。

誰にも気がつかれない場所で、一人の時を私は過ごしていた。

思い出ははいつだって騒々しくて、あいつはいつだって自信に満ちていて、私はいつまでも負けっ放しだ。

私が勝ったのはあの時が最初で最後で、あれだって譲られた勝ち

だった。

芹沢は最期まで私に甘いままだった。

「あ、やっぱり葉桜さんだ」

ふいにかけられた声に驚いて、私は顔を上げる。

そこにはにこにこと機嫌の良さそうな笑顔を湛えた沖田が立っている。

気配を絶った状態でここにいて誰かに見つかったコトなんて初めてだったから、私は本当に吃驚した。

「こんなところでまたサボってんですか？
土方さんに怒られますよ」

「今日は、非番。
……てか、沖田こそここで何を？」

「今、みんなで鬼ごっこをしてたんです。
よかったら葉桜さんもやりませんか？
楽しいですよ」

沖田の差し伸べる手に、私は少し戸惑う。

沖田は私の状態をわかっていて、言っているのだろうか。

それとも、ただの天然なのだろうか。

その姿が、私の過去に重なる。

「葉桜、鬼ごっこしようぜ」

「やだ」

「俺、鬼な。
じゃ、始めるぜ」

「やーりーまーせーんーっ」

「いーち、にーい、さーん……」
「わ、早い早いっ！
それじゃ逃げる時間ないよっ」
「……ごー、ろーく、しーち……」

そう簡単には掴まってあげなかったけど、なんでか芹沢も父様も私を捕まえるのが好きだった。
私も、捕まえられるのは楽しかった。

「葉桜さん？」

ふと、沖田の声で私は我に返る。
一人でいるときならいざ知らず、誰かがいるときにこんなことを考えていてはいけない。
この心を悟られちゃいけないのに。

「ああ、いいよ」

私は沖田の手を取らずに先に歩く。

「じゃあ、私が鬼で」

腕を頭の後ろで組んで、私は大きく伸びをする。

「鬼ごっこは久々だな～」

私は言いながら、気配がついてこないのに気がついて振り返ると、丁度沖田が駆け寄ってきたところだった。

「それじゃ、お願いしますね」

私に触れることなく、そのまま駆け抜けてゆく元気な姿を微笑ましく見送り、私は社に寄りかかって両目を閉じる。

「いーち……にーい……さーん……」

想い出よりも私はゆっくりと数を数える。

「わーい、お姉ちゃんが鬼だー」

「キャーッ」

闇の中に子供たちの笑い声が聞こえて、それだけで私はなんだか嬉しい気持ちになってしまって。

「おーい、桜庭さーん！」

数え終わる前に沖田が鈴花にかける声が聞こえて、私は一瞬目を開けようか躊躇した。

どうやら鈴花を鬼ごっこに誘っているようだとわかり、私はさらにゆっくりと数える。

「しーち……、はーち……、きゅーう……、じゅう！」

数え終えた私はぱちりと目を開き、沖田と鈴花がまだ話し中なのを確かめて、気配を忍ばせて近寄る。

「はい、やりま」

そして、私は鈴花が最後まで言い終わらないうちに。

「つっかまーえたっ」

鈴花の背後から抱きついた。

「ひゃぁ!?

あ、え、葉桜さん!?」

「じゃあ、次は桜庭さんが鬼ですね」

鈴花が次の言葉を発する前に沖田がたたみ掛ける。

上手いぞ、流石だと私は頷く。

「ええっ?」

「よーし、みんな逃げろーっ」

子供たちに混じって、私も社まで走り抜ける。

私の隣にすぐに沖田は追いついてくる。

「葉桜さん、鬼ごっこも久しぶりにやると楽しいでしょう?」

子供たちの様子を嬉しそうに見守りながら、沖田が私に話しかけてくる。

「ああ、そうだな」

私の口からは素直に言葉は出てきた。

それは、私の本心だということの証でもある。

「何も考えずにただ走り回るだけで、結構頭がすっきりするんです」

え、と思わず私は隣にたつ男を見るが、沖田の笑顔からは何も読

み取れない。
もしかして、沖田は私の様子がおかしいと気がついていたのだろうか。
だから、私に声をかけたのだろうか。

「沖田、」
「はい」

しかし、私がその問いを口にする前に、沖田へ子供が一人突進する。

「総司兄ちゃん、つかまえたーっ」
「あっ」

いつのまにか鬼が鈴花から別な子供に交代していたことに、私も沖田も気付いていなかったらしい。

「やられたなぁ」

しまったというよりも嬉しそうな顔で、沖田が言う。
こういうところはちゃんと大人な対応が出来るんだなぁと、私は素直に感心した。

「ふふっ、油断大敵だな」
「ええ、なかなか侮れません」

私と沖田が二人で笑い合っているところへ、鈴花が駆け寄ってくる。

「葉桜さん、沖田さん、そろそろ屯所へ戻る時間ですよ?」

私はほんの少し駆け回っただけなのに、たしかに沖田が言ったように頭はすっきりした気がする。

「ああ、そうでしたね」

集まってきた子供たちが、沖田に言う。

「じゃっ、次は総司兄ちゃんの鬼からだからねっ」

「ああ、約束だよ。
それじゃあ、またね」

子供たちと別れて、私たちも帰路につく。
その帰り道、私は鈴花に少しだけ勤務態度についての注意をされてしまったのだが、笑ってかわして、その上で鈴花をからかっていたら、彼女は怒って先に帰ってしまった。

「やりすぎたかな？」

「あはは、葉桜さんは楽しい人ですねー」

私は沖田と二人で並んで歩きながら、話す。

「ところで、さっき何か言いかけてませんでした？」

何食わぬ顔で聞いてくる沖田だったけど、なんとなく私はもう聞けなくて、首を振った。

「いや、なんでもないよ」

「そういわれると気になりますね」

「大したことじゃないから気にするなって。

それより、」

私は隣を歩く男の顔を見る。
自分と同じぐらいの目線にある沖田の目に曇りはない。
沖田が人を斬ったこともないような顔をしていても、その剣が恐ろしいと知っていても、私は沖田の剣は綺麗だと思う。

「今日は有難う」
「なんですか、急にお礼を言うなんて」
「ははは、まあ気分だ、気分」

不思議そうに私を見る沖田の肩を私は叩く。

「なんとなく言いたくなっただけだよ。
さ、屯所まで競争しようっ」

そのまま私は地を蹴り、走り出す。
さっき以上に何も考えず、ただ全力で。

「あはははは」

顔に当たる風、耳元を通り抜ける風、深く吸い込む風、その全てが、私の何もかもを吹き飛ばしてくれる気がして。
私はただ前だけを見つめて、屯所まで走り抜けた。

沖田は笑いながら、途中であっさりと私を追い抜かしていきやがった。

27#鬼ごっこ　（後書き）

ゲームから台詞を起こしたのに、ファイルを消してしまったので（ＵＳＢメモリ内作業だから残らなくて（泣）もう一度書くのも面倒だから、覚えている間に書いてしまいましたが、その間にスーパーが閉まってしまいました
慌てて、もう一つのスーパーが閉まる前に買い物に行きました…

読み返してみるとヒロインの回復が余りに早いので、ちょっとずつ付け足し中
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／１３）

28#見廻りの後で

見廻りから戻った私が真っ先にやることは、井戸に行って顔を洗うことだ。
同じ水で浸して絞った冷たい手ぬぐいで、私は濡れた顔を拭き、汗を拭う。

「どうだったよ、葉桜。
京の町の様子は」

私がここに入隊して約一年。
今では声だけで誰なのか、私にもだいたい分かるようになった。

「見慣れない浪人の増え方が異常。
仕事増やすなっての」

私はこれから何が起こるのか知っているだけに、悪態もつきたくなる。
もうすぐあの日が、新選組の運命を変える、事件が起こる。

「まァそういうな」
「大体なんで私と沖田ばっかり絡まれんだよ。
斎藤と出ても藤堂と出ても同じだし、楽ができるのは原田や永倉と出るときぐらいだ。
ああ、あと源さん」
「あれで楽なのかよ」

呆れきった永倉の声に、私は苦笑いを返す。
沖田と組んで見回りに出ると大変なのはわかるのだろうけど、私

が永倉と組んで出る時とどう違うのかなんて永倉は知らないだろう。

「ホラ、わかんだろ。
沖田は喧嘩全部買うし、藤堂も買うし、斎藤は売るし」
「ははは っ大変だなァ、葉桜」
「笑い事じゃないってーのっ」

そうでなくてもここ最近は、非番で私が町をぶらついてるだけで絡まれる。
変装とかって私が山崎に女装させてもらったら、もっと質の悪いのがひっかかるし。
しかも、この場合はもれなく梅さんまで釣れてくれる。

ぶつぶつと文句をいう私の頭を軽く叩いて宥めてくれるだけ、永倉は優しいと思う。
原田辺りに言ったら、私は爆笑されて終わりだ。

「てか、なんでいつのまに私は一番隊副長なわけ?」
「俺が知るわけねェだろ」
「仕事終わった直後だってのに、沖田がやり足りないから稽古しろって煩いんだよ。
何とかしてよー」

私が泣きつくと、永倉は本気で笑いやがった。

「オメー、また手ェ抜いて稽古してやがんな?」
「別に手を抜いてるつもりはないよ」
「ウソつけ」

永倉には何度か私の仮想敵、対芹沢をさせているので、薄々感づ

かれているとは思っていたけど。
そのせいで私の手の抜き具合というのは分かるものらしい。

「ここ最近のオメーはなんか気ィ抜けてるからよォ、総司も心配なんだろ」

確かにあれ以来、私は気が抜けていると言えば、そうかもしれない。
芹沢がいなくなって空いてしまった私の胸の内にある虚ろの穴はまだ空っぽで、ヒューヒュー風が通り抜けていく。
私も隊務の最中だけはそんなことも忘れられるんだけど、それ以外の時は普段のやる気のなさが二乗されてるぐらいに腑抜けていると自分でも実感している。

そこまで考えて、やっと私は思い至った。
「も」てことは永倉にまで私は心配されているのか。

「悪いな、心配かけて」
「おぅよ。
だから早くいつものオメーに戻ってくれ」

永倉からは否定でなく、なんだかやりにくいんだよ、と零された。

＊　＊　＊

永倉と別れた私が道場に行けば、入る前からこちらに近付いてくる気配がある。
そのまま私が入らずに待っていると、案の定沖田が満面の笑顔で

道場の戸を開けてくれた。

「葉桜さんっ」

こいつはよく懐いた犬みたいだなぁと微笑みながら、私は沖田の言葉を先に続ける。

「沖田、今は稽古の相手、頼める？」

私の誘いが意外だったのか、一時沖田が目を丸くし、次いで目を細めて本当に嬉しそうに笑った。

「はいっ」

これが見た目通りの少年ならいつだって相手してやるんだけど、沖田の稽古はこいつが飽きるまでと相場が決まってて、しかも恐ろしく長い。

若さ故か、沖田の体力は無尽蔵といっても過言でないのだ。

鈴花や他の平隊士はあれは稽古じゃないとかって逃げ出すし、近藤や土方は忙しくて滅多に道場まで来られない。

永倉や原田や藤堂は他の隊士の面倒を見るとかで逃げやがるし、斎藤に至っては汗をかくのが嫌だとかぬかしやがる。

事情も知らずに最初に沖田と稽古したのが私の運の尽き。

あとは沖田が道場にいるときは自然、相手が私になるようになった。

沖田と私は向かいあって、木刀を構え、礼をする。

「今日こそは手加減無しでお願いしますよ」
「どーしよっかなー？」

私が本気の剣を振るうとき、それは沖田を救うとき。
そう言ったら、沖田はどんな顔をするだろうかと考えかけたが、私は意識を目の前に切り替えた。
稽古と言えど、沖田との稽古は私にも命のやり取りにとても近い。
私がよそ見できるほど、沖田の相手は容易ではないのだから。

２８＃見廻りの後で（後書き）

うーん……永倉とどうしても「オトモダチ」で止まってしまう。
特に芹沢の事件後のことがあるから、踏み込めなくなってる。
その分沖田が近付いてる。
　いいのかなぁ？
（２００６／０４／２６）

リンク変更
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／１４）

29#気配（前書き）

元治元年水無月

29#気配

どこにいても葉桜さんの姿は目立っていた。
旅をしているときでも、どこにいてもすぐにわしには見つけられた。
特徴のある格好をしているというのもあるが、何よりも葉桜さんの空気が人を惹きつけるのだろう。
だから、最初ぶつかった時の空気が違いすぎて、わしには葉桜さんだとわからなかった。

「すまない」

囁くような謝罪の声は確かに葉桜さんだったのに、わしの知る気配とまるで違う。
いいや、違うどころじゃない。
今にも空に溶けて消えてしまいそうで、空気みたいだと思った。

すれ違ったばかりの葉桜さんの姿をわしは慌てて追いかけ、見た目よりも細い腕を取る。

「梅さん?」

振り返った葉桜さんはさしてわしに驚いた様子もなく、ただ小さく首をかしげていた。
いつもわしが見る葉桜さんの笑顔とは全然違って、ひどく堅くて、空虚だ。
葉桜さんという人は、こんな人ではなかったと、わしは思う。

「何かあったかえ?」

ここにどうしてというよりも何よりも、わしには葉桜さんの様子がおかしいことが気になる。

「ははっ、何だ急に。
今日は別に何もないよ」

葉桜さんは笑っているけれど、そんなはずはない。
何もなくて、こんな泣きそうな顔をしないだろう。
もしも葉桜さんが泣くのだとしたらと考えかけて、わしの思考が止まる。
普段の葉桜さんから、わしにはまるで想像がつかなかったのだ。
葉桜さんは泣くことなどあるのだろうか。

「ちっくとわしにつきあいやー」
「その前に腕を離してくれないか？」

笑っている葉桜さんの腕を引いて、わしは人気のない路地裏へと連れ込む。
時間があればどこか店へ入ってとも考えたが、今は少し立ち寄っただけで、わしに与えられた時間は少ない。

暗がりで問われる前に葉桜さんの顔を、自分の胸に押しつけるようにわしは抱きしめた。

「梅……？」
「泣きたいときは泣いていいちや」

腕の中の葉桜さんの様子は、さっきから変わらない。
わしの前で笑っているのに、強張った声で、何かを恐れる声で葉

桜さんは呟く。

「……何、急に」

「葉桜さんは女の子なんやき、泣きたいときに泣いてえいがだ」

「別に、泣きたくなんか」

「ほがな風にしちょったら、みしくれてしまうよ」

腕の中の気配はわしを恐れる様子も何もない。

が、不意にくすくすと葉桜さんは笑い出した。

「みしくれ？」

「壊れる、ってことちや」

「壊れる？

私が？」

「あぁ」

「本当にそう見えるのか？」

くすくすと笑う声と共に、葉桜さんの気配が変わる。

いつもの包み込むような温かな葉桜さんの気配になる。

わしから見ても、葉桜さんは無理をしている風ではない。

ない、のだが。

「ああ、ダメだな。

つい、クセで……」

葉桜さんが離れようとする肩を押さえて、わしは強く抱く。

彼女はいつものように動揺の微塵も見せない。

「なんちゃーがやないか？」

「なにがだ？」

「葉桜さん、まっこと辛そうちや」

そんなつもりはないんだけどなぁ、と葉桜さんは静かに笑う。

わずかに揺らぐ葉桜さんの気配だったが、今度はわしの腕の中で崩れずにそのままだった。

わしは葉桜さんが強い女性なのだと思っていた。

とてもとても強い、何にも揺らがないでまっすぐに歩む女性が葉桜さんだと。

だけど、今の葉桜さんの様子は、強いには強いのだがただの女のよりも弱く、儚く、わしにはそのまま消えてしまいそうに見える。

わしはぎゅっと葉桜さんを抱きしめる腕に力を込める。

腕の中の気配はわずかに苦しげな呻き声をあげるものの、抵抗はしなかった。

代わりに、葉桜さんは腕を伸ばせるだけ伸ばして、わしの背中を精一杯抱きしめ返してくる。

「まだ大丈夫。

消えられない理由があるから、私はいるよ」

すべてを見透かすかのような葉桜さんの言葉に、わしもつい腕が緩んで。

その隙に葉桜さんはわしの中から抜け出してしまって。

少しの、本当に手が届いてしまうぐらいの少しの間を置いて、また葉桜さんは強く微笑んだ。

「理由？」

「ああ、私は――だから」

通りを走る子供たちの元気な声が、葉桜さんの言葉を遮る。

「だから、まだここにいるよ」

「？」

不意に葉桜さんが空を見上げ、眉をひそめるのを見て、わしも天を仰ぐ。

「ひと雨来るな」

そんな気配もないのに言い出す葉桜さんに、わしは視線を戻す。

「葉桜さん」

「じゃあ、私は寄るところがあるから。
またなっ」

わしが引き留める間もなく、葉桜さんは風のように駆けていってしまった。

一瞬見えたその目に涙の色は見えなかったのに、どうしてかわしは葉桜さんの後ろ姿が目蓋の後ろに焼き付いて離れなくて。

葉桜さんは一体に何を考えて歩いていたのか。

少なくともわしがまだそういうコトを話してもらえるような関係でないことだけはわかった。

「一体、何があったがだ」

呆然としていたわしはその理由を探るために、場を後にする。

もちろん、聞くとするならそれは葉桜さんが大切に慈しんでいる、同じ新選組隊士の鈴花さんしか思い浮かばないのだが。

だが、鈴花さんはわしに何も教えてはくれなかった。
あの宴の夜からずっと葉桜さんは同じだということだけで、それ以外には本当に鈴花さんは何も知らないようだった。

あの宴の夜、芹沢さんを追うように出て行った葉桜さんの姿を、わしはまだ鮮明に覚えている。
涙に濡れた綺麗な瞳で、強く睨むように出て行った葉桜さんはとても美しかった。
魂に色があるというのなら、葉桜さんほど強く白く眩く光るものはないだろう。

正直、あの時にわしは芹沢さんが羨ましいと思った。
あれほどに強く想ってもらえるような人はわしにない。
ましてや、葉桜さんほどの女性というのもなかなかいない。
もしもわしが芹沢さんと同じ立場にいたとしても、葉桜さんに殺されたなら本望だ。

わしは新選組の屯所を出て、寝屋への道を歩きながら考える。
葉桜さんはまだ戻っていなかったが、一体どこへ行ったのだろう、と。

夕闇で人の顔の判別も難しい黄昏時の道、すれ違う影に足を止めるより早く、わしはその腕を掴んでいた。
弱々しい、消えそうな葉桜さんの気配が、とたんにわしの前に強く広がる。

「いきなり何するんだ。
梅さんじゃなかったら、殴りかかってるところだぞ」

カラカラと笑う様子は、いつもどおりの葉桜さんだ。
だが、今のわしにはそれが作り物だとわかる。

「芹沢さんは、葉桜さんの何じゃったがだ？」

びくりと、今日初めて葉桜さんの腕が震えた。
それを覆い隠すように、尚強く、葉桜さんは笑む。

「大切だった人、よ」
「恋人じゃーなかったかえ？」

わしが掴んだままの葉桜さんの腕が、また震える。
彼女は抑えるように笑う。

「ははっ、それはない。
だって、あの人と私じゃあまりに違いすぎる」
「まっことか？」
「相手にもされなかったよ。
あの人にとって、私はただの……子供でしかなかったから」

あの人と、囁く葉桜さんの声は震えている。
必死に隠そうとはしているけれど、今のわしには意味がない。
わしは黙ったまま葉桜さんの言葉を待つ。
しかし、葉桜さんはそれ以上何も言わないままだった。

「風が少し冷たいな」
「雨が降ったからちや」
「ああ、そう、だな」
「また降るかもしれん」
「……だ、な」

そこでわしが葉桜さんの腕を離したのは、震える声を聞いたからではない。
葉桜さんの瞳が閉じられ、わしの前で静かに滴が溢れて落ちてゆく。

「雨が降れば、誰にもわからんよ」
「……っ」

わしが抱き寄せようとする手は、葉桜さんに拒まれた。
だけど、動かずに目の前で泣く女を放っておけるはずもなく、わしは道の端へ葉桜さんを誘導する。

「葉桜さんは芹沢さんが好きじゃったがだな」
「違……っ」
「芹沢さんも葉桜さんが好きじゃったがやき、よういかんなぁ」
「……っ」

世の中は全てが思い通りになるものでもないけれど、それでも好き合う者同士がこうして離ればなれになるのは哀しいことだ。

「何故、嫌いなフリらぁてしよったがだ」
「……嫌い、だったもん」
「嘘をついてはいかんちや。
わしにゃ全部お見通しやき」

わしはそっと泣いている葉桜さんの髪を撫でる。
葉桜さんの髪はさらさらと流れ、指通りがいい。
それでいて、まっすぐで揺るぎない、芯の通った髪だ。

「まっことのことをゆうてみいーや」
「……」
「ほら」

促すと、葉桜さんは一時泣くのを止めて、ただの幼い子のように不思議そうにわしを見つめてきた。

「どうして、わかる」
「葉桜さんのことなら、なんちゃーお見通しやき」
「……ウソ、ばっかり」

泣きながら、ようやく葉桜さんが笑う。
わしが今日見た中で、一番可愛らしい笑顔で。

「でも、そうね。
一度ぐらい言ってあげればよかった。
大好きだよって、」

ただ真っ直ぐに、純粋に、一直線に向かってくる葉桜さんの言葉が、わしに向けられているものでないのだとしても。
抱きしめようと伸ばした腕が、葉桜さんのただの笑顔に阻まれる。

「ありがとう、梅さん。
おかげですっきりしたよ。
これでやっとふっきれそうだ」

葉桜さんはただ弱いだけの人ではない。
今のわしに適う人じゃないと、意識させるほどに強い微笑みだ。

「葉桜さんのためなら、いつでも胸を貸しちゃるよ」

「あはは。
面白い冗談だな、梅さん」

それほど時間はないだろう、と笑った葉桜さんはもういつもの彼女に戻っていて。
わしが初めて見たとき以上に、強く笑んでいて。

その眩しさにわしは思わず目を細めた。

２９＃気配（後書き）

梅さんの台詞はきっとニセモノです（コラ
珍しく翻訳使わないで書いてみたけど、梅さん語は難しいね！
結局コンバータ使いました…
しっかし、元気になったり落ち込んだりと忙しいヒロインですね
（２００７／０６／１３　１９：５４：０６）

公開
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／１５）

30#ぜんざい

甘い甘い甘～い匂いが辺りに充満しているぐらいなら、私は別に耐えられる。
耐えるものでもないけど。
ただ、私の中に入る甘い物の許容量はそんなに大きくないのだ。

普通の、鈴花みたいな女の子は砂糖やお菓子といった甘い物で出来ているから、あんなに食べられると私は思っていたんだけど、新選組に入って私の中でそれは違うと認識は改めさせられた。

「口に合わない？」
「いや、すっごく美味しいです」

同期の島田という力士並の体格の大男も度を超えて甘い物が好きだけど、まさかこの人も甘い物で出来ているとは、私は予想だにしなかった。
ある意味納得だけど、ある意味私は納得したくない。
なによりこの男が鈴花と同じようなもので出来てるなんて、私には考えるだに恐ろしい。

私は思っていることが顔に出ていたのか、近藤は少しだけあげた顔を吃驚したように全部あげた。

「な、なんで怒ってんの、葉桜君？」

鈴花と甘い物同盟組んでるからと私が言ったらどんな顔をするんだろう、この男は。

「いいえ別に」

ぜんざいに箸を突き刺しつつも、私が笑顔で応えてやったのに近藤は哀しそうな顔をしないでほしい。

「本当に美味しいと思ってますよ。甘味は苦手ですけど、これならいくらでもはいりそうでしたし」

「ってことはもう食べられないの？」

私を見る近藤の目は、どう見ても残りを付け狙う子供のキラキラと期待に満ちた目だ。

近藤には大人なようで案外子供みたいなところが、こういう部分がある。

おかげで私の悪戯心まで刺激されてくるから、私は箸で持って、差し出してみたら食べるかなという考えを行動に移した。

「食べますか？」

本当に本気で冗談だったんだけど、次の瞬間、私はこの人には絶対に勝てないと実感した。

「マジ？

いっただっきまーすっ」

ぱくり、と。

近藤は躊躇なく、人の箸から食いやがった。

固まったのは私の方だ。

「何考えているんですかっ」

「なぁに怒ってんの？」
「怒ってませんっ」

私は近藤が戸惑っているうちに器に入れてやろうと考えていたのに、なんでこっちが動揺しなきゃなんないんだ。

「あ、もしかして冗談だった？
本当は自分で食べるつもりだった？」
「違いますー」

甘味が苦手な私が何故こんな甘味処にいるのかというと、情報収集のため女装姿となり、例によって絡まれているところを近藤に助けてもらったからだ。
私は一時的にここに隠れるために近藤が入った店だと思ったんだけど、どうも違うようだ。

だって、近藤がこの甘味処に入っていくときの顔は、私から見ても物凄い嬉しそうだったし。
しかも店員がきたら近藤は即注文し、迷うことも全く無かった。

「何、ニヤニヤしてるんですか」
「いやぁ、こうして逢う度に意外な葉桜君が見られて嬉しくて」

私は迷惑です。
弱点ばっかり、この人に見られて自分が情けなくなるし、しかも私が見られるばっかりだ。
私はあんまり仲間に格好悪い処は見られたくないっていうのに。

「じゃあ、近藤さんの苦手なものも教えてください」
「俺？

俺はぜんざいが苦手」

目の前で既に三杯も平らげておいてよく言う、と私はため息を吐き出す。

「……饅頭怖い、じゃないんですから」

近藤はよく知ってるねぇと、私を笑った。

＊　＊　＊

屯所へ帰るまでの道、私はしっかりと近藤に手を繋がれる。

近藤が言うには私が拐かされないように、だって。

近藤にとっての私は、とても小さな子供みたいだ。

「何か良い情報はあった？」

「三下がひっかかるばっかりで、大したのはありませんでしたね」

折角女装しても、絡まれてばっかりで仕事になりゃしないと、私もつい愚痴がこぼれる。

近藤が来なくてもこれまで私は上手くからまれたのを捌いてきたのだけど、いい加減飽きていたところで丁度助けてもらえて良かった。

そういえば、まだ私は近藤に礼の一つも言っていないことに気がつく。

だが、私が何かを言う前に近藤が続ける。

「二百名を超える人間が京に入ってるんだ、なにかあるとは思うんだけどねぇ」
「戦争でも始めるんでしょうか」
「でも、市街には剣を持たない商人や町人ばかりだよ。まさか御所に殴り込むわけでもないだろうし」

こういうとき、先を知っている私としては、すごく言いたくなる。読んだだけだが、私はあの紙に書いてあるのが真実になるという裏付けを既に取ってある。

だから、もしかしたら話せるかもしれないと、私はかすかな希望を舌に乗せる。

「あの、近藤さんっ」

独り言に入りかけていた近藤を呼びとめると、私を見てくれる。だから私は言おうとしたけど、やっぱりダメで。

咳き込んでしまった私を気遣い、近藤は背中をさすってくれる。

「大丈夫？」
「は、はいっ」

どうして話してはいけないんだろう、と苦しい息の下で私は考える。

一言言うだけで回避されることはあるはずなのに、いつもこんな風に咳込んだりして話せない。

「例の約束の制約……？」

弾かれたように私は顔を上げる。

私は山崎にしか約束の制約について話していないのに、どうして

近藤がそれを知っているんだろう、と。
て、そりゃ山崎が報告したって考えるのが普通だ。
近藤は私にとっても山崎にとっても上役なのだから。

「そんなところです」
「難儀だねぇ」
「ホント、面倒ですよ。
これさえなければ、皆助けられるかもしれないのに」

芹沢を殺さなくても済んだかもしれないのに、と時々私は考える。
すべては終わってしまったことだから、私が今更考えてもどうしようもないのだけど。

私が考えていることがわかったのか、近藤は優しく背中を叩いてきた。

「頑張ろうね」

山崎が全部話したかなんて私には分からない。
けれど、事情なんて全部わからないのに近藤の言葉の通りにすれば、不思議とすべてうまくいきそうになる気がすることがある。
制約が何だ、知らなくたって、ここに来てしまった以上、私は新選組を皆を、近藤達を守りたいという気持ちに代わりはないのだから、頑張るしかない。

「そうですね、じゃあ手始めに邪魔者をどうにかしましょうか」

私が懐剣を取り出そうとしたところで、近藤に片手で制される。
また近藤は私を止める無駄な努力をする気かと思いきや。

「小太刀でいいなら、使うかい？」

差し出された近藤の小太刀を私は有り難く受け取り、鞘から抜いて無限に構える。

近藤は愛刀の虎轍を抜いて、私に並んでいて。

私はこの人と戦えば、どんな状況でも勝てないことはないと自信と安心が満ちあふれてくる。

「下手な尾行はそろそろ止めたら？」

私の挑発を合図に、浪人が十数人出てきて、私と近藤を逃さぬように囲む。

それでも私の自信は揺るがない。

自信の現れで口端が自然と上向くの私は止めず、はやる気持ちで地を蹴り、誰より早く敵を迎え撃った。

３０#ぜんざい（後書き）

リクエストイベント「ぜんざい」
例の店に一緒に行ったものの、そういやこのヒロイン大酒飲みなので甘い物苦手でした。
で、近藤と移動してるとどうしたって絡まれそうなんですよね。
だって、ゲームの近藤さんって目立つから！！

イベントはこんな感じにオリジナル化されていきます。
…ダメですか？
（２００６／０４／２６）

リンク変更
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／２０）

31#原田の純情

「来月、祝言を挙げるんです」

嬉しそうに言った小料理屋の娘のお膳立てをしたのは、私だった。

だけど、まさか彼女に懸想している男が他にもいるなんて考えてもいなかったし、しかもそれが私自身の仲間内にいるなんて思いも寄らなかった。

彼女はどこにでもいるようなごく普通の娘で、何かしらのきっかけがなければ、万人の目に止まるようなことだってない。

私にとってはそういう普通なのがとても羨ましくて、彼女には絶対に幸せになってもらいたかった。

だから、彼女からの祝言の報告はとても嬉しかった。

直後に、原田が告白しているのを目撃しなければ、私はもっと喜べた。

「……葉桜さん～っ」

情けない顔で戻ってきた彼女が目の前にしゃがみ込んでしまったので、私は椅子に座ったままで彼女の頭に手を置き、撫でてやる。

「おかえり～、良かったねぇ」

「良くないですよ～、私、あんなに怖そうな人から告白されるなんて……」

「見た目は怖いけど、中身は悪いヤツじゃないよ」

「やっぱり、お知り合いなんですか」

私が苦笑していると、涙を浮かべたまま上目遣いに睨まれる。

怖いというよりもそれはかなり可愛い。

「知り合いってか、仕事仲間」

少し考え込んだ後で娘がふぅと息を吐き出す。
その仕草一つ一つが私にとっては可愛くて仕方がない。
もしも生まれ変わるなら、力も剣の腕もなくていいから、彼女のように普通になりたいと願う。

「お仕事、今は新選組でしたっけ」
「そ。
まあ、今日は非番だけどね～」
「なんでそんな怖そうな所にいるんですか」
「まあ、これも仕事、」
「いっつも、そうですよね。
葉桜さんと会うときは、いっつも仕事だって」

どうみても私が遊んでいるようにしか見えないとふくれている彼女が仲間に呼ばれて、奥へ戻る。
その間に私は他の従業員に代金を払って、店を出た。
これ以上いると、またいつものお小言を言われるに決まっているのだ。

私が彼女と出会ったのは京へ来て直ぐだった。
道に迷って入ったこの店で、案内してもらったのがきっかけで、何の特徴もない彼女がかえって、私には好ましく映った。

私はゆっくりと空を仰ぎ、町人に挨拶をしながら、のんびりと壬生寺へ向かう。
途中すれちがった原田に、私は小さく謝っておいた。

＊　＊　＊

片手に徳利を持ち、片手で杯を一つ持ったまま、私は足で勢いよくその部屋の障子を開けた。

「おーい、起きてる？」

空は既に暗く、宵の口と呼ばれる時刻の良い月夜だ。
もちろん、私はその部屋の住人が起きていると予想してきている。
案の定、行燈の薄暗い光の中、永倉、原田、藤堂はまだ起きていた。
彼らの間にはすでに酒があるようだ。

「葉桜さん、静かにっ」
「土方さんに見つかったらやべェだろっ」
「問題ないよ。
許可は取ってあるから」

私は輪に混ざって、原田と永倉の間にどかりと座り、持っている徳利から自分の杯へ注いで原田に差し出す。
怪訝そうに私を見つめる原田に笑顔で勧める。

「旨い酒もらったし、お裾分けしにきたんだ。
飲んでみて」
「……いや、俺は……」
「こらー、私の酒が飲めないのかー？」

カラカラと笑い、飲まない原田の代わりに私は自分で杯を傾ける。

「っかー、旨い！
さすが名酒ってだけあるわ」
「自分で飲むなよ」
「えーだって、原田が飲まないから」
「飲まねーなんて言ってねぇだろっ、貸せ！」

杯を奪い取った原田に対し、私はにやにやと笑いながら、酒を注いだ。
たった一杯、されど一杯。
ぐいっと原田がそれを一気に煽るのを私は柔らかな目で見届ける。
呆気にとられている永倉と藤堂を放っておいて、私はにっこりと笑顔で原田に問いかけた。

「どうよ？
うまかろう？」

反応のかえってこない原田を放って、私は少し体を外へ向けて、夜月を仰いだ。

「今夜は月も綺麗だし、こんな日は上手い酒呑まれるのもいいよな」
「……葉桜、おまえ……」
「悪いけど、ちょっとだけ私につきあってよ。
こんな酒はこれっきりにしておくから、さ」

原田のために用意した酒だったけど、飲んでいるうちに私の方が感傷的になってしまった。
こうして飲んでいると、私が京へ上るよりもずっと前のこと、かつて芹沢と過ごした時間が鮮明に思い出されてくる。

「山南さんに聞いていると思うから全部は言わないけど、私は結局あの人が好きだったんだ。
恋とかそんな甘ったるい感じじゃなくて、ずっと一緒にいたかった。
だから、戻れるなら、あの頃のあの人に戻って欲しかった」
何も考えずに一緒に笑っていられたあの頃に、私は戻りたかった。
誰と明言しなくても、気がついているのか、三人は私の話を静かに聞いてくれる。
「生きていれば、やりなおせたかもしれないのに。
もう戻れないところまで来てしまっていたから、彼も私の手にかかってくれたんだ。
あの人は最期まで全部分かってた。
分かっていたから、何も言わずに逝ってしまった」
「こんなことなら、あの日に全部言ってしまえば良かったって、何度も後悔したんだ。
後悔したまま再会したのに、私は何も言えなかった。
変わってしまったことがただ哀しくて、その内面まで見ようとしなかったんだ。
いや、全てが変わってしまっていることが怖くて、見るのが怖かった。
ちゃんと見つめれば、よかった……」
全ては過去。
戻ることの叶わない過去だ。
「最近になって、やっとそうわかった。

あの人の行動は理不尽に見えて、無意味に見えて、どこかしらにちゃんと理由があったことも、今はわかる。
分からなくなっていたのは私の方だって、わかるよ」
「……葉桜……」

それは誰の声だろう。
心配そうに自分の名を呼ばれ、私は首だけ軽く振り返った。

「許してなんて言えないよね。
殺したのは私なんだから」
「原田たちは迷っちゃダメだよ。
後悔するような選択をしちゃダメだ。
何が大切なのか、何を守るべきなのか、ちゃんと見極めて。
そうして、一度選んだらもう振り返っちゃいけない」

それがどれだけ辛い選択だったとしても、と私は付け加える。
自分と同じ過ちを犯してはほしくないから、全てが自分に言い聞かせる言葉だとしても、ここに居る誰か一人でも言いから届けばいいと思った。

「明日はいつだってあるわけじゃないって、知っておいて」

からりと私が笑うと、原田から同じくカラリとした返事が返ってきた。

「バーカ。
そんなん当たり前だろーが」

永倉からの当たり前のそんな答えがただ嬉しくて、酔っているせいもあって、私は自然と涙が溢れていた。

「おいおい、何泣いてんだよ」
「まだ調子よくないんじゃないの、葉桜さん？」
自分でもどうしてか分からないので、可笑しくて、泣きながら私は笑った。

「器用なことするなー」
「ね、葉桜さん。
俺にもその酒ちょうだい？」
「やだ」
「なにしにきたんだ、オメーは」
手を伸ばした藤堂から私が冗談で徳利を避けると、すかさず永倉から背中を叩かれ、痛い。

「加減考えない永倉にはあげない。
藤堂ー、ほら」
「へへっ。
悪いね、新八さん」
嬉々とした藤堂に私が杯を差し出すと、藤堂が受け取る前に永倉が横から奪い取り、さっさと煽ってしまう。

「おー、こりゃイイ酒だ。
どこからもらってきたんだ？」
永倉から杯を奪い返して、酒を注ぎ、私は自分で煽る。
「ああ、美味しい」

「……葉桜さん～」

哀しそうな顔をしている藤堂に徳利ごと酒を渡して、私は立ち上がる。

もう一度仰ぎみた月はもう西へ沈みかけていた。

「そういや、葉桜は明日当番じゃなかったか？」

思い出した原田の声を振り返らずに私は小さく笑う。

「明日は休みとってあるから」

ここ数日真面目に仕事していたおかげで、私は休みをすんなりととれた。

それどころか、やっと休む気になったのかと私は思いっきり安堵されてしまった。

私が思っていた以上にいろんな人に迷惑と心配をかけていたらしい。

「聞いてくれて有難う、な」

三人それぞれの快い声を背中に、私は自室へと戻る。

温かな心がようやく体中に広がって、久しぶりに深く優しい眠りにつけた夜だった。

31#原田の純情（後書き）

最初、原田をからかおうかと思ったんですが、
あまりに難しかったのでこんなんなりました
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／２０）

32#臥竜鳴動ー1

元治元年水無月四日の夕刻頃、それは私が沖田と稽古をしている最中のことだった。

大きな足音が道場に近付いてきたと私が気がつき、視線を向けると、入り口に入るやいなや、鈴花が大きな声でそれを叫んだ。

「葉桜さん、大変です。

山南さんが、山南さんが倒れてっ」

鈴花の報せを聞いて直ぐに私が山南の部屋へ行くと、本人は布団に横にならずに青白い顔で起き上がっている。

「なんで眠ってないんですか……っ」

がっくりと項垂れる私を静かに笑う山南の様子は普段と変わらないが、倒れたということはそれだけ無理をしていたということだろう。

屯所内で私が山南といる時間も多かったというのに、どうして自分は気づけなかったのか。

考えれば考えるだけ、私は自分が情けなくなってくる。

「葉桜君の来るのがわかったから、」

「私のために起きてないで良いですから。

ちゃんと休んでいてください」

傍らにいる山崎に山南が倒れた原因を尋ねると、過労だと言う。

また根を詰めて教材作りでもしていたのか、それとも木細工でも弄っていたのか。

「なにやってんですか、もう。
心配させないでください」
「本当よ、敬ちゃん。
こんな時に余計な心配を増やさないで頂戴」

山崎と私が二人で言うと、山南は分かっているのかいないのか、ただ微笑んで返してくる。
それを見て、二人顔で山南の顔を見合わせ、大きくため息をつく。

「すまない、三人とも」
「そう思うなら、今日はちゃんと休んでいてくださいねっ」

私が有無を言わせず言い切ると、山南はかすかに頷いた。
この人、絶対わかってない気がする。
ぐいっと山南の襟を掴んで引き寄せ、私が自分の額を合わせてみると、少しだけ熱い。

「な、葉桜、君」
「もー少し熱も出てるしー……今日はちゃんと眠っててください」

私は山南の肩を押して、布団に無理やり寝かしつける。
うわ、顔赤いし、山南は絶対熱上がってるに違いない。

「あれだけ気を付けてくださいって言ったじゃないですか。
今は一番大切な時でしょう!?」

昨日、山崎の情報で武田観柳斎が枡屋主人の喜右衛門を新選組に捕らえてきた。
枡屋は本名を古高俊太郎と名乗ったが、それ以降だんまりを通し

ているらしい。
今は土方が尋問している所で、結果がそろそろ出る頃合だと私は見ている。
結果が出たら、あとは動くだけで、そうなればこれからの場に山南が一緒にいてくれたらどんなに心強いかと思ったのに、どうしてこうなるのか。

紙に書いていないことはどうすることも出来ない自分が歯がゆくて仕方がない。

「……あのさ、葉桜ちゃん」
「それは、熱も上がりますって」

怒っている私の側で、冷静に山崎と鈴花が突っ込むけど、私はそれどころじゃない。

「倒れないでくださいって言ったじゃないですかっ」

私の膝の上に大きな染みが落ちて広がってゆく。

「山南さんがいなくなったら、私は、私は……っ」

いつのまにか起き上がっていた山南の腕に私は包まれていた。
広くて、大きくて、暖かくて、優しい人の体に私は無心でしがみつく。
部屋の中に既に山崎と鈴花の気配はないことに、気がついていたから。

「心配させて、すまない」
「本当ですよっ」

私は顔を上げて気がつく。

「なんで笑ってるんですか。
私は本当に心配したんですよ！？」
「すまない。
葉桜君が心配してくれたというのが、思ったよりも嬉しいみたいで」
「笑い事じゃないんですっ」
「ああ、わかっているよ」
「もう本当に、心配、させないでくださいっ」
「悪かった。
今度からちゃんと気を付けるから、ね？」

抱きしめて、耳元で優しく囁いてなんて、そんな風に病人に慰めさせて、私は一体何をしているんだ。
ぼろぼろとみっともなく涙を溢してまで、私は慰められたいわけじゃないのに。

山南を無理やり押し返そうとするも、しっかりと抱かれていて容易に振りほどけない。

「山南さん、大人しく眠ってください」
「眠るまでいてくれるかい？」

山南はいきなり何を言い出すんだ。

「それは出来ません」

私ははっきりと告げる。

「今夜、私にはやらなければならないことがあるんです」
おそらくもう結果は出ているはず。
私の真剣なのを見て、山南の手が離れる。
「約束――？」
私が大きく頷くと、山南は大きく息を吐いた。
「山崎君によると、葉桜君が新選組にいる一番の理由だっけ」
私はもう一度頷く。
私がここに居る理由は既に近藤が一部の――試衛館の仲間には話していたのだろう。
山南はあっさりと、それじゃ仕方がないなと諦めてくれた。
大人しく布団に横になった山南に上掛けを引き上げながら、私は続ける。
「その代わり、明日からはちゃんと看病してあげますから」
「期待しないでおくよ」
「本当ですって」
じゃあちゃんと眠っていてくださいね、と念を押して私は部屋を後にした。
直ぐ後に山崎がその枕元に現れたらしいことを私は知っていたが気がつかない振りをした。

「押しが足りないんじゃない、敬ちゃん」

山崎の不満そうな声音に、山南は乾いた笑いを返して、直ぐさま寝息に変わったという。

「……それに無理しすぎ。
こんな敬ちゃんを放っておくなんて、葉桜ちゃん何を考えてんのかしら」

＊　＊　＊

私は山南の部屋を出て夕陽で朱色に染まった庭へ降りた。
歩きながら、懐からあの紙を出す。
夕日に染まる赤い紙は、不吉を呼ぶようで、私は少し怖い。
そろそろ古高は吐いたのだろうか。
いつ、あの場所へ行くのだろうか。
そんなことばかりが私の中を支配していて、落ち着かない。

私の隣に降りてきた影がその紙を取り上げる。

「またこれぇ？」

山崎は前もこれを見ているから、私の事情も知ってる。

「んー本当に何か書いてあるの？」
「うん」

山崎には眼を細めても陽にかざしても、見えないのだろう。
一番近しい弟も母も見えなかったのだから、山崎に見えるべくも

ない。
一通り裏返したりしてから不満そうに山崎は私へ突っ返した。
「それで、また今回のことについて何か書いてあるワケね」
「うん」
「それって、弱ってる敬ちゃんよりも大切なの？」
私は一瞬だけ逡巡し、迷ったけれど頷く。
「たしかに今回の任務はすっごく大変だし危険よ。
でも、だからって」
「わかってるんならさ、私の言いたいこともわかるよね、烝」
強く言い返すと、山崎からは嘆息が帰ってきた。
「わかってるけどぉ～っ」
「私に構ってるより、仕事あるでしょっ」
いってらっしゃいと送ろうとしたら、私はいきなり山崎から襟首を掴まれた。
急に近づいた距離に、私はらしくもなく動揺する。
山崎は男とか女とか関係なく綺麗だから、目の前に急に近づかれると動揺しないではいられない。
当たった額の温もりを眼を閉じていても感じるけれど、目を逸らすわけにはいかないから、私はまっすぐに山崎を見た。
「せめて始まるまではそばにいてあげなさいよ。
敬ちゃんの気持ち、わかっているんでしょ？」
それだけ言うと、返答も聞かずに消えた影に私は小さくゴメン、

と呟く。

山南が眠っている姿を見てしまったら、私はきっと山南が心配になって、これからの戦いに赴けなくなってしまうだろう。

守るべきものがある今はまだ、山南のそばには行けない。

本当は、「芹沢の代わりになりたい」と言ってくれた時にはとうに気がついていた。

山南が私を好いてくれているということも、私が惹かれていると言うことも。

分かっているからこそ、動けない。

あの手を掴んでしまうことは、再び哀しみが襲うことを意味するからだ。

もう一枚の紙を取り出す。

最後に書かれた、山南の名前は震える文字で。

「……っ」

頭痛と共に、青い空と鮮血が脳裏に浮かび上がる。

時が進む度にそれは鮮明になり、私を苛む影を見せる。

白い着物を着た人が、赤い花を散らして死んでゆくのだ。

誰の記憶なのか、現実なのかどうかも私にはわからない。

でも、あれはきっと過去じゃない。

これから起こる厭な未来だと妙な確信が私にはあるから、私は前を向いて進む。

山南は確かに大切な人だ。

だけど、山南を守るのは約束だからであって、大切な人だからということに置き換わってはいけない。

そんなことになったら、きっと私はどう行動したらいいのか分からなくなってしまうだろうから。

32#臥竜鳴動－1（後書き）

＜＜追記＞＞

別に山南さんを贔屓しているワケじゃなく。

やっぱりこの山南さんが倒れたことが外せないと思うんです。

なにより、この人を助けるにはどうしても。

（２００６／０４／２６）

リンク変更

（２００７／０６／２０）

改訂

（２０１０／０１／２０）

32#臥竜鳴動－2

山南の部屋を出て、数刻後。
日のすっかり落ちた暗い通りを歩く自分の足が、やけに重い気がする。
原因はたぶん、これから起こることを知っているからこその不安だ。
避けられない戦闘の中で自分がどれだけのことをできるのか、私には見当も付かないけど、私はやらなきゃいけないんだ。

大きく息を吸い、吐き出す。
それでも落ち着かない心臓の辺りを私は自分で強く掴む。

「よぉ、葉桜君。
なんか様子がおかしいねぇ」

隣からかけられる声に私は一瞬、動揺する。
見上げる近藤はこれからおそらく激しい戦闘が起こるとも思えないような柔らかな目をしている。

「緊張してるのかい？」

誰かに背中を軽く叩かれ、私の胸の中の何かが零れた気がした。

これから起きる「池田屋事件」は室内戦だが、私は別にこういう戦闘が初めてなわけもない。
道場をやっているころから、父と連れだってよく繰り広げてきたから、慣れているといえば、確かに慣れている。

「ホント、らしくないですよねぇ」

私は努めて平静な声を出したつもりだが、震えていることに後から気づいた。

本当に、私らしくもない。

今更血を見るのが怖いわけでもないのに、今夜の私はどうしてこんなに震えが止まらないんだろう。

「屯所に残っていても良かったんだよ？」

「イヤです！」

近藤から言われた言葉に私は即座に返す。

残っていたら――沖田、を守れないじゃないか。

藤堂だって大怪我をするし、人手はいくらでも必要なんだから。

近藤は大きくため息をついて、がしがしと頭をかいた。

「迷いで剣が鈍らなきゃいいけど」

急に何を言うのだろう。

迷っているようなら、そもそも私は新選組にいない。

それに私は他の者とは違うが、信念も目的も明確なのだ。

揺らぐコトなんて、ない。

強く近藤を睨みつけたとたん、私は背中に大きな重力がかかり、一瞬体勢が崩れそうになる。

「ねえ、葉桜さん。

今回はきっと盛大な斬り合いになるでしょう。

楽しみですね！」

「お、沖田っ」

背後から近付いた沖田が飛びついてきたのだ。

沖田の場合は私よりも単純で、強い相手と戦えれば何でも良いのだろう。

それは羨ましいようでもあるし、憐れでもある。

「今日こそは本気の葉桜さんを見せてくださいね」

まだ言ってるのか、と私は嘆息する。

「何その、本気の葉桜君、ってのは？」

くいついてきた近藤に、沖田が人の背中で目を輝かせながら答える様子が目に浮かぶ。

「葉桜さん、すっごく強いのにいくら稽古しても見せてくれないんですよ。

いつも僕に勝たせて終わらせるんです」

「へぇ～」

近藤が意味ありげな、イヤな視線を送ってくる。

だって、沖田を勝たせないと稽古が終わらないし、私は仕事の後はさっさと休みたいんだから、当然じゃないか。

「僕の打ち込みに合わせて木刀を放り投げて、はい、お終い、って言われても納得いきませんよ」

その後沖田は必ず打ちかかってくるクセに、よく言う。

「そのあとはいくら打ち込んでも全部避けて、結局逃げられてしまうんです」

道場を出たら私闘になるから、私闘禁止の規則に私は随分助けられてる。

引いては土方に助けられているとも言うかもしれない。

後で思い出したら礼でも言っておこうとひそかに思う。

「いいかげん退けなさい、沖田」

言ってみると珍しく素直に、沖田は私の背中から降りてくれる。

かと思えば、隣に並んで、しっかりと私な手を掴む。

「……近藤さん、これどうにかしてよー」

縋るように私が近藤を見ると、彼は至極楽しそうにくつくつと笑っている。

「総司、今日は存分に本気の葉桜君を見せてもらいな」

「煽らないでくださいっ」

嬉しそうに満面の笑顔で頷いている沖田を横目に、私は苦笑いしかできない。

たしかに今夜の戦闘は普段の半端な気持ちでやれば、命に関わるだろう。

だから、今同じ班にいる沖田には必然的に見せることにはなるけど、それは沖田を守るための剣であって、彼自身は決してみることのできない剣なんだ。

恨めしく見上げた天才剣士は、鼻歌でも歌いそうにぶんぶんと私

と繋いだ手を振り回す。

同じように睨みつけた近藤は、トントンっと自分の肩を叩いた。

口の動きで近藤が言っていることはわかる。

（緊張はとれたようだね）

確かに緊張はとれたけど、始まる前から変な疲れが出たんですけど、どうしてくれるんですか。

私の無言の訴えは、近藤にも沖田にも届かないようだった。

こうして私たちがじゃれあっている間も、徒に時間が過ぎてゆく。

私たちが探しているのは禁裏に火を放ち、混乱に乗じて会津公を討って公武合体派の中川宮様を幽閉し、天子様を長州に動座奉らんと企てる不届きな攘夷志士の潜伏場所だ。

本来なら古高が吐くのを待ちたいところだが、計画は既に大詰めらしく、急を要する。

だから、今近藤が率いる班と土方が率いる班、それから監察方の三手に別れて捜索しているわけだ。

（烝、遅いなあ）

こんな虱潰しに探しても見つからないのは目に見えている。

だから、私は山崎が見つけるのを待っているのだ。

おそらく近藤も、他に山崎を知る者たちはきっと同じく空を見上げるだろう。

真っ暗な夜空には星明かりばかりで、細い月ではあまり人の姿も見えない。

そんな空だから、よほど目をこらさなければ、飛翔する黒い影も

見つけられない。

「おっとぉ……？
こいつは、烝の烏か」
「ええ、近藤さん」
「みんな、あの烏のあとを追いかけるぜ！」

闇夜を舞う非常識な烏は山崎の子飼いだ。
足を早める近藤に続き、沖田、永倉、藤堂も続く。
私も遅れずに近藤に続く。

池田屋の店先上空をぐるり旋回する烏の下を行くと、闇の中から忍装束姿の女性が現れる。
もちろん、山崎その人だ。

「勇ちゃん、遅かったじゃない」
「ああ、遅れてすまねぇな。
で、やつらがここにいるってのは間違いないのかい？」
「ええ、間違いないわ。
宮部鼎蔵、吉田稔麿、他にもそうそうたる勤皇家が雁首並べてお話中よ」
「そうかい。
分かった」

近藤に報告を済ませた山崎は、少しだけ何か言いたげな視線を私に向けてきたが、すぐに反らした。

「じゃ、報告はすんだコトだし。
アタシはそろそろ帰るわ」

言うやいなや姿を眩ませた山崎には悪いが、今は山南を気にかけている状況じゃない。

「ははは、まったく勝手なヤツだぜ」

緊張を隠す軽い笑いを零した近藤は、次にはきりりと気合いを入れ直す。

「さてと、本腰入れていこうか！」

「局長どの！
念のため軒下の武器を取り上げておきましたぞ！
誰あろう、このわたくしが！」

「あはは！
お手柄ですねぇ、武田さん。
それじゃ武田さんには他の武器が隠されていないかの確認と出入り口の封鎖をお願いしましょうか」

「はっ、この一命を賭して！」

武田に出鼻をくじかれた気もするが、私たちはそれからすぐに池田屋へと足を踏み入れた。
一見、他とは何等変わらない店だ。

「主人はおるか！
御用改めである！」

だが、近藤の言葉に対して、明らかな動揺が伺える。

「しっ、新選組……！
皆様方、御用改めでございます！」

流石は山崎だ、とひそかに私は口端をあげた。

「我々は新選組である！
刃向かう者はみな敵とみなす！
……ま、やつらが大人しく応じるなんざありえねぇけどな」

近藤の声が池田屋全体に響き、すぐに戦闘は始まった。

近藤、沖田と共に二階へ行った私の前へ、直ぐに志士が躍り出る。
だが、すでに抜刀していた私が腕を振るう前に、その姿が揺らいだ。
倒れた彼の向こうで沖田が赤く濡れた刀を下げて、笑っているのが見える。

「私の剣が見たかったんじゃないの？」
「こんな雑魚相手に貴方は本気を振るわないでしょう？」

屁理屈を言う沖田に私が呆れた息を吐き出すと、そのやりとりを見ていた近藤が微笑む。

「ここは総司と葉桜君に任せて大丈夫そうだね」
「ええ」
「もちろん」

笑って答えている私に斬りかかってくる長州藩士を軽くいなし、剣柄を首の付け根に叩きこんで昏倒させる。
甘いと言われようがなんだろうが、これが私のやりかただ。

「俺は一階の連中を追うから」

近藤の背中を見届けた後、私は沖田と二人で背中合わせにやる気満々な攘夷志士たちと対峙する。

「それにしても、もう少しぐらい葉桜さんが隙を見せてくれてもいいのに」

「なにバカいってんだ」

沖田はこの状況でそんな隙のある馬鹿が生き残れるはずがないと分かっているだろうに、無茶を言う。

「死ねえええええぇっ！」

「遅ぇ」

私は自分に向かって打ち下ろされる剣を払い、相手の急所に蹴りを叩きこむ。

続けて、蹲る男の鳩尾を蹴り付けると相手は動かなくなった。

「葉桜さんは守ってほしいとは言いませんよね」

そんな殺さずの剣を奮う私とは対照的に、背後では肉を断つ音、血の噴き出る音、絶命の叫びが聞こえてくる。

「そんな殊勝な女が新選組にいられると思ってんの？」

もっとも私のような甘い方法はそう長くはもたないし、戦闘中に昏倒させた相手がいつ起きて、剣を向けるかしれない。

それでも、私はできるだけ殺したくはないんだ。

一瞬体勢を崩した私に斬りかかってくる相手に懐剣を投げつけると、相手は剣を取り落とした。
私は落ちた剣から間一髪体を避け、足を蹴り上げて、相手の顎に命中させる。

「はは、これは楽しくなりそうですね」

戦闘の最中、急に沖田の空気が歓喜の興奮を含み出した。
振り返った私は嘆息する。
沖田が今対峙している相手は吉田稔麿といって、長州藩士だ。

「新選組ですか」

吉田はあきらかに他の志士とは違うピリピリとした隙のない空気をまとい、私たちを、沖田を見据えている。

「はい。
沖田総司といいます」

沖田の名乗りに、吉田が頷く。

「ああ、聞いたことがありますよ。
新選組に笑顔で人を切り捨てる男がいるらしいですが、確かその男がそんな名前でしたね」

芹沢が派手に動いていたから、あまり知られていなかったが、沖田も負けず劣らず、評判が悪い。

「我々は日本を正しく導くために日々精進しています。
あなた方のような、ならず者とは違うのです」

黙って眺めていようかと思っていたのだが、ならず者、という言葉に私は思わず反論してしまった。

「京に火をつけるような計画を立てるのはならず者じゃないのかよ」

私を見た吉田が一瞬意外そうな顔をする。

「おやおや、こんな可愛いお嬢さんまでたぶらかしているのですか」

「たぶらかされてなんていません！」

「葉桜さん、いいんですよ」

「私は私の意思でここにいるんです。

たぶらかされたなんて、誤解も甚だしいっ」

私を宥め、沖田が吉田に完全に向き直る。

「確かに、僕に限って言えば思想などないと言われても間違いではありませんね」

私は私に向かっている相手を再び昏倒させつつ、沖田の言葉を聞く。

沖田に自覚があったこと自体には少し驚いた。

「僕はただ、無心に剣を振るいたい。

強い人と戦いたい。

それだけのために生きてるんです」

沖田の願いは、憐れと思うなというほうが無理という話だ。

剣に通じなければ興味を持てないというその生が私には憐れでならない。

「そして僕が今興味あることは、あなたがどの程度強いかということだけですよ」

不敵な沖田の言葉に、吉田は口角を上げる。
それは軽蔑の印だろう。

「ふっ、なるほど。
ただ剣のみに殉ずる、ですか」

剣を構える吉田に、寸分の隙などない。
彼だって信念をもった憂いの志士だ。
吉田は剣にしか興味を持たない、思想のない沖田に負ける気などないだろう。

「言葉での語らいは意味がないようだ。
なら、剣で語らいましょうか」

吉田の剣が風を切る。

「ハッ！」

それぐらい受けられないような沖田じゃない。
私には澄んだ音で沖田が剣戟を弾く姿が浮かぶ。

「ふふっ」

相手が気の毒に思える嬉しそうな沖田の微笑が室内とは言え離れている私にも聞こえてくる。
こういう時の沖田と殺り合いたくはないと私はつくづく思う。

「そのような笑顔で殺気も込めず致命の剣を振るうとは、まさしく魔性の剣」
「ふふふ、楽しいですねぇ」
「あなたとは、相容れません。
ハァアッ！！」

吉田には最高の一撃だったに違いない。
それほどの鮮やかな一撃だったのだが、相手は本物の天才剣士。
沖田が一重で吉田の剣を交わし、吉田の体に吸いこまれるように沖田の剣が薙ぐ軌跡が私には見えてしまった。

「本当に、恐ろしい男だ」

倒れた吉田の言葉に、私は同意する。
沖田は、恐ろしい。
人を斬るということのなんたるかを真にはわかっていないのでは、獣と大差ない。

ただ無邪気で純粋な心根のまま、天才の名を欲しいままにしてきた沖田。
それが終わる時が来ると私は知っている。
いや、終わりがあるからこそ、もしかすると沖田は天才たりえるのかもしれない。

勝ったはずの沖田が口許を抑え、両目を見開いている様子を私は冷静に眺め、逆刃にしていた刀を返す。
こんな状況で至極冷静が自分が滑稽だが、幸か不幸かこの場に私を見る仲間は沖田の他にいない。
さぞ私は冷めた目をしているのだろう。

「……かはぁっ！」

私は沖田を背に庇い、剣気にこれまでにない殺気を籠もらせ、取り囲む攘夷志士らを牽制する。

「休んでなさい、沖田」

「なっ、葉桜さん！？

僕はまだ……！！」

言葉を繋げることもなく、ドサリと沖田が意識を失い倒れた音を聞く。

「……本気の剣、見せてあげる。

――もう聞こえていないだろうけど」

向かってくる志士に、私は迷いなく心臓を狙って剣を突く。

沖田を庇いながら、峰打ちなんて芸当はできない。

でも少なくとも仲間が来るまでは、沖田に傷一つ付けさせやしない。

こいつは、私が守ると決めているんだ。

もう一本腰に差した刀を手にし、私たちを囲む敵に私は構える。

「死にたいヤツからかかってきなさい！

今度は、手加減できないよ」

斬りかかってきた相手の剣先を払い、勢いづいた相手の心臓に迷わず突きを放つ。

私の前にどぅっと倒れる志士の姿に、他の志士らが怯む様子がわ

かる。

「女一人だからって、この私を抜けるなんて思わないコトね」

強気に発言したものの、情けないことに私は土方が来てくれたと同時に倒れてしまった。

攘夷志士らは決して弱くはなかった。

ただ、その数に私の体力がもたなかっただけのことだ。

「遅ぇーよ、土方」

「葉桜!!」

頼もしい仲間の姿を目にした一瞬の後、私の世界が暗転した。

３２＃臥竜鳴動－２（後書き）

＜＜追記＞＞

池田屋事件でのヒロインの役割は、沖田の盾。

沖田ＶＳ吉田稔麿戦はネタバレというか、ヒロイン部分以外はゲームそのまま。

この吉田さん、ちょっと好きです。

よっぽどヒロインと一度接触があったとかいう設定を入れようか悩みました。

後で面倒になるので止めましたけどね。

（０６／０４／２４　１５：１１）

しかし、殺陣って難しい。

書き加えました。

（０６／０４／２６　１０：４８）

改訂

（２０１０／０１／２１）

32#臥竜鳴動ー3

瞼越しに温かな光りを感じ、私は自然に目を覚ました。
室内は暗いけれど、障子から入る光はすでに昼間の明るさだ。
真っ先に目に入った天井が見慣れたものだったから、私は自分の部屋の布団に寝ているのだとすぐにわかる。

起き上がると体中が悲鳴を上げるが、これぐらい昔の稽古に比べたらなんてことはない。
隣室の鈴花の布団が畳まれている様子を見て、私は自分がかなり遅くまで寝ていたのだと思った。

寝間着用の白の着流しに着替えさせたのは誰かわからないが、流石に身体を拭いてくれることはなかったらしく、まだ自分の身体に血の臭いが強く纏われている気がする。
井戸か湯浴みに行くのも考えたが、私は近くにある濃い藍染めの羽織を引っかけ、とりあえず部屋の外へ出ることにした。

「……で、どうなんだ？」
「ああ、先生によると」

屯所内が静まり返っているので、こそこそと話している近藤の部屋の声も聞き取れる。
私は縁側から出ようとした足を止め、自然に気配を消す。

でも、その先は二人とも押し黙ってしまって、何を話しているのかわからない。
話すなら早くして欲しいのに、と私がいらついていると、苦笑と共に局長室の障子が開かれた。

「いくらなんでも、そこで気配を消したら不自然だって」
「あ、やっぱり？」
私がにかりと笑って返すと、近藤には大きく息をつかれた。
差し出された手に手を乗せて、私は近藤の部屋の中へ招き入れられる。
「おまえ、もう起きて大丈夫なのか？」
室内で驚いている土方に笑って返し、手を引かれるままに近藤の隣に座す。
自然な流れで座ってから、私は首を傾げる。
常ならば、私は近藤とも土方とも離れて座るのに。
「で、俺に何か用事？」
「まだ休んでいていいんだぜ？」
気遣う様子の二人に、私は大丈夫と返す。
「昨夜の守備はどうでした？
それから、沖田とと……けほっ」
咳込む私の背中を軽く叩いてくれる近藤に、軽く頭を下げて礼をする。
既に起きたことなのに、言えないのかと私はまた心中で首を傾げた。
「沖田と他の隊士の怪我の具合は？
鈴花は？」

矢継ぎ早に質問した私に、近藤は一つずつ丁寧に答えてくれた。

昨日の作戦は大成功で、勤皇家の宮部鼎蔵、吉田稔麿らを打ち倒し、多数の長州藩士を召し捕ったということだ。

沖田はまだ眠っているそうで、大半の隊士がかなりの重軽傷を負っている。

特に藤堂は額に深い傷を受けたという。

沖田と藤堂のことは知っていたし、あの状況から重軽傷者が出ること自体は納得できる。

「それで、さっきの話は沖田の話？
それとも藤堂？」

全て聞いた後に私が問いかけると、二人共が苦い顔で私を見た。

「お前、どこまで知ってやがる」

唸るような土方の声に、私は乾いた笑いを返す。

「烝ちゃんに聞いてるでしょ？
概要ならまかせて」

親指をたてた私の頭をうしろから小突かれる。

怪我人になにするのさ、と小突いた相手を恨めしげに見やると、丁度近藤は立ち上がるところだった。

「さて、じゃあそろそろ俺は容保様のところへ御報告に行ってくるよ」

「ちょっと、沖田の容態は？
藤堂の具合はっ？」

近藤を引き止めようとする私の肩を土方が押さえた一瞬、目の前が白くなり、私は身体を強張らせた。

「俺が説明しとく。
近藤さんは行ってくれ」
「悪いな、トシ。
頼むわ」

すぐ近くにいるのに遠くの方で二人の会話が聞こえ、次いで襖の閉まる音が響く。
耳鳴りがするわけでもないのに、水中で会話を聞いてるみたいだと思った。

「葉桜も痩せ我慢してねぇで、部屋に戻れ」
「説明するって」
「傷が治ったら教えてやる」
「ず、ずるい。
土方、さん」

私を引き寄せる力に逆らわず、私は近くにある気配に寄りかかる。
漂ってくるこの香りは、土方の香だろうか。
土方は見た目通り格好をよく気にする人だから。
自分の足が地を離れる感触に、私は土方の着物の衿を強く握る。

「次に起きたら、ぜっっったいに、教えてください、ねっ」
「次に葉桜が起きて、普段通り動けていたらな」
「やっぱりずるい～っ」

近藤の部屋から移動した距離はそう遠くない。
何しろ、私の部屋は局長室隣だ。
当然鈴花はその隣。

布団に降ろされた感触で、やっと私の痛みも和らぐ。

「無理するから、傷口が開いてるじゃねぇか」

医師を呼んでくるという土方の袖を、私は掴む。

「それより、沖田と藤堂は？
沖田、まさか労咳とか言わないよね？」

私の言葉に土方の気配が鋭くなり、だが、すぐに誤魔化すように、彼は笑顔を取り繕う。
普段から笑わないからそれがどれだけ不自然なのか、この人は気がついていないのだろうか。
芹沢の時だって、それで気がつかれたっていうのに。

「そんなわけねぇだろ。
総司はちっと風邪引いてるだけだ。
平助も命に別状はない」

風邪で血を吐いて倒れたりしないことも、労咳の症状も私は知っている。
そんなことで騙されるわけ無いのに、その取り繕われた嘘が哀しくて、私は土方から手を離した。

「葉桜？」

「沖田、怪我はしてないよね？」
「ああ、おまえのおかげでな。
俺から礼を言わせて貰う」

優しく頭を撫でる手を避けて、布団を被る。

「いいよ、そんなの」

今回に限って、私は沖田のために行ったんだから。
沖田が自分を過信しているとは言わないが、一人で突っ走った上であんな風に倒れたりしたら、殺されてもおかしくない。

部屋を出ようとする影に対し、私は目だけを上掛けから出して、言葉を紡ぐ。

「あのさ、もう聞かないから、だから」

沖田の病を止める方法なんて、私は知らない。
医術は多少かじってるけど、労咳を治す方法はまだ見つかっていなかったはずだ。

このまま私は何もできないのだろうか。
考えたところで何にもならないことはわかっている。
私にできることはそばにいることだけだ。

「少しの間、そばにいてくれない？」

ただこの不安が消えるまで、誰かにいて欲しかった。
温もりが、ほしかった。

＊　＊　＊

近藤さんの部屋から葉桜を隣の彼女の部屋に送るまでの間、抱いた柔らかな体からはまだ血の匂いが消えていなかった。
満身創痍の上、気を失っている状態で葉桜を風呂に入れるわけにはいかなかった故、桜庭に濡れた手ぬぐいで拭かせただけだからだろう。

葉桜は総司を一人で守り続けていたのだ。
深傷がないのだけが幸いだったといえる。
元々、並の剣士以上の腕を持っていることは知っていたが、守りながら、しかも室内で戦うなんてのは簡単にできる芸当じゃない。

意外だったのはそれだけの強さをもっているのに、それ以上に脆い精神を抱えていることだ。
葉桜は直ぐに立ち直るが、それでも崩れやすい心は変わらない。
芹沢さんを斬った後も随分と立ち直るまで時間がかかっている。

震える手でしっかりと俺の着物を掴む葉桜の細い腕には、今は見えない大きな傷がある。
それが何か関係でもしているのだろうか。

俺が葉桜を布団に降ろすと彼女は呼吸を止め、完全に体を寝かせると安堵の息を漏らした。
よく見ると体中に撒かれた包帯の数カ所からもう血が滲んでいる。

「無理するから、傷口が開いているじゃねぇか。
先生を」

まだ新選組内に留まっている医者を呼び行こうと立ち上がりかけたが、俺は袖を引かれ、振り返った。

「沖田と、藤堂は？」

こいつは自分が致命傷となるほどの重症ではないとはいえ、どれだけの怪我をしているかわかってねぇのか。

人の心配をしていられるほどの余裕はないはずなのに。

「沖田、まさか労咳とか言わないよね？」

先に言われた言葉に、俺は一瞬怯む。

まだそうと決まったわけではないというのに、葉桜は病名まで言い当てるか。

例の「約束」が関係しているのかもしれないが、話そうとすると何かが葉桜の口を閉ざさせるらしい。

「そんなわけねぇだろ」

だが、今は総司のことを葉桜に悟られちゃいけねぇ。

こいつが自分の怪我を治すことを先に考えてくれなきゃ、俺も――おそらく総司も――安心できねぇんだ。

そうでなくとも今はまだ「かもしれない」状況で、確定じゃねぇ。

近藤さんも俺も信じたくない気持ちが強いから、総司にも報せてねぇってのに。

俺の言葉に葉桜は顔を曇らせて、仕方なくといった様子で袖を離した。

それから、普段の葉桜からは想像も付かないぐらい、哀しそうに

女の顔で微笑む。

「沖田、怪我はしてないよね？」

寂しそうな声と姿に、抱きしめてしまいそうな自分を抑えて、俺は葉桜の頭を撫でる。

「おまえのおかげだ」

すると、葉桜は上掛けを引き上げて、姿を隠してしまった。

柄にもなく恥ずかしがっているのだろうか。

今度こそ医者を呼びに行こうと俺が立ち上がると、小さな小さな声が届いてくる。

「もう聞かないから、少しの間、そばにいてくれないか？」

らしくなく弱気な葉桜の呟きに、俺は動けなくなる。

本当なら俺は叱咤してやらなければいけないところだろう。

剣で戦う新選組では弱い心を持っていること自体が、危険を呼び込む要因ともなりうる。

「ああ」

だが、新選組にとっても俺にとっても、もう葉桜はなくてはならないほど深く根付いていた。

心密かにこの女隊士に惚れているものは多いが、葉桜は告白されても気がつけねぇほどの鈍感ときてる。

だからといって、力に任せればすべて返り討ちしてしまうし、弱

みにつけ込もうものなら男としての自尊心も剣士としての自信も徹底的に叩き潰される。

それでも尚、好かれるのは葉桜の人間性なのだろう。
近藤さんとは別の力で周りを惹きつけてやまない。
ましてや、葉桜は女であるだけに隊士たちは恋という錯覚に陥り、道を踏み間違える。

そこで終わるだけなら、葉桜はただの毒にしかならねぇ。
だが、しっかりとその後立ち直らせ、さらには全うな人間に育てる術ってヤツを知ってやがるから、葉桜はタチが悪い。

ただの毒なら放り出せたものを、と考える俺の目の前では、静かな寝息をたてる女が一人。
俺という男と二人でいても警戒ひとつしない葉桜は、安心しきっているのだろうか。

それは正しくもあるが、一抹の虚しさを感じずにはいられない。

「ふっ、俺まで染まっちまってりゃ世話ねぇな」

俺は寝息を立てる葉桜の髪を避け、その額を軽く叩いた。
葉桜はかすかに呻き、だがすぐにまた深く眠ったように見えた。

32#臥竜鳴動－3（後書き）

＜＜追記＞＞

本隊、土方側からの池田屋事件。

土方が来てからヒロインは倒れてしまったので、そのまま掃討戦終了。

起きてから沖田の所へ行くか、平助の所へ行くか、永倉の所へ行くか、山南の所へ行くか悩みましたが、

一番状況がわかる近藤のところへ行ってみました。

三章まで終わったのに、よく見ると原田がいない！

気が向いたら出します＜ぇ。

てか、章ごとに更新って、けっこう凄い量ですね。

ほぼ一日一話のペース。

ありえない！

（たぶんここが長すぎるだけ、と信じたい）

リクエストがなければイベントはほとんどすっとばしです。

起こして欲しいイベントはお早めにメールや拍手等でリクエストしてください。

（０６／０４／２６　１５：２２）　新規

視点での文体による呼び名変更です。

ご指摘があったので…。

（０６／０６／１４　１６：３１）

土方のモノローグの人称を修正。

（０６／０７／０６　０９：１５）

リンク変更

（２００７／０６／２０）

改訂
（2010／01／25）

33#明保野

唄が聞こえる。
闇夜の中に閃光を煌めかせ、ひとつひとつ命を消してゆく哀しい唄だ。

どこでどう間違ったのか、誰が何を間違えたのか。
それともそれらはすべて只の結果であり、変えることの出来ないことであったのか。

元治元年六月十日、幕府の命により池田屋事件の残党捕縛に当たっていた新選組はひとつの事件に遭遇した。
後の明保野亭事件と呼ばれる出来事である。
東山の料亭に長州藩士が潜伏しているとの情報を得た武田は、新選組隊士十五名と前日より応援に来ていた会津藩士のうち五名を連れて、現場へ向かった。
その現場で会津藩家中の柴司が、座敷にいた武士を制止しようとしたところ相手が逃げ出したため、取り押えようと追跡のうえ槍で傷を負わせてしまう。
直後に相手が浪士ではなく土佐藩士の麻田と判明したため、その場で解放した。

当初、柴の行為に問題無しとして念のため会津藩から医師と謝罪の使者を送り、これに対し土佐藩側も最初に名乗らなかった麻田にも落ち度があると理解を示していた。
が、翌日に麻田が「士道不覚悟」として藩により切腹させられてしまったことにより若手土佐藩士たちが「片手落ち」だと激昂し、会津藩と土佐藩の外交関係に亀裂が入りかねない事態へと発展してしまっていた。

さらに翌日、柴司自らが望んで謝罪の意で切腹をし、事件は有耶無耶のウチに幕を閉じた形となった。

昼間、山南が鈴花とその話をしたあとで久しぶりに塾を開いたと、私は床に座った状態で見舞いに来た鈴花から聞いた。

「山南さんは、柴さんや土佐藩士の死に、自分を重ねているんです。死ななければならないこと。
殺さなければならないこと。
池田屋の件で、これからもっと新選組は剣を振るうことになるでしょう。
その力を増大させていくでしょう」

悩みに悩んで相談に来た鈴花に、私は何を言うべきか迷った。

「そんな中で、山南さんの苦悩は理解してもらえるんでしょうか。
誰よりも真剣に考える、山南さんがとても痛々しくて。
多分、もう新選組は、責任を果たす能力があろうとなかろうと、剣を振るわざるを得ないでしょうから」

だから、と鈴花は毅然とした顔で言った。

「せめて、私だけでも山南さんの苦悩を知っていよう、思いを知っていようと思います。
それが私にできるただひとつのことだから」

鈴花は強くて、優しい女の子だ。
こうして人の心に触れられるから、山南の心まで感じ取ってしまったのだろう。
新選組にいれば、誰しも遭遇してしまう、この世の理不尽さや幕

府の在り方の問題というものに、気が付いてしまう。

鈴花がいなくなり、しばらくは私はまた横になっていた。
夕餉の薫りが漂ってきた頃、夕闇で薄暗い部屋の障子を少し開け、ゆっくりと移動して寄りかかる。
今朝からずっと聞こえてくる唄は、どこから聞こえてくるのだろうか。
私の心の内から聞こえているのだろうか。

「――」

私は口を小さく開き、喉を鳴らして静かに唱う。
唄に合わせ、思いつくままに言葉を並べ、音を並べ、ただ紡ぐ。

時はまだ来ない。
けれど、近づいてくるのを私は確かに感じる。

山南との別れの時は誰よりも早くて、共にいられる時間は短いと最初からわかっていた。

私の仕事は基本的にずっと誰かと居続けると言うことがない。
依頼されればどこへだっていくし、どこでだって仕事する。
いつだって出会があって別れがあった。

だけど、今回はなにかが違うのだ。
理由はわからなけれど、違う、ということだけがはっきりとわかる。
今までだって短期間で気の合う人はいたけれど、こんなのは初めてだ。

私は口を閉じているのに唄は消えない。
ただ静かに世界へ広がり、水面に波紋が揺れるように、ただゆっくりと静かに広がってゆくのを感じる。

「葉桜さん」

わずかに唄が遮られ、私はいつのまにか閉じていた瞳を開いた。
少し離れた場所にぼんやりと才谷が立っているのが見える。

「何しちゅう」

私は小さく笑って、縁側からゆっくりと降りようとして、躓いた体を才谷に柔らかく抱き留められていた。

「ありがと」
「えずい怪我だと聞いちゅうよ。
大人しくしちょき」
「はっ、大丈夫だ。
梅さんがいてくれるだろう?」

無理せずに、私は才谷の胸に顔を埋める。

「葉桜さん?」

才谷にはここに来る前にも会った。
だけど、彼もまたいつかはいなくなるのだろう。
置いていかれなくても、私が置いていくのだろう。
いつか離れていくものに踏み込みすぎてはいけないとわかっているのだが。

「山南さんを助けたいんだ」
弱気な言葉が零れた。
「だけど、どうしたらいいのかわからなくて、何をしたらいいのか、わからなくて。
山南さんの心はどうしたら救える？」
鈴花はその苦悩を、思いを知っていようと言った。
ならば、私には何が出来るだろう。
知っているだけじゃ救えないと、そうわかっているのにどうしたらいいのかわからない。
山南の生きる道はどうすれば切り開けるのだろう。
「葉桜さんは優しいから、考えすぎちゅう」
頭を軽く叩かれ、顔を上げると才谷は柔らかく笑んでいた。
「その半分でもわしに向けてくれるといいがやき」
少し拗ねたように言われて、私は笑った。
「何を言っているんだ。
梅さんは自分の道をしっかりと歩んでいるだろう？
それこそ、誰の意見も関係なく、自分の進みたい道を進んでいるじゃないか」
「ああ、そうちや。
ははははっ、やっぱり葉桜さんは笑顔が一番いい」

ぐりぐりと私の頭を撫でてから、おもむろに才谷は私を抱え上げて屯所へと上がり込む。

「おーい、土足だぞ」
「はっはっはっ」

才谷は全然意に介さず、私をそっと布団に横たえた。
そして、目を閉じない私の目蓋にそっと自分の手を翳して、囁く。

「山南さんのことは心配しやーせき、今はゆっくり養生していや」

そういうわけにはいかない。
が、ゆっくりと微睡みが広がってゆく。

「山南さんだけじゃ、ないんだ」

眠りの間際に訪れる不安が、私の口をつく。

「私は誰にもいなくなってほしくない、から。
そのためならどんなことでもできる、けど。
私が何をしても変えられないことがあって、」
「葉桜さんはだれちゅうちや」

遮るのは柔らかだが、その先を強く止める声だ。

「ここにいてあげるから、ゆっくりねちょき」

誘われるままに私は深く深く眠りの淵へ落ちていった。
だから、才谷がどんな風に自分を見つめているかなんて気づきもしなかった。

「葉桜さんは優しすぎる」

才谷はゆっくりと繰り返した。

３３＃明保野（後書き）

明保野亭事件はちょっと難しいですね。
　単純だからこそ、難しい
梅さんは神出鬼没ですね。
（２００７／０６／２０）

改訂
（２０１０／０１／３１）

３４#だんだら羽織（前書き）

元治元年水無月

３４#だんだら羽織

池田屋の件での怪我も癒えたが外出を止められている私は、せめてもと屯所内をふらつくようになった。

稽古はある程度すると、やはりまた追い出されてしまうから、居場所がないのだ。

とっくに治っていると本人が言うのに、周囲はまったく信用してくれない。

それは哀しくはあるものの、こういう心配は、私を仲間と認めているからだとわかるから、嬉しい部類に入る。

そんな調子でふらふらと狭い屯所ないを散策していたのだが、誰かの疲れた声に吸い寄せられ、自然とそちらへ足が向かっていた。

「はぁ～あ、池田屋で討ち漏らした残党狩りがなかなかはかどらねー」

う、と耳が痛い一言に私が怯んでいると、さすがにそれを呟いていた原田に見つかってしまった。

原田は気配を消しても勘でわかるというんだから、厄介なやつだ。

「あん？

そんなところでなにしてんだよ、葉桜」

まだ安静中じゃなかったか、という言葉を言わせずに私は右手を上げて、縁側に座る原田を制する。

言いたいことをわかってくれたのか、しかたねえなと言いながら、原田は私を手招きしてくれた。

隣に座れと、隣を叩く。

「仕事出来なくて悪いね」

「いや、葉桜は充分やってくれただろ？

総司が怪我一つしてないのはおまえのお陰っていうし、俺からも礼を言うぜ」

「いいってば」

あの日以来、元試衛館の出身という連中には会う度に私は礼を言われてしまって、少し居心地が悪くなる。

あれは知っている私がやるのが当然のことなのに、皆大げさなことだ。

それに私は藤堂が怪我をすることも知っていたのに、沖田を選んだ。

むしろそれを責められるべきなのに、誰もそれを言わない優しさが時々ずきりと私の胸を痛める。

「しかしよ、戦場で倒れるなんてのは感心できねーな」

「あ、あはは……いやぁ、土方がきたと思ったら安心しちゃってね」

私だって、まさか土方が来たとたんに自分が倒れるとは思わなかった。

いくら土方が来たからって、敵陣ど真ん中でなんて、ありえなさすぎる。

あの時のことに想いを馳せる度に私は考えてしまう。

もっといくらでもやらなきゃいけないことがあったというのに、自分に出来たことと言えば、沖田を守るだけで精一杯だった。

階下では藤堂が額を斬られ、守っていた永倉だって満身創痍だっ

たという。

もっと力があればとも思うが、力があってもあれは簡単にはどうにもならないだろう。

信念を持つ相手と交わす剣は、ひどく私を疲れさせる。

それでもたぶん今回一番痛感したのは、自分自身の体力のなさだった。

もともと体力はある方だったし、上京前の旅でかなり増やせたつもりでいたんだけど、まったくの気のせいだった。

普段の不摂生が祟ったのだろう。

ともあれ、今後の課題は体力と持久力だ。

今回ぐらいのことで倒れていては、話にならない。

「話によると随分色っぽい格好だったんだって？」

原田の台詞で、私は現実へと引き戻される。

「なにそれ？」

「何おまえ、あの時の自分の隊服がどうなってたかしらねーの？」

目を覚ましてから、あの羽織りを見ていないことに気がついてはいたが、私は大して気にも止めていなかった。

休養中で隊務もないから着る必要もないし、それに隊務に戻るにしてもあの浅黄は目立ち過ぎる。

それでも、また隊務の度に必要なものなのだから、完全に回復する前には新調しなければならないだろう。

聞き返した私に原田があまりに助平な笑顔を浮かべるので、思わず私は後退りした。

「治せないぐらいあちこちが切り裂かれててよ、胸の辺りなんてばっくりいってたって聞いたぜ」

見たかった、と本気で悔しがる原田の足を、私は無造作に蹴りつける。

「いてぇっ！」

憶えてるワケがない。

私は池田屋で土方を見てから、屯所で目を覚ますまでの一切が記憶にないのだから。

「そっかー、じゃあ新しく作らないといけないのか？」

目立つ衣装はあんまり好まない私は、深く深く息を吐く。

臑を押さえて涙ぐんでいた原田がそれにあっさりと返してきた。

「いや、いらねーんじゃねぇ？

あのだんだら染めの隊服、着用禁止になったらしいぜ」

「え、マジで？」

「まあ、あんなモン着て歩いたら目立って仕方ねぇからなぁ。

しょうがねーよな」

そうだよね、しょうがないよね、と原田に頷きながらも私の顔には隠せない嬉しさがにじみ出ていたらしい。

「そこまで露骨に喜ぶなよ。

特に近藤さんの前じゃやめとけ」

「うん、わかったっ」

満面の笑顔で頷いた私にひとつ息を吐き、原田はまた残党狩りのために屯所を出て行った。

それを見送ってから、私も同じ道を辿り、屯所の出入口を目指す。

原田と話していたら気分も良くなったし、新しい羽織でも買いに行こう。

報奨金で新品の刀を買うのもいい。

今回のので流石にボロボロになってしまっている愛刀はしばらく研ぎにださなければならないし、ついでに怪我人の皆に美味しい酒でも買ってくるのもいいだろう。

酒は百薬の長とも言うし、多少なら問題ないし、御神酒なら尚効果は高そうだ。

「どこから行こうかなー、迷うなぁ」

うきうきとした気分で屯所の門の手前までたどり着き、私は立ち止まらずにくぐり抜ける。

いや、一歩出る前に背後から腕を取られて、一瞬だけ私は顔をしかめた。

だが、すぐに平静を装って振り返る。

「どうしたんだ、永倉?」

誰かがいることに気がついてはいたが、まさか永倉だとは思わなくて、私は半ば本気で驚いた。

近藤の班にいた私達は少しの間休みを貰っているし、あれから姿も見かけていなかったし、永倉の性格上てっきり島原か揚屋にでも泊まり込んでるのかと思っていた。

「オメー、少しは病人の自覚を持て」
「なんで？」
「町にはまだ長州の残党がいやがんだ。回復しねぇうちから屯所を出るやつがあるか」
私は腕を振って、永倉の手を強引に振り払う。
私をただの女や普通の平隊士と同等に見てもらっては困る。
「完全とは行かないけど、ほとんど回復してる。問題ないだろ」
「あるに決まってんだろ」
一体どんな問題があるというのか、と本気で見上げる私に、永倉は大きく嘆息した。
「あのなぁ、オメーは仮にも女」
皆まで言わせず、私は永倉の臑を蹴り上げる。
「いてぇっ」
永倉が痛がっているうちに私はまんまと屯所を抜け出した。
女だから、というのは別に本当のことだからいいけど、「仮にも」はないだろう。
私は別に女を捨ててるわけじゃない。
気にしていないだけだ（それもどうか）。
気遣ってくれるのは有り難いが、永倉はもうちょっと言い方を学ぶべきだと、歩きながら空を仰ぐ私はため息を吐き出した。

＊　＊　＊

屯所を昼過ぎに出てから二、三刻で戻った私を待っていたのは、鈴花を筆頭に親しい仲間たちの心配の強い怒りだった。

いくら途中で平隊士とあったからと言って、呉服屋で羽織り、武器商で新しい剣を買い、酒屋で酒樽ごと買ってくるのはやり過ぎだと笑いながら言うのは原田と藤堂で、まず一人で屯所の外へ出るなんてもってのほかだというのが永倉や山崎、近藤らで。

「まだまだ安静が必要なんですよ！？」

部屋から出ること自体がダメだと言うのが鈴花と、土方。

土方に睨まれても怖くないが、鈴花のは少しだけ怖い。

まあ、ここで怖いけど可愛いとか口にしたら火に油なのは目に見えている。

「せめて屯所を出るなら、俺らの誰かを連れて行けよなァ」

「だってみんな忙しいじゃないですか」

残党狩りと、養生が必要なのと、事後処理に追われている者ばかりで誰を誘え、と。

そんな風に私が言い返したとたん、土方に怒られた。

「わかってんなら、部屋からでるんじゃねぇ」

しかもその上。

「罰として謹慎三日だ」

なんの罰ですか、と不満新たに私を囲む者らを睨み付ける。

「俺たちを心配させた罰だよ、葉桜君」

「ええ～っ」

不満そうな声をあげる私に、山崎までもが言う。

「当たり前でしょ～ぉ？

あんたがいない間、屯所内じゃちょっとした大騒ぎだったんだからねっ」

「大騒ぎは、ちょっと、って言わない……」

「口答えするんじゃありませんっ」

みんな酷い、こんなに動ける病人がどこにいるっていうんだ。

私が泣く真似をして土方に抱きついてみたら、案の定怒られた。

でも、いくら動揺しているからって力一杯引きはがすことはないと思う。

「仮にも」病人て言ってるのに。

「山南さん、本貸してください」

小一時間怒られた後、部屋に戻る前に私は言ってみる。

「ああいいよ。

でも、部屋に戻って読むんだよ？」

だけど、念を押されてしまって、山南も平静に見えて、本当に心

配してくれていたらしい。
本を持って部屋を出る前に一言だけ私が謝ったら、山南も動揺していた。

それから三日間謹慎して、回復の証拠に斎藤と原田、それに永倉と仕合させられ、ようやく私は隊務に戻ることが出来た。
みんな、過保護すぎだなあと仕合の後で私が笑ったら、仲間だから当前だと即答されて、私には苦笑いしか返せなかった。

３４#だんだら羽織（後書き）

山南さんの看護はどうしたということですが、その前にヒロインに養生が必要です。
じっとしていないので回復に時間のかかるヒロインを無理やり養生させてみた。
この間、沖田はまだ養生中。
（０６／０４／２４　１７：４９）

池田屋襲撃の反省。
新選組の隊服、史実では近藤・土方は着ていないって話。
どこまで本当だろう？
（０６／０４／２６　１７：４４）

リンク変更
（２００７／０６／２０）

リンク変更
（２００７／０６／２７）

改訂
（２０１０／０１／３１）

35#ご褒美は島原

ちん、とん、しゃん、と女たちが踊る。
普段であれば芸姑らに見惚れるだけの俺も落ち着かず、彼女らも落ち着かない。
ちらりちらりと送られる芸姑らの視線がどこに向かっているか何て探らなくても丸わかりで、俺は小さく嘆息した。

そこでは勧められるままに酒を飲んでいた葉桜がいる。
若いヤツらのことだから、葉桜を酔わせてどうこうする腹があったのかもしれねぇが、今はそこまで骨のあるようなのは残っていねェ。
辺りに酔いつぶれさせた隊士を囲ったまま、葉桜は一人手酌で飲み続けている。

「情けない」
「……オメーも大人気ねェよな……」
「んなことないでしょ、永倉。
誘ったのはこいつらの方なんだからさ」

立ち上がり、葉桜が一足飛びに俺へと近寄る。
こういうとき、葉桜は普通じゃないと俺は思う。
葉桜のいた位置から俺のトコへ来るには、少なくとも一間の転がっている隊士を越えなければならない。
多少の大きな音はして当然のハズなのだが、葉桜は衣擦れの音と極軽い着地音だけしかたてない。
一瞬天の羽衣でも着けているんじゃないかと見まごうほどに、葉桜は軽やかに飛んでくる。
元は舞をやっていたといっても、そんな芸当が出来るような女を

俺は初めて見た。

俺の前で胡座を掻き、葉桜はもう一杯と銚子を傾ける。

「鈴花ちゃんはもう無事に屯所に着いたかな？」

「ああ、まあ大丈夫だろ。

最近腕も上がってるし、油断さえしなけりゃ心配ねェよ」

「そうだなぁ。

確かに最近は腕も上がってきたし、油断、してるかもなぁ」

口では心配しながら、葉桜は楽しげに酒を煽る。

一体何本空けたのか、まあ、酒代は葉桜が自分から持つって言ってたし、俺が心配することじゃあねェ。

そんなことよりも、今は別に気にすべきことがある。

「いい加減、オメーも酔ったんじゃねェのか？」

「ふふ、まぁ、ホロ酔い加減で良い感じかな」

俺の目の前で潰れている隊士は一人や二人じゃない。

ゆうに八人はいるというのに、それらを酔いつぶれさせた上でまだほろ酔いってなァ、どんだけ葉桜は酒に強いのか。

「酒ですべてを忘れられるワケじゃないから、たぶん私は酔えないんだ」

寂しそうに呟いて、すっと葉桜が立ち上がる。

足取りもしっかりしているけれど、その言葉はいつもとは真逆に弱気で、かすかに見える葉桜の横顔は寂しげに微笑んでいた。

「気分が良いから、今日は舞を披露しちゃおっかな～」

「おい、葉桜、」
「ねぇー、扇子を一つ貸してくれないかな?」

葉桜の伸ばす手に芸姑の一人が、鮮やかな朱色に金銀の粉をちりばめた扇子を投げ渡す。
それを宙でぱっと受けたまま、ゆっくりと葉桜は舞いだした。

木の葉が揺れるように、ゆるりとその袖が動く。
腕が動く。
体が動く。
見たことのない舞型は即興なのか、葉桜の流派なのか、とても不思議な感覚を俺に与えてくる。
周囲の騒々しさも遠ざけて、風呂で微睡んでいるような、ゆったりとした安心を広げてゆく。

りん、とどこかで音が鳴る。
それが葉桜の持つ扇子の房飾りから聞こえるのだと気が付くのに俺は少し時間がかかった。
手首を返す度、意識的に何度も控えめに鳴らされる鈴の音と葉桜の舞だけで、部屋の中は静まりかえる。

神事の舞を見るようだと、俺は漠然と感じていた。
こんな小汚い揚屋でみるような、そんなものではなく、神社の舞台で見るような清廉な舞だと。

どれぐらい俺は葉桜の舞をみていたのだろう。
糸が切れるように、ぱたりと葉桜の腕が唐突に降りて、舞が止む。
俯いたままの顔は誰にも見せずに葉桜は小さく謝罪して、隣の部屋へ姿を消してしまった。

葉桜がいなくなってから、芸妓の一人の瞳からほろりと透明な雫が落ちた。

「え、あれ？」

「あんた、どうしたん？

……って、あれ？」

彼女に声をかけた芸妓もまた涙を零し。

「わかれへん。

けれど、葉桜様の舞を見とったら、なんでか急に」

芸妓たちは皆が一様に目に涙を浮かべて、何かを感じてか思い出してかいるようで。

彼女らを帰らせてから、俺は葉桜の消えた隣室の襖を開いた。

そこには本来組の布団が置かれて、気に入った芸姑なんかと男女の営みをするような部屋となっているのだが、今はそれらがすべて一カ所へとかき集められて、その中心でぐるりと丸まるように葉桜がいる。

円を描く布団の中心で、猫のように丸まり、葉桜は震えていて。

だから、俺はそうして顔を隠している葉桜のそばへ一歩足を踏み出した。

「来るな、永倉」

葉桜は普段、人を拒絶することがない。

それが敵でも味方でもどんなものでも、とにかく向き合おうとするやつだ。

葉桜の制止を無視して、また俺は一歩を踏み出す。

「今は、一人に……してよ……」

常ならば毅然として、笑っている葉桜が、弱々しく震える声で俺に願う。

ただの女よりもか弱い声で言うから、そんなことを口にするヤツが仲間だろうが女だろうが、放っておくなんて俺には出来なかった。

あと二、三歩も歩みを進めれば、その顔に手が届く。

「また芹沢さん絡みか？」

進む前に俺が声をかけると、びくりと葉桜の体が震えた。

なんてわかりやすいやつだ。

葉桜はこんなにわかりやすいやつだったかと思ったが、俺の記憶の限りにはない。

「ホント、オメーはなぁ」

「違、う」

「何がだ」

「私、とんでもない、こと……」

「だから」

震えている葉桜に構わず、俺はそばまで行って、葉桜の細い顎に手をかけて、顔を上げさせる。

部屋には灯篭の薄明かりしかないのに、葉桜の涙に濡れた顔だけははっきりと見えて、泣きそうなのがはっきりと見て取れて。

普段の男勝りの影を潜めた葉桜は、誰よりも女だった。

「だから、なにがだ」

震える葉桜の大きな瞳から、大きな滴が溢れる。

「……酔っては、いけなかった。
舞っては、いけなかった」
「なんでだ？
すっげぇ綺麗だったぜ」

ふるふると腕の中で葉桜が首を振る。

「そーゆー問題じゃ、ない」

ふらりと起き上がりそうになる葉桜を今度はしっかりと俺が捕えると、強くしがみつかれる。
どこか夢現に見えるのに、葉桜の力は強い。

「私ですべて終わらせるはずだったのに、伝えてしまった」

普段の葉桜はあれだけ強気なのに、今との格差はあまりに激しい。
だが、俺はしっかりと受け止めた葉桜を強く抱く。

「だいじょうぶだ、あんな一瞬、誰も覚えてねぇよ」
「一瞬じゃない、だろう？
永倉も、見たのだろう？」

ゆらりと葉桜の瞳が淡く揺らめき、幽かに危険な光を煌めかせている。

「あれで姿も女だったら文句なかったけどな」

俺には何がどうしてということはなにもわからないけれど、とにかく今はここから葉桜を出しちゃならねェことだけはわかっていた。
だから、強く、守るように抱きしめる。

「すがた？」
「次はちゃんと女のカッコで見せてくれよ」

俺との会話はかみ合わないまま、葉桜が小さく呟く。

「そう、か。
まだ揃えていない。
……まだ、大丈夫」
「一緒にいてやるから、ちっと寝ておけ」
「ん」

素直に腕の中から聞こえる葉桜の寝息に安堵し、俺は腕を弛める。
そこには聞いている歳よりも、普段の強気な様子からも垣間見ることの出来ないぐらい、ずいぶんと幼い寝顔で眠っている葉桜がいた。

俺は葉桜を起こさないように両腕で抱え上げて、ぐしゃぐしゃの布団の一つを足で軽く整え、そこへ横たわらせる。
その後で葉桜が寒いだろうと掛け布団を取りに行こうとしたのだが。

「おいおい……どこのガキだよ」

袖を引っ張られて、しかたなく俺も葉桜の隣に横になり、丸まっている葉桜を胸の中に抱きかかえるようにした。

これが綺麗な芸姑ならと考えかけて腕の中の女に視線を落とす。
この位置からだと、緩んだ襟の隙間から胸の谷間が見える。
だが、色気は不思議なほどに感じない。
仲間だという認識のせいなのか、それとも単に葉桜が本当に子供だからなのか。
理由はわからないけれど、この時の俺は葉桜に女は感じなかった。
ただ、幼い子供のようにしか見えなかった。

「子守は範囲外だぜ、葉桜」

葉桜は最初から妙に俺と気の合う女だった。
だが、それは俺が見ている葉桜のほんの一面でしかなく、いつでもこいつは爆弾みたいなものを抱えているのかもしれない。

しばらくして起きてからの葉桜は別に俺がどうこうしたなどと勘ぐることもなく、他の隊士たちもたたき起こして、店を後にした。
信頼されているのか眼中にないのかよくわからないが、俺も同じようなもんだし、今はどうでもいいことだ。

「なぁ、葉桜」
「なんだぁ、永倉？」

俺の隣を歩く葉桜は少し前までの余裕のなさを微塵も感じさせることなく、悠々と鼻唄でも歌い出しそうな様子だ。

「そのうち女の着物着たところも見せてくんねーか？」
「ははは、そのうちなー」

起きてからの葉桜は舞のことを一言も口にしなかった。

本当に酔って、覚えていなかったのかもしれねェし、それともとぼけているだけなのかもしれねェ。
少なくとも葉桜が本当に酔ったとき、それは葉桜自身をただの女に変えてしまうのかもしれない。
俺は今日、そんな秘密を知ってしまった気がする。

「マジ？
俺、ずーっと謎だったんだよな。
オメーが女のカッコした時の外見ってよ」
「謎って何だよ、もう」
「スゲー見たかったんだ。
約束だからな？
絶対見せろよ」
「そこまで見たいかぁ？」

やけに楽しげな葉桜はいつも通りで、やっぱり葉桜はこのままが良いと俺は心底思った。
あんなただの女になった葉桜なんてのは、他の男にはもったいなくて見せられねェ。

「めちゃくちゃ見てェよ。
ついでに着物の中身も見せてくれたら、もっといい、」

俺は強く脇腹を肘で突かれ、一瞬息が詰まった。
そうだった。
普段の葉桜は、ただの女じゃねェんだ。

「痛ェッ！？」
「結局それか。
もうっ、見せてあげようかなんて思って損した！」

「悪ィ悪ィ。
でも、もう約束済みだからなッ」

何か言いたげな目で俺を見つめる葉桜だったが、それ以上に俺の楽しげなのが腑に落ちないようで、少し考えた後で小さく息を吐いて笑った。

「調子いいなぁ」

いつも通りの馬鹿話をしながら屯所まで戻ったところで、葉桜が聞いてくる。

「それにしても永倉、こんなコトしててよく金がもつな?」
「いや、もたねーぜ。
給金前はぴーぴーよォ」

だから、今回の酒代は助かったぜと礼を言うと、葉桜はいいってことよと楽しそうに笑った。
こいつもよく平隊士たちを島原に連れて行ったりしているのは知っている。
だが、俺と同じように連れて行っていても、何故か葉桜の金が尽きることはない。
何か理由があるんだろうけど、烝も何も知らねェみたいだし、葉桜自身も何も言わない。

用事があるという葉桜と、屯所に向かう道とは別の角で別れた。

「また、頼むぜ」
「気が向いたらなー」

俺が別れ際に言うと、葉桜は振り返らずに片手だけを上げて返してきて。

そのまま一度も振り返らなかったから、葉桜が誰にも見せない厳しい顔で何を考えていたのか、俺は気が付かなかった。

３５#ご褒美は島原（後書き）

ご褒美に島原、って感じですね。
（２００７／０６／２７）

改訂
（２０１０／０１／３１）

36#対角線

謹慎明けからずっと私は山南の所に入り浸っていた。
回復のための無理やりな謹慎の間で山南の方が先にすっかり回復してしまって、池田屋襲撃が終わったら看病してあげるという約束がフイになってしまったかわりに、山南塾の手伝いということになったからだ。

ただ、問題は段々とこの山南の隣の居心地良さが増しているという点で。
それは私にとって、とても問題のある事態だ。

「葉桜君」

あの一件以来私は山南の隣に座ることが出来なくて、なんとなく机の端と端に座っている。
対角線上、一番遠い位置で山南の書いた教本を書き写して、大抵私の一日が終わる。

「葉桜君、聞きたいことが」
「うわっ！」

急に耳元で聞こえる山南の声に驚いた私は聞こえた側とは反対側に移動しようとして、背中を本の山にぶつけ、どさどさと降ってきた本に軽く潰されてしまった。

「だ、大丈夫かい、葉桜君!?」

大急ぎで本を避けてくれた山南を見上げ、私は照れ笑いを返す。

情けない。
いくら驚いたからって、何をしているんだ、私は。

「ごめんなさい、崩しちゃいましたね……」
「怪我はないかい？」

山南に肩を掴まれた私は、軽々と崩れた本の山から救い出され、そのまま逃げ出せないほど近くにある顔に思わず視線を背けてしまう。
だって、こんなに近くで山南の顔を見るなんて、あの一件以来で。
絶対、今の私の顔は赤くなってるに違いない。

「怪我はありません。
……だから、その、離してください」

山南もそれは同じらしく、慌てた声で謝罪と共に私は肩から手を離された。
しばらくお互いにその場から動けなかったのだが、とうとう山南のほうから腕が伸びてきて、思わず引きそうになった私を捕まえる。

「や、山南さん……」
「私の気のせいでなければ」

眼鏡が逆光で光って、私の位置から山南の瞳の奥の言葉は読み取れない。

「気のせいでなければ、葉桜君は私を避けていないかい？」
「そんなっ！」

本当に避けるつもりなら、毎日山南の所に足を運ぶわけがない。

本気で避けるつもりなら、私は幾らでも理由をつけて来ないことができるのだ。

それを伝えようとしたけれど、私は声に出すのを止めた。
言ってはいけない、と私の中で警報が鳴っている。
山南はあれから私の答えを待っているのに、そんな風に先伸ばしにし続けること自体が残酷過ぎるだろう。

だからと言って、私に山南を拒絶することなんて出来ない。
惹かれている確かな想いを私は否定したくないんだ。

「それとも、沖田君が気になるのかな？」

私が顔を上げた機が悪かったのだろうか。
山南に掴まれていた右手が、私から離れる。

「やはりそうなのか」
「違」
「沖田君なら今日から稽古をしているよ。
行ってきたらどうだい？」

山南らしくない、責めるような言葉に、私の身体に震えが走る。
だめだ、絶対に傷つけた。
誤解をされた。
いや、誤解されてもいいけど、私は山南にこんな顔をして欲しいわけじゃないのに。

「避けていたワケじゃないんです。
ただ、山南さんをみるとどうしても思い出されることがあって…
…怖くて」

私に震える手で山南の腕を掴むことは出来ても、縋り付くなんて真似は出来ない。
それに、そんな女が山南の隣にいられるとは思えない。
この人は自分の足で立って生きている私を見てきて、そんな私を好いてくれている。

「私は約束を守るために新選組にいると言いましたよね？
山南さんといると私はきっと弱くなってしまう。
約束を、守れなくなってしまう気がして怖いんです」

ああダメだ、泣かないと決めていたのに、私の目から雫が落ちて、じわりと山南の羽織を濡らしてしまう。

本当の私は全然自分だけじゃ立っていられない子供で、望みさえ満足に口に出すことが出来ない。
私の望みが依頼通りに新選組を救うことなんて、本当じゃない。
本当の私は、自分が楽しく笑っていられることしか望んでいない卑怯な人間なんだ。

「葉桜君は充分強いじゃないか」

私は強くなんかない。
軽い気持ちで受けた依頼に、今は私自身が絡め取られ、どこにも進めなくなっているのだ。
ここの強い影響力に揺さぶられる私自身を制御できなくなってきているのに、そんな自分が強いとは私には到底思えない。

ふるふると首を振る私の頬に、大きな山南の手が添えられる。
剣を手にする人と同じく、ごつごつと硬い山南の手を両手で掴ん

ですり寄せると、墨の薫りがする。

「貴方にいなくなられたら、きっと私は動けなくなってしまう。
それが怖くて、しかたがないんです」

山南のせいじゃない。

惹かれるこの想いが、目の前で不安そうにしている人を見捨てられない私の弱さが、私の足を止める。

山南の望みが知りたくて、書を読み、討論もしたし、普通の話もした。

だが、歩み寄るほどに惹かれている自分が居る。

芹沢がいなくなってからそれは顕著で、いなくなってしまったら私自身がどうなってしまうわからない程だ。

最初に近付いた理由は山南が一番時間がなかったからだったのに、それさえももう私自身に対する言い訳にしかならない。

私の脳裏に変わらず点滅する映像はやっぱり青空と鮮血で、それは山南のものだ。

山南のいない未来が書いてあるから、今、私は山南に惹かれることが怖い。

＊　＊　＊

「沖田、調子は良さそうだな」

道場で剣を交えながら私が問いかけた相手は、普段と変わらない笑顔を返してくる。

「ええ、なんともありませんよ」

沖田は、まさかつい先日に血を吐いて倒れた者と同一人物にはとても見えない。

私は力では沖田にまったく敵わないから、今みたいな鍔迫り合いはかなり危険な行為だ。

当然それに対する返し技を私が持たないわけではないが。

「引け」

「嫌です」

笑顔で忠告を拒否する沖田の答えは予想できていたが、私も多少なりとげんなりした気分になる。

病み上がりの人間に私が使える技なんてないというのに、沖田はそれもわかっていてやってるのかもしれない。

「んじゃ、せーので引こう」

「葉桜さん、いつもみたいにはいかないんですか？」

「バカか、おまえは。

仮にも私は病み上がりだぞ」

「三日も謹慎していれば完全に回復してるでしょう？」

いちいち揚げ足をとるな、と私は呟く。

私がせっかく気を使ってやってるっていうのに、甲斐のない男だ。

ふっと私の纏う空気が変わったのに気付き、沖田の目が輝く。

他の隊士なら逃げ出すものなのに、これをやると沖田はいつも大喜びをするから、私としては少し困る。

「今日こそはその技、破らせてもらいますよ」

楽しそうないつも通りの沖田としばし見つめ合い、私はため息を吐いた。

技を破ってほしい気持ちがないわけじゃないが。

「やっぱやめ」

「え？」

「今日は気がノらない」

そうなんですか、と残念そうに沖田が離れたところで、私は礼をして試合を終わらせる。

試合でもすれば気が晴れるかと思ったけれど、相手に気を使っていて晴れるわけがない。

こういう時はどうせなら永倉辺りとの試合の方が私は気を使わなくていいんだけど、今日は残党狩りに参加しているとかで屯所にいないのは確認済みだ。

道場の端に正座する私の隣で、沖田が胡座をかく。

「山南さんと何かありました？」

やっぱり沖田にはバレたか。

流石に交わす剣先に出てくる私の迷いには気がついたのだろう。

でも、だからってそれと決めつけることはないと思う。

私が無視していると沖田は好き勝手なことを話してくれる。

「今日は随分と集中が乱れているようでしたよ。

普段ならどうとでも抑え込んでしまっているものなのに」
「謹慎明けからずっと山南さんの所に通っていたようですから、今日の苛立ちはそれのせいとしか考えられませんよ」

それに、と言葉と共に私の頬へ誰かの手が伸びてきて、触れる。
冷たい指先に思わず振り見ると、ずいぶんと私に近い位置に沖田の顔がある。
逃げようにも、既に片方の腕を抑えられていて、私はのけ反ることさえ出来ない。

「葉桜さんが泣くほどの何かが山南さんとの間にあったんでしょう？……悔しいな」
「ちょっと、沖田。なんのつもり」

他の隊士達も見ているのに、何をするつもりだ、と私は沖田を睨みつける。

「僕が見たのはたった一度きりなのに、ずるいですよ」
「何言ってんだよ、離せっ」

沖田は私の反応も意に解さず、私の腕を引き、自分の膝に横倒しにさせる。

「沖田っ」
「葉桜さんを泣かせる人に、葉桜さんは渡しません」

穏やかで、それでいて決意の籠もった沖田の言葉は私を通り越して発せられている。
まさか、と私が探る頃と、丁度道場から山南の弱い気配が離れて

いくところで。
一瞬私は山南を追いかけようとして、止めた。
そんな女々しい真似は私に向いてない。

代わりに沖田に向き直ると、沖田は私に何時も通りの満面の笑顔を向けてくれる。
こういうときは少しだけ憎たらしい少年だ。
さっきの言葉もきっと近くにいた山南に向かって言ったのだろうから。

「……あのねぇ、山南さんとは別になにもないよ」

沖田のは単に、子供が玩具を取り上げられるのに駄々をこねているだけだってことは、私にはよくわかっている。
そんな弟よりも弟らしい少年は愛しいけれど、その感情はまだ山南のそれには及ばない。
きっと今沖田がいなくなっても、私はただ約束を果たせない自分自身を深く後悔するだけだ。

「本当ですか？」
「マジ、だから離せ」
「本当に？」
「本当だってば、しつこいぞ。
……ってこら、こっち見てないで稽古しなさいっ」

私の叱咤に止まっていた道場内の音が再会する。
まあ確かに一番隊組長と副長がこんなことしてたら目立つよ。
私を膝にしっかりと抱えているのはいいんだけど、容易に振りほどけない力強さは元の通りだ。
本当に、まさか池田屋で血を吐いて倒れた御仁には、まかり間違

っても見えない。

「いいかげんに離せ」

「嫌です」

まだ言うか。

大きくため息をつき、私は最終手段を覚悟する。

沖田の腕から私が逃れられないのは、とかく沖田に隙が少ないからだ。

ないなら、怯むような隙をつくってやればいい。

「こら、総司」

沖田が吃驚して私を見ている間に、緩んだ腕から抜け出す。

「葉桜さん、今」

「金輪際こんなことしたら絶交だからね。

稽古もしないし、散歩も行ってあげない。

目の前でアンタの相手を全部捕縛してやる」

沖田の目が楽しげに輝く様子を私は訝しむ。

しかも何時もと様子が違うのは、沖田の頬に赤みが差しているってことだ。

「それは困ります。

稽古をつけるより、巡察より、葉桜さんや近藤さんたちとの稽古が面白いんですから」

全然全く困っていない様子の沖田に、思わず私は笑いが零れてし

まった。

「ははははっ、ウソつくなって。
剣術遊びの方が楽しいクセに」
「葉桜さんとの稽古が楽しいのは本当ですよ」

沖田は稽古と言っているが、私が見たところ、あれはどう見たってシゴキだ。
隊士達が逃げ出すのも道理。
大体、沖田は剣を思うように振れないと言うことが全く理解できていない。
元が天才だけに、大した苦もなく剣術を習得し、それを遊びと称しているのだ。
他の人間がその域まで到達するのにどれだけの稽古を重ねても、追いつくのは困難。

「それより、葉桜さん」
「ああ、なんだ？」

クスクスと笑いながら返す私に、沖田が囁く。

「もう一度、名前を呼んでくれませんか？」
「沖田？」
「いいえ、下の名前」
「……なんで」

剣を握って強い相手と対峙している時よりも嬉しそうに沖田は促すから。
私は仕方なしに口にする。

「総司？」

目の前で、沖田が満面の笑顔になったことに驚き、私は少し怯んだ。

それを良いことにまた沖田は私に抱きついてくる。

「こ、こら、沖田！」

「葉桜さんに名前を呼ばれるのって、気持ちいいですねっ」

「はぁ！？」

「もっと、もっと僕の名前を呼んでください」

「何言って……こ、こら、あんたたちも黙ってないでこの馬鹿をどうにかしろー！」

それから原田らが稽古に来るまで、沖田は決して私を離そうとはしなかった。

なんで名前ぐらいでと思ったが理解できないわけじゃないから、だけど沖田のそれはまだ淡いから。

私は何も気がつかないことにして、予感を振り払った。

３６＃対角線（後書き）

山南さんで落ちると話が続かない。
でも、無視できない。
それで気分を晴らそうと稽古をしようとしてみたら、沖田と更に仲良くなってしまいました。
（２００６／０５／０２）

リンク変更
（２００７／０６／２７）

改訂
（２０１０／０２／０７）

37#宛名のない手紙

私に宛名のない手紙が届いた。
書いてあるのが和歌一首で、添えられているのは青々とした松の葉と鮮やかな桔梗の花が一輪だ。
内容を考えなければ風流な手紙を一度は手にしたものの、私は開けることもせず、そのまま机に置いた。

「葉桜、いるか？」

丁度その時、私の部屋に顔を出した土方が目聡く、その手紙を見つける。

「……宮家の知り合いでもいるのか？」
「っ！」

なんでそんなことを土方が知っているのかと、思わず私は息を飲んだ。
かつて、天皇家が日本を支配していた頃、宮中作法のひとつとしては極当たり前の習慣だったというのが、私に送られてきた手紙の手法である。

「いたかもしれないけど、よく覚えてないなぁ」
「……」
「ほら、私、顔が広いから」

誤魔化そうとしたのだが、どうも土方のこの視線は居心地が悪い。
高く結わえた後ろ髪を片手で引き寄せて、土方から目線を反らしつつ、私は仕方なしに本当のコトを返す。

「これ、容保様からですよ」

怪訝そうに眉間に皺を増やす土方の様にドキドキしながら、なんでもないことのように返すよう私は努める。

「ここへ来る前に会津藩邸へ一年ほど滞在していて。その時に、私が和歌を詠めるって知ってから、時々こうして届くんですよ」

こんな手紙、私にとっても最初はただの遊びだった。だが、ここ最近は容保様の趣向がちょっと変わっていて、何も事件が起きない平和なときに送られてくるのは、恋歌、だ。これはどうしたものか、私は非常に困る。下手な答えを返すわけにもいかないので、ものすっごく困る。

「葉桜は和歌が詠めるのか」

土方にはがっしと両肩を抑えて訊ねられ、それはそれで反応に困る。

「あー……才能はないって言われたから、期待しないでください」

「ということは、手習いをしていたことがあるんだな？」

「いやいや、そんなもんじゃないですよ。必要に駆られて、って何言わすんですか」

思わず口走ってしまいそうになる自分の出自を慌てて抑える。私の出身が宇都宮藩ということはともかく、他はまだ知られていないし、知らせる必要のないことだ。

「必要に駆られて……？」
「そんなに興味があるっていうことは、土方は詠めるの？」
追求される前に切り返すと、珍しく土方がかすかにはにかんで微笑む。
「和歌はやらん」
「そ」
じゃあと私は話を終わらせるために土方の隣を抜けて、部屋を出ようとしたが、それは許されなかった。
土方に掴まれた手首が痛い。
「だが、俳句を少々、な」
俳句じゃ返歌の役に立つのだろうかと一瞬私の中にも過ぎったが、何度かこちらからも容保様に返歌しているので、すぐに私じゃないとバレるだろうと諦める。
「――夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを――」
和歌も知ってんじゃないですかとため息を吐きつつ、私は下の句を返す。
「――雲のいづこに月やどるらん――」
俳句と聞いたから、仕掛けてくる気がしたのは間違っていなかったらしい。
百人一首からとって来たのはやはり一番知られているからといったところだろうし、他は土方が知らないのかもしれない。

「どれだけ暗記してるんだ？」
「万葉、古今はなんとか。
手、離してください」
「和歌が苦手なら、俳句やってみねぇか」
「イヤです」

私を見る土方の視線に、うっと気持ちが揺らぐ。
そんな捨て犬みたいな目でみられたって、私はやりたくないものはやりたくない。

「まあ、気が向いたら言ってくれ」
「絶対あり得ません」
「ふっ、だから気が向いた時で良い」

今日の土方はいつになく駆け引きの上手いやり方をするもんだ。
普段、副長として動いているときは有無を言わせないってのに、こんなのはずるい。

手を離されてからもなんとなく私は動けず、かといって土方と目線を合わせることも出来ずに、なんとなく送られてきた手紙に視線を落とす。

容保様からの恋歌、今回はどうやって交わしたものだろうか。

「なあ、葉桜……その……」

歯切れの悪い土方の問いかけに、私は顔を上げる。

「容保様からの和歌というのは、もしかして、恋の歌なのか？」

「え、なんでですか？」

どうしてわかったのかというと、私の反応からと決まり悪げに言われてしまった。

「葉桜は……素直だよな」

「それ、褒めてるんですか？

貶してるんですか？」

「こういうところは捻くれてるけどな」

苦笑して、私の前髪をくしゃりと撫でる土方は、珍しく少年のような笑顔を零していて。

「なんか困ったことがあったら言えよ。

相談ぐらいは乗ってやるから」

その空気のくすぐったさに思わず私は笑ってしまった。

土方相手に一体、私はなにをしているんだろう。

＊　＊　＊

目の前でくすぐったそうに笑っている葉桜は、こうして知ってしまえばただの女と見えないこともない。

が、やはり人とは違う何かを抱えているらしいということだけは、会話の断片でわかった。

山崎に探らせているが、葉桜の出自はようとして知れない。

害あるものでないのは確かだし、総司や新八と並ぶほどの腕前は

新選組にとって非常に頼りとなるものだ。

だが、時折垣間見せる教養やその洗練された作法はただの田舎者に身につけられるものじゃない。

新八の話じゃ、舞も身につけているというし、今の様子じゃ和歌も教養の一つとしているらしい。

そんなものは普通、庶民が身につけるようなものではない。

山崎の提案で女装させたときはどこかの公家者かと思ったが、そうでもなさそうだ。

かといって、どこかの藩の姫君がおいそれと出歩けるわけもないだろうし、これだけの剣客としての技術を身につける必要もないだろう。

「わっ！？」

俺が引き寄せれば簡単に胸に落ちてくるというのに、そのまま完全に体を預けるということはしない。

適度な距離を置いて、俺たちと向き合っているのはよくわかった。

普通の女ならば慌てるようなことでも葉桜はどっしりと構えて、笑い飛ばす。

それはそれだけ俺たちのような者との付き合いが深く、慣れているとも考えられる。

「そういえば、土方さんは私に何か用事ですか？

仕事？」

見慣れない手紙の宛名を探っていたというわけにはいかないが、葉桜には気が付かれている気がする。

にっこりと腕の中から俺の顔を上目遣いに覗いて、葉桜が笑った。

これが全部わかっていてやっているようなら警戒もするんだが、葉桜のその目は俺はよく知っている。
総司とおんなじで、子供と同じだ。

「別に、なんでもねぇよ」
「へー」

にやにやと笑っている葉桜の頭をぐしゃぐしゃと撫で回すと、きゃらきゃらと子供のようにはしゃいでいた。

37#宛名のない手紙（後書き）

書き終わって気が付いたこと、土方がお父さんになってますんで、裏イベントは気をつけないと土方満載になります

（２００７／０６／２７）

改訂

（２０１０／０２／０７）

38 #桜柄の扇子（前書き）

元治元年文月

38#桜柄の扇子

最近長州の動きが活発になっているのを私は感じていた。
見慣れない浪人も増えているし、ろくでもない新入隊士も増えているし、はっきりいって暇がない。
非番の時は試験に駆り出され、サボって屯所を抜け出せば浪人に絡まれ、巡察中なんかはそれ以上に絡まれる。
沖田は喜んでいるけど、いい加減私は疲れた。

「私は今日休むっ」

宣言したものの、私は町をぶらつく気分にもなれず、結局壬生寺で昼寝をしていたんだけど、女性の悲鳴に一も二もなく走りだした。

折角の休みなのに、人の休憩を脅かす馬鹿は誰だ。
しかも新選組屯所すぐそばのこの壬生寺でなんて。

「イイ度胸してんじゃないの、ニーさん方」

女性に乱暴しようとしていた二人を即座に昏倒させ、私は女性の側に屈んで、買ったばかりの瑠璃染めの羽織をかけてやる。

「大丈夫？」

びくりと震える女性はまだ十二、三といったところで、脅えたままの瞳で私を見ている。
この男達と同じに見られていないといいなぁ、と私は少女の頭を優しく撫でてやる。

「もう大丈夫だから、こいつらが起きる前に行こうか」

立てるか、と私が差し出した手に恐る恐る重ねられる手は細くて白い。

ああ、可愛いなと思っていたら不審そうな顔で見上げられて、反射的に私が笑い返したら俯かれた。

少女を境内に座らせ、着物の泥や草を払ってやりながら、とりあえず私は自己紹介してみる。

「私は葉桜。

こう見えても女だから、そんなに警戒しなくてもいいよ」

大きく瞳が見開かれ、私がにこにこと見ていると慌てて逸らされる。

「お嬢さんの名前は？」

俯いたままの少女は、まだ小刻みに震えている。

「無理には聞かないけど、家はどこ？」

小さな小さな彼女の言葉に、私は耳を寄せる。

「……ど、して」

これは問いかけ、だろうか。

だったら、私の答えはひとつだ。

「女の子が困ってたら助けてあげる。

これ、常識也ってね」

私には男と対等かそれ以上の力がある。
強いものが弱いものを助けるのは当然だし、そうすべきだ。

ぽん、と彼女の頭に手を置き、たまに山南がしてくれるように私は撫でてあげる。
それは私が一番、安心することだから。

段々と彼女の震えが大きくなり、嗚咽が零れてくる。

「――っく……っ……」

私は手ぬぐいを渡し、少女の細い肩を抱いて、軽くリズム良く叩いてあげる。
と、急に少女が私にしがみついてくる。

「わぁぁぁっ」

それまでの緊張が一気に解けたのだと思う。
泣きじゃくる少女を抱きしめ、私は何度も大丈夫と囁いてあげる。

知らない男に拐かされ、組み敷かれ、怖くない女などいない。
どんなに気丈でも、耐えられないことはある。
いつも頑張っている鈴花にだって、私にだってある。

泣いて泣いて、泣き疲れて眠ってしまった少女を胸に抱き、私も軽い眠りに落ちる。

そうして、気がつけば日もとっぷりと暮れ。

「……あーまた謹慎かー……」

気持ち良く眠っている少女を前に、私は諦めた笑いを小さく溢すのだった。

＊　＊　＊

助けた少女を彼女の家まで送り、屯所までの道程を私はゆっくり歩く。

とおの昔に門限は過ぎているのだから、どうせなら月を見ながら歩く方がいいと考えたのだ。

月に出来た自分の影を踏みながら、ゆっくり、ゆっくりと歩く。

私の手には少女に貰った御礼の扇子、白地に艶やかに桜が彩られ、周囲を金箔で覆ってある品だ。

近藤の持っている着物の柄によく似た扇子で、それを思い出して、くすりと笑う私を少女はとても嬉しそうに見ていた。

酔いどれのごとく、私は詩吟を口ずさみながら道を行く。

まだ固い扇子を開いては閉じ、閉じては開き、静かな宵夜にパチリパチリと音が響き渡る。

たっぷりと時間をかけて、京の町を歩き回り、私は屯所ではなく壬生寺に戻る。

「いつまで付いて来る気だ?」

境内で詩吟と扇子を動かす手を止め、私は周囲に詠うように声をかける。
道の途中から着いてくる相手がいるから、壬生寺に招いたが、相手は敵ではないと私は核心していた。
案の定、背後に現れる影に私は開いた扇子を差し出し、見せる。

「斎藤、これイイだろ」
「……扇子？」
「もらっちゃったよ」

ぱちりとまた開閉してみせるが、斎藤の表情は全く変わらない。
私は何も気がつかれないように、普段通り軽快な調子で世間話をする。

「しかしアレだね。
最近また碌でもない浪人が増えてるみたいね」
「取り締まっても切りがないし、休みで歩いてても絡まれるし、それ見てる京の町の人たちは脅えるし」
「なーんか、やな感じ」

斎藤の隣をすり抜け、私は境内からまた道へと戻り、立ち止まる。

「この間の吉田さんとか宮部さん辺りの思想は分かるし、それに賛同するやつらってのも分かる」
「でも、問題はそれを利用しようとする輩」

ぱちり、と私はまた音を立てて、扇子を閉じる。

ざわざわと夜の風が木々を撫で、私の髪が踊っているのを感じる。

私の血が、ざわざわと風に煽られるように騒ぎ出す。

「火の用心でも、しますかね」

斎藤には言っている意味がまったく通じないわけでもないだろう。
この先何が起こるか知っていても、私には何も話せない。
だから、せめてもの警告を投げかけているのだ。

関わりは少ないけれど、勘の良い斎藤なら分かる気がした。
私の不自然を堂々と見咎める斎藤なら、わかってくれる気がした。

長州は、まだ計画を諦めていない。
今度こそ火事に乗じて、天子様を動座奉る計画を実行するだろう。
それこそ、あれほどの長州藩士が命を賭した計画だったのだから。

「ああ」

斎藤の僅かなうなずきに、正解、と私は声を発さずに返す。

――騒ぎに乗じるのは、きっと不逞浪士も同じこと。

新選組が取り締まるのはどちらもだが、私は目立たぬ長州を重視するつもりだ。

「手はいるか？」

斎藤からの申し出に対して、気持ちだけ受け取っておく、と私は返す。

「斎藤は烝にこき使われて、忙しいでしょ」

そんなことはない、という答えは斎藤から返ってこない。
普段の仕事熱心な山崎を知っているだけに、彼の下に付く者がどれだけ忙しいか窺われるというものだ。

私がくつくつと笑っていると、急に斎藤から手を引かれた。
帰るぞと、行動で表している。

「子供じゃないんだから、一人で帰れるよ」
「……本当か？」

これは、山崎に私の方向音痴度合いを聞いているのかもしれない。
だけど。

「いくらなんでも、ここから屯所に帰るのは迷わないって」

それでも斎藤が手を離すことはなくて、諦めた私は手を引かれたまま道を行く。
手を引く斎藤と彼よりも少しのんびりと歩く私。
気配は私の微弱なものがひとつだけで、斎藤は完全に断っているようだ。

私が空を見上げると満月に近い月が出ている。

「斎藤、今日は良い月だよ。
こういう月を酒に浮かべて飲むのも、また格別じゃないか？」

私がにやりと笑ってみせると、少しの間を置いて小さな同意が返された。
斎藤は振り返りこそしないが、私が笑っていることぐらいわかっ

ているのだろう。
それでも空気一つ変えてよこさない。

ある意味清々しく、ある意味面白くない。

こっそりと屯所の自分の部屋まで送られた直ぐ後、風呂上がりの私の部屋の前に先に汗を流したらしい斎藤がいた。
肩に手ぬぐいをかけた斎藤の手には、銚子ひとつと杯が二つある。
語らないけれど、たぶん一緒に飲まないかということだろう。

「有難う、斎藤」

月はもうほとんど傾いていたけれど、ゆらゆらと杯にゆれる月を二人で飲み干す。

「……たまには」

酒の席で私は斎藤と話したことはほとんど無いが、彼に酒が入って饒舌になるというのは聞いたことがない。
とうとつに話し始める男に、私は杯を傾けながら、耳だけ傾ける。

「たまには、こういうのも良いものだな」
「そうだろ？」

斎藤が一杯を空けている間に私が銚子の中身を飲み干し、月見酒はお開きとなる。
その斎藤が去ったすぐ後り、土方が姿を現した。

「葉桜、いつ戻った」

夕餉の後と私は言い切り、追求されないうちに自室へと戻る。
せっかく気がつかれていないならそのままやり過ごした方がいいだろうというのが私の考えだったのだが、後日、少女の勤め先の扇子屋から御礼状が届いてしまって、結局全部バレてしまった。
しかも、近藤に扇子を自慢している最中に。

善行ゆえの門限破りだったが、規則違反に変わりはない。
私は謹慎を覚悟していたが、近藤と斎藤に取りなしてもらって時間の件はお咎め無しとなった。

土方の説教も長くて面倒だか、大事の前で忙しい私は、すぐあとの斎藤との巡察に出てから、ホッと胸を撫で下ろしたのだった。

38#桜柄の扇子（後書き）

＜＜追記＞＞

男前を目指しているワケじゃないんですけど、元々ヒロインはこういう性格なんです。

女の子が困っていたら、助けてあげる。

それって、当たり前です。

（０６／０４／２６　１８：４４）

ヒロインは大酒飲みですけど、作者はあまり酒の味がわかりません。

月見酒の話はよく聞くものだし、なにより絵的に風流だからいいかなと（いいのか？。

（０６／０４／２８　１１：３３）

公開

（２００６／０５／０２）

リンク変更

（２００７／０６／２７）

改訂

（２０１０／０２／１２）

39#困ったときは…

水の揺れる音がゆっくりと私の意識を呼び覚ます。
桜庭君がいるのかと思ったが、すぐ近くにある気配は同じように穏やかながら、少しだけ違っていた。

葉桜君であればいいのに、と私は願う。
だが、彼女がここに来るはずがない。
突き放したのは私なのだから。

二度、三度、と瞬きし、ゆっくりと覚醒する意識で、私はそばにいる人を見つめる。
熱に浮かされてうまく働かないからなのか、その人は私が今一番逢いたいと願う人に見える。

「おはようございます、山南さん」

私が起きたのに気が付いた葉桜君のような女性は、ゆるりと穏やかな笑顔を見せた。
声や笑い方まで一緒だが、そんなはずはないと、私は自身で否定する。
だって、葉桜君は。

「まだ熱があるんです。
山南さんはそのままで」

思わず身体を起こした私は、肩を押す葉桜君の軽い力に負けて、布団へ戻される。
それから、葉桜君に上掛けをしっかと肩の辺りまで引き上げられ

て、その上から優しく叩かれた。

葉桜君であればいいのにと、私は願った。
だから、こんな幻覚が見えるのだろうか。
ああ、だが、幻覚でもそばにいてくれるというのなら、私はそれでも構わない。

「すまないな、葉桜君」
「いいんですよ。
困った時はお互い様ですから」

幻覚の葉桜君は、私に向かって柔らかな笑顔を湛えている。

「何か欲しいものはありますか？
飲み物とか、食べ物とか」

喉は、乾いていない。
食欲はまだない。
ただ、叶うなら。

「葉桜君」
「はい」

幻覚にしては、葉桜君の澄んだ声ははっきりと答えてくる。
私は起き上がり、今度は止められる前に、目の前の人を抱き寄せる。
温かな幻覚は戸惑う素振りを見せたものの、次には私の背中に両腕を伸ばしてきた。

本当に、本物の葉桜君だったら、今の私にこういう風にするだろ

うか。

「ふふ、今日は甘えん坊ですね、山南さん」

いいや、それよりも幻覚でなければ、葉桜君はこんな風に私に笑いかけてくれないだろう。

だから、これはきっと夢なのだと私は思った。

「この間は、すまなかった」

「なんのことですか？」

「君を泣かせるつもりじゃなかったんだ」

あの時、両腕で涙を拭って、部屋を出て行ってしまった葉桜君を想う。

心なしか、腕の中で強張っている葉桜君を、私は強く抱く。

「葉桜君は誰にでも優しいとわかっていたのに、その優しさが私だけのものだと私は誤解してしまっていた」

私の腕の中で、葉桜君は小さく震えていた。

「葉桜君は常に誰かを無くすことを恐れているけれど、同じように私も葉桜君がどこかへ行ってしまうのではないかといつも不安なんだ。

だから、ここにいてほしいと、私の手の届く処へいて欲しいと願って、」

「山南さんっ」

腕の中の葉桜君が強く、私の名を呼ぶ。

「まだ、体が熱いですよ。
私はここにいますから、大人しく眠っていてください」

私の腕の中、哀しそうな顔で葉桜君が笑う。
それはとてもあの時に似ていた。
私といることが怖いのだと、無理をして笑ったあの日の笑顔と同じだ。

私は葉桜君の手を借りて、もう一度布団へ横になる。

「色々とすまないね。
いずれ、必ずこのお礼はさせてもらうよ」

もう一度上掛けを引き上げながら、笑顔を浮かべたままの葉桜君が深く頷く。

「それじゃあ、私が病気になった時は山南さんが看病してくれますか？」

願ってもない申し出だから、私は迷わずを快諾した。

「ああ、もちろんだ。
任せてくれ」

私の額に添えられる葉桜君の手は軽い湿り気を帯びていて、とても冷たい。
その冷たさが私を緩やかな眠りに誘う。

「きみには世話になりっぱなしだからね。
お安い御用だよ」

「ふふふ、世話になりっぱなしなのは私のほうです。
でも、その時はお願いしますね」

私はここまで心乱される女性に出逢ったのは、葉桜君が初めてだった。
それから、ここまで共にいたいと私が強く想った女性も初めてだ。

「葉桜君がそばにいてくれて助かったよ、ありがとう」

だから、幻覚でも葉桜君が私と同じ想いを抱いてくれれば嬉しい。
私の前で照れた顔で笑う葉桜君はとても綺麗で、何よりも可愛かった。

「あ、あはは。
何だか照れちゃうなぁ」

だけど、どうして今、笑っている葉桜君の瞳から雫が落ちたのか。
問うことも出来ないまま、私はまた深い眠りについた。

＊　＊　＊

私は自分の部屋の隅で両膝を抱えて、小さく踞っていた。
両目から溢れるものが止まらなくて、今は誰とも会いたくなかったのだ。

ついさっきまで私は山南の部屋にいた。
看病している鈴花が不在だったので、ただの一度だけ魘されてい

る山南の額の手拭いを替えてきたのだ。
その様子を見てくるだけでいいと、私は言葉を交わすつもりもなかった。

横になって眠っている姿をずっと見ると、様々のことが思い起こされてしまうから、心が辛くなるから、顔を見たらすぐに出ていくつもりだったのに。

約束という言葉なんかもう私の中では関係がなくて。
ただあの優しい人に生きて欲しいから、私は山南を生かす術が欲しいのだ。
約束なんかじゃなく、私自身の意思で生きて欲しいと、願ったから。

「ここにいてほしい」

山南のそばにいたい、と願いたくなってしまう自分を偽ることが難しい。

ずっと一緒にいられるコトなんて、あり得ないって私はわかっているのに。
十分すぎるぐらい分かっているのに、どうして私は何度も願ってしまうのだろう。

もしも山南の未来が変わったとしても、もしもこの先山南が生きていたとしても、私の約束も役目も終わらない。
約束を果たすまで、何も終わらない。
だが、約束を果たしたその先の自分がどうなっているのか、今は想像もつかない。

不安定な情勢を生き抜いたとしても、もう一つの役目があるから、自分がどうなるかわからない。

「私の手の届く処にいてほしい」

そんなこと、私だって願っている。

ここは心地よくて、山南の隣は取り分け、気持ちが良くて。

他の誰とも違う風で、心を守られている気がするからだ。

私にそんな資格はないとわかっていても、そんなことを言われたら願いたくなってしまう。

共にいる未来を、夢見たくなってしまう。

ぎゅっと自分で自分を抱きしめて、それから私は涙を拭って立ち上がった。

このまま井戸へ行って、顔を洗って。

そうしたら、もう笑顔に戻らなければ。

さっきの山南は私がいたことを夢と思っているかもしれない。

だったら、あれはなかったことにしてしまった方が良い。

夢現の願いならば、今はまだ叶わないままの方が良い。

そうしなければ、今度こそ私自身が為すべきコトを迷ってしまうから。

３９＃困ったときは…　（後書き）

＜＜追記＞＞
イベント書こうとして気が付きました…間にこれ入れちゃ辻褄が合わない！そんなわけで、ちょっと哀しい夢オチ
（２００７／０６／２７）

改訂
（２０１０／０２／１２）

40#高札

新選組の葉桜と言えば、男にも引けをとらない女丈夫というので有名だ。

屯所の外では男に間違われることも多いが、屯所内の男所帯ではどう贔屓目に見ても女に見える。

懸想している隊士も多いと俺は聞いている。

「ふぅ……」

だから悩ましげに屯所内の井戸端に座ってため息を吐く葉桜の姿は、普段の男勝りでがさつな様子は影を潜めて見えて、とても魅力的らしい。

だが、誰が何を問いかけようとも、葉桜は相手を酷く哀しい目で見つめた後、「一人にしてくれ」と拒絶するのだ。

誰が言ってもその様子で、だけれど屯所を出ようとすれば呼びとめられ、行き先を聞いた後でまたため息を吐いて送り出す。

これでは気にならない方がおかしいだろう。

だが、周囲のそんな空気に気がつくことはなく、また葉桜はため息をつくのだった。

「良い天気だな」

「あ、ああ、永倉か」

隣に座った俺が言うのに顔を上げた葉桜は、力無い笑いを返してくる。

驚かない辺り、俺がきたことには気がついていたのだろう。

ある意味で葉桜が一番気を使わず、からかいの対象としていないことも実証されていて、おそらくは俺が一番気さくな友人の地位を確立しつつある。

俺と葉桜はお互いにお互いのことを干渉しない。

一歩引いた男女の差違を感じない俺らの関係は、あの芹沢さんが死んだ翌日以降崩れることがない。

「……山南さんか？」

「は？

いや、違うよ。

全然別」

はっきりきっぱり、今度はしっかりと言い切ってから、葉桜はまたため息を吐いた。

俺にはどう考えても様子がおかしく見える。

「悩みがあるんなら聞くぜ？」

性質としては同等の俺らだからこそ、お互いに言い合えることもある。

葉桜が悩んでいる姿を左之や平助、桜庭や山崎あたりならば恋煩いとでも称しそうだが、俺から見ればそれは全然別物だ。

俺のさっきの問いかけはといえば、先日総司から聞いた事柄があったからだしであるし、俺自身も今の問い掛けが原因とは爪の先程も思っていない。

葉桜は少し俺を見つめた後、永倉ならいいか、と外へと促す。

話す気になったのを断るわけもなく、俺も葉桜に続いて屯所を出た。

俺の先を歩く葉桜の足取りは、屯所内とは一変して軽やかだ。
行く先々でかけられる声に軽く返し、馴染みと思われる茶屋まで来る。

「まあ、葉桜様」
「だから、様、は……まあいいや。
団子二本」

葉桜は女中が自分につけた敬称に苦笑しつつ、注文し、それを受け取った後でまた歩きだした。

「おい、どこまで行くんだよ」

行き先が見えないだけに、俺が問いかけると団子の串を一本手にした葉桜が俺を顧みて、口の両端を上げて明るく微笑む。
一瞬だけ、そこに女の色が見えた気がして、仲間と思っているはずの俺も動揺した。

「河原」

だが、葉桜から返されたのはそんな一言だけで、俺は軽い落胆を引きずりながら葉桜を追いかけた。

＊　＊　＊

団子を持ったまま、私はおもむろに河原へと飛び降りた。

それまで歩いているだけだった私が唐突に動いた気配に、永倉が慌てた様子で追いかけてくる。
それに対して、私は永倉を顧みて、軽く手招きした。

「オメー、いきなりいなくなるヤツがあるかっ」

たぶんそう言われると思った私は永倉に向かい、軽く肩を竦めて見せて、苦笑と共に団子を差し出す。

「それより、ほら」

差し出された団子を永倉が受け取るのを見、私は自分でも手に残ったもう一本を口にする。
歩くのはここまでで、屯所から随分離れた理由を、永倉ならわかってくれるだろう。
あの場で言えるわけがない内容だから、私はここまで永倉を引っ張りだしたのだ。

「ここの団子美味いだろ？」
「ん？
ああ、美味いな」
「奢るから、助けろ」

気持ちとは裏腹に、私の口をついて出たのは脅迫紛いの言葉だったけど、なんとか笑顔で誤魔化せただろうか。
私は情けないことに少し泣きたい気分になっていた。

「実はな、ここ最近よく相談を受けるんだよ」
「相談ってオメー」

まさか勝手に、と口走りそうになる永倉を私は軽く笑う。
続けられる内容はわかる。
勝手に相談を解決したりして、ましてやそれで金子なんてもらった日には、流石の私も規則違反の切腹を免れない。

「別に依頼ってわけじゃないよ。
本当に単なる相談なんだ」

苦笑に安堵してくれる永倉に内心謝りつつ、私は続ける。

「最初は芹沢のせいかと思っていたから、内密に処理していたんだ。だけど、芹沢が亡くなった後も相談が絶たない」

私への主な相談内容は、新選組隊士への苦情だ。
自分でいうのも何だが、私の友人というのは本当に幅広い。
もしかすると京中の人間と既に仲良くなっている可能性があるが、対外的には一応、京市中限定と言い切っている。

「勝手に金策に奔るのは、たぶん切腹だよね」

ツケ払い程度なら可愛いもので、かつての芹沢のような振る舞いをしている者もある。

「島原の姐さん達や遊女さんとか夜鷹さんとかもさ、乱暴すぎて嫌だとか言ってるし。
まあ、あれよ、金払ったからって何しても良いわけじゃなし、新選組って理由で金策しても駄目なワケよ」

芹沢が亡くなる前に土方が出した「局中法度」。
その中に当て嵌まる振る舞いが苦情として相談されることが一番

多いというのが、今の私の悩みだ。

「ところが、私の耳にはそんなんばっかり入ってくる」

驚いている永倉には悪いが。

「しかも、何度か現場を押さえてる」

団子の櫛をくわえたままの相手に、どうしよう？と私は返してみるけど、永倉は険しい顔のまま動かない。

「もしかして、知ってた？」

「まァな」

苦い顔で永倉が吐き出した櫛を私は拾い上げる。

もちろん、全部が全部新選組隊士なわけじゃないし、浪人が偽ってということも多い。

だけど、新選組が高札に上げられているようなことをまったくしていないわけじゃないのだ。

原田は高札の内容を不当だと怒っていたけれど、きっと知らないだけだろう。

「土方さんに言ったら、みんな切腹になっちゃうし」

私としては死んで欲しくないわけで、かといったところでひとりひとりに言い聞かせるにはいかんせん数が多すぎる。

それに自分の言うことにどれだけ影響力があるというのだろうという疑問もある。

そんなことを日々悩んでいるおかげで、私は井戸端で一人ため息をつくなんて事態に陥ったわけだ。

「なぁんで、男ってのはこうアレなんだかなー」
「アレってなんでェ？」
「アレはアレよ」

何時の時代も男というのは何でも力でどうにか出来るとでも、金さえ払えば何をしてもいいとでも、思っている大馬鹿者ばかりなのだろうか。

「聞いたからには協力しろよ？」
「葉桜、俺に拒否権はねェのかよ」
「当たり前だろ」

好奇心だけで聞いてきて、ただ聞くだけで解決できるような相談事じゃないってことぐらい、ここに来るまででわかるだろう。

私が瞳で語る言葉に、永倉は深く深ーくため息を吐いた。

＊

その後、こっそりと私と永倉の開いた宴会に呼ばれた平隊士たちは、酒と遊女と、それからみっちりと私のお説教を頂戴したというのはまた別の話である。

４０#高札　（後書き）

＜＜追記＞＞

高札の内容ってどういうのだったかなぁと検索してみたら、ちょっと気になる内容も引っかかってしまって。

それで、まあこんな話になりました。

永倉が相手なのは、自伝で閉口していたというのを読んだからです。

（０６／０４／２８　１５：３２）

新規更新。

（０６／０５／０２）

前半を永倉のみのモノローグに人称修正。

（０６／０７／０６　０９：１６）

リンク変更

（２００７／０６／２７）

改訂

（２０１０／０２／１４）

41#白玉

壬生寺はいつも穏やかで、私にとって心地よい空間だ。
だから、よくここへ足を運んでしまう。

「葉桜さんー」

自分を呼ぶ声に、私が片目を開けると、丁度目の前に藤堂が辿り着いたところで、その後ろを鈴花が追いかけてくる。
二人の手にはそれぞれに小さめの椀が抱えられている。

「どうしたの、二人とも」

私が目を丸くして尋ねると、二人は同時に言った。

「葉桜さん、どっちが美味しいか判定して！」

至極真面目に言われた私は、さらに目をまるくする。
差し出された椀の中には白玉が三個ずつ入っているようだ。
藤堂の方はみたらし風、鈴花の方は何もかけていないようだが。

「判定って、私が？」
「そうですっ」

二つの椀の中を見比べてみても、私からはどちらも大して違いは見られない。
ただ藤堂の方のみたらしは甘そうだということだけだ。

「こういうのは島田とか近藤さんの方がいいんじゃない？」

私は甘味が苦手で、二人は甘党だから最適だと提案したのだが、すぐさま却下された。

「葉桜さんじゃないとダメなんです」
「そう言われても、私は甘いのが苦手で」
「お茶ならありますっ」

目の前に水筒が差し出され、困惑しながら私はそれを手にとる。
流石にここで中身がお茶以外と疑うことはないが、さてどうしたものかと考えつつも私は水筒を傾けた。

「うぶっ」

飲んだ瞬間私が吹き出すのを予測していたのか、藤堂と鈴花は私の目の前ですでに左右に分かれている。

「な、なにこの渋い……っ」

お茶、と言い切る前に、私の目の前へ二つの椀が差し出される。

「葉桜さん、これぐらいの渋茶があれば大丈夫でしょうっ？」
「俺の白玉食べてよ」
「あ、抜け駆けはずるいよ、平助君。
私のを先に食べてください」

顔の目の前に持ってこられた椀の中からは甘い香りがする。
甘い甘い、みたらしの香りがする藤堂のほうはわかるが。

「……鈴花ちゃん、そっち何が入ってるの？」

「食べてみてのお楽しみです」

とても、嫌な予感がする私は、ひくりと頬がひきつるのを感じた。

なんでこんなことになっているのだろうか、と現実逃避しかけた私の前に、鈴花が非情にも白玉を一つ串に挿して差し出す。

藤堂はずるいと言っているが、みたらしを差し出されたらいくらなんでも私は逃げる。

私は甘味が嫌いなわけじゃないが、苦手は苦手だ。

誰かが大酒飲みは甘味が苦手なんだと言っていたが、私は正しくその典型で、嫌いじゃないが量が入らない口だ。

島原や揚屋でも勧められるが、大抵は座敷の女性に分けて済ましている。

なんで私がこんな目にあっているんだろう。

「葉桜さん、さあ」

「判定してください」

二人に勧められながら、私はどうやってこの場を逃げ出したものかと思案するが、あいにく壬生寺に来るものはほとんどいない。

助けは望めないだろう。

意を決して、私はえいやと鈴花の白玉を口に入れた。

瞬間、口の中に広がったのは。

「な、何これ……」

「甘いのが苦手な葉桜さんでも食べられるように、葉桜さんが好きなお酒を混ぜてみたんですよー。

どうですか？」

目をキラキラと輝かせて尋ねてくる鈴花には悪いが、これはその端的に言って。

「……不味い」

「えーっ」

何がそんなに意外なのか。

確かにそういう種の菓子はあるにはあるが、この白玉にはずいぶん辛味の強い酒を使っている気がする。

それがあまりに中の餡と合わなすぎて、最悪の音を奏でているのだ。

「けほっ、けほっ」

「葉桜さん、ほら、お茶っ」

渡されたのが例の渋茶とわかってはいたが、他にないのだからしかたない。

口の中が不味さの不協和音で今にも死にそうだが、苦味でまあまあ消してはくれただろうかと私は小さく息をついた。

「じゃあ今度は俺の番だよね」

満面の椀を差し出してくる藤堂の前で、私はうっと口元を抑える。

さっきのが私に合わせてということは、藤堂のもおそらく酒入りだろう。

つまり、さっきと同じかそれ以上の地獄が待っているのかもしれない。

「食べない方がいいですよー、葉桜さん。

平助君は白玉作ったの、これが二回目なんですからねっ」

さっき私が不味いといったことが相当不満だったのか、鈴花が不機嫌に言う。

「ちょ、そういうのはずるいよ、鈴花さんっ」

焦ったように言いながら、どさくさに紛れて藤堂が私に椀を押し付ける。

これはやはり食べないといけないだろうか。

鈴花のを食べて、藤堂のを食べないというわけにはいかないだろうな。

「第一、俺は最初に言ったじゃん。

いくら葉桜さんが酒好きでも、あの量は入れすぎだし、あの酒は料理に合わないんだって」

「そんなことないわよ、葉桜さんはお酒が入っていれば、多少の甘さがあっても大丈夫なんだから」

鈴花の中での私は一体どういう存在なんだろう。

「それに、これは永倉さんや原田さんにきいた葉桜さんのお気に入りの酒を使っているだから、不味いわけが」

「でも、鈴花さん味見してないよね」

藤堂の一言で私が鈴花を見ると、鈴花が怯んだ顔で私と藤堂を交互に見る。

「そ、それはだって、私、お酒飲めないし」

鈴花が下戸なのは周知の事実で、確か同じように甘党の島田も酒いっぱいでひっくりかえるというので有名だ。
私とは逆で、甘味に強いものは酒に弱いの典型なのである。

そういえば、近藤は甘味好きだが、それなりに酒も飲めた覚えがある。
流石に私や永倉たちのような限度のない飲み方はしないけれど、芹沢のように酔っ払った姿というのは見たことがない。
表に出ないだけなのだろうか。

「そ、そんなことより、葉桜さんっ」
「近藤さんって、甘いの好きだけど、お酒って強いの？」

考えながら私が口にすると、藤堂が音を立てて固まった。

「さあ、そういえば酔ったところは見たことないですね」

鈴花からは素直な同意が返されたが、藤堂の様子は明らかにおかしい。

「藤堂？」

私が声をかけると、さらに大きく体を震わせる。

「どうした、」
「あ、俺、山南さんと約束があったんだったっ」

じゃあと逃げるように走り去る藤堂を、私はついそのまま見送ってしまい。

「な、平助君！？」

勝負はどうするのだと、鈴花は藤堂を追いかけていってしまった。

残されたのは私と、白玉らしき物体の入った椀が二つと、とても渋い茶入の水筒がひとつ。

私はおもむろに藤堂の椀から白玉をひとつ、口にする。

「甘」

なんの変哲もない、普通の白玉に安堵し、私は水筒を傾ける。

「渋」

閉じた私の瞳から、何かがひとつこぼれ落ちる。

冷たくて、透明な粒は私の頬を伝い、膝に小さな染みを作ってすぐに消えた。

藤堂のがただのごまかしだとわかっているのに、今の私は山南を想うと胸の辺りがきゅうと締め付けられる。

会いたい、けれど、山南の前で私がどんな顔をしていいのか、どんな話をしたらいいのかわからない。

想いが千々に乱れているのがわかっていながら、どうしたらいいかを誰かに問うことも出来ない苦しさを抱え、私はただ蒼天を見上げて、藤堂の作った白玉を口にする。

「甘……」

甘いのに、何故か私にはその一口が苦い気がした。

４１＃白玉（後書き）

＜＜追記＞＞

たぶん、最初はヒロインを元気づけるためだったんでしょうが、話している間に勝負することになった二人。

……とかだったら、はた迷惑な（笑

（２０１０／０２／１６）

42#剣術遊び

道場に入ろうとしていた私は、珍しく躊躇していた。
その理由は、戸口に数人の平隊士が群がっていたからだ。
最初、私は彼らに声をかけようと思ったが、中から聞こえてくる二つの声で留まった。

「戦いは気迫が勝負です！！
さぁ、もっと打ち返して！！」
「うひぃぃぃぃ～！」

私は片手を頭の後ろへやって、はぁとひとつ息を吐く。
そろそろ鈴花と沖田で稽古させてみるかと考えてはいたが、どうやらまだ少し早いようだ。

「はーい、どいてどいて」
「あ、葉桜さん。
今行ったら危険ですよっ！」

何が危険なものかと私は忠告に耳を貸さず、躊躇いなく道場の中へと足を踏み入れる。
背中には心配の視線が集まるが、私からしたら多分に余計な世話だ。

「おーい、二人ともそろそろ時間ー」
「あ、葉桜さんっ」

私を振り向きざま、沖田が振り抜いた剣の向こうで鈴花を吹き飛ばされる。

鈴花は普段から私が鍛えているから、これぐらいじゃ大した怪我もしないだろう。

尻尾でもついてりゃ勢いよく降ってそうに近づいてきた沖田が、いきなり私に斬りかかってくる。

それを体重移動だけで避けて、沖田の手を押さえ、私は足でその木刀を蹴り落とす。

「っ！」

「そこまでつってんでしょ。

ほら、鈴花ちゃんもさっさと支度なさい」

「え、今日は葉桜さんもなんですか？」

「やー土方さんのおつかいあるから、ついでに一緒に行こうと思ってね」

力で手を外そうとする沖田を引っ張って、私は道場を出る。

道場を出てしまえば、私闘になってしまうから沖田も手を出せなくなるからだ。

「葉桜さんがいるなら」

「あぁ？」

外そうとするのを諦めた沖田が手を握りかえしてくるのに対して、私はするりと抜けだし、先を歩く。

「今日は思いっきりやっても良いですよねっ」

「いいわけあるかっ」

軽い足取りで私を追いかけてきた沖田に叫ぶ。

その背が楽しそうに追い越していく姿を見ながら、私は小さく笑

った。
今日ぐらいは沖田の剣術遊びにつきあってやるか、と。
だが、私がその考えを撤回するまで一刻もかからなかった。
そりゃあ、私だって少しはつきあってやろうと思っていたのは嘘でもなんでもない。

土方の使いがあるからと別れたばかりで、その場所から聞こえてくる声に私は息を深く吐き出す。
今の沖田は危険だと分かっているから、止められる者が少ないと、自分が数少ないその中に含まれると分かっているから、私は踵を返して戻る。
案の定、私は沖田たちと向かい合う浪人の背後に出ることになった。
多少消しているとはいえ、私の気配に気がつけないようじゃ、大した腕の相手でもない。

「くくく、お坊ちゃまの剣術遊びにつきあってやるぜ」

そう言った相手の背中から、私は軽く手刀を浴びせて昏倒させる。

「葉桜さんっ」
「こーらー、私といるとき以外は喧嘩買うなって言ったでしょうが」
「なんだ、貴様……っ？」

私は向かってきそうな相手に向けて、無造作に拳を向ける。

「いるじゃないですか、葉桜さん」
「ちっ、沖田は計算づくか」
「貴様ぁっ！」

剣を抜きかけた男に私は片足で蹴りを放ち、押さえ込む。

「あぁぁ、僕にも残しておいてくださいよー」

「やなこったっ」

後ろで剣を抜いた気配を感じて、私も剣を抜きざまに背後に横一線を仕掛ける。

「ぐぅっ！」

「がはぁっ」

ドサドサと相手が落ちたのを確認してから、私は沖田の方へ向き直り、直ぐにすっと身体をずらした。

私がいた場所を通り抜ける一閃は予想されたものだが、流石に鋭い。

「私闘厳禁だぞ」

一閃を放った沖田も私が避けることを予想していたはずだが、珍しくも今のだけで大人しく剣を収めてくれた。

確認して、私も鞘に収める。

「残しておいてくださいっていったのに酷いですよー、葉桜さん」

「ほら、おまえらぼーっとしてないで捕縛して」

私と沖田のやりとりを呆然と見ていた見廻りの隊士たちが慌てて、倒れている相手を捕縛する。

「私は土方さんのお使いがあるんだって言ってるでしょうが」

「付き合いますって」
「沖田は仕事中でしょうが」
「じゃあ、見廻り終わらせて帰ってくるまで待っててくださいよ」
「やだって言ってんでしょうが」
「むー、じゃあどうしたらいいんですか」
不満そうな沖田に、私はからりと笑いかける。
「今日は大人しく見廻りしておけって言ってる。
どうせ、明後日には私と見廻りなんだからさ」
その時なら暴れていいぞと、私はカラカラ笑いながらもう一度仲間に背を向け歩きだす。
これから沖田たちは捕縛した浪人を連れて行かなきゃならないし、巡察は開始したばかりだ。
今日はもう屯所に戻るまで会うこともないだろう。
「じゃあな」
振り向かずに片手を振って、私は今度こそ沖田らと道を分かれて、立ち去った。

＊　＊　＊

高い空を仰ぐ。
そうしているだけで、世界はとても平和で、世の中の諍いなんてものは夢の中だけの出来事に思えてくる。

だけど、現実と夢ってのは大抵正反対な場所にあって、どうにもならない。

「新選組の葉桜だな？」
「人違いでーす」

私は否定しているのに斬りかかってきた相手の剣を避け、ついでに軽く足をひっかけてやる。
こういう輩と私が出会うのは既に日常茶飯事となりつつある。

「何故、貴様は我らを殺さぬっ」
「剣がもったいないからとでも言ってほしい？
それとも、その価値もないと言ってほしいの？」
「き、貴様ぁーっ！」
「我らを殺ささなかったコト、あの世で後悔するがいいっ！」

一斉にかかってくる相手に向かって、私は剣を抜きざまに一閃する。
流派は忘れたがこの居合の一刀目を食らったことのあるヤツらはこれにかからず、一歩手前で踏みとどまる。
だが、流れは止まる。

「お前らにだって大切に想ってくれる者の一人や二人いるだろう。おまえらはどうなったって構わないけどな、私は女子供が泣くのは許せない質なんだよ。
せっかく助かった命ぐらい、大切にしたらどうだ？」

忠告を聞かずに向かってくる相手に対して、私はただ一度地を蹴り、次には囲みを突破する。
まだだ、と私は振り向きざまに懐から懐剣を取り出し、一間向こ

うへ投げ放つ。
向かってこようとした相手の腕に突き刺さり、相手が崩れたのが見えた後はもういつも混戦で。

しばらくして、倒れ呻く男たちを前に、私は剣を収めて、汗を拭った。

「腕は上がったようだが、まだまだだな」
「……ぅ……」
「それに、おまえらは何度言えばわかる。力で世界は変えられないと。力で私は倒せぬと」
「……何故、殺さぬ……」
「あいにくとね、私は沖田のように死にたがっているヤツに引導を渡してやるほど親切じゃあないんだ」

ひらひらと手を振って去ってゆく私の後を追ってくる者はない。
怪我が癒えたら、また彼らは私に挑んで来るのだろう。

何度こんなコトがあったかしれないが、私は自分自身の主義を変えるつもりはない。

他の新選組隊士ならば、今のようなことがあれば斬り殺すことも厭わないものだろう。
だが、私は新選組隊士である前に、葉桜、だ。
ずっとこうして生きてきたし、奪わないために己を鍛え続けているのだ。

「葉桜くん」
「出てきても構わなかったのにね、井上さん」

通り過ぎようとした壁から掛けられた声に、私はくすりと笑いながら返す。
井上はいつもと変わらない表情で私を見て、少しの間を置いてから小さく笑って返してきた。

「俺が出て行っても邪魔なだけじゃないか？」
「ははははっ」

私の隣を並んで歩く井上の姿は、普段通りで変わりない。
だからこそ、私は不審だと考える。

「土方に報告する？」
「いいや、不要だろう。
近藤くんたちも気が付いているはずさ」

近藤はちゃらちゃらしているがあれで意外と目聡いし、もちろん土方も私の不信な行動に気が付いているだろう。
それに山崎も気が付いているから、私に女装させようとするのだろう。

「じゃあどうして好きにさせてくれるんだろうな。
皆、私に甘すぎるんじゃないか？」
「……もしもそれが新選組にとって不利益となるというのなら、土方くんは処断するだろうな。
だけど、葉桜くんは違うだろう？」

何故、という私の問いかけは井上に先に封じられた。

「葉桜くんは新選組にとって、というより、俺たちにとって不利に

なることはしないよ。
矛先をすべて自分に向けさせ、すべてを引き受けて」

井上の足が止まるのに合わせ、私も足を止めて、彼を見る。
私に井上が、そして近藤や土方が言いたいことはわかっているつもりだ。

「そこまでして守らなければならないほど、俺たちは頼りないかい？」

私はその問い掛けの答えが違うわかっているから、首を振る。

「じゃあ、何故」
「強いから、だよ」

仕事柄、私は様々な者を見てきた。
だからこそわかることがある。
力の強さで勝負が決まるワケじゃないし、どれだけの力があっても抗えない波のようなものが必ず存在する。
そうして、世界は均衡を保っているのだ。

「どういうことだい？」

笑わずに真剣に問いかけてくれる井上には悪いが、それに関して私は何の答えも返せない。

「新選組の敵はとても強大だから、私はそいつとやりあいたいだけさ」
「……葉桜くん？」
「今の新選組に私の守りなんて不要だろう。

精々今の間に好きにやらせてもらうさ」

言い終えてから、私は再び歩き出す。

私は自分のやろうとしていることに理解を求めようとは思わない。

今までだって、たった一人で歩んできた道だから、今更誰かと共に歩む道を求めようだなんて思っちゃいないんだ。

それは私が望んではいけない願いなのだから。

「井上さん、今日の夕餉って何かな？」

少し進んで顧みる私を、井上は少し哀しそうに見つめていた。

返す言葉がないから、私はただ、ゆったりと微笑んだ。

４２＃剣術遊び（後書き）

＜＜追記＞＞

しっかりと某アニメに影響されました（ｄｉａｒｙ２００７．６．２１参照）

も～とにかく殺陣が書きたくて書きたくて書ききれなくて。

しくしく

（２００７／０６／２７）

改訂

（２０１０／０２／２１）

43#その覚悟

しんと静まりかえった道場内で対峙するは滅多に来ない斎藤であるが、私は十日に一度は手合わせしている気がする。

稽古の時の、というか木刀の時の私の基本の型は正眼だ。
それ以外の時は動きの自在な無限の型なのだが、稽古と指導、この二つの時は極力正眼で構えることにしている。

「どうした、葉桜。
来ないのならば、こちらから行くぞ」
「どうぞ～」

斎藤の打ち込みは新選組内でも沖田と並ぶほどに隙がない。
私は一打目を一重で交わし、間合いを取りつつ、機会を伺う。
ただそれだけで嬉しくなっている自分がいて、ワクワクしている自分がいて、沖田のことをどうこう言えないなとこんな時ばかりは私も笑ってしまう。

「じゃ、今度はこちらから行くよ」

言うやいなや立て続けに私が浴びせる斬撃にも動揺することなく、斎藤は鮮やかに防いでみせる。
この落ち着いた様子から、私には斎藤の余裕が見てとれるのだ。

（そろそろ来る、かな？）

普段の無口さに比べれば、こうして剣を交わしているときの斎藤は饒舌だ。

空気の変化を察知して、自然と口端が上がる。

「その技、破ってもいい？」

「出来るならな」

一際高い音が響いた直後、私は一足飛びに斎藤の脇をすり抜けていた。

一瞬の後、余裕の笑みを浮かべていた私の方が、目に涙を浮かべて、木刀を降ろすこととなる。

「負けたーっ」

「ふっ」

「見えてるのに、見えてるのにーっ！」

片手を隠すように押さえて、口惜しげに叫ぶ私を、斎藤は楽しそうに見つめる。

「やはり木刀だと集中力にムラがあるな、葉桜」

「そんなの分かってるよ～。

でも、稽古で真剣使うわけにはいかないっしょ」

近くにいた隊士に木刀を投げ渡し、私は斎藤らに背を向ける。

変わらず手を押さえたまま。

「おつかれさん～」

余裕げに歩く葉桜の後を追おうとした斎藤が隊士たちに呼び止められているのを聞きながら、私は小さく笑った。

斎藤が道場に近づくことは珍しいことなのだ。

それでいて、斎藤には指導力もあるのだから、この機を逃すなと、私は常日頃から隊士に言い含めている。

道場を出た私は一直線に土方の部屋へと向かった。

「土方さん、葉桜です」

「入れ」

障子の前で名乗り、了承を得てから開けると、土方が相変わらず眉間にシワをよせて、私を見上げてくる。

何かを言われる前に私が差し出した手を見たとたん、土方は深く息を吐き、共にいた近藤が自分がなっているかのように眉をひそめた。

道場を後にして、まっすぐに私がここへ来たのはもちろん怪我をしているからだ。

土方の部屋には、何かと薬がそろっているので都合が良い。

「痛そう～」

「痛いですよ」

慣れた様子で土方の部屋の一角から薬箱を持ち出し、自分の手を手当てする私の後ろから近藤がのぞき込んでくる。

土方はいつものことなので、自分の仕事を続けているようだ。

打ち身の薬を塗り、これで終わりだと私は薬箱の蓋を閉める。

「あれ、それだけ？」

本当は包帯を巻いたりしておいた方が良いかもしれないのだが。

「いやあ、あんまり大げさにしておくと斎藤が気にしちゃうんで」

私を捕えようとする腕を、ひらひらりと軽く交わそうとすると、近藤は後ろから私を覆うように手を捕まえてきた。

握られた手が痛いし、首に、耳に、近藤の息がかかって、少しだけときめく。

「近藤さん」

「女の子が傷ばっかり作ってちゃいけないよ」

「……近藤さん、邪魔」

呆れた声で言っても近藤がどけてくれる気配はない。

そこに邪な気は感じられないのだが、流石の私だっていくらなんでも家族でもない男にこんな風にされるのは慣れていない。

「俺が包帯巻いてあげようか」

「いりません」

「遠慮しなくていいから」

「遠慮じゃありませんから、どいてください」

「何してんですかい、近藤さん」

不意に呆れた声が別の方から聞こえてきて、私はそれが誰かわかったから手を振って助けを求める。

「永倉ー、この人どうにかしてよ」

しかし何を思ったのか、永倉はずかずかとこちらまでやってきて、私の正面へ回った。

「……意外にちっせェ……」
「聞こえてるぞ、バカ倉」
何がだと睨みつけると冗談だと笑いながら、永倉は無造作に私を担ぎ上げた。
「ぅわっ！
た、高い！
やばい！
ぶつかる！！」
騒いでいる私を廊下まで連れて行き、永倉が顔を合わせてにやりと笑う。
「探したぜ、葉桜」
永倉の言い様に、私は露骨に眉を潜めた。
こういう言い方をする永倉に良いことなどないと、私は経験上知っているからだ。
だが弱味と気取られるのも癪なので、私は永倉ににやりと笑ってみせる。
「絶対イヤ」
「そう言わずに、ちっとぐらい付き合ってくれよ」
「……何の話？」
私を拝み倒して見せる永倉を不思議そうに、だが楽しそうに笑いながら訊ねてくる近藤を私は睨みつける。

「どうせ、また金がないから、一緒に飲みに行こうとかそんなトコでしょ」

最後まで言い終わらないうちに、永倉に叩かれた。

痛いと抗議の視線を向けるが、永倉は私を見ないようにして避けている。

「まあ、そういうコトでさ。

近藤さん、土方さん、葉桜は借りてくぜ」

屯所の外まで引きずられるように歩いた後で、示し合わせたわけでもないのに私たちは互いに離れる。

「おめェ、人が折角助けてやったってのになんてェ言い草だ」

「え、違うの？

じゃあなんで助けてくれたのさ」

憮然とした永倉は答えない。

だが、理由はともあれ助かったわけだし、と私は永倉の肩に軽く腕を回した。

「鴨川沿いに上手い団子屋があるんだ。

どうせ出たんだし、行かないか？

もちろん、看板娘は可愛いよ」

「ほぉ～、そいつは期待しとくかな」

すぐに機嫌を治した永倉と並び、私も並んで歩き出す。

こうして、二人でつるむようになったのはここ最近の話だが、そう頻繁というわけでもない。

元々気が合うのもあるが、何よりも私が考える以上に言いたいことをわかってくれるというのは楽でいい。
互いに気兼ねなく自然体でいやすいというのもある。

二人で茶を飲んだ後で、どうでもいい世間話に花を咲かせながら、河原を歩いていると、ふいに永倉が言った。

「礼金貰ってねェのはいいとして、いつもこんなことしてんのか？」

永倉がこんなことと言ったのは、目の前で私が茶屋の娘からの頼まれ事を済ませていたからだ。
私的には元々していた「相談屋」としての仕事を無償でしているだけなのだが。

「やっぱまずいかなぁ」
「どう考えてもヤバイだろ。
土方さんに知れたら」

やばいやばいと言いながらも黙っていれば、永倉だって同罪だ。

「ふっ、別に言ってもいいよ。
土方の処断なら甘んじて受けるさ」

その決断が切腹だとしてもと私が言うと、永倉はまた不機嫌に眉を寄せて、足を止めた。

「そういうわけにゃいかねェよ」
「どうして」
「葉桜は仲間だからな」

そんなことを言われたら、いくら私が世辞とわかっていてもにやけてしまうじゃないか。

「少なくともオメーに何かあるのはわかってんだ。敵にならねェ限り、俺は味方でいてやるよ」

芹沢さんのこともあるしな、と永倉に続けられ、私は渋面する。永倉はわかっていて、私にこういうことを言う。

「そうだ、またあの時みたいな稽古しねぇか？」

「無理だよ」

「屯所じゃ拙いし、ここでいいか」

勝手に進めようとする永倉が剣を抜く前に私は動き、その柄頭を押さえる。

とん、と軽く身体がぶつかる。

「駄目だ、永倉」

「一本ぐらいイイじゃねェか」

「あの剣はもう使えない」

震える私の肩を永倉が押さえたのは、そうしなければ私がそのまま崩れてしまいそうに見えたのかもしれない。

「そうじゃねェ、俺は真剣なオメーとやってみたいだけだ。もう一度、真面目にオメーの剣を受けてみたいと思っただけだ」

顔を上げると永倉は珍しく柔らかな目で私を見つめていて、吐息がふれあいそうなほどの距離に、私は思わず息を止める。

「オメーの覚悟ってやつを知りてェんだ」

本能が勝手に私を操り、後ろへ飛び退き様、逆手で私に剣を抜かせる。

そこへ高い金属音が響いた。

打ち込んできたのは永倉で、受け流した私は問いかける。

「覚悟って、何？」

「源さんから聞いてるぜ、葉桜っ」

昨日の一件、井上が土方に報告していないと思ったら、永倉に話していたのか。

それもきっと、井上は永倉が私とこうしてつるんでいるのを知っているからだろう。

推測だが、おそらく井上にはそれとなく探ってほしいと言われたのだろうが、永倉がそんな回りくどいことをするはずがない。

合点がいってしまえばこの行動も永倉らしくて、私はつい笑いが零れた。

「余裕だなァ、葉桜。

それで何を守るって？」

「フッ、人に覚悟を見せろというのなら、おまえも相応のものをみせてくれないとな」

「モチロンだぜ」

私と永倉は互いに間を取り、機をうかがう。

永倉との仕合は、芹沢のことを除いても私にとってかなり楽しい類いだ。

自分に似た剣を使うというのもあるが、何よりも均衡するその心の強さや真っ直ぐな感情が、とても眩しくて。

つい口元が緩んでしまうじゃないか。

甲高い音を立てて飛ばされた己の剣の軌跡を見守ることなく、私は即座に振り下ろされる永倉の刀から、身体を逸らす。

「さァどうする？」
「こうするっ」

永倉の腹部へ向けて、蹴りを放ち、避けたところですかさず、私は彼の刀を蹴り飛ばす。

「ほら、これで互角」
「そういや、オメーはそれがあったな」
「まだやる？」
「トーゼンだぜッ」

そのまま子供のように喧嘩して（互いの顔を殴らないのは後で土方にバレると怒られるから）、二人共が疲れ切って、仰向けに空を見上げる頃には夕闇が降りてきて、私も永倉も朱に染められていた。

「イチチ、やっぱ葉桜は女じゃねェな」
「永倉だって、手加減しなかったじゃないか」
「するわけねぇだろ」

そこまでの余裕なんかねェよと呟く永倉を笑ったら、私も身体中のどこもかしこも痛かった。

痛いけど、楽しさが上回っていて、今はどうでもいいと思える。

「強いヤツと戦いたいっていうのは本当なんだ。
ただ、永倉たちが勘ぐるように、私がここへ来た理由はもう一つある」

こちらを見ているであろう永倉の顔を想いながら、私は静かに話す。

「あんたたちが強いことはここに来てよくわかった。
だけど、力だけじゃどうにもならないことが世の中にはあるから、私はそれから守るのが役目だと思ってるよ」

まだまだ分からないことばかりだけど、私にもひとつだけはっきりとわかっているコトがある。

「お前たちは生きたいように生きろ。
その道を阻む者があって、もしもどうにもできないようなら、全部私が引き受けてやる。
だから、存分に生きろ」

私は起き上がって、永倉を見下ろして笑う。
そうできるかどうかじゃない、そうすると決めているから、私は笑うのだ。
その顔をどこか不満そうに見ている永倉が手を伸ばし、私の片手を引く。

「うわっ」

ごろりと転がされ、目を開ければ、覆い被さるように永倉が私を見下ろしていた。

「本心か？」
「ああ」
「んじゃ、俺がもしここで葉桜を抱きたいっつったら」
本心じゃないクセに、よく言う。
クスリと笑い、私は目の前の男の頬に手を伸ばした。
そして、おもむろに引っ張る。
「私を相手にしなきゃならんほど、永倉は女に不自由してないだろ？」
「ひでで……っ」
「不自由していたとしても、永倉は私に手を出さない。
そうだろう？」
「あんで、そう……いでででっ」
「これでもかなり信頼してるんだからさ、失望させないでよ」
痛さに涙目を閉じている永倉の目蓋へそっと口付け、彼が我に返る前に私は起き上がる。
見下ろす永倉の顔は夕陽以上に朱く見える気がする。
「報告はご自由にどうぞ？」
「……て、テメー……っ」
「はっはっはっ、これぐらい永倉は慣れてるだろ」
屯所へ戻ると、私と永倉はすぐに近藤の部屋へ呼ばれた。
永倉の報告を聞きながら、隣で居眠りした私が怒られたのは言うまでもない。
結局、最後まで永倉は私がしていることを報告することはなかっ

た。

４３＃その覚悟（後書き）

＜＜追記＞＞

引き続き、アニメ影響中です

紅桜編最高でした～殺陣が！！

（２００７／０６／２７）

改訂

（２０１０／０２／２１）

４４＃長州咆吼ー１

皆は知らない事だけれど、近藤さえも知らないことだけど、山崎だけが勘づいていたようだけれど、定期的に私は松平容保様の所へ足を運んでいた。

大抵が現状報告のため。

それから、鈴花の現在の様子をお伝えするため。

照姫様は本当に鈴花を気にしておられて、でも鈴花はきっと手紙だけでは報せないこともあるだろうから、と。

私から容保様へお伝えし、容保様から照姫様へと伝えられる、密やかな新選組の近況報告のために。

その日は定刻よりも遅れて容保様とお逢いした。

待ちくたびれた私は庭の緑の欅を前にして、ただ呆けていた。

私らしくもない失態で、容保様の変化に気がつくことが出来なかったことだけが悔しい。

「葉桜殿は、欅がお好きなのかな？」

「欅も、と言ったところです」

葉に触れるか触れないかというギリギリの位置に差し伸べていた手のまま、顔だけ振り返り柔らかく微笑んでみせた。

容保様は私のその笑顔がとても安心すると言ってくださったから。

また、そんな私に柔らかい微笑を返してくださる容保様に、私も安心できるから。

ゆっくりと歩いてくるのを待つ。

砂利を踏む音は小さく、存在感も強かれど、他藩の藩主に比べれば少々微弱であろうと推測される。

体を折り、自然と傅く。

「貴方にそのような真似は似合いませんよ」

いつもそう言って、私の手を取り、立ち上がらせる。

私は普通の女性よりも背が高いので、容保様と同じか少し高い位置に目線が来る。

それが見下しているように思われる気がして、直視し辛い。

「容保様に言われているようでは、たしかに未熟ですね」

「葉桜殿は御身を卑下しすぎでしょう」

そんなつもりは全くないのだが。

「かないませんね、容保様には」

そう、どんなに自分を繕おうとしても、この人の前では全てが無駄だった。

ここに来ると役目を忘れ、全てを任せてしまいそうになる自分を抑え、容保様の手を取る。

合わせた手を絡め、ほっと息を吐く。

「いつもより随分と冷たいですね。

一体いつから見ておられました?」

「何、ほんの半刻ほどだ。

貴方がいるとわかるまでが長かったがね」

それは半刻なんてとうに過ぎているじゃないか。

私の瞳が色を変えたことに気付き、容保様は弱く微笑む。

小さく溢される謝罪に、返す言葉はない。

「それじゃ、今回の報告といきましょうか」

「ああ、頼む」

庭を歩き、いつもの東屋まで足を運ぼうとして手を離した。

歩いたのはただの一、二歩だったと思う。

よく憶えていないのはその後に走った衝撃からだ。

揺らいだ気配に振り返り、即座に戻って抱き留める。

「容保様っ」

「……あ、あぁ、すまない。

葉桜殿」

腕の中で意識の消えてゆく体を抱え、叫ぶ。

「誰か！

容保様がっ！」

憔悴した顔で、よほどの無理をしてきたのがわかるはずなのに、

私は近くにいて気がつけなかった。

この時のことを私は何度も後悔することになる。

松平容保様が体調を崩し、お倒れになられることは書いている事柄ではなかった。

書いていないからと言って起こらないわけではないということなど当たり前のことなのに、その当たり前に気がつけなかった自分が

悔しくてならない。

＊　＊　＊

容保様が呼び出した近藤と話している間、私は隣の部屋で気配を完全に殺してその話を聞く。

「池田屋での一件、本当によく働いてくれた。
礼を言う」
「我ら当然のことをしたまでです」
「あの時、そなたが池田屋を発見してくれなければ、天子様は長州へ動座奉られてしまったであろう。
そして、今頃私も命を奪われていたに違いない」

容保様が咳き込む声に動き出しそうな自分を、私は必死に抑える。
私がここにいることは今、近藤に悟られてはいけないのだ。
容保様のためにも私自身のためにも。

「これ以上のお話しはお体に触ります。
ご無理をなさらぬよう」
「いや、話しておかねばならない。
長州藩の動きのことだ」

すでに聞いていた話に私はきりりと唇をかみしめる。

「何か、あったのでしょうか？」
「長州は過激な倒幕を諦めず、兵を動かしているのは知っているだろう。
どうやら、そろそろ本格的な実力行使に出る向きがある」

予想していたこととはいえ、無謀をするものだ。
長州は民衆が犠牲になることも厭わないというのか。
それが、同じ人間の所行とは思えない。

京の町の人たちには関わりのない戦いなのに、彼らに言わせれば何もせず、安穏と暮らしているのが許せないのだと言う。
力を持たない人が、学を受けない者が安穏と暮らすことが何故悪いのか。
皆必死に日々の生活を生きることの何が悪いというのか。
そう考える私は浅はかだろうか。

「その際は私も打って出なければならない」

聞いていない話に私は耳を傾ける。
何を言い出すのですか、容保様。

「失礼ながら、そのお体では無理かと」
「ああ。
医師にも守護職の仕事を辞めるべきだと言われた。
しかし、今、私以外に京都守護職となってくれる者もない。
病をおしてでも戦いに出なければならぬのだ」

京を守ろうとする者がいない。
恥ずかしいことに、今の日本の現状はそれだった。

容保様だって、進んで京都守護職を受けたわけではない。
だが、とても真面目な人だから、病をおしてまで責務を果たし、京を、天子様を守ろうとされている。
そんな容保様だから、私も力を貸したいと思っているから。

「私で、いや、新選組にできることはありませんか」
「おお、その申し出、心から嬉しく思うぞ」

だから、こうして新選組を裏切ってでも容保様への報告を行っているのだ。

近藤がいなくなった後の部屋で、私は容保様を無理やりに隣の寝所へと運んだ。
体は弱々しいけれど、この人はとても強い。
今一番大変なこの京都守護職という職を命を賭して行っているのだ。
そんな人は弱いわけがない。

容保様の布団の上掛けを引き上げつつ、私は呟く。

「容保様がこれ以上ご無理をなさらないように、私が働きますから。だから、どうか御身ご自愛ください」

私の頬に触れる細い手をつかみ、その甲に口づける。

「葉桜殿？」
「西洋では、これを忠誠の証と言うそうですよ」

私が守りますから、と容保様に繰り返す。

「必ず私がお守りしますから、どうか」

どうか、自分自身のことも考えてください。
容保様にいなくなられるのも、私にはとても辛いことだから。

４４#長州咆吼－１（後書き）

＜＜追記＞＞
意味は無いのですけど、「欅（けやき）」は福島県の県木です。
会津なので、合わせてみました。
まったく関係ないでしょうけどね。

当時の京都は本当に大変で、どの大名も守護職をやりたがらなかったそうです。
会津公だって本当にやりたいわけではなかった。
それでもやり通したこの松平容保様という方は本当に真面目な人だったのだと思います。
（０６／０５／０２）

リンク変更
（２００７／０６／２７）

改訂
（２０１０／０２／２１）

44#長州咆吼ー2

屯所内のざわついた隊士達の波が動いてゆく。
葉桜君は、それを私の部屋でただ感じているようだ。
私はまた体調を崩して療養している最中だったから。

「近藤さんもお戻りになられたようですね」

葉桜君がぽつりと溢す言葉を咎めるつもりは、私にはない。
ただ柔らかく葉桜君の髪を撫で続ける。
まだ万全でない私の体調を心配してか、葉桜君は私を見ようとはしない。
それとも、先程話してくれたように、お倒れになられたという容保様と私を重ねられているのだろうか。
どちらにせよ、私には憶測の域はでない。

それに加え、今葉桜君から聞いたばかりの話を私自身、どう判断したものかというのも考えあぐねる。
泣いて私の部屋から出て行った葉桜君が、久しぶりに来てくれたと思ったら、彼女は容保様に会ってきたという。
それも話しぶりから、葉桜君が容保様の元へ行ったのは今回だけに限ることでないと容易にわかったし、彼女自身もそれを否定しなかった。

葉桜君からの話の内容には、長州がとうとう本格的に実力行使に出る動きがあるという話も含まれていた。
葉桜君自身も意識してのことではないだろうが、話しぶりから衝突が免れないという想像は私にも容易だ。

「土方さんに言っても構いませんよ」
「何をだい？」
葉桜君はふてくされた子供のように、決して私と目線をあわせようとしない。
「おそらく誰も、山崎も私が容保様のところへ出向いていたことは知りません。
山南さんが考えているように、私はずっと新選組を欺いていた。
でも、誓って新選組を貶めるような真似はしていません。
ただ全ての真実をあの方にお知らせすることが私の役目ですから」
小さな小さな少女のようで、とても頑固で、とても強くて、そして弱い葉桜君を私はそっと抱きしめる。
「それほどに大切なことを私に話してくれたことをとても嬉しく思うよ」
「山南さん」
「なのに、こんな時期に体を壊してしまっている自分が申し訳ない。
葉桜君に何もしてあげられない」
「何を言って」
「新選組にいて、何も出来ない自分が情けないよ」
私の弱気な言葉ごと包み込むように、葉桜君は細く小さな腕を私の背中に回して強く抱きしめ返してくる。
「そんなことありません。
少なくともこうして話を聞いてくださるだけで、私には十分すぎるほどです」

秘密が多い葉桜君は、極端に誰かを頼るということを怖がっている。

私がいなくなってしまうことを恐れ、存在を確かめるようにすがりついてくる好意は嬉しいのは嬉しいのだが、おそらく自私と葉桜君の感じている好意の種類というのはまったくの別物だ。

私が一人の女性として葉桜君を好きだということに対して、葉桜君のそれは家族に向ける愛情のようなものだ。

暖かいが、熱くはならない。

「前回の池田屋襲撃で長州は新選組を警戒していたし、大元を潰したのは新選組です。

きっとここにも襲撃があるはずです。

戦に出ることだけが戦いではありません。

それに戦場は市中を巻き込むことになるでしょう。

民衆の安全を守ることも、新選組の仕事ですよね？」

私が驚くように腕を緩めれば、腕の中ではここを守ってくださいと、微笑する少女がいる。

自分の帰ってくる場所を守ってほしいと、葉桜君が私に頼んでくる。

どこまで葉桜君は私の不安に気が付いているのだろう。

それとも気がつかずに、私に居場所を与えてくれようとしているのだろうか。

「期待してますよ、新選組総長殿」

それが無意識であっても、私の腕の中で笑っていてくれる葉桜君がいる限り、頑張ろうと心に誓った。

私の決意を鼓舞するように、離れた部屋から隊士達の同意の声が聞こえていた。

＊　＊　＊

会津公からの出動命令が出、私は近藤率いる本隊の隊士として伏見へ向かっていた。

道中、町中だというのに戦いの跡がいくつも残り、見回せば辺りには多くの者が傷つき、斃れている。

長州の望みは確かに過激倒幕だ。

だけれど、それで民衆を犠牲にしていいわけがないと何故、気がつかないのか。

怒りで沸騰しそうになる頭を、私は拳を強く握り込んで抑える。

これから戦闘が起こるというのに、余計なことを考えている場合ではないというのに。

後ろで鈴花が永倉たちと話しているのが聞こえる。

あの子なんて、こんな戦いの跡を見ては落胆もするし、緊張もするだろう。

せめて、彼らと話して余計な緊張が落ちてくれるといいと願う。

「心配？」

「そうですねー、鈴花ちゃんはあんまりこういうの慣れてないだろうし」

私の隣で近藤が困り顔で微妙な表情を浮かべている。

「……葉桜君は慣れてるんだ」
「少なくとも初めてじゃありません。京に来る前は旅暮らしをしてましたから」
ここまで大きな戦いはなくとも、小さな争いというのはどこに行ったってあるし、いつだって私にどうにかできるわけじゃない。遅すぎたということはいくらでもあった。
「それはいいけど、俺が聞きたいのはそう言うコトじゃなくて、容保様のコトだよ」
後の部分は私に気を遣ってくれたのだろう。
かなり小さめの声だったので、周囲に目を走らせても気が付いた者はいない。
「今日は参内なさるとおっしゃっていたよ。寝返りを打つことさえ辛い状態だというのに本当に無理をする」
本当に無茶な人だ。
「近藤さん、やっぱり貴方は凄いよ」
言われたとたんに、私は容保様がお倒れになられた時のことを思い出してしまった。
今は新選組の仕事に集中しなければいけないというのに、腕の中で青い顔で意識を失っていく様が鮮明に浮かび上がってくる。
「それから、やっぱり容保様も凄い。だから、私はここで頑張らないといけないんだ」

新選組の活躍は、きっと容保様を助けることになる。
だから、私は震える腕を押さえ込み、強い笑顔で近藤に笑いかけたのだけど、近藤は仕方ないなぁというように呟いて言ってくれた。

「葉桜君には別の任務を与える」

普段と違う物言いに、私は心を構える。

「今すぐに容保様の所へ行って、そして無事に参内できるように御守りしてきなさい」
「はい。
……え、近藤さん？」

急に何を言い出すのだろうと見たけれど、私には近藤の表情から何も読み取れない。
ただ、近藤は行ってらっしゃいって言ってくれて。
私の背中を押してくれた。

「有り難うございますっ」
「無事に送り届けたら、合流ね」
「はいっ」

この時、私は先に御所の公用門の方で長州藩兵が待ちかまえていることを知り、容保様に南門からの参内を進言して事なきを得た。

伏見で合流した私を、近藤はただ「おかえり」と言って迎えた。

４４#長州咆吼－２　（後書き）

＜＜追記＞＞
山南さんは蔑ろにしてはいけません。
だって、総長ですもの。
（０６／０５／０１　１８：０４）

容保様の参内に関してはゲームではなく新選組関連書籍から参考にしました。
ゲームの内容だけだとわからないことだらけなんですよね。
　この辺りは。
（０６／０５／０２　１３：２８）　新規

前半のモノローグを山南に人称修正するついでに、大幅に改訂。
　予定外！
（０６／０７／０６　１７：０１）

改訂
（２０１０／０２／２６）

４４#長州咆吼ー３

伏見の長州勢が退き、程なく始まった御所への砲撃を耳にした新選組は御所へと急いで向かっていた。
その最中で私がひとつの人影を見つけた時、どうやら同じく見つけたらしい近藤も立ち止まる。

「あはは、み～つけた！」

こちらを見る近藤と目線を合わせ、私は頷く。

「そうだな、とりあえず葉桜君は俺と一緒に来てくれ」
「了解、先行きます」

近藤が他の指示を出しているのを聞きながら、私は人影を追いかけた。
彼に付いていた者が一人消え、二人消え。
後ろに近藤の足音が聞こえるのに安堵して、私はさらに速度を上げる。

「意外と体力があるね」

ようやく止まった人影に合わせて、こちらも足を止めて対峙した。

「二度目はないと言いましたよね、桂さん」

追撃の最中に見かけた背中を見間違えたわけではないということは、近藤の様子からもすぐにわかった。
だから、私は追いかけた。

桂を私は一度故意に逃がしているが、あの時に言った「次はない」という言葉を撤回するつもりはない。

「桂さんほどのお人が一人でいるなんて不用心すぎないかな？」

近藤の軽口に桂も軽口で答える。

「俺の逃げ足が速すぎてね。
部下たちはついてこれなかったみたいだ」

「あはははは！
たいした逃げ足じゃないの」

桂の軽口は近藤と張るくらいだろうか、一度会った時と代わりはない様子に、私は少し安堵する。
今は明確に敵同士だから、素振りを面にすることはないけれど。

「たいした用がないならもう行ってもいいかい？」

笑いながら言う問い掛けに、流石に近藤もカラ笑いを収める。

「ははは、は。
ごめん、そりゃ無理」

「それは困ったな。
俺はこの後、めちゃくちゃになった長州を立て直さなきゃならんのだ」

まったく困った様子に見えない桂は長州を立て直せるつもりでいるのか、と少し私は目を大きくする。
笑っているが、桂の目は真剣に見えたからだ。

「こっちだって困るさ。
京をこんなにしちまった顛末をじっくり聞かなきゃならないんだ」

近藤が刀を構えるのに合わせて、桂も刀を構えて対峙する。
どちらも譲れない信念があるから、二人が対峙する、ただそれだけで間に入れないほどの緊張がびりびりと私にも伝わってくる。
ざわざわりと私の肌も総毛立つ。

「抵抗しなければ斬りはしない。
おとなしくお縄になってよ」

静かな、だが力強い近藤の言が空気に強く弦を張る。

私だったら、ここに踏みいるようなことは出来ない。
少しでも動けば始まってしまいそうな斬り合いの気配に、私は唾をごくりと飲んだ。

「桂先生！！」

だか、それは私だけだったのか。
二人の間に一人の剣士が抜き身の刀を中段に構えて、入り込む。

無粋な、と眉を潜めた私はすぐに剣士の後ろを駆け去る桂の姿を捉えていた。

「待てっ」

追いかけようとした私の前にもう一人、剣士が立ちふさがる。
桂を先生と呼ぶなら二人とも攘夷志士だから、切り捨ててしまえばいいのだか。

「ジャマ、しないほうがいい」

私の狙いはあくまで桂だから、殺気を放って牽制する。
それに怯みもしない長州藩士に、私は少し目を見張り、すぐに彼の覚悟に気づいた。
私たちの前を塞ぐ二人は、もうほとんど気力だけで、気迫だけで立っている。
長州にもこんな人物がいるのか。
こんな人に、桂小五郎は慕われているのか。

「ごめん、戦えない」
「貴様っ」

私は刀を仕舞い、たんっと地を蹴って彼を下方に交わし、桂の後を追う。
悪いけれど、彼らは近藤にまかせよう。

走り始めて直ぐ、私は桂の背中を捉えた。
間違いようのない、真っ直ぐな背中、真っ直ぐな足取りの男に、刀ではなく手を伸ばす。

「桂さん、そう簡単に」

私の手が触れる寸前、急に桂が振り返った。
あまりの意外さに反応できない私は桂に腕を捕られ、胸元へと引き寄せられる。
強く香るのは桂が着物に焚きしめた香の匂いか。

「また貴女に会えたら、俺は聞きたいことがあったんだ」

「桂さんっ」

桂の力は沖田並に強く、私は身動きがとれない。

「何をっ！」

「何故あの時、貴女は俺を見逃した。

貴女は新選組だろう？」

それを言われると、私は耳が痛い。

「勤務時間外だったから、だ」

これが私の本心でないのはすぐに見抜かれてしまったのだろう。

桂からは苦笑が返される。

「そんな面白くない答えを聞きたい訳じゃないんだけどな」

「他にどんな理由があるっていうんだよっ」

私が噛み付くように言い返したのは、まさかこんな所で桂が個人的に気に入ったからなどと口に出来ないからだ。

基本的に気に入った人間に対して私はとても甘い。

だから、本当に桂に危害を加えることなく、無傷で屯所へ連れていきたいと思っている。

だから、この腕を力づくで外すことができないでいる。

「じゃあ、何故振りほどけない？

君はあの葉桜だろう。

池田屋襲撃でたった一人で沖田を守って戦っていたという」

ならば容易なはずと桂に指摘され、私は口籠もる。

こういうくせ者ばかりに出会ってしまう上、しかもそんな人たちが私は憎めない。
どうしても、桂が長州の者だと知っていても、彼の道を力づくで遮るには私に覚悟も足りない。

「こんなことをしていたら、近藤さんに捕まりますよ」
「貴女といられるなら」
「馬鹿なことを言わないで。
……大人しく捕まりますか？」

ゆるりと腕が外され、私は身構える。
正面にある桂の瞳には曇り一つない。

「さっきも言ったように、俺は長州を立て直さなきゃならんのだ」
「新選組として、それは困ります」
「葉桜君自身としては？」
「……卑怯です、桂さん」

私の頬に添えられる桂の手はごつごつとしていて、とても力強い。

「それは君の方だ。
そんな顔をしてはどんな男だって囚われる」

桂は嘘ばっかりだ。
それが本当ならここで私に捕まるのだろうけれど、桂の目は逃げ切ることを望んでいる。

「次に逢えたら、一緒に来ないか？」
「ごめん、出来ない」
「それは残念だ」

桂の言葉を合図に、私は桂の腕を掴んだ。
そのまま倒そうとするけれど、いつものように技がきれない。
いらつく私を見てとったのか、桂は私に柔らかく笑いかけ、笑顔のまま鳩尾に一撃を喰らわせられ、私は気絶させられてしまって。
気が付いた時には近藤が目の前にいて、私が桂に逃げられたと言っているのに「無事で良かった」と泣き笑いされてしまった。

大した怪我はないので、その後で私は進んで掃討戦に加わった。
この時の戦闘は一日で長州の敗北となったものの、京放たれた火は以降三日間休み無く燃え続けてしまう。
一条通と七条通の間は三分の二も焼け落ち、町の人々は逃げた山間部から消えない炎を呆然と見下ろしていたと、後で避難誘導に回っていた隊士から私は耳にした。

そして、会津藩や薩摩藩もだが、新選組も長州から京の町を守った英雄として称えられたけれど、長州は朝敵となった。
それを素直に喜べない自分を私は押し隠す。

戦なのだから仕方がないと言ってしまえばそれまでだけれど、やはり私は人が死ぬのは嫌なんだ。
甘い考えだと分かってはいるけれど、それに慣れたくはない。
死に慣れてしまったら、自分でなくなってしまう気がして、私はずっと怖くて。
考えるだけで震える自分を、私は無理矢理に押さえ込んだ。

４４#長州咆吼－３　（後書き）

＜＜追記＞＞
桂に口説かれる話になってしまった。
（０６／０５／０２　１４：５４）

改訂
（２０１０／０２／２６）

４５#掃討戦（前書き）

元治元年文月

45#掃討戦

御所周辺での追討戦の後、新選組は会津藩兵と共に長州勢を天王山まで追いつめた。

追いつめられた真木和泉守は近藤との名乗りの後、詩を吟じ、勝鬨をあげて発砲した後、陣小屋に火をかけその中で見事な切腹を果たしたという。

私は後から話を聞いただけだが、それでもやはり長州のその覚悟に対して暫し圧倒された。

だからといって、戦闘が一段落したということに代わりはなく。

「流石にアンタもお疲れね、葉桜ちゃん」

「烝、」

隣に立った山崎に、私は情けない声が零れる。

疲れてるとかじゃなくて、そうじゃなくてと言いたいけれど、私の今の気分を的確に口にできる自信がない。

「それもあるけど、ちょっと別に気がかりなことが多くてさー」

例えば、容保様の容態とか。

例えば、山南さんの様子とか。

京の町の被害状況やらなにやら、考えることが多すぎて、流石の私も嫌になる。

「聞いてあげてもいいけどぉ」

「いいよ、聞かなくて」

「あら残念」

全然残念じゃなさそうに、私の隣に立つ山崎が言う。
今の山崎は普段なら見慣れた暗色の仕事着で、動き易さを優先してか蒸されるのを嫌がってかで肩から先の袖がない二の腕もあらわな装束は、こういう田舎で見ると虫に刺されそうで少し気の毒だ。

「それより、腹減ったよ。
どこかで貰ってこようか？」

私が苦笑を返すと、山崎からも苦笑が返ってくる。
こんな状況でこんなに大変な時でも、山崎が笑う姿はやっぱり艶やかで明るくなるなぁと思う。
私とは大違いだ。

「お結びあるけど、食べる？」

普段の私なら、即座に貰うけど。

「そうゆう誘惑をこの状況でするなんて、酷いわっ」

私が少し芝居がかったように言ってやると、山崎からは呆然とした表情が返ってきた。
冗談だと笑い、私は理由を山崎に明かす。

「怪我人が満足に食べれない状況で、どうして無傷の私が食べられるよ。
負傷した隊士にあげなさいな」

誰にも気が付かれていないだけで、私はまだ桂に殴られた鳩尾は痛むけど、刀傷なんてほとんどない私が怪我してる隊士の前で食べ

るわけないって、山崎なら分かってるはずだが。

「驚いた。
アンタ、鈴花ちゃんと同じこと言うのね」
「怪我人優先は常識よ。
でも、そうか。
鈴花ちゃんが……」

そういえば、私が再会した後の鈴花もたいした怪我は負ってないみたいだった。
鈴花からは近藤や永倉に窮地を救われたと聞いている。

正直、今回ばかりは私も単独行動が多く目立ち、鈴花まで構っていられる余裕もなかった。
それに加えて、近藤に命令を頂かなければ、私には容保様をお助けすることも叶わなかったし、桂に口説かれることもなかった。

桂を思い出した私は眉間にしわを寄せる。
あの状況で桂は何故、私を、敵を口説き落とそうとなんてするんだろう。
それだけ余裕があったというのか、それとも、私の迷いを見透かされた、か。

「あーもうっ」

私は強く地を蹴って走りだす。
そうした理由は、かすかに見えた長州藩士の影のためだ。

「あ、ちょっと！
葉桜ちゃん、どこ行くのっ？」

「野暮用っ」

地を踏みしめるその足で私は草を刈り行き、まだまだ余裕のある体力でもって前を走る背中を追いつめる。

「抵抗しなければ、命だけは助けてやる」

「ひっ」

「私に、剣を抜かせるな」

言っている側から抜き放たれる相手の剣は震えていて、それは防衛だろうが戦場では戦う意思と同じ意味を持つから。

こめられ放たれる殺気に奥歯を噛みしめ、私は一気に間合いを詰める。

本当は斬りたくなんてないのに、刃を向けられているのに甘んじて受けるなど、私には許されることではない。

私が振り抜いた剣が鮮やかな赤い血潮を青空に飛び散らせるのを、どこか遠くに感じる自分がいる。

視線の先を流れる白雲は少し早く走ってはいるが、どこまでも続く青空に雨の気配はない。

今、雨が降ってくれたら、私は誰に遠慮することなく泣き叫ぶことができるのに。

ぼやける視界を手の平でぬぐい去り、私は刀を鞘に収める。

そして、新選組のみんなの元へゆっくりと歩きだす。

家を出るときは身一つでいたのに、今の私には捨てられないものが増えすぎて、いまや新選組そのものが大切な場所となってしまっている。

いつか無くなってしまうものに想いを寄せても、哀しみしか残らないとわかっているのに、自分でも止められない。

「あ、葉桜さんーっ」

遠くで手を振る沖田に、私も手を振り返す。
そうするとそれぞれの手が返ってきて、笑顔が返ってきて、私の胸も痛いぐらいに苦しくて。

本当は少しずつだけれど約束なんて、私には関係なくなってる。
京の町が好きで、それを守ろうとする新選組や容保様が好きで、新選組を守ろうとする近藤さんや土方さんが好きで。
私には全てを守れるはずもないのに、この手で全てを守りたくなる。

反面で勤王派志士であっても私には共感できてしまう人がいて、それに賛同する人というのもわかってしまって。
その人たちと戦うことが、私にはとても苦しくて。

仲間の元へ戻った私は山崎に抱きつき、山崎も大人しく抱きしめ返してくれる。

「ただいま」
「おかえり、葉桜ちゃん」

戦わなければ共に生きられないという世界が、今の私にはとても憎くてならない。
そして、こうして大好きな仲間と出会えた世界が、私には愛しくてならない。

４５＃掃討戦（後書き）

＜＜追記＞＞
なんか、書いていて思ったのが、今の日本って本当に平和だなぁと。
基本的に武器持って町中うろついてたら法律的に駄目じゃないですか。
只それだけのことがこの時代できないんですよ。
竜馬はそれだから、日本を変えたかったのかなぁ。
今の世界は竜馬が夢見た世界になっているのかなぁ？
そんな風に考え込んでしまいます。
（０６／０５／０９　１７：０７）

改訂
（２０１０／０２／２６）

46#迷い

両腕を頭の後ろに、体は自分より少し大きいぐらいの木の幹に預けて、私は目を閉じる。
幹の反対側からは原田の遠慮ない鼾が聞こえてくる。
普段なら煩いと思う其れが心地よいと思うあたり、私も少し参っているのかもしれない。
耳を澄ませば私にも隊士たちの屯所へ帰れる喜びの声が聞こえ、息を吸い込めば泥や埃とともに濃厚な緑の気配と、疲れ切った男たちの汗の臭いが鼻につき、目を開ければ。

「……何をしている、梅さん」

目の前の男に言い様、私が足を高く蹴り上げると、才谷は軽く吹っ飛ばされそうになりつつも私の足を押さえる。
才谷も段々と私の行動に慣れてきたらしい。

「何をするがなが。
わしはただ再会の挨拶をしようとしちゅうばあやか」
「挨拶で顔を近づける必要がどこにあるのか、二十字以上四十字以内で答えなさい」

私がとっとと離せといったら、才谷はいきなり抱きしめてきた。

「こがなげに出会うらぁて、わしらは運命で結ばれちゅうで」
「馬鹿言ってると、蹴り殺すよ」
「異国じゃーこうして抱き合って挨拶するそうやか」

私は、またかと言った感じで歎息し、才谷に同じく両腕を伸ばし

て抱き返してやる。

「こう？」

「そうやか。

ほき両頬に、きす、するがやか」

自分の耳に妙な感触を感じ、私はぞわざわと全身が総毛立った。

その原因はわかってる。

才谷が私の首筋に口を這わせたからだ。

私は遠慮もなく、才谷の着物をつかんで引きはがそうとしたが、強い力で逃げられない。

しまった、油断していたが、才谷という男はそういう男だった。

「そこは頬じゃない！

それにここは日本っ。

今すぐ離せっ！」

「ん～、葉桜さんはしょうえいかざがするがで」

「梅さんっ」

私が拳を下から突き上げようとするのと、私たち以外の殺気があたりに充満したのはほぼ同時だった。

ゆっくりと私から離れた才谷が残念そうに呟く。

「ただの挨拶に、ほがーに怒らのうてもいいがやないがでか」

「そうですか？

僕には葉桜さんが厭がっているように見えたんですけど」

新選組から、とりわけ私は近藤や土方から見えない位置で座っていたのもあるが、今沖田がいるのは幹の反対側だから見ることはできない。

ただ沖田と顔を合わせているであろう才谷は真剣そのものの眼をしながら、笑っている。

「沖田ー、この人に怒っても疲れるだけだよ」

自分の両肩にかかったままの両手をぐぐぐっと持ち上げて才谷をどけ、立ち上がった私は袴の埃を払う。

その間に沖田がすぐそばまで近づいてくる。

殺気は押さえられているけれど、それでも微量に溢れているそれに私は小さく歎息した。

私が沖田に手を差し出すと強く引かれるのを、足を強く踏みしめて耐える。

そういつもいつも倒れてたまるか。

「何か私に用が?」

双方へ問いかける私の肩を才谷が掴み、私を体ごと引き寄せようとする。

「用がないがやったら、はよぅいなくなっとおせ。

わしはこれから葉桜さんに大事な話があるがでから」

「貴方こそ、早くいなくなったほうがいいんじゃありませんか?」

沖田に掴まれたままの腕が痛いし、才谷に掴まれた肩も痛いし、正直休みたい私としては二人ともどこかに行ってほしい。

「二人とも」

しかし、二人ともが激論中で、私の言葉などまったく聞いちゃい

ない。
話しているうちにわずかに弛んでいる二人の手を抜け出し、私は喧噪に背を向けて、別の木陰に移動する。

今日も青空澄み渡る気持ちのよい天気で、時折吹いてくる風に背中で揺れる髪が跳ねているのがよくわかる。
通り過ぎ様、何人かが私に声をかけようと手を伸ばし、空気を掴む手を握りしめ、諦めるのに気づきながら、私は狸寝入りを決め込む。

新選組にいる私は異端だ。
ここにいる誰よりも信念の基盤が脆く、進むべき道も定まらない。
伝えられる歴史を踏襲するように道を行き、このまますべてをまに行わせてしまうのか。
揺らぎ続ける心を支える体は未だ弱く、誰一人として救えない。

誰にも見えない木陰で、私は一人、膝を抱えて蹲る。
今はとにかく一人でいたい。
大概そんなことを考えているときに限って、邪魔が入るものだ。

ずしりとくる重量感に、かすかな怒りがこみ上げてくる。
でも、殴ったぐらいで才谷がどけるわけがない。

「話ってなんだよ、梅さん？」

今ならきいてやるぞ、と私が才谷に笑いかけると大人しくどいてくれる。

「そう邪険にしのうてもいいがやないがでか。
わしはただ葉桜さんと世間話がしたかったばあやか」

才谷からは寂しそうな笑顔を返され、私は仕方なく隣を示してやる。
隣に座った才谷に立てた膝の上に乗せた顔だけ向けると、木漏れ日の下で揺れた葉が差し込み、私はわずかに目を細めた。
そっと私の髪に触れる才谷の手がゆっくりと撫で下ろされる。
気持ちのよい感触に、私の目蓋まで重くなってくる。

「もしも」

才谷の隣は居心地が良すぎて。

「もしも守るべきものと守りたいものをどちらかひとつしか選べなかったら、梅さんならどうする？」

つい、口が滑った。
人に聞くことでもないだろうに、私は何を口走っているのか。
言ってしまった後で、私は激しく後悔する。
立てた膝に顔を埋めて、私は片手を振って才谷の答えを止めさせる。

「悪い、変なこと聞いた。
忘れて」

どうしたってこれは自分で答えを出さなきゃいけない問題なのに、私は何を聞いているんだか。
それに以前の私なら絶対に迷わなかった問題だ。
どうしたって、両方なんとかしてやると息巻いていたのに、私は何を弱気になっているんだろう。
ここ最近、あの紙に振り回されすぎているってことが如実にわか

る。

「葉桜さんはじってやか。
めっそう思い詰めないでおせ」

才谷の手は温かく、撫でるたびに私の中の余計な何かを落としていくように思える。
この人の言葉はどうしてこうも私の中に響いてくるのだろう。

「強うて可愛い葉桜さんのような女は好きやけど、ほがな顔をされるとわしはどうしたらいいかわからなくなるがで」

まるで、父様の腕の中にいるみたいだ。

「わしは人のことが言えるわけがやないがでが、ただ悔いの残らんようにするががえいろう。
その結果がどいっぱいになをなくすかもしれんきね、けんど、どちらも手に残るかもわかりやーせん。
したいようにするがが一番にかぁーらん」

私の、したいこと、か。
ここまでしたいようにしてきたつもりだったけど、私のしたいことは少しずつ「約束」に埋もれてきたのかもしれない。
でも、まだ間に合わせることができるのだから、ここでくよくよと悩んでいる場合じゃない。

「梅さん、ありがとう」

いつもの柔らかな才谷の笑顔に支えられてるな、と少しだけ葉桜は実感したのだった。

「御礼なら言葉より、ここに、きす、でもしてくれたほうが嬉しいやか」
「調子に乗るな」

立ち上がり様、頬を指す才谷の頭を軽く叩いて、私は伸びをする。

見上げる空の青さと広がる緑を強く吸い込むともやもやしていた気分が晴れてゆくのがわかり。

もう一度隊士たちの帰還の喜びの声を吸い込むと、今度こそ私の気分も明るくなってきた。

「さぁて、帰りますか！」

優しい才谷の視線を背中に感じながら、私は仲間たちの元へと足を向けた。

向かい風が柔らかに私を追い抜き、さわさわとなる葉擦れの音が応援してくれているように感じて、私の口元にはいつしか笑みが浮かんでいた。

４６＃迷い（後書き）

＜＜追記＞＞
暗くなってきたので路線を修正しました。
梅さんや近藤さんは出てくるだけで華やかになる気がします。
て、私の気のせいですね（笑）
（２００６／０５／１０）

梅さんの台詞を微細修正。
（０６／０６／２１　１０：５９）

リンク変更
（２００７／０７／１１）

改訂
（２０１０／０３／０６）

４７＃消えた傷（前書き）

元治元年葉月

47#消えた傷

方々から聞こえてくる歓喜の声を聞きながら、葉桜君は自室の縁側の柱に寄り添い、目を閉じていた。

老中から感謝状なんて珍しいことがそうそうあるわけもなく、今回のことは葉桜君だって功労者の一人なのだから、仲間と共に喜んでも良さそうなものなのだが、葉桜君は変わらない。

いつものように居眠りをしているだけだ。

俺が踏みしめた床が立てる低い音を聞いても、葉桜君は目を開かない。

だが、気が付いてはいるはずだ。

「こんなとこにいないで、部屋の中で寝たらいいのに」

近くまで寄って、俺は葉桜君の少し日焼けた頬にそっと手を伸ばす。

俺の手に先んじた風が葉桜君の髪を揺らし、彼女の頬をくすぐってゆく。

葉桜君は特別美人というほどじゃないし、特別可愛いわけでもない。

だけど、何故か葉桜君には惹かれるものがあって、俺も放っておけない気分にさせられる。

俺の指が葉桜君の肌に触れる寸前、彼女の大きな瞳がぱちりと開く。

微かに赤茶の光彩が混じる葉桜君の黒い瞳は、大きく開かれた後で一度閉じられ、また直ぐに今度は半分ばかり開かれた。

「……近藤、さん……？」

ぼんやりと寝ぼけている葉桜君を笑い、俺はその頭に手を置く。

「ただいま。
今日は非番？」

「……今日は……死番、だったかな？」

俺の質問を聞き間違えて答えつつ、葉桜君がフルフルと頭を振る。

「ああ、えと、近藤さん？
いつ、戻ったんですか？」

「今戻ったばかりさ。
葉桜君はよーく眠っていたねぇ」

まだ眠気が覚めないのか、目元をこすっている葉桜君の手を俺は取る。

案の定、葉桜君には煩そうに振り払われた。

「うん、昨夜は一仕事あったかふぁ」

葉桜君は寝たりないのか、大きな口を開けて、欠伸をする。
掃討戦以来調子が悪いのか、葉桜君がこうしてのんびりして姿を俺が目にする機会が増えた気がする。
安心しきって、今日のように縁側で眠っていることなどよくあることだ。

「大捕物なんてあったっけ」

俺が聞き返すと、葉桜君が吃驚したように顔を上げて、それからしまったという顔をした。

「あー……ごめん、間違いです」
「間違いって、何と？」
気まずそうに顔を反らす葉桜君の顎を取り、無理矢理に俺へ向ける。
動揺が見えるかもしれないと考えたが、葉桜はただにっこりと俺に微笑んだだけだった。
「賞状、いただいてきたんでしょう？
見せてくださいよ」
「あ」
俺も思い出して、葉桜君から手を離す。
それを見せてあげようかと思って、葉桜君に近づいたんだった。
俺が賞状を取り出そうとしている間に風が動く。
それが葉桜君の起こす風と気づいて、俺はとっさに手を伸ばしていた。
「っ！」
「どこに行くの」
ただ掴んだだけなのに、その場に葉桜君は力を落として、へたり込んだ。
今まで気が付かなかったけれど、さっきから面倒で動かしていないだけなのかと思ったけど。
「腕、怪我してたのか」
「っ」

葉桜君は違うと首を振っているが、俺の前で涙を滲ませて、肩を押さえながらやっても説得力はない。
手を掴んだまま、俺は葉桜君の袖を捲る。

「な、に……これ？」

葉桜君の腕に無数の切り傷があることは俺も知っていた。
見た目の年齢と実力や性別から考えてもそれは無理からぬことだから、今更驚きはしない。

俺が目を見張ったのは、葉桜君の手首よりも少し下から二の腕の半ばまでにかけて、どす黒く彩られた禍々しい文様が彩られていたからだ。
そこへ俺が触れようとすると、葉桜君は慌てて腕を引いて隠してしまう。

「ええと、刺青？
ほ、ほら、原田の真似！！」

確かに原田君は胸元に目立つ入れ墨を入れているが、葉桜君のそれは明らかに嘘とわかる言い訳だ。
俺にはそれがどう見ても刺青に見えない。

「葉桜君」

俺は強く、葉桜君の名を呼ぶ。

「う……っ」
「理由はともかく、その腕で仕事するつもりだった？」

「実は、もう原田に代わってもらってます」
「そう。
それなら、」
一瞬安堵の表情を浮かべる葉桜君を、俺は両腕で抱え上げる。
葉桜君は普通の女性よりは多少重いが、その身長や見た目に反して軽い。
「ちょっとおいで」
「私に拒否権はないんですか」
「あはは、あたりまえじゃない」
俺の部屋に連れて行き、葉桜君をそっと俺の布団へ横たわらせる。
そのまま待つように言い置いて、一度部屋を出てからすぐさま俺は戻る。
すると、案の定葉桜君は起き上がっている。
「今、医者を呼ぶから待ってなさいって」
「医者にどうにか出来るならいいですけどね」
「葉桜君ー」
「はいはいはーい、わかってますよ」
大人しくしてますという葉桜君を信じて、俺は今度こそ部屋を出た。
だが、医者と共に戻ってみると、葉桜君の腕には何の影も残っていなかった。
ただ代わりにある痛々しい傷跡に、医者は目を見張るばかりだ。
「あれー？」
「古傷ばかりですね。

私に出来ることはないようだ」
「御足労かけて申し訳ありません。
どうにも出来ない怪我なら、まっさきに先生のトコへ行くんで、
そのときはまたよろしくお願いしますよ」

医者を帰らせてから俺が聞いてみても、葉桜君はいつもどおりに
はぐらかすばっかりで。

「医者にどうにかできないなら、自分でどうにかするしかないんで
すよ」
「だから、どうやって」

俺の前でカラカラと笑う葉桜君は、もういつも通りで。

「ほらぁ、古来からあるでしょ。
傷口に酒をかけてってヤツ」
「それでどうにかなるようなもんじゃないでしょ～。
第一、それは消毒」
「あれ、そうでしたっけ？
あははっ、まあ治ったんだからいいじゃないですか」

俺が思いっきり誤魔化されているのはわかったけど、葉桜君は追
求の隙をまったく与えてくれなかった。
なにかあるはずと俺の勘が告げているのに、葉桜君はもうその手
を掴んでも軽く振り払ってしまう。

「さてせっかく休みになったし、昼寝の続きしてきます」

悠々と出て行く葉桜君を俺は止められなかった。

部屋に一人残された俺は、頭を抱える。
考えても仕方がないことだが、一体葉桜君は何者なのだろう。
「聞いても素直に教えてくれるワケないしねぇ」
俺が吐いたため息は空気に溶けて、ゆるりと消えていった。

＊　＊　＊

薄闇に光が煌めく。
ゆらり、煌めき、赤を撒き散らし、消えてゆく。
「まさか、近藤さんに見つかるとはねぇ」
葉桜さんは自分の懐から手拭いを取り出し、鮮血の滴る腕を縛った。
その場所へ縦に紅い線が走り、血がしたたり落ちている。
多すぎるということはないが、かなりの量の血が溢れる腕に片腕と口で器用に応急処置を施しつつ、葉桜さんは夜を仰いだ。
「皆鼻が利くから、本当に気をつけないと」
痛そうには見えないのに、笑っている葉桜さんの片目から透明な雫がぼたぼたと溢れて落ちる。
ただ流れるだけのそれを拭わず、葉桜さんは光が揺らめく水に近づく。

そこに映る自分の顔をみて、何を想うか、わしにはわからん。

「ったく、なんでこんなことで泣いちゃってんだか。

……馬鹿みたい」

髪が濡れるのにも構わず、葉桜さんは川辺にかがんで、顔を浸けた。

ほんの一呼吸で水から放れ、フルフルと頭を振って、水を辺りへ飛ばす。

「哀しくなんてないのに、馬鹿みたい。

そう、思わない？」

誰に問いかけたのか、返ってこない応えに苦笑し、葉桜さんは袖で顔を拭った。

わしもこんな夜中に出会う人がいるとは思わなかったが、姿を現すつもりもなかった。

近寄りがたい清浄な空気を放っていて、近づくだけで葉桜さんを穢してしまう気がして。

葉桜さんのほうでも、あえてわしを引きづり出すような面倒もしたくないのだろう。

遠目でも逢いたくないと、空気がはっきりと拒絶している。

ならば今は会わないほうがいいのかもしれない。

そう思い、そっと踵を返したわしの耳に葉桜さんの優しい声が届いた。

「最近は物騒だから、早く帰った方が良い」

そんなことはもうここ数年ずっと続いている今更なことだというのに、何故今そう言うのか。

わしはもう一度みた葉桜さんの背を追いかける。
そう遠い距離でもないので、すぐに追いついたが、その肩に手をかけようとして、寸前で留まった。
わしの喉元に、月の光で懐剣の光が怪しく煌めく。

「哀しいから泣いてるワケじゃない。
でも、名乗りもしない相手に預ける涙は持ち合わせてないよ。
さっさと消えなさい」
「ワシじゃ、葉桜さんっ」
「わかってるから言ってるんでしょ、馬鹿梅」

懐剣を仕舞い、葉桜さんが振り返るその前に、わしは腕を伸ばす。
泣き顔を見られるのがイヤだというのなら、振り向かせなければいい。
わしの考えをわかっているのか、葉桜さんは諦めたように深く息を吐いた。

「こんな夜中に、どうしてここにいるの?」
「なんとなく葉桜さんが泣いちゅうような気がしたからちや」

いけしゃあしゃあとよく言う、といつもどおりの呟きが小さく聞こえて、わしは少しだけ安堵した。

「別に哀しいワケじゃないんだから、ほっときゃそのうちに止まるよ」

止まるといわれて、わしは思い出す。
葉桜さんの濃い色の着物がその袖の辺りだけ既に色を濃くしている。

「痛くないがか？」
「え？」
「せんばんと思い切りよお切ったから、声をかけられなかったが」
わしが最初から見ていたということの方に驚いたのか、葉桜さんがわずかに身を強張らせた。
気配に気が付いたのはきっと血が流れる腕を手拭いで縛っていた時だろう。
声一つあげずに自らの腕へ刃を突き立てる姿に、わしは思わず気配を消すのを忘れたからだ。
「見てるわしのほうが痛うて……葉桜さん？」
姿が揺らいだように見えて、わしは思わず力を込めていた。
しかし、それにも葉桜さんは呻き声一つあげない。
地面へキラキラと月光に照らされる光の粒が落ちていく。
「慣れてる、から」
怪我をしていない腕で振り払われて、葉桜さんはわしから一歩間合いを置く。
葉桜さんは泣いている声ではないのに、何故泣いているのか。
わしの問いに、わからないと葉桜さんはいう。
「それに、こんなんじゃただの気休めにしかならない。
私の力じゃ、こんなことぐらいしかしてあげられない」
これは誰だろうと、わしは一瞬訝しんだ。
あまりに、葉桜さんらしくない。
常の葉桜さんはとても強く、涙も笑顔に塗り替えてしまうほど強

くて。

「葉桜さん……？」

近くを流れる水の音と木の葉を揺らす風の音をひととき聞いてから、ゆっくりと葉桜さんが顔をあげる。

そこにあるのは、わしの知る葉桜さんの満面の作り笑顔。

「ところで、こんな時間にどうしているんだ？

どこかへ向かう途中だったのか？」

「……葉桜さん？」

「ああ、まあ、聞いても送っていってやれないんだけどな。

もう少しで土方が部屋へ見廻りに来るから戻らないと」

部屋で寝てないと煩いんだ、と面倒そうにいいながら、葉桜さんは今度こそわしに背を向ける。

葉桜さんはいつも世界の全てを受け入れているようで、人間にだけは冷たく厳しい拒絶を向けている。

今は特にそれが強い。

葉桜さんが消えた先をしばらく見つめてから、わしは慌てて追いかけたがもうそこに姿はなく。

残り香だけが血の臭いを混ぜて漂い、直ぐに風でかき消された。

夢だったのだろうか。

翌日の普段通りの姿を葉桜さんを見て、わしはまたわからなくなった。

ただ風で微かにめくれた袖口に覗く見慣れた傷痕が、妙にわしの気にかかって仕方がなかった。

４７＃消えた傷（後書き）

＜＜追記＞＞

公開
（２００７／０７／１１）

改訂
（２０１０／０３／０６）

48#ぷれぜんと

昼の巡察から戻り、土方に報告を済ませた後で自室へ戻ると、男が一人私の座布団を枕にして眠っていた。

一瞬自分の部屋かどうかを疑ったが、調度品は見慣れたものだし、何より机には昨夜から読みかけの書物が開きっぱなしになっている。

「……いくらなんでも屯所で寝るか？」

これが他の隊士ならただ叩き起こして追い出すのだが、相手は隊士でもなんでもない才谷である。

どうにもこの男といると、私も調子が狂う。

私は才谷の傍らで膝を付き、暑そうな髪を避けて汗を拭いてやる。この部屋は南向きで、夏はけっこうな熱さに見舞われるのだ。

先程までは障子も閉じていたし大したこともなかったのだろうけれど、未の刻を過ぎたばかりで障子を開け放たれている今、才谷は暑さに魘されている。

寝ながら唸り声を上げる才谷に、私は扇子で少しの風を送ってやった。

「ん……葉桜さんなが」

「おー、おはよう」

目を開けたものの、まだ眠そうな才谷に、私は歯を見せて、笑いかける。

「新選組の屯所でここまで眠りこけるなんて、梅さんぐらいだね」

笑っている私の扇子を取ろうとした才谷の手から体を捻って逃げていたら、そのまま押し倒される体勢になる。
普通の男ならそういう目的で来ていない限り慌てて離れるのだろうけど、目の前の男は非常識が服を着て歩いているような人物だ。
当然、私の上から退けるわけがなく、案の定胸に才谷の縮れた髪を押しつけられることとなる。

「いい加減にしないと大声で叫ぶぞ」
「見せつけるがかぇ？」
「土方さんあたりが来たら、確実に梅さんは追い出されるし、私は謹慎だな。
この屯所には一応塗籠もあることだし、今度は流石にそっちかもしれない」
「……ほがなところにいたら、わしは葉桜さんに会えやーせん」
「嫌なら今すぐどけて」

心底残念そうにのろのろと才谷が私の上から退ける。
重さが引いたとたん、涼しい風が私と才谷の間を通り抜けていった。

一瞬の爽快感に、私は目を細める。
視線の向こう側では才谷が何か常には持っていない箱を引き寄せているようだ。
何の装飾紙も貼られていない箱には、埋め合わせのように色とりどりの綺麗な飾り布が縛られていて、私は何かの罠かと心だけ身構える。

聞きたくないけど、聞いてくれと才谷の目が輝いている。
しょうのない人だと、私は早々に諦めて問い掛けた。

「梅さん、その箱、何？」

私が口にしたとたん、才谷は嬉しそうにその箱に、差し出してきた。

「おまんにぷれぜんと、やか。
ちっと開けて見るぜよ」
「ぷれぜんと？」

聞いたことのない言葉は確か、西洋の言葉というぐらいの知識しか、私にはない。
だが、才谷の様子から察するに、私への贈り物というだろう。
でも、私には才谷から何かを貰う理由が思い当たらない。
むしろ、私の方がけっこう蹴ったり殴ったりしているし、それの御礼と言うことはまさかないだろうが、才谷がそういう趣味だったら嫌だ。

どうせ押し問答しても勝てるわけがないし、私は素直に手にした。

一つ一つ紐を解いてゆく私を、才谷は嬉しそうに眺めている。
まるで悪戯前の子供にも見えるし、純粋に贈り物を喜んで欲しいと思っているようにも見える。
どちらか、まだ付き合いの浅いこの男の思考は、私には判断し難い。

赤、橙、黄、緑、と布を解いていくのは、私も少しだけ心楽しい。
こんな風な色合いの布で包んでいる贈り物なんて見たことも聞いたこともない。
青、藍、紫と、私がゆっくりゆっくり解いて行くまでの才谷のこ

んなに楽しそうで焦れったそうな顔はみたこともない。
才谷は本当に、本当に楽しそうだ。

「はよぅ開けとおせ」

ここまできてしょうもないものが入っていたらどうしてくれようか、と笑顔の後ろで考えながら、私は箱を開いた。

初見の感想はまず、正直に驚いただ。
私の目に最初に映ったのはふわふわとした真っ白な鳥の羽で、それから包みの布よりもっと鮮やかな目も覚めるほどの瑠璃色の布、それが飾られた真っ白な。

「梅さん、これって？」

私はこれを書物で読んだり、絵を見たことはあるけれど、実物を見るのは初めてだ。
吃驚した顔をした自分を嬉しそうに見ている才谷のことも気にならないぐらい、私はそれに見とれてしまう。

「西洋の帽子ぜよ。
おまんに似合うかと思って持ってきちゅう」

色鮮やかな西洋の帽子は、今の私には到底似合うとは思えない。
だけれど、姿を変えれば、きっと私にもと夢を描く。

想像の中で私は髪も結わずにいるから、私は普段一括りにしてある髪結いの紐を解いた。
長すぎて重い私の黒髪が、結いあげた状態で座っていても畳に触れるか触れないかぐらいのそれが、紐解かれるとぱさりと乾いた音

を立てる。

「梅さんは新しもの好きだな。
私、実物は初めてだ」

人に言う以上に、私は新しいものや珍しいものが好きだ。
こういうふうにするんだったと思い出しながら、私はそれを頭に乗せ、端を両手で支えて才谷を見る。

「おまんには西洋の帽子も似合うと思うちょったぜよ」

そのまま私が立ち上がって庭に出ると、熱い日差しも遮られる。
今度は片手で支えてみると、意外に安定しているし、大丈夫そうだ。

「似合う？」

私が笑うと、にんまりと才谷も笑う。

「まっこと、よぉ似合っちゅう」

西洋の姫様はこんな帽子をかぶって、どれす、という着物をきてしゃなりと歩くのだそうだ。
今の男装ではそんな風にはいかないけれど、私は書物で読んでみたいに袴を少し持ち上げて礼をする。
才谷も手を叩いて喜んでくれる。

「ははは、喜んでもらえたようじゃ」

私が帽子を外し、箱に戻す間、ずっと才谷の視線を感じながらも

ずっとにやにやがとまらなかった。
これを被る時がいつか来たら、物語のように言えると良い。

「いつか、どれす、を来てそれを被った葉桜さんと町を歩きたいやか」
「ええ、喜んで」

そんなことができるのはきっとこの動乱の時代が収まった後だ。
それがわかっていても、私も才谷も同じ時を望んでいる。
いつかこの帽子を被って、堂々と町を歩けるような平和な時代を、私も才谷も二人で夢見ていた。

４８＃ぷれぜんと　（後書き）

＜＜追記＞＞

連続はマズイだろうと思いつつ、また梅さん。
元気のなかったヒロインを心配して来たとでも思っておいてください（事後報告。
リクエストのあった「ぷれぜんと」イベント。
箱がどんなとか絵は出ていなかった気もしますけど、なんとなく虹色のリボンで飾ってみました。
帽子の色にセンスがないのは作者のデフォルトです。
そっとしておいてください。
　苦手なんです。
（０６／０５／１０）

梅さんの台詞を微細修正。
（０６／０６／２１　１１：０５）

リンク変更
（２００７／０７／１１）

改訂
（２０１０／０３／０６）

49#つきあってやろうか?

鈴花は私以上にすっかり新選組に馴染んだ。
最近は他の者にも進んで稽古をつけてもらっているというし、良い傾向だ。
もしも今私がいなくなってもなんの心配もないだろう。

そこまで考えて、私はくすりと一人笑いを零す。
何故、今になって自分がいなくなることなど心配しているんだろう。
「約束」がある限り、私にはそれは許されないし、どんな約束であろうと勝手に反古にすることはできないのに。
だからこそ、私はおいそれと約束などしないことにしているのに。

「原田ー、私面白い話聞いたんだけど、聞く?」

大部屋で寝転がる原田に、私は窓辺で湯呑みを傾けながら、軽口を叩く。

「おー、なんだ?」

部屋にはさっきまで他にも隊士がいたのだが、永倉が島原へ連れていってくれると聞いて出ていってしまった。
だから部屋には気分が乗らないと断った私と原田しかいない。
寝転がる原田には、私が少し足を伸ばせば届く距離だ。

「私のよく行く店の女の子が噂してたんだけどー、最近、帰り道を一人で歩いていると後ろから何かついてきてるみたいなんだって」
「それがなにかよくわからないんだけど、家に着くとその人はいっ

つもいなくなるんだって」
「それまではよく浪人に絡まれる子だったんだけどー、てかその縁で知り合ったんだけどー、その人が夜についてくるようになってからぱったりそういうことがなくなったんだってー」
見なくても、私の話を聞きながら、だんだんと変わってゆく原田の様子をほくそ笑む。
「……それの、どの辺がおもしろいんだ？」
「私も一度だけそれを見かけたことがあってねー、なーんか誰かに似てる気がするんだけど、原田はどう思う？」
誰のことを言っているのか予想はついているのだろう、起き上がった原田が顔を俯かせて、ガシガシと後ろ頭を掻く。
「そんな回りくどいことしてないで、素直に送ってあげればいいと私は思うのよ。
外見はそりゃちょっと怖いけど、無害なのはよくよく言ってあるし」
弾かれたように顔をあげる原田の額を、私は扇子で叩く。
「葉桜、おまえっ……てっ！」
「男なんだから、当たって砕けてこいよ」
「俺が砕けるの前提かっ」
「さぁ？
それに、私は一言も原田のことだなんて言ってないよ？」
「ぐ……っ」
くつくつとした笑いのままに、私は原田をみやる。

原田は赤くなったり青くなったり忙しそうで、これだから原田をからかうのは楽しいのだ。

今回の私のお膳立ては、この間のちょっとした罪滅ぼしみたいなもんだ。

故意ではないとはいえ、原田の想い人の結婚をまとめたのは私だったから。

「告白に行くの、つきあってやろうか」

「い、いらねえよっ！

一人でいけらぁ！！」

「あはは、わかった。

じゃあ、がんばれ～」

立ち去ろうとした私の袖が引っ張られ、思わずにやりと笑みが溢れる。

もう楽しくて仕方がない。

「なんだー？」

「……そ、その……ありがと、よ」

「ふふふっ」

「な、なんだよ、その笑いはっ」

「べっつに～？」

今度こそ、私は軽い足取りで立ち去り、残された原田は赤い顔を抱えて、呻いていた。

＊　＊　＊

新選組の稽古というのは木刀を使って行う、完全実戦主義だ。
真剣でないとなどという私を除き、たいていの隊士は軽い気持ちで稽古に臨むことがない。
もちろん、幹部であっても例外でなく、軽口を叩いていても常に緊張はしている。

だが、軽口の内容が色恋であることなど今までになく、私は戸惑いながら、相手の――原田の剣を受け流す。

確かに私は昨日とかに原田を焚きつけた。
だからといって、なんで私が稽古しながら原田の惚気を聞かなきゃならないんだろう。

「なあ、原田？」
「なんだ？」

夕餉直後の人気のない道場で、気持ち悪いぐらい機嫌の良い原田の木刀を受けながら、私は仕方なしに問いかける。

「それって、こうやって稽古しながらする話じゃないと思う」
「ああ？
別にいいじゃねぇか。
テメエはマジに稽古する気ねーだろ」
「本気だしていいの？」
「おう」

私は一度床を蹴り、間合いを取り、両手で中段に構えていた姿から、右手だけに木刀を握り、両腕をだらりと下げる。
この構えはやる気がなさそうに見えるだろうが、私の目だけはギ

ラギラしていると沖田に言われたことがあった。
そのつもりはまったくないのだが、私自身が強い者を相手にするときにワクワクしているのは本当だから、納得せざるを得ない。

「じゃあ、遠慮無く」
「お、おうっ」

多少怯み気味の原田をくすりと笑い、私は常のようには上に飛ばず、真っ直ぐ床を蹴った。
真っ直ぐに突進した私の木刀を、原田もしっかりと受ける。
鍔迫り合いは得意じゃないが、本気を出して良いのなら遠慮せずに使える技もある。

にやりと笑った私の口元だけが見えたのか、わずかに原田に隙が出来る。

「ハァッ！」

私と原田は一瞬の後に離れ、次の瞬間には高めの木霊が道場内に響き渡っていた。

「……ほぅ、寸前に防いだか」
「てっめ、マジ容赦ねぇな」
「本気でやって良いといいったじゃないか」
「寸止めにする気もなかったろ」
「本気だからな」
「っ」
「これで少しは目が覚めたか、色ボケ男」

得物を収めた私を見て、原田もほっとした顔で腕をおろす。

どうやら、原田の惚気もようやく治まりそうだ。

「目が覚めたかじゃねーだろっ！
それに誰が色ボケだっ」

自覚がないのが一番タチが悪いとはよく言ったものだ。
どうすりゃ、原田の目が覚めるだろうか。
私は別にこんな惚気が聞きたくて、手助けしたワケじゃないんだが。

「ところで、肝心なことをきいてないよ」
「ちっ、興が削がれた。
もうやめだ」

逃げだそうとする原田の肩に手をかけ、私は耳元でそっと囁く。

「結局、告白したの？」

舌打ちが返されてきて、私はやっぱりと思う。
思ったから、行動で示してみた。
原田にしなだれるかかるように肩から腕を回した後で、私はぐっと力を込めて締め上げる。

「こーらーっ！」
「ぐぇっ、だ、誰も告白してねーとは……っ」
「へー、そう」

私がぱっと腕を離すと、原田は大げさに首をさすっているが、そこまで力を入れたつもりはない。

「じゃあ、返事はもちろん」
「……振られたよ」
「ふーん。
……え？」
「好きな男がいるんだとよ。
ったく、なんでてめーにこんなことっ」

そんなはずはないだろうと、私は眉を潜める。
だって、彼女は原田にとても感謝してて、それで礼が言いたいって言ってたわけで。

「だいたい、おめえが紛らわしいカッコしてっからワリぃんだよっ」
「はぁ？」

原田ががっと私の衿を掴む。

「非番の時ぐらい、女のカッコしてりゃいいだろっ」
「……そんなの今、関係」
「あんだよっ」
「っ」

襟元を強く締め上げられて、苦しいのは私のハズなのに、そうしている原田の方がひどく苦しい顔をしている。

「は、らだ……？」
「お前が女のカッコしてりゃ、こんな、こんな……っ」

だが、次第にゆるゆると力が緩められ、ついには外された襟元を直すのも忘れて、私は原田の頬に手を伸ばす。
これはどうやら、まさかの事態らしい。

「……まさか、あの子、私が好きだなんて、言ったの？」
「たしかにおまえは強いし、男前かもしれねーけどよ、なんで俺が……っ」

私は決して女姿にならないというわけではないが、その姿の時と今の男姿の時を同じとみる人は少ない。
それに女の時は絡まれる専門だが、男姿の時は絡まれているのを助ける側だというのも事実で、女だと言っても言い寄ってくる者はいる。
しかし、それがこんな形で影響するなんて、誰も思わないじゃないか。

「今度こそ、本気だったんだ。
本気で、俺は……っ」

私だって、仲間の、原田の幸せを思っての行動だったのだ。
謝罪の想いとともに、私は原田の体を引き寄せ、抱きしめる。

「……ごめん」

今はただ謝罪以外の言葉が私には浮かばなくて。

「……ごめんなさい」

謝ってどうにかなるわけもないけど、ただそれ以外どうしたらいいのかわからなくて。
強く抱きしめるぐらいしか、私には慰める方法もわからなくて。

そうして、しばらくしてから、カタンと道場の戸口で音がした。

「何してるのかな、お二人さん」

二人だけだった道場に入ってきたのは、近藤だった。

「げ、近藤さんっ」
「何って……あっ」

慌てて原田と二人で離れる間に近藤が近づいてきて、私の手をとってそのまま歩き出す。

「はい、離れてー」
「近藤さん、これはですね」
「ったく、無自覚ってのは一番困るよ。
ねぇ、原田君？」

私が道場を出る直前に原田の方を見ると、赤くなったり青くなったりと忙しそうで頼りにならない。

「無自覚って何のことですか？
私はただ」
「理由はなんでもいいけど、気安く男に抱きついちゃ駄目だよ」

人を抱きつき魔のように言う近藤の頭を私は空いている手で叩くが、彼はまったく動じない。
手も離してくれない。

「私だって、誰でもってワケじゃないし。
それに、原田はただの友達ですよ」
「葉桜君はそう思ってても、ね」

私には近藤が何を言いたいのかわからない。
そういう顔をしていると、立ち止まった近藤が深く息を吐いた。
それから、呆れた顔で笑って、私の頬を引っ張る。

「だーかーらー、その顔をやめなさいって」
「いひゃい」
「ったくホント、自覚が無くて困るよ」

哀しそうな近藤の顔を見て、私も手を外そうと暴れるのを止める。
風が二人の間を通りぬけ、入り込んでくる風で私の襟元が緩んでいることに気が付いた、近藤が片手で直してくれる。

「自覚ならちゃんとありますよ」
「どんな？」
「私は新選組隊士で、」

私は掴まれていない手で拳を作り、とん、と近藤の胸に触れた。

「あなたたちの仲間っていう自覚です」

笑いかける私に、近藤はただ乾いた笑いを返してきた。

49#つきあってやろうか？（後書き）

＜＜追記＞＞
可哀相な原田の話。
　しかも、近藤オチ
もう誰の話かわかりませんね
まあ、こんな日常ってことでｗ
（２００７／０７／１１）

改訂
（２０１０／０３／０６）

50#万の華を映す鏡

昼飯後、一人で京の町を歩いているとき、私はとても綺麗な紙を見つけた。

同時に先日の、ぷれぜんと、事件が頭を過ぎり、鈴花から聞いた土方の恋文に関する話を思い出した。

薄桜模様のこの紙で御礼の手紙を書いても、ぷれぜんと、になるだろうか。

でも、ただの御礼の手紙じゃつまらない。

ひとりひとりに恋文でも書いてみようかと、私は思い付いたままに紙を買い求め、屯所へと戻った。

さてと文机に座り、筆をとったまではいい。

はたと気付くのは恋文なんて書いたこともないということだ。

書き出しはどんな風なのがいいのだろう。

できれば私と気付かれないのがいい。

だけど、御礼と悪戯を含めた恋文を書くのだから、普通の手紙じゃあいけない。

これまで私が読んできた書物に恋文の書き方なんてものはなかった。

一体、皆どんな風に書いているんだろうと思案した私は、筆を置いて部屋を出る。

「鈴花ちゃんー」

土方は外出中だし、鈴花を探して屯所内を走り回る私を咎める者

はいない。
しかし、誰に聞いても誰も鈴花の行方を知らないというのはどういうことだろう。
たしか、鈴花は今日非番だったと私は記憶している。
部屋にも居ない、道場にもいないし、屯所内で他に鈴花がいそうな場所と言ったら、台所ぐらいだろうか。
そう思って足を台所へと向けた私は、走っていく途中で山南を見かけ、足を止める。
山南は筒のようなものを陽に向け、覗きこんでいるようだ。
「山南さんっ」
私がそっと近づいて声をかけたら、吃驚されて、本当に集中していたんだなと笑いが零れる。
「何してたんですか？」
山南の隣に座り、私は山南の手元を覗きこんだ。
朱色の和紙に色とりどりの絵が描かれた何の変哲もなさそうな筒だけれど、発明好きの山南がもっているのだから、ただの筒のはずがない。
「ああ、葉桜君か。
こいつを調整していたんだよ」
山南の手元で振られる筒からはしゃらしゃらとなにやら涼やかな音が聞こえる。
楽器だろうか。

「何ですか、それ？」
「可列以度斯可布（かれいどすかふ）……更紗眼鏡だよ」
山南が言った言葉を私は口の中で、かれいどすかふ、と復唱してみる。
これも西洋の言葉なのだろう。
更紗眼鏡というのならば私だって見たことがあるから理解できる。
「まだ完成ではないんだが、覗いてみるかい？」
差し出された筒を手に取り、私は陽にかざしてみた。
筒の向こう側ではキラキラとした色とりどりの色紙が陽に透けて、回せば回すだけその見目を変えてゆく。
子供の頃、一度父様に買って貰った縁日のそれよりも大きくて、とても綺麗だ。
色んな花が沢山咲いては変わってゆく様子に、思わず私も頬が緩む。
「わ、綺麗！！」
更紗眼鏡を作れる山南はすごいが、これで未完成というのが私には何より不思議だ。
「こんなに綺麗なのに、未完成なんですか？」
筒を覗いたままの私の言葉に、山南からは苦笑が返ってくる。
「いや、最終調整したのを確認していたところでね。

きみが綺麗だと思うなら、それで完成だ」

言葉に驚いて、私は思わず更紗眼鏡から目を離す。
目の前には少し照れくさそうな山南の姿があって。

「私が綺麗だと思えば、ですか？」
「ああ、そうだよ。
これはきみに作ったものだからね」

当然のように答えられた私は戸惑う。
またこれも、ぷれぜんと、なのかと。

「やはり、きみにあげるものはやさしい風情のあるものがいいと思ってね」

いつものように私の髪を撫でる山南の手がぎこちない。
そんな山南から私は目が離せなくなる。

「とにかくきみに女の子らしい綺麗なものをあげたかったんだ」

いつもの御礼と思って是非受け取ってほしいと言われてしまい、私は戸惑う。
その顔が泣きそうに見えたのだろう。
こちらを見た山南が慌てだす。

「どうしたんだい？」
「いえ」

先を越された、と思った。
私から御礼をしようと思ったのに、これじゃ恋文なんかで誤魔化

せなくなってしまった。

「あの、ありがとうございます。
一生大切にしますっ」

山南にだけは本当の気持ちを伝えようかと、また少し迷う。
でも、それは本当にいいことだろうか。
彼自身の迷いとなってしまわないかが不安だ。

「少し、迷惑だったかな？」
「そんなことは」
「君は先日、私を失うのが怖いと言ったね」

あ、と私も気が付く。
聡明な山南が、私の言葉の奥に潜めた意味に気付かないわけがない。

「理由は聞かないでおくよ。
だけど、これだけは知っていて欲しい。
私も、葉桜君を失うのが怖いんだ」

私の頬に触れる山南の掌が涙を拭ってゆく。
大きくて強くて暖かいその手に、私はとても安心する。
でも、もう迷わないと決めたから、私は私のしたいようにすると決めたから。
絶対にこの手を助けてみせる。

「ねえ、山南さん。
そんなことを言うと誤解しちゃいますよ」

頬に触れる山南の手をとり、私はその手の平に口づける。
書物で読んだ、西洋の親愛の証だ。
戸惑っている山南に、私は最高の笑顔で応える。

後悔なんてしない。
みんな、絶対に助けてみせる。
それが私の役目だからというのもあるけれど、何より私自身がこの手をなくしたくないから。

「この動乱の刻が終わったら、話したいことがあります」

だから、と約束を取り付ける。

「絶対に何があっても生き抜いてください」

まずは本人に生きる気力がなければ、すべては上手くいかないのだから。
協力してくださいね、と私は泣きそうな気持ちを抑えて、山南に微笑んだ。

５０＃万の華を映す鏡　（後書き）

＜＜追記＞＞

リクエストされた「万の華を映す鏡」です。

でも、一言言わせてください。

良し（何。

泥沼から抜け出したー！

なんとうかこのところこのところ山南さんに偏りすぎですね。

一応逆ハー夢の予定なんだけどなぁ。

（２００６／０５／１０）

リンク変更

（２００７／０７／１１）

改訂

（２０１０／０３／０８）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3213m/

幕末恋風記

2011年6月13日18時13分発行